

宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ

多賀城施釉陶磁器

宮城県多賀城跡調査研究所



巻頭図版1 西門・五万崎地区出土緑釉陶器



西門・五万崎地区



東門・大畑地区

卷頭図版2 西門・五万崎地区、東門・大畑地区出土施釉陶磁器

序 文

多賀城は奈良・平安時代における陸奥国の国府であり、奈良時代には蝦夷に対する軍事政策を担った鎮守府も置かれ、古代東北地方の政治的・軍事的な中心を担っていました。その価値は早くから認められ、1922（大正11）年に国史跡の指定を受け、昭和41（1966）年には特別史跡に昇格しています。

宮城県では、本県はもとより我が国においても重要な歴史遺産と認識し、昭和35（1960）年に多賀城跡調査研究委員会を設置、昭和44（1969）年に多賀城跡調査研究所を設立しました。それ以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の計画的な発掘調査事業を実施し、実像を明らかにしてきました。

また発掘調査では、瓦や土器をはじめとした多数の遺物が出土しており、毎年刊行する年報や総括報告書で主な資料を報告してきました。このなかで漆紙文書と木簡は資料の集成を行い、これまでに資料集として『多賀城漆紙文書』、『多賀城跡木簡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』を刊行しました。

今回、多賀城跡調査研究所設立50周年を迎える令和元年度に向けて、施釉陶磁器の集成を行っており、その成果として『多賀城施釉陶磁器』を刊行する運びとなりました。第92次調査までに出土した緑釉陶器・灰釉陶器・貿易陶磁は計1,880点で、東北の城柵官衙遺跡では突出した出土量であり、また東日本の遺跡と比較しても有数の出土量といえます。本書では、近年の調査・研究の進展に伴う生産地や年代の再検討、そして出土遺構や共伴資料との関係についても検討を行っています。多賀城の性格や東北古代史の検討を進めるうえで本書が一助となれば幸いです。

最後に本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生方、文化庁、奈良文化財研究所、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査にご支援をいただいた多くの皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和2年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 高橋 栄一

目 次

第Ⅰ章 本書作成の経緯と整理方法

- 1. 本書作成の経緯 1
- 2. 整理の方法 3

第Ⅱ章 多賀城出土施釉陶磁器について

- 1. 政庁地区12
- 2. 政庁南面地区16
- 3. 政庁西方地区22
- 4. 西門・五万崎地区24
- 5. 金堀地区33
- 6. 六月坂地区35
- 7. 東門・大畑地区37
- 8. 作貫地区50
- 9. 南門地区51
- 10. 南辺東地区51
- 11. 南辺西地区52
- 12. 北辺地区53
- 13. 東辺地区56
- 14. 市川橋遺跡高平地区57
- 15. 多賀城廃寺跡58

第Ⅲ章 総括

- 1. 多賀城出土施釉陶磁器の特徴62
- 2. 多賀城城外出土例との比較76
- 3. 宮城県域出土例との比較80

第Ⅳ章 まとめと今後の課題83

註83

引用・参考文献84

図版89

挿図目次

第1図	特別史跡多賀城跡と周辺の遺跡	1	第37図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（5）	45
第2図	調査区の位置と地区区分	2	第38図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（6）	46
第3図	緑釉・灰釉陶器の主な器種	4	第39図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（7）	47
第4図	緑釉・灰釉陶器碗・皿類の高台分類	5	第40図	作貫地区建物配置模式図	50
第5図	尾張・東濃窯における灰釉陶器碗類の変遷	6	第41図	作貫地区出土施釉陶磁器	51
第6図	尾張・東濃窯における緑釉陶器碗・皿類の変遷	8	第42図	南門地区出土施釉陶磁器	52
第7図	山城・篠窯産緑釉陶器碗・皿類の変遷	9	第43図	南辺東地区出土施釉陶磁器	52
第8図	近江産緑釉陶器碗・皿類の変遷	9	第44図	第37次調査区遺構図	53
第9図	白磁・青磁の主な器種	11	第45図	南辺西地区出土施釉陶磁器（1）	54
第10図	政庁の建物配置模式図	12	第46図	南辺西地区出土施釉陶磁器（2）	55
第11図	政庁地区出土施釉陶磁器	14	第47図	北辺地区出土施釉陶磁器	56
第12図	政庁地区（北端）出土施釉陶磁器	15	第48図	東辺地区出土施釉陶磁器	56
第13図	城前官衙建物配置模式図	16	第49図	市川橋遺跡高平地区の位置	57
第14図	城前官衙出土施釉陶磁器の出土状況	17	第50図	市川橋遺跡高平地区出土施釉陶磁器	57
第15図	政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器（1）	18	第51図	多賀城廃寺跡伽藍模式図	58
第16図	政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器（2）	19	第52図	多賀城廃寺跡出土施釉陶磁器	59
第17図	政庁南面（政庁南大路）地区出土施釉陶磁器	19	第53図	地区ごとの破片数の割合	63
第18図	政庁南面（鴻の池）地区出土施釉陶磁器	20	第54図	各地区における緑釉・灰釉陶器碗・皿類の 時期ごとの点数	66
第19図	政庁西方地区出土施釉陶磁器	23	第55図	緑釉・灰釉陶器碗・皿類の時期ごとの点数	67
第20図	第28次調査区出土施釉陶磁器の出土状況	24	第56図	緑釉・灰釉陶器碗・皿類における時期ごとの 産地の変遷	67
第21図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（1）	26	第57図	A期の緑釉・灰釉陶器	68
第22図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（2）	27	第58図	B期の緑釉・灰釉陶器	69
第23図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（3）	28	第59図	C期の緑釉・灰釉陶器	71
第24図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（4）	30	第60図	D期の灰釉陶器	71
第25図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（5）	31	第61図	貿易陶磁	71
第26図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（6）	32	第62図	政庁における施釉陶磁器の出土状況	72
第27図	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器（7）	33	第63図	城前官衙における施釉陶磁器の出土状況	73
第28図	金堀地区出土施釉陶磁器	35	第64図	東門・大畑地区における施釉陶磁器の出土状況	74
第29図	第12・18次調査区建物配置模式図	35	第65図	SD1221出土の被熱した緑釉陶器と灯火器・ 墨書土器・木簡	75
第30図	六月坂地区出土施釉陶磁器	36	第66図	多賀城城外出土の緑釉・灰釉陶器	77
第31図	東門・大畑地区建物配置模式図	37	第67図	多賀城域外における貿易陶磁出土地点	79
第32図	東門・大畑地区第14・23・56・58・60～67次 調査区における施釉陶磁器の出土状況	38	第68図	多賀城域外出土の貿易陶磁	79
第33図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（1）	40	第69図	宮城県域における古代の施釉陶磁器出土遺跡	80
第34図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（2）	41	第70図	宮城県域出土の緑釉・灰釉陶器	81
第35図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（3）	42			
第36図	東門・大畑地区出土施釉陶磁器（4）	44			

表 目 次

第 1 表	各編年の併行関係	10	第 12 表	南門・南辺東・南辺西・東辺・北辺地区出土 施釉陶磁器の器種と産地	56
第 2 表	政庁地区出土施釉陶磁器の器種と産地	13	第 13 表	市川橋遺跡高平地区出土施釉陶磁器の器種と産地	59
第 3 表	政庁地区（北端）出土施釉陶磁器の器種と産地	13	第 14 表	多賀城廃寺跡出土施釉陶磁器の器種と産地	59
第 4 表	政庁南面地区出土施釉陶磁器の器種と産地	21	第 15 表	整理・登録・原図番号対応表（1）	60
第 5 表	政庁西方地区出土施釉陶磁器の器種と産地	22	第 16 表	整理・登録・原図番号対応表（2）	61
第 6 表	西門・五万崎地区出土施釉陶磁器の器種と産地	34	第 17 表	貿易陶磁の器種構成	62
第 7 表	金堀地区出土施釉陶磁器の器種と産地	36	第 18 表	100㎡あたりの破片数	64
第 8 表	六月坂地区出土施釉陶磁器の器種と産地	36	第 19 表	緑釉・灰釉陶器の器種	65
第 9 表	東門・大畑地区出土施釉陶磁器の器種と産地（1）	48	第 20 表	緑釉・灰釉陶器の産地	65
第 10 表	東門・大畑地区出土施釉陶磁器の器種と産地（2）	49	第 21 表	緑釉・灰釉陶器碗・皿類の各編年の点数	66
第 11 表	作貫地区出土施釉陶磁器の器種と産地	50			

図版目次

図版 1	施釉陶磁器の胎土・釉調	89	図版 17	六月坂地区出土施釉陶磁器写真	99
図版 2	政庁地区出土施釉陶磁器写真	90	図版 18	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（1）	100
図版 3	政庁地区（北端）出土施釉陶磁器写真	91	図版 19	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（2）	101
図版 4	政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器写真（1）	91	図版 20	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（3）	102
図版 5	政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器写真（2）	92	図版 21	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（4）	103
図版 6	政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器写真（3）	93	図版 22	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（5）	104
図版 7	政庁南面（政庁南大路）地区出土施釉陶磁器写真	93	図版 23	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（6）	105
図版 8	政庁南面（鴻の池）地区地区出土施釉陶磁器写真	94	図版 24	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（7）	106
図版 9	政庁西方地区出土施釉陶磁器写真	94	図版 25	東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（8）	107
図版 10	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（1）	94	図版 26	作貫区出土施釉陶磁器写真	107
図版 11	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（2）	95	図版 27	北辺・南辺東地区出土施釉陶磁器写真	107
図版 12	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（3）	96	図版 28	南辺西地区出土施釉陶磁器写真（1）	108
図版 13	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（4）	97	図版 29	南辺西地区出土施釉陶磁器写真（2）	109
図版 14	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（5）	98	図版 30	市川橋遺跡高平区出土施釉陶磁器写真	109
図版 15	西門五万崎地区出土施釉陶器写真（6）	99	図版 31	多賀城廃寺跡出土施釉陶磁器写真	110
図版 16	金堀地区出土施釉陶器写真	99			

例 言

1. 本書は、宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴで、多賀城出土施釉陶磁器の資料集である。
2. 本書は、当研究所が管理する多賀城跡第1～92次調査、現状変更（「現変」と略記）、多賀城廃寺跡の発掘調査で出土した古代の緑釉陶器・灰釉陶器・貿易陶磁を集成したものである。それらは各年報や総括報告書で公表されているが、施釉陶磁器の年代や生産地については、本書が優先する。
3. 当研究所の刊行物を以下のように略記する。

『多賀城跡 政庁跡 本文編』→『本文編』

『多賀城跡 政庁跡 図録編』→『図録編』

『多賀城跡 政庁跡 補遺編』→『補遺編』

『多賀城跡 外郭跡Ⅰ—南門地区—』→『外郭跡Ⅰ』

『多賀城跡 政庁南面地区—城前官衙遺構・遺物編—』→『政庁南面Ⅰ』

『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ—城前官衙総括編—』→『政庁南面Ⅱ』

『宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ 多賀城漆紙文書』→『漆紙』

『宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ 多賀城跡木簡』→『木簡Ⅰ』

『宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ 多賀城跡木簡』→『木簡Ⅱ』

『宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ 多賀城跡木簡』→『木簡Ⅲ』

また『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2010』などと記し、複数年の場合は『年報1983・2006』、『年報2011～2014』などと記す。

4. 本書では、「猿投山西南麓窯跡群」を「猿投窯」と略称し、その他の窯についても「跡群」という表記を省略した。また図・表においては、産地名称を次のように略す場合がある。

猿投窯産：「猿」、東濃窯産：「濃」、尾張産：「尾」、洛北窯産：「北」、洛西窯産：「西」、近江産：「近」

5. 引用・参考文献は巻末に掲げた。また、本文中や図の表記では煩雑さを避けるため、刊行機関については引用する際に以下のように略す。

〇〇県・市町村教育委員会→〇〇県・市町村教委、埋蔵文化財調査センター→埋文センター

6. 土器実測図のうち、緑彩は■、墨書は■、油煙は■の塗りで表現した。
7. 図版作成と写真撮影については高橋透が行い、高橋里枝・柴田とみ子・菊池摩耶がこれを補助した。
8. 本書は所員で討議と検討を行い、高橋透が執筆・編集した。
9. 本資料は宮城県教育委員会で保管している。
10. 本書を作成するまでに以下の機関・個人の方々にご協力・ご指導いただいた。

奥州市埋蔵文化財センター、関西文化財調査会、九州歴史資料館、京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古資料館、白石市教育委員会、仙台市教育委員会、多賀城市埋蔵文化財調査センター、多治見市教育委員会、東北歴史博物館、みよし市歴史民俗資料館

相原淳一、大立目一、大堀秀人、小川淳一、尾野善裕、小原駿平、嘉見俊宏、黒田祐規子、齋藤健一、斎野裕彦、佐藤好和、高橋千晶、高橋照彦、立原遼平、館内魁、平尾政幸、古川一明、水橋公恵、村松稔、柳澤和明、山内伸浩、吉川義彦、吉野武、魯柔君

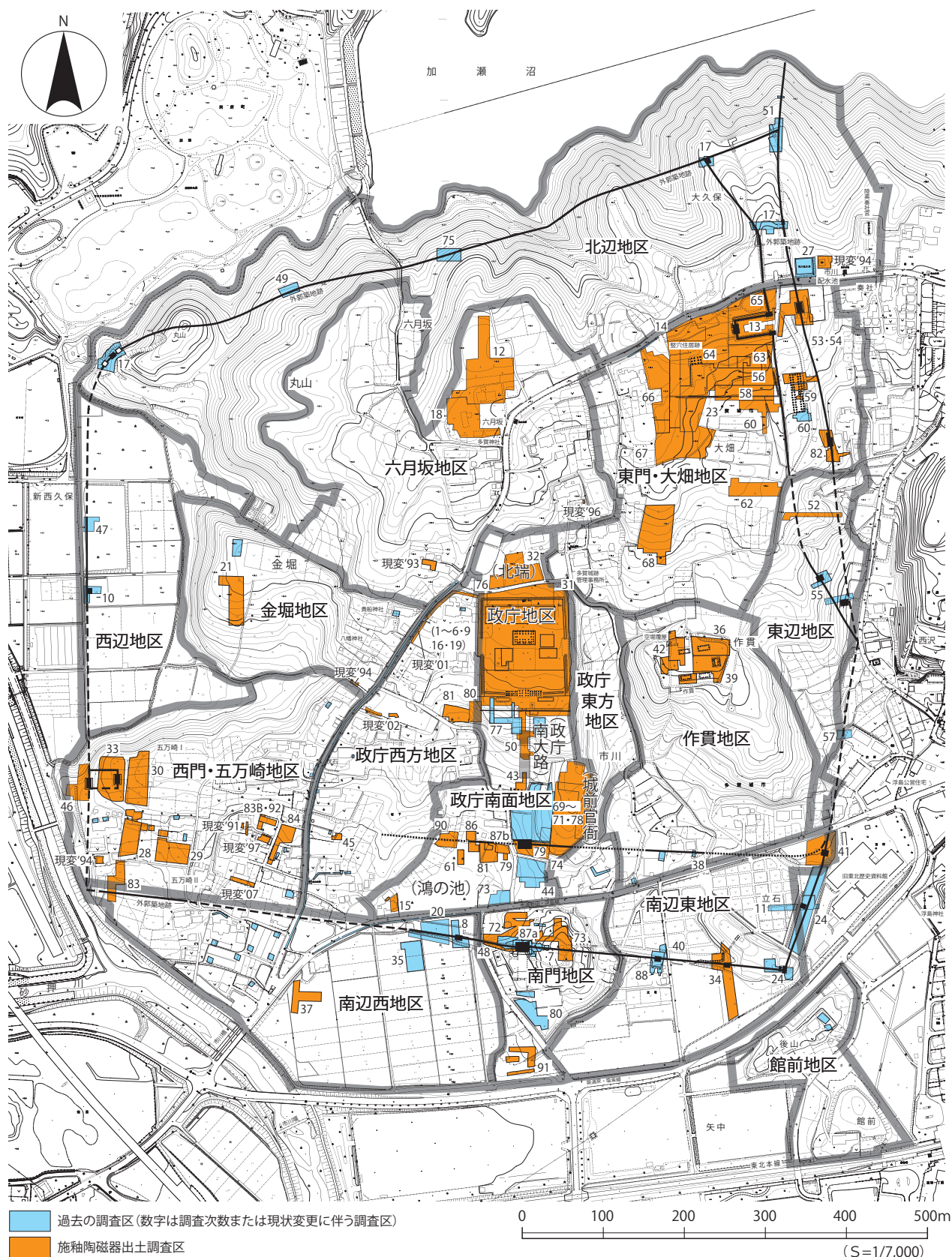
（敬称略・50音順）

【表紙の図は第26図1の陰刻花文を復元したもの】

1. 本書作成の経緯

その後、昭和 44（1969）年には多賀城跡の実態解明と、多賀城跡周辺の遺跡保護に万全を期す目的で「宮城県多賀城跡調査研究所」が設立され、2019 年までに第 93 次に及ぶ学術調査のほか、現状変更に伴う調査や工事の立会も行っている。その成果は年度ごとに『年報』で概要が報告されるとともに、『本文編』、『図録編』、『補遺編』、『外郭跡Ⅰ』、『政庁南面Ⅰ・Ⅱ』の総括報告書が刊行されている。加えて「漆紙文書」や「木





第2図 調査区の位置と地区区分

簡』については、多賀城の性格を考えるために重要な遺物であることから、資料集として『漆紙』、『木簡Ⅰ～Ⅲ』にまとめられている。

こうした調査史を踏まえ、現在、宮城県多賀城跡調査研究所ではこれまで当研究所で発掘した考古資料の再整理を進めている。そのなかで、施釉陶磁器は柳澤和明（1994）や『年報 2006』で集成・整理が行われ、

多賀城を評価する際に重要な遺物であることが指摘されている。今回は未報告資料を含め悉皆的に整理を行い、専門の研究者らから調査指導を受けつつ作業を進めた結果、漆紙文書、木簡に続く「宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ」として成果をまとめることとなった。

2. 整理の方法

(1) 整理作業について

①整理番号と収納方法

当研究所では、発掘調査で出土した資料を整理して抽出した場合、遺物であることを示すRと材質を示すアルファベット記号、年次調査ごとの通し番号を合わせた「登録番号」を付して管理し、平箱に収納することとしている（『本文編』：pp.73-74）。一方、施釉陶磁器はこれまでに緑釉・灰釉陶器が柳澤（1994）や愛知県陶磁資料館（1998）、貿易陶磁器が『年報 2006』で集成・整理されており、その過程で「登録番号」に加え緑釉・灰釉陶器は「次数＋番号」、貿易陶磁は「No. ○○」という「登録番号」とは異なる「整理番号」が付され、本書では「整理番号」を優先して用いた。なお、なかには調査時に抽出されなかったため「登録番号」が付されていないものもあり、それらについては新たに「登録番号」は付けていない。

また、当初は施釉陶磁器として抽出したが、再検討の結果、施釉陶磁器ではないと判断した場合^{（註1）}、その整理番号は欠番とした。一方、新たに抽出できたものについては、その次数の整理番号で最も新しい番号を付与した。貿易陶磁については、今回は多賀城が機能した8世紀前葉から11世紀中葉を対象としたため、中世以降のものについては取り上げなかった。

これらの資料は基本的に各次数ごと登録した平箱に収納されていたが、本書を作成するにあたり、資料の散逸を防ぎつつ今後の利活用を簡便化するため、新たに登録した平箱に収納することとした。

②資料化と掲載方法

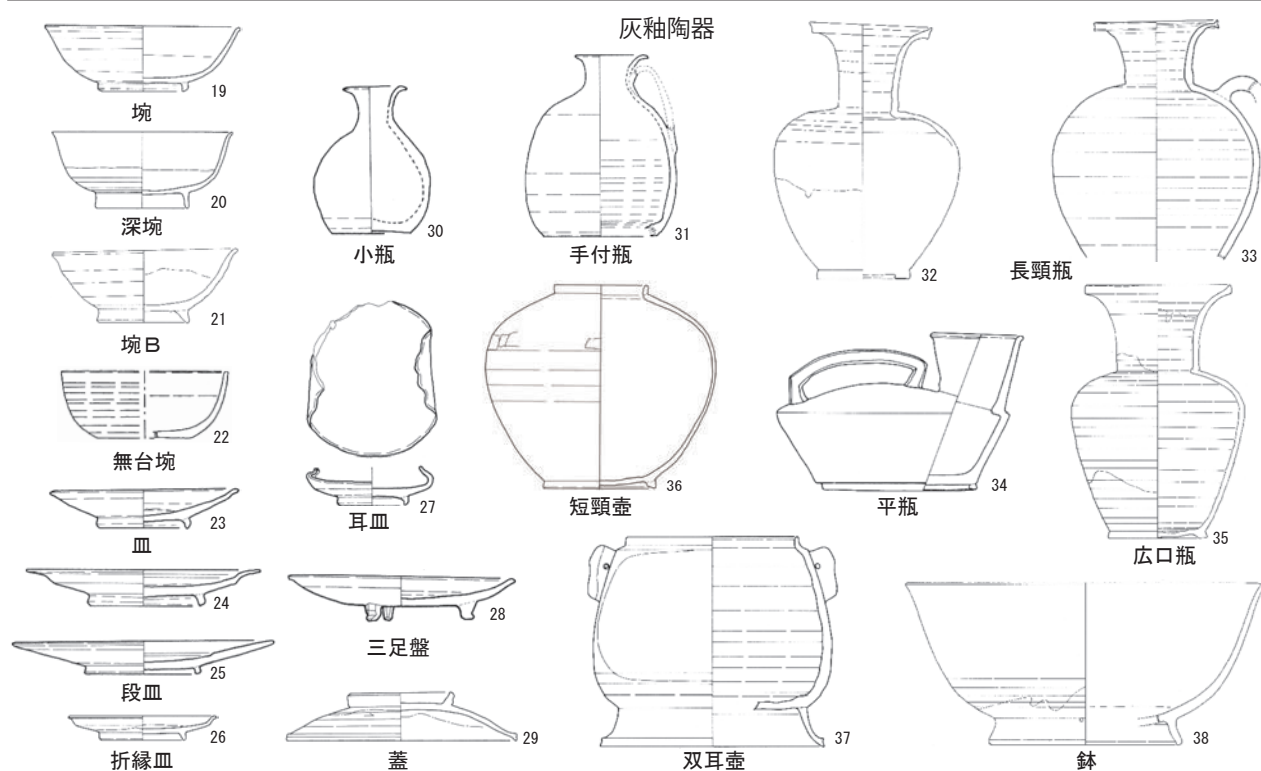
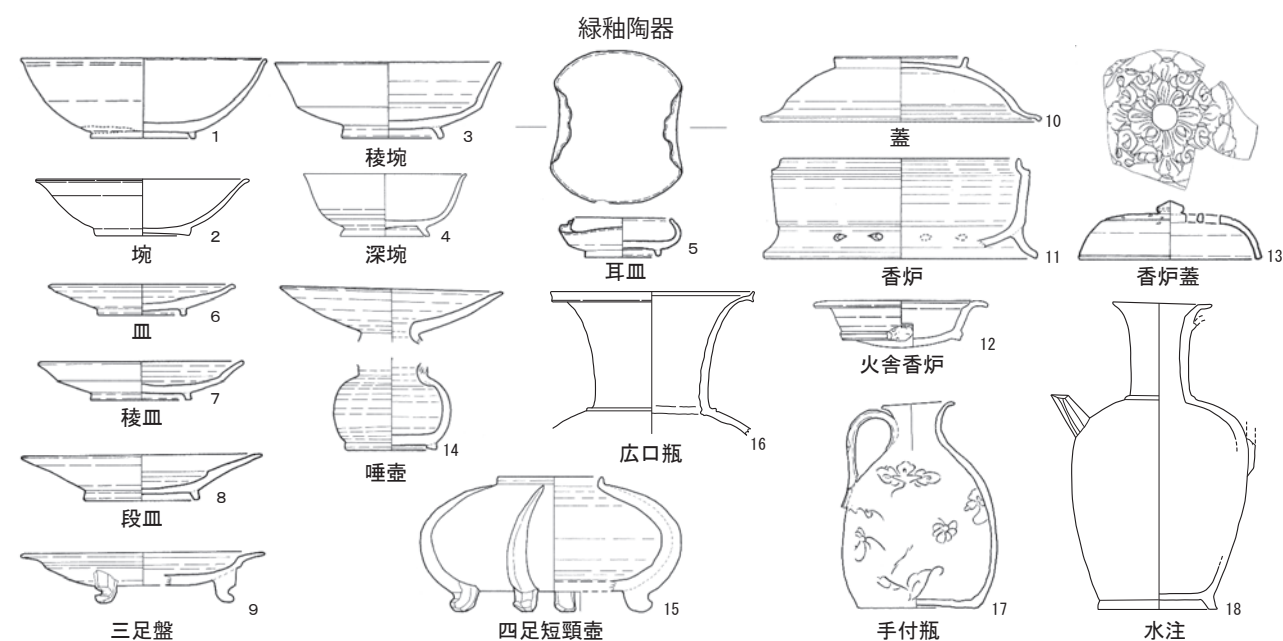
施釉陶磁器の数量化方法については破片数や重量で把握する方法がある（宇野 1992、酒井 2012 など）。両方のデータを把握することが望ましいが、すでに石膏などで復元されているものがあることや、出土量を比較する際に100㎡あたりの破片数を用いることが多いことなどから、破片数と個体数は必ずしも比例しないことに留意する必要があるものの、本書では破片数で把握することとした。

掲載方法について、過去の年報や総括報告書に掲載されているものは再録したが、実測図に残存部分が表現されていないものもあることから、それらについては可能な限り再実測することとし、また第15・16表を作成して過去の年報の図や登録番号とも対比できるようにした。一方、未報告資料については口径または底径が1/6以上残存するものを新たに抽出して実測し、香炉や唾壺などの特殊器種、貿易陶磁は破片でも図化した。なお、これまでに緑釉陶器のヘラミガキを表現している場合もあるが、本書では図面全体の表現を統一するため、それらの表現は省略した。

図面を掲載するに際し、近年は施釉範囲をカラーの塗りで表現している。しかし本書では土師器や須恵器などと区別する必要がないことや2次利用のしやすさを考慮し、施釉範囲は下端部分を一点鎖線で表現する方法に統一した。

③地区区分

成果をまとめるにあたり、施釉陶磁器の出土状況は地区ごとに差異が認められたことから、『木簡Ⅰ・Ⅱ』のように次数の古い順に記述するのではなく、地区ごとに整理して報告することとした。多賀城内における地区区分は大字によって区分されてきたが（『本文編』：p.72）、近年では環境整備の進展に伴ってそれらを整理・統合している（宮城県教委 2016）。本書では後者の地区区分を踏襲するが、発掘調査の進展により今後変更される可能性がある。そのため、総括報告がなされた政庁地区・政庁南面（城前官衙）地区・南門を除き、同じ地区であっても複数の調査次数・現状変更の資料を混在させるのではなく、それぞれ分けて掲載することとし、今後地区区分が変更になっても把握しやすいよう努めた。



1：NN259号窯（名古屋市教委1989）、2：平安京左京二条二坊（京都市文化市民局2016を再トレース）、3・5・6～11・13～15・17・19・23～25・27・28・30・31・33：黒笹90号窯（三好町誌編集委員会2013）、4・20・26・38：北丘15号窯（多治見市教委1981）、12：大針1号窯（多治見市教委1987）、16：斎宮跡第8次（三重県教委1978を再トレース）、18：平出遺跡平出遺跡調査会1955を再トレース）、21：明和27号窯（多治見市教委1990a）、22：兼近1号窯（豊田市教委2005）、29：苗畑5号窯（豊橋市教委2000）、32：北丘25号窯（多治見市教委1984）、34：黒笹14号窯（愛知県教委1980）、35：虎渓山5号窯（多治見市教委1990b）、36：七曲1号窯（豊田市教委2007）、37：黒笹89号窯（愛知県埋文センター1994）

第3図 緑釉・灰釉陶器の主な器種（スケール不同）

（2）器種と産地

器種分類・名称については愛知県（2015）や太宰府市教育委員会（2000）を参考に、多賀城で出土するものを中心に第3・9図に示した。なお、「椀」については材質の違いを評価し、緑釉・灰釉陶器では「椀」、貿易陶磁は「碗」で表記を統一した。

産地や年代観については、大阪大学高橋照彦氏、奈良文化財研究所尾野善裕氏、関西文化財調査会平尾政幸氏など各研究者からご教示いただき、最終的には後述する産地推定基準をもとに高橋透が判断した。本書で用いる産地同定の基準や編年については、次に示す通りである。

I (削出)			II (貼付)			
A (円盤)	A (蛇の目)	C (方形・長方形)	D (端面段あり)	D (三日月状)		E (三角形状)
B (蛇の目)	2 (幅狭)	2a (高く直線的)	2 (低く太い)	1b (端部の屈曲強く稜あり、直線的)		2 (鈍い稜あり)
	B (撥・台形状)	2b (高くやや内湾)		2a (端部の屈曲やや強く、鈍い稜あり)		3a (稜なし)
2a (幅狭、削出)		2c (高くハの字状にひらく)		4 (低く端部のみわずかに内湾)		3b (稜なし、低く太い)
2b (幅狭、沈線)	2 (高い)			2b (端部の屈曲やや強く鈍い稜あり、直線的)		3b (ハの字状で端部が外反)
C (輪)						III (なし)

第4図 緑釉・灰釉陶器碗・皿類の高台分類

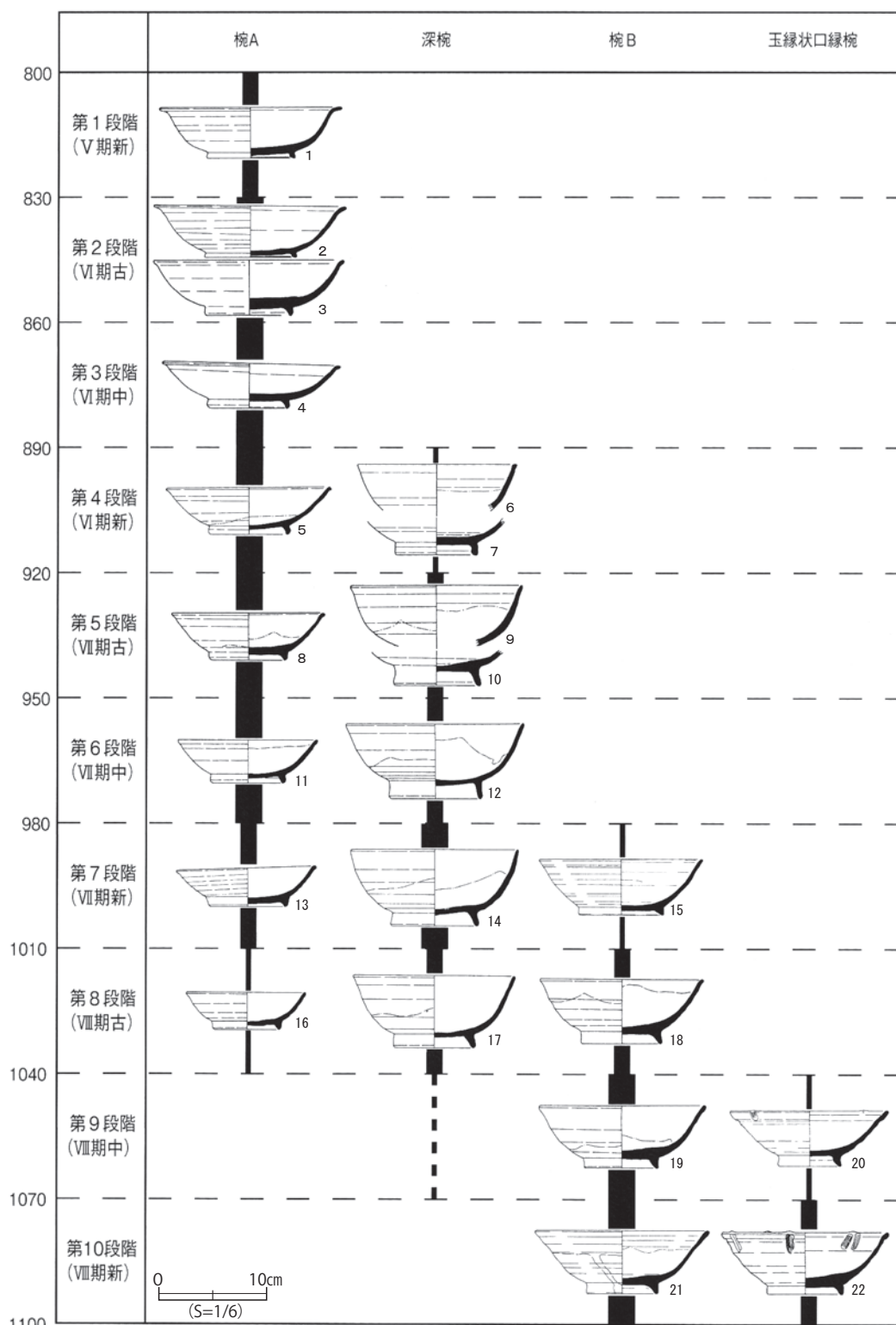
①灰釉陶器

【猿投窯・尾北窯・東濃窯産】

猿投窯・尾北窯産は胎土がやや粗く全体に灰白色を呈する傾向にあり、白色粒や黒色粒を一定量含むもので（図版1-7）、両者は明確に分けることが難しいことから、本書では総称して「尾張産」とする。東濃窯産は胎土が緻密で全体に灰白色を呈するものが多く、白色粒や黒色粒を少量を含むものである（8）。ただし粒子の入り方によってどちらか判断が難しい個体も一定量存在し、可能性が高いとは言えないが、胎土や粒子の入り方から尾張産あるいは東濃窯産の可能性があるものは「尾張産?」「東濃窯産?」とし、どちらとも判断しがたいものについては総称して「東海西部産」とした。なお、8世紀中葉に出現する自然釉を利用したいわゆる「原始灰釉」（檜崎 1976）については、「人工施釉」が確認できるものと同質の胎土が用いられており、小破片ではそれらを区別することが難しい場合がある。本書では共伴資料から9世紀初頭以前のものは除いたが（註2）、単独で出土した小破片については「原始灰釉」を含んでいる可能性がある点は留意されたい。

編年に関して、猿投窯・尾北窯の場合、緑釉陶器を含めて代表的なものに檜崎彰一（1961・1976・1979・1983）や、斎藤孝正（1981・1982・1989ab・1994・1998）による窯式編年、これらに最近の資料を踏まえて修正した井上喜久男（2015）の編年、前川要（1989）、尾野善裕（1999・2000・2001・2003・2008・2014b）の編年などがあり、東濃窯では田口昭二（1982・1984）や若尾正成（1987・1988・1990）、山内伸浩（1994）、尾野（前掲）による編年がある。

現状で窯式編年が最も利用されることが多いが、猿投窯の黒笹14号窯式における高台の断面が方形を呈するいわゆる「角高台」の碗・皿類と、黒笹90号窯式における高台端部先端の尖ったいわゆる「三日月高台」は、黒笹14号窯と90号窯の両者から出土しており、それだけをもって時期差とは判断できないという批判（尾野 2014a）や、消費地においてそれらが共伴する事例も確認されている（小森 1994、原 1994）。また黒笹90号窯式では施釉方法がハケ塗りで底部に回転ヘラケズリが施されるが、折戸53号窯式では漬け掛けで高台内に回転糸切りの痕跡が残されるようになる点についても、東山72号窯式の標識窯である東山72号窯出土資料において、回転糸切り痕のみられないものが一定量存在することが分かり（名古屋大学考古学研究室 2017）、資料の実態にはそぐわない部分がある。加えて多賀城では、第61次第10層（第18図1）において10世紀前葉に降下した灰白色火山灰（註3）の下層から漬け掛けの可能性のある碗・皿類が出土し、また第68次SK2482では灰白色火山灰層の直上層にあたる3層からハケ塗りの深碗（第16図2）が出土するなど、窯式編年では説明できない資料が存在する。対して尾野編年ではそうした資料の実態が反映されており、多賀城出土資料とも整合的であることから、後述する緑釉陶器と合わせ、尾張・東濃窯産については尾野編年を用いる。



第5図 尾張・東濃窯における灰釉陶器碗類の変遷（尾野 2008 に加筆）

碗・皿類の変遷について^(註4)、第4図の高台分類も参考にみていけば、V期新（815～830年頃）は高台が撥状を呈するものが多く（第5図1、第4図ⅡB1）、碗は体部が強く張り、皿も含めて口縁部が大きく外反する。人工施釉の痕跡はみられず、内面は自然釉である。VI期古（830～860年頃）は高台が隅丸形状を呈するものに变化し（2、ⅡC1）、端部を尖らせ外面に鈍い稜をもつものが出現する（3、ⅡD2）。口縁部の外反は弱くなり、内面ハケ塗りである。VI期中（860～890年頃）は高台が三日月状でも屈曲が強く端部外面に稜をもつもの（4、ⅡD1a）や直線的なもの（ⅡD1b）が加わり、三角形のもの（ⅡE1）、細長いもの（ⅡF1・ⅡF2）、隅丸長形状のもの（ⅡC2）もみられる。内外面ハケ

塗りで、内底面まで施されるものもある。Ⅵ期新（890～920年頃）は高台が三日月状でも屈曲の弱いものへ変化し（5、Ⅱ D3）、三角形のもの（Ⅱ E2）や細長いもの（Ⅱ F2）があるが、全体に薄手化しており、深碗（6・7）が出現する。ハケ塗りがほとんどであるが、漬け掛けもわずかにみられる。

Ⅶ期古（920～950年頃）は高台が低平化して三日月状でも端部のみ内湾するもの（8、Ⅱ D4）が主体で、さらに薄手化が進む。また底部に回転糸切り痕を残すものや漬け掛けが一般化する。皿は口径13～14cmのものが中心となる。深碗や折縁皿が増加し、深碗は高台が細長く直線的なもの（Ⅱ C2abc）や細長く「ハ」の字状にひらくもの（10、Ⅱ F3ab）があり、ハケ塗りされるものもある。Ⅶ期中（950～980年頃）は高台に大きな変化はないが（11）、皿の小型化が進み、口径13cm前後のものが主体となる。Ⅶ期新（980～1010年頃）はのちの山茶碗につながる碗Bが出現し（15）、高台は三角形のもの（15、Ⅱ E3a）が出現する。深碗は高台が底部中心近くに付され、体部の張りが強くなる（14）。皿は口径12cm前後が中心で、段皿は段が形骸化して沈線状となり、稜皿も確認できるようになる。Ⅷ期古（1010～1040年頃）は碗Bが多くなり（18）、Ⅷ期中（1040～1070年頃）は玉縁状の口縁をもつ碗が出現し（20）、太く低い三角形のもの（19、Ⅱ E3b）がみられるようになる。皿は皿・段皿が急減して折縁皿はみられなくなり、稜皿中心となる。Ⅷ期新（1070～1100年頃）はほぼ碗B（21）・玉縁状口縁をもつ碗（22）・稜皿のみとなり、碗Bは口径が16cmを超える大型品が中心となる。

瓶類の場合、長頸瓶はⅤ期新～Ⅵ期古にかけて原始灰釉がみられ、Ⅵ期古になると人工施釉が行われるようになる。Ⅴ期新は頸部の最も細い部分が付け根にあり、口頸部が緩やかに外反するが、Ⅵ期古は頸部上半が大きくひらいて口縁端部は直立または外傾する。Ⅵ期中～新は頸部がやや太くなり（第3図32・33）、口縁端部を上下に拡張するものもみられる。Ⅶ期はほとんどが広口瓶（35）となり、頸部が太く大きくひらき、口縁端部は外傾するものが多い。体部は底部から直立してのび、肩部が張って、高台は隅丸方形あるいは逆台形状であるが、端部は丸みを帯びるものもある。

【三河・遠江・駿河産】

三河・遠江・駿河産は胎土が粗く全体に暗い発色で、白色粒や黒色粒を多量に含む（図版1-9）。胎土の肉眼観察では三河の二川窯と遠江の宮口窯の判別が難しいという研究成果（東海土器研究会2009）を踏まえ、特徴的な器種で産地を絞り込める場合を除き、本書では三河・遠江・駿河産を総称して「東海東部産」とする。なお、「東海西部産」か「東海東部産」か判断が難しい資料は「東海産」とした。

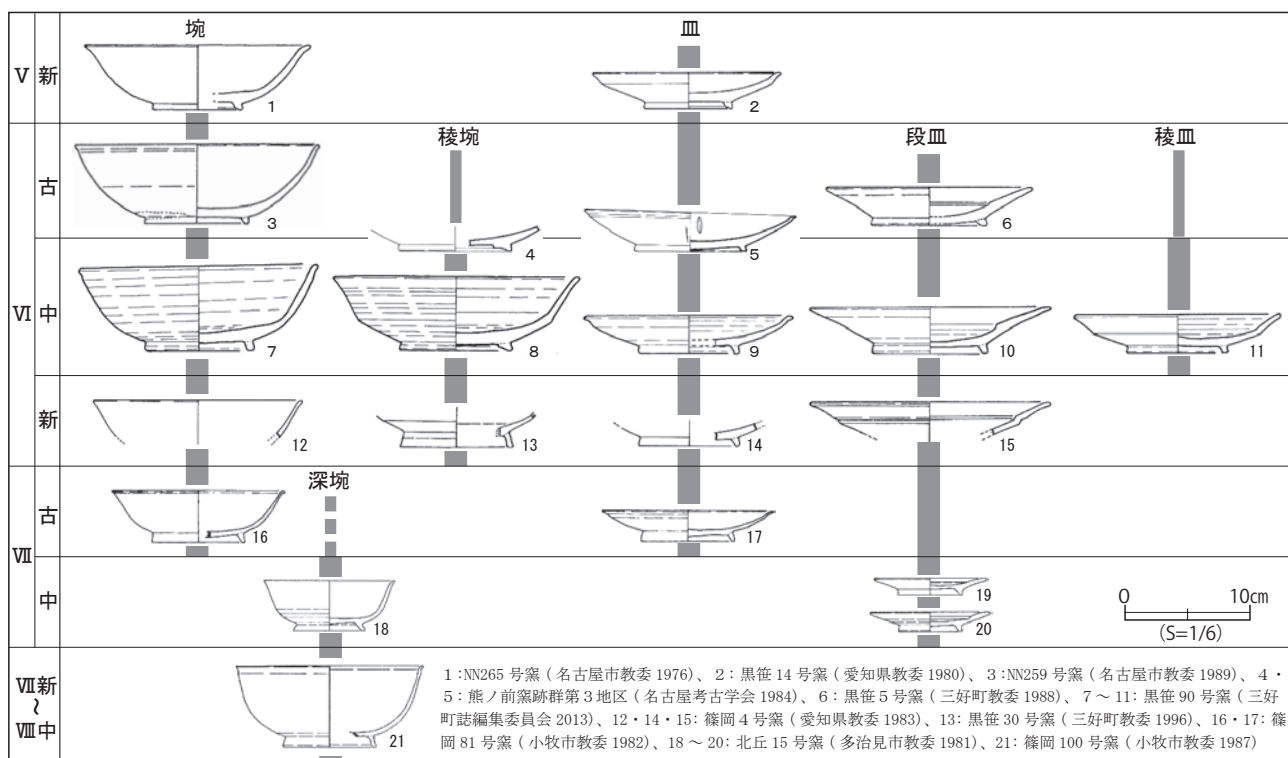
遠江産では宮口窯や清ヶ谷窯を対象とした鈴木敏則（2014・2015）の編年、三河では二川窯を対象とした贅元洋（2002）の編年があり、本書で東海東部産を位置づける場合、鈴木編年を代表させて用いる。

鈴木編年における碗・皿類の変遷を示せば、Ⅰ期（9世紀前半、黒笹14号窯式併行）はハケ塗りで高台は角高台（第4図Ⅱ C1・2）、底部は回転ヘラケズリであり、碗は口縁部がわずかに外反する。Ⅱ期（9世紀後半、黒笹90号窯式併行）はハケ塗りで高台は稜をもつ三日月状（Ⅱ D1）や高いもの（Ⅱ C2ab・Ⅱ F1・2）であり、底部は回転ヘラケズリである。Ⅲ期（10世紀前半、折戸53号窯式併行）は漬け掛け主体だがハケ塗りが残り、高台は低平化した三日月状のもの（Ⅱ D3）や三角形のもの（Ⅱ E3a）となり、底部は回転糸切り無調整主体でナデや回転ヘラケズリもみられる。Ⅳ期（10世紀後半、東山72号窯式併行）では高台に大きな変化はないが、底部は回転糸切り無調整がほとんどである。碗は法量の縮小化が進み、14cm未満のものが主体となる。Ⅴ期（11世紀代、百代寺窯式併行）は口縁部が玉縁状を呈するものが出現し、高台は三角形がほとんどで、低平化したものもみられる（Ⅱ E3b）。

②緑釉陶器

【猿投窯・尾北窯・東濃窯産】

猿投窯・尾北窯・東濃窯産の特徴として、碗・皿類は貼付輪高台で全面施釉され、焼成の際は全時期を通じて三叉トチンが用いられることが挙げられる。おおまかな傾向として、猿投窯は明るい色調の胎土に淡緑色の釉をかけたものが主体で（図版1-1）、尾北窯・東濃窯は暗灰色の胎土に濃緑色の釉が多いとされるが（2）、近年では時期によって前者から後者へ変化すると考えられていることから（尾野2003）、



第 6 図 尾張・東濃窯における緑釉陶器碗・皿類の変遷 (尾野 2003 をもとに作成)

ここでは尾野編年Ⅵ期中以前は猿投窯産、Ⅵ期新～Ⅶ期古は猿投窯・尾北窯・東濃窯産とし（本書ではこれらを総称して「東海西部産」と呼称）、Ⅶ期中以降を東濃窯産の可能性が高いものとして産地を推定した。なお緑釉陶器生産はⅧ期中まで確認できるが、Ⅶ期新以降はきわめて低調である。

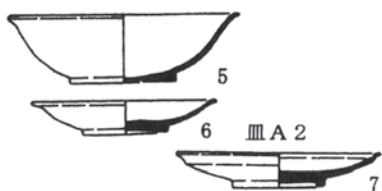
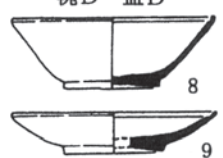
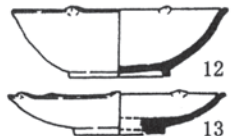
碗・皿類の変遷を示せば、Ⅴ期新は高台が撥状を呈するもの（第 6 図 1・2、第 4 図Ⅱ B1）や幅広の蛇の目高台のもの（Ⅱ A1）がみられ、碗の体部は張りが強く、碗・皿ともに口縁部は大きく外反する。Ⅵ期古は高台が隅丸方形状を呈するものが多くなり（3・6、Ⅱ C1）、やや幅の狭くなった蛇の目高台（4、Ⅱ A2）も認められる。碗は体部の張りが弱くなり、口縁部の外反は碗・皿ともに弱く、内湾するものもみられる。Ⅵ期中は縦長の隅丸長方形状を呈するものが多く（7・9～11、Ⅱ C2ab）、端面が反ってさらに幅が狭くなった蛇の目高台（8）も少量みられる。Ⅵ期新は硬陶のものが増え薄手化して法量の縮小化が進み、高台は「ハ」の字状にひらくものが出現する（13、Ⅱ C2c・Ⅱ F3a）。Ⅵ期古（920～950 年頃）は高台が「ハ」の字状にひらくものが多い（16・17、Ⅱ C2c・Ⅱ B2・Ⅱ F3a）、Ⅶ期中以降は深碗・段皿が占め、高台はⅡ B2（19・20）や端部下端が外反するもの（18・21、Ⅱ F3b）がみられる。

その他の器種では、三足盤・唾壺・四足壺はⅥ期古から出土がみられ、Ⅵ期中にかけて段皿・蓋・托・手付瓶・小瓶・香炉・短頸壺・花瓶・陶枕が出現し、手付瓶などでは外面に陰刻花文の施されるものもみられる。Ⅵ期新では器種が減少し、Ⅶ期以降は広口瓶や短頸壺、香炉、水注が確認できるのみとなる。

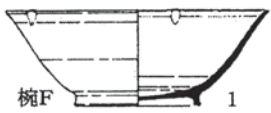
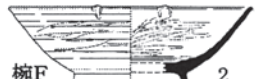
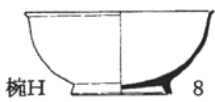
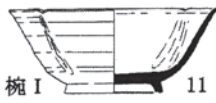
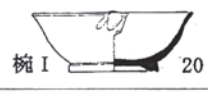
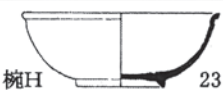
【洛北窯・洛西窯・篠窯産】

洛北窯・洛西窯・篠窯産の特徴として、削出高台であることや 9 世紀後半以降になると 2 次焼成の際に三叉トチンは使わず重ね焼きを行うようになることが挙げられる。胎土は洛北窯産が淡黄褐色を呈する軟陶で、猿投窯産に比べ白色粒や黒色粒を多く含んでおり（図版 1 - 4）、洛西窯産は灰色で硬陶のものであり、白色粒をやや多く含む（5）。篠窯産はこれらに比べ胎土が精選され、底面無釉のものである（6）。いずれも釉層が薄く、施釉の際のハケの痕跡が明瞭に観察できるものもあり、釉調は軟陶の場合では淡緑色が多いのに対し、硬陶のものでは深緑色を呈する。なお、硬陶のものは洛北窯産と洛西窯産、あるいは洛西窯産と篠窯産の識別が難しい場合があり、そうしたケースでは洛北窯・洛西窯を総称して「山城産」、篠窯産を含む場合は「山城・篠窯産」とする。

編年に関して、代表的なものに百瀬正恒（1986）や上村和直（1994）、前川要（1989）、高橋照彦（1995・

先 I 期	 碗 X	
I 期	 碗 A・皿 A 1 2 3  碗 C 4	
II 期	 5 6 皿 A 2 7  碗 D・皿 D 8 9  0 10cm	
III 期	 碗 E・皿 E 10 11  碗 F・皿 F 12 13	
IV 期	 14  15	
V 期	 16  17	

第7図 山城・篠窯産緑釉陶器碗・皿類の変遷（高橋 2016）

I	 碗 F 1	 皿 F 5
	 碗 F 2	 段皿 6
	 碗 G 3	 皿 7
	 碗 B 4	
II 古	 碗 H 8	 皿 F 13
	 碗 G 9	 段皿 14
	 碗 G 10	 皿 15
	 碗 I 11	
	 碗 I 12	
II 新	 碗 H 16	 段皿 21
	 碗 G 17	 皿 22
	 碗 G 18	
	 碗 I 19	
	 碗 I 20	
III	 碗 H 23	 碗 G・I 24
	 碗 G・I 25	 皿 26

第8図 近江産緑釉陶器碗・皿類の変遷（高橋 2016）

2003・2012・2016) による研究があり、本書では最近の篠窯の調査成果や詳細な暦年代の検討を行っている高橋照彦の編年を用いることとする。

埴・皿類の変遷を示せば、Ⅰ期(9世紀前葉)は軟陶で底部削出平高台のものが多数を占め(第7図2～4、第4図ⅠA)、口縁部は強く外反するものが多く、やや扁平な器形となる。Ⅱ期(9世紀中葉～後葉)は古段階と新段階に分けられ、古段階は硬陶のものが急増し、平高台が主体であるが蛇の目高台(5、ⅠB1・ⅠB2a)、輪高台(7、ⅠC)が多くなり、無高台(Ⅲ)もみられる。また埴・皿ともに口縁部が内湾し、口縁部内面に沈線をもつものがみられる(8・9)。新段階は蛇の目高台や輪高台が主体となり、陰刻文の施されるものが増加する。Ⅲ期(9世紀末)は蛇の目高台や輪高台主体であるが、わずかに貼付輪高台(ⅡC2)もみられる。稜埴や稜皿が多く(10・11)、装飾手法として陰刻文のほか輪花をもつもの(12・13)も少量存在する。Ⅳ期(10世紀前半)は輪高台が多数を占め(14・15)、蛇の目高台は底部に1条圈線を施すもの(ⅠB2b)に変化する。施釉方法も底面の一部に施釉または無施釉のものがほとんどとなる。埴・皿には輪花をもつものが多く、皿はⅢ期に比べて口径が縮小化する。Ⅴ期(10世紀後半)は埴・皿類の口径の縮小化が顕著になるが(16・17)、貼付輪高台(ⅡD2)のものも確認されている。

【近江産】

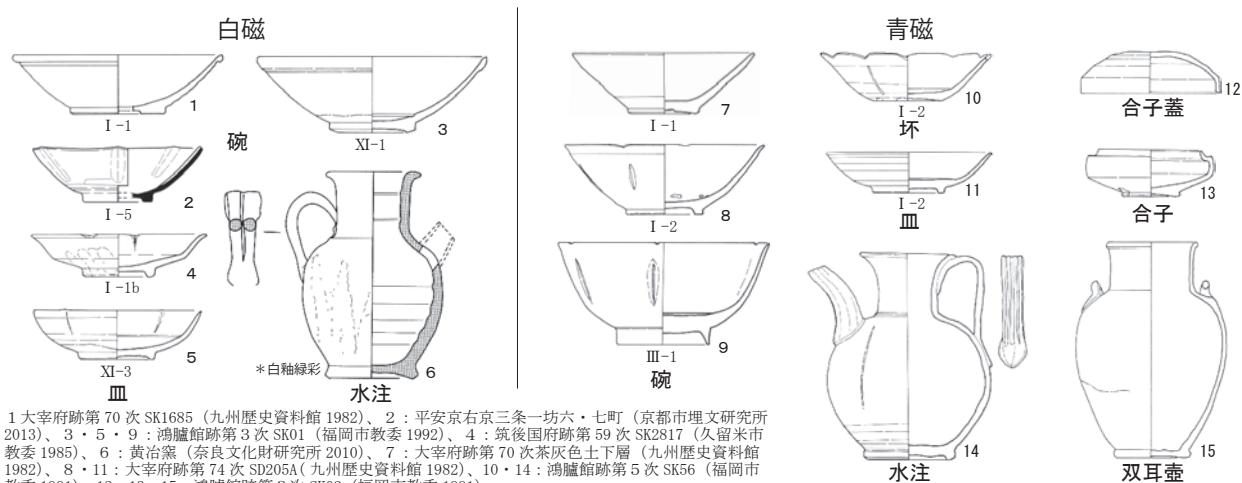
近江産埴・皿類の特徴として、貼付輪高台で端面に段をもつこと、内底面に1条圈線が施されること、底部回転糸切り無調整であること、ヘラミガキは施されないことが挙げられる。これらの特徴は三河の二川窯でも認められるが(賛1996)、生産された緑釉陶器は近隣の消費地のみで確認され、遠隔地で明らかに三河産と考えられる資料は出土していない。また近江産は胎土が硬陶で須恵器質のものや褐色を呈するのに対し(図版1-3)、二川窯では灰釉陶器と同じことが指摘され(賛2003)、後者は多賀城では出土していない。このことから、今後確認される可能性は否定しないが、本書ではそれらの特徴を持つ資料は「近江産」として把握することとした。

編年に関して、代表的なものに日永伊久男(1988・1994)、前川要(1989)、森隆(1991)、高橋照彦(1994a・1995・2016)、畑中英二(2003)の研究がある。最近の春日北窯の調査成果(滋賀県教委2012)によって、近江における施釉陶器生産開始期の様相が明らかとなり、本書ではその成果を反映している高橋照彦の編年を用いることとする。

埴・皿類の変遷を示せば、Ⅰ期(10世紀前半)は高台が「ハ」の字状にひらき(第8図1～4、第4図ⅡC2c)、端面はわずかにくぼむ程度で、底部の回転糸切りはナデ消される。ただしこの段階は東濃窯産などと類似しており、本書ではこれらの資料を「東濃窯または近江産」とする。Ⅱ期(10世紀後半)は古段階と新段階に分けられ、古段階は高台が高く幅狭で端面に段をもつもの(8～12、ⅡD1)が主体で、回転糸切り無調整である。輪花は縦に長いものが多い。新段階は高台が低く幅広で端面に段をもつもの(16～20、ⅡD2)が主体で、底面に施釉されないものもみられる。輪花は口縁端部のみを押圧するものが多い。Ⅲ期(10世紀末～11世紀初頭)は高台が三角形状がほとんどとなる(23～25、ⅡE3)。

暦年代	近江産 高橋(1994・2016)	山城・篠窯産 高橋(2003・2016)	平安京 小森・上村(1996)	尾張・東濃窯産 尾野(2003・2008)	猿投窯 井上(2015)	遠江・駿河産 鈴木(2014・2015)	三河産 賛(2002)
850		I	I 新	V 新	黒笹14号窯式 I		1
		II 古新	古	古			2
900		III	II 中	VI 中	黒笹90号窯式 II		3
			新	新			4
950	I	IV 古新	III 古	VII 古	折戸53号窯式 III		5
	II 古新		中	中			6
1000	III	V	新	新	東山72号窯式 IV		7
			古	古			
1050			IV 中	VIII 中	百代寺窯式 V		8
			新	新			
1100							

第1表 各編年の併行関係



第9図 白磁・青磁の主な器種（スケール不同）

【各編年の併行関係】

高橋編年と尾野編年については平安京出土土器との対応関係、尾野編年と鈴木・賛編年は猿投窯の窯式編年との関係から併行関係を推定でき、それらをまとめると第1表のように整理できる。ただし、これらは共伴関係から厳密に検討しておらず、今後変更される可能性があることは留意されたい（註5）。

③白磁

太宰府市教育委員会（2000）に拠れば、古代の白磁にはⅠ類とⅪ類があり、Ⅰ類は胎土が緻密で純白あるいは乳白色、乳黄灰色を呈し、表面は滑らかで釉は乳白色または空色である（図版1-10）。Ⅺ類は胎土がわずかに青白色を帯びる白色を呈し、釉はわずかに水色を帯びる白色で（11）、淡緑白色や黄白色気味のものもある。体部下端は露胎で、橙色気味に発色する。碗・皿は高台や口縁部形態から細分されるが、Ⅰ類（第9図1・2・4）は8世紀末～10世紀中頃、Ⅺ類（3・5）は10世紀後半～11世紀中頃とされる。産地については、Ⅰ類は刑・定窯系とされるが、近年では黄冶窯や白河窯で唐代の白磁生産が確認されている（奈良文化財研究所2010・2013）。本書ではそれらを明確に分けることができなかったことから、産地は表記せずに「白磁〇類」とだけ示すこととした。

④青磁

越州窯系青磁はⅠ～Ⅲ類に分類されるが、Ⅱ類は多賀城において出土していない。Ⅰ類は胎土が緻密で淡黄灰色を呈し、器面全体は茶黄色や黄緑色である（図版1-12）。碗は蛇の目高台のⅠ-1類（第9図7）と輪高台のⅠ-2類（8）があり、輪花の有無や施釉方法、目跡の状況からさらに細分される。Ⅲ類はⅠ類に近いが、胎土・釉ともにやや濃い茶色味を帯びるものが多く（図版1-13）、碗は高台内に細長い白色の目跡が4～5個残るものがある。Ⅰ類は8世紀末～10世紀中頃、Ⅲ類は10世紀後半～11世紀中頃とされる。産地については越州窯産が大半と考えられ、本書では「越州窯系青磁〇類」と表記した。

（3）記述の方法

以上の整理方法と器種・産地をもとに、第Ⅱ章では各地区の状況を概観していくが、『木簡Ⅰ・Ⅱ』では調査の概要や出土した遺構について細かく記述している。施釉陶磁器は木簡に比べ出土量が圧倒的に多く、同様に記述した場合、非常に煩雑となる。そのためここでは各地区の概要を示すにとどめ、施釉陶磁器の分布状況や出土量の多い遺構についてのみ触れることとした。また各地区における出土の集中度を比較するため、100㎡あたりの破片数も提示する。発掘調査面積は各年報や総括報告書に記載されているが、実際の調査面積と異なる場合は再計測した。また個々の資料の産地や特徴については可能な限り図に記載し、本文では編年の位置づけにかかわる特徴や産地、あるいは特記すべき痕跡についてのみ記述することとした。

第Ⅱ章 多賀城出土施釉陶磁器について

1. 政庁地区

(1) 地区の概要

政庁地区は、政庁とその北側にある政庁地区北端に分けられる。政庁は多賀城跡のほぼ中央にあり、東西約 103 m、南北約 116 m の長方形の範囲に築地塀を巡らせている。第 1 ～ 6 ・ 9 ・ 16 ・ 19 ・ 31 ・ 76 ・ 77 次調査によって、創建以来大きく 4 時期の変遷があることが明らかにされた（『本文編』、『補遺編』、第 10 図）。各時期の画期は多賀城碑に記された多賀城創建と改修、六国史にみえる伊治公弼麻呂の乱の際の火災や貞観の大地震と対応し、この時期区分は多賀城全体の変遷を考える基本となる。

第Ⅰ期：養老・神亀頃（717 ～ 728）～ 8 世紀中頃 藤原朝鸞による改修（多賀城碑銘文によれば創建は神亀元（724）年、修造は天平宝字 6（762）年）

第Ⅱ期：8 世紀中頃～宝亀 11（780）年 伊治公弼麻呂の乱を契機とする火災

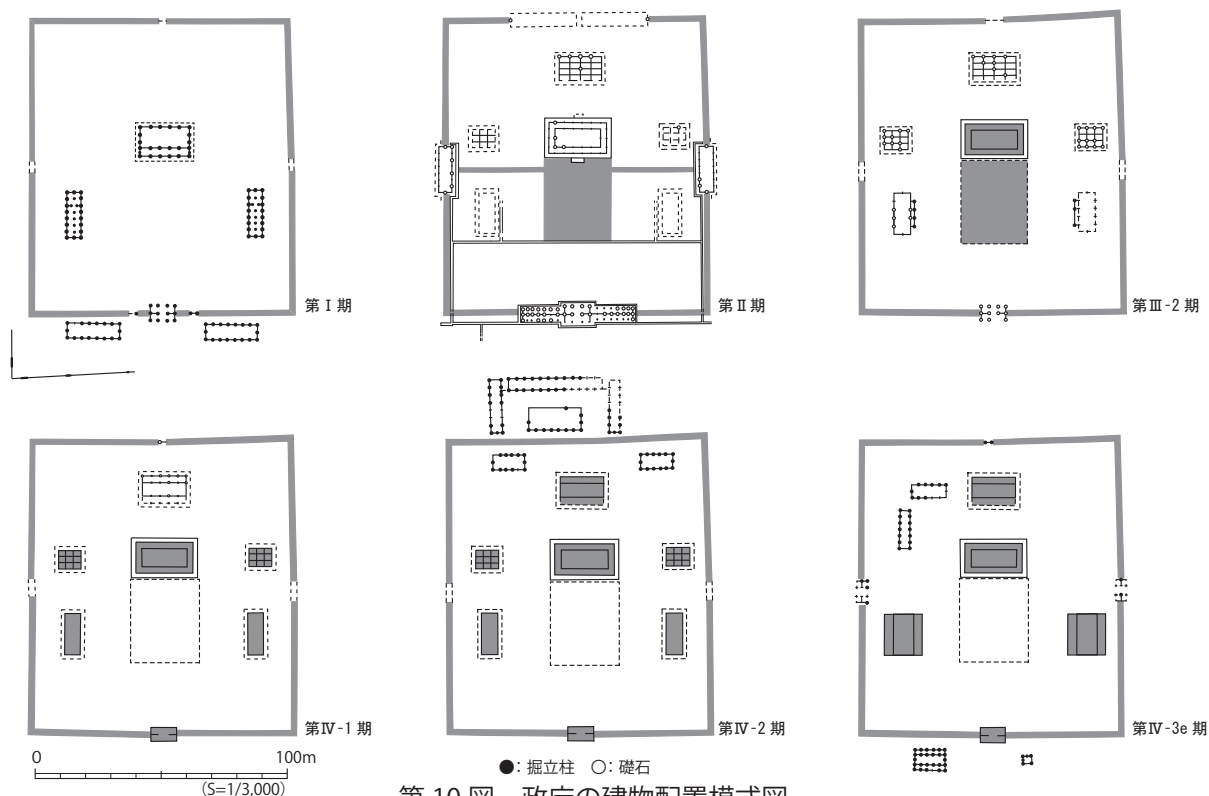
第Ⅲ期：宝亀 11（780）年～貞観 11（869）年 貞観 11 年大地震による被災

第Ⅲ-1 期：火災後の暫定的な復興、第Ⅲ-2 期：本格的な復興

第Ⅳ期：貞観 11（869）年～ 11 世紀中頃

第Ⅳ-1 期：震災後の暫定的な復興、第Ⅳ-2 期：北方建物の追加、第Ⅳ-3 期：終末期

第Ⅰ期は正殿・東西脇殿・南門・南門前殿から構成され、正殿前には広場が設けられる。第Ⅱ期は全面的な建て替えが行われ、正殿・東西脇殿に加え、翼廊のついた南門・東西楼・後殿が全て礎石式となり、築地塀各辺には西殿・東殿・北殿もつくられる。第Ⅲ期は翼廊・北殿・東殿・西殿が取り払われるが、第Ⅱ期の配置を継承する。第Ⅳ期は、第Ⅳ-2 期に後殿の後方へ掘立柱建物が東西対称に配置され、さらに北辺築地外側の北西側に掘立柱建物群が建てられるが、それらは第Ⅳ-3 期にはなくなり、東西脇殿が掘立・礎石併用建物へ変化し、政庁内の北西部では小規模な掘立柱建物が変遷する。



第 10 図 政庁の建物配置模式図

政庁地区（北端）は第 31・32 次調査によって第Ⅲ・Ⅳ期の竪穴建物や小規模な掘立柱建物群が確認されている（『年報 1977・1978』）。

（2）施釉陶磁器の出土状況と特徴

①政庁（第 1～6・9・16・19・76・77 次）

出土破片数は『本文編』と『補遺編』において報告されているが、今回改めて検討したところ^{（註 6）}、古代の施釉陶磁器は緑釉陶器 9 点、灰釉陶器 27 点、白磁 2 点の合計 38 点となり、器種構成と産地については第 2 表の通りである。調査面積は、政庁内から政庁南門前殿を対象とした第 1～6・9・16・19・76・77 次調査の合計で 11,587㎡であることから、100㎡あたり 0.33 点（緑釉 0.08 点／灰釉 0.23 点／白磁 0.02 点）となる。

出土状況は、緑釉陶器 7 点、灰釉陶器 15 点が表土からの出土で、北辺築地周辺から 4 点（緑釉 1 点／灰釉 3 点）、西辺築地周辺から 3 点（緑釉 1 点／灰釉 2 点）、南辺築地周辺から 1 点（灰釉）、東辺築地周辺から 3 点（全て灰釉）と築地周辺に多く認められる。一方、遺構出土は少ないものの、SK064・065・066・078・090 で 1 点ずつ確認できる（第 62 図）。

図示したものには緑釉陶器 碗（第 11 図 2・4）・深碗（5）・碗または皿（1・3・6）・水注（7）、灰釉陶器 碗（9・12）・深碗（8・13）・碗または皿（10・11・14）・鉢（15）・広口瓶（17・19・20）・瓶（16・18）、白磁碗（22）・皿（21）がある。

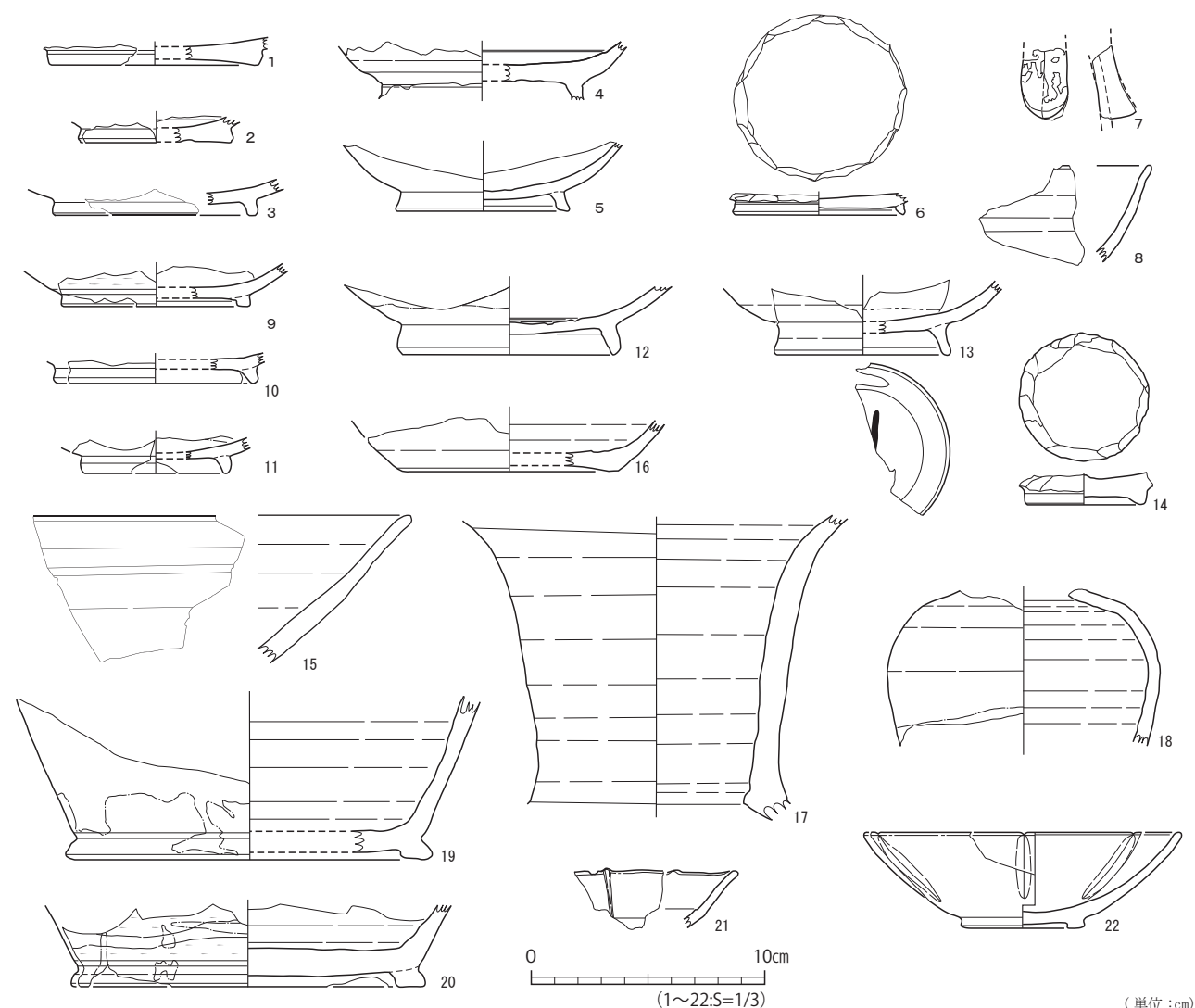
1 は洛北窯産で、高台がⅠ A であることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。2 は洛西窯産の可能性があり、底面は部分施釉で、高台がⅠ B2a であることから高橋Ⅳ期に位置づけられる。3 は猿投窯産で、高台がⅡ C1 とⅡ C2 の中間的な形態であることから、尾野Ⅵ期古～中に位置づけられる。4 は近江産で、底部回転糸切り無調整であることから高橋Ⅱ期に位置づけられる。5 は猿投窯産で、高台がⅡ C2b であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。6 は東海産で、高台は生産地で確認されていないⅡ E3a であるが、灰釉陶器はⅦ期に三角形のものがみられることから、ここでは尾野Ⅶ期に位置づける。底部周縁が打ち欠かれている。7 は水注の把手であり、尾野Ⅶ期に位置づけられる。9 は尾張産で、高台がⅡ C1 であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。10 は尾張産の可能性があり、高台がⅡ D3 であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。内面が磨耗し朱墨が付着していることから、転用硯と考えられる。11 は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡ D3 とⅡ D4 の中間的な形態であることから、尾野Ⅵ期新～Ⅶ期古に位置づけられる。全体に被熱している。12 は東濃窯産で、高台がⅡ D2b であることから尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。13 は東濃窯産で、高台がⅡ F3a であることから尾野Ⅶ期古～中に位置づけられる。底部に墨書がみられる。14 は東濃窯産で、高台Ⅱ E3b であることから尾野Ⅷ期中～新に位置づけられる。底部周縁は打ち欠かれている。17・19 は東濃窯産、20 は東海西部産であり、広口瓶であることから尾

種類	緑釉陶器							灰釉陶器							白磁
	産地	猿投	東海西部	東海	洛北	洛北？	洛西	近江？	合計	尾張	尾張？	東濃	東濃？	東海西部	合計
器種	碗				1	1	2	4	1			4	1	1	7
	皿							0							0
	深碗	1						1			2				2
	碗 or 皿	1		1	1			3		1		1			2
	水注		1					1							0
	鉢							0			1				1
	広口瓶							0			3				3
合計		2	1	1	1	1	1	2	9	2	2	17	3	2	27

第 2 表 政庁地区出土施釉陶磁器の器種と産地

次 数	種類				灰釉陶器					合 計	白 磁	青 磁		
	產地	猿 投	近 江	合 計	尾 張	尾 張 ？	東 濃	東 濃 ？	東 海 西 部				東 海	
31	器 種	碗	4		4				2	1	3			
		手付瓶			0	1					1			
		瓶			0	1					1			
		壺or瓶			0			1			1			
		合計	4	0	4	2	0	1	2	1	0	6	0	0
32	器 種	碗		1	1				1	1	1	3	3	
		深碗			0			2				2		
		皿			0		1					1		3
		碗or皿	1		1							0		
		鉢			0			1				1		
		広口瓶			0				1			1		
		小瓶			0					1		1		
		瓶			0			5		1		5		
		壺or瓶			0	1	1	14		3		20		
合計		1	1	2	1	2	22	2	6	1	34	3	3	
総計		5	1	6	3	2	23	4	7	1	40	3	3	

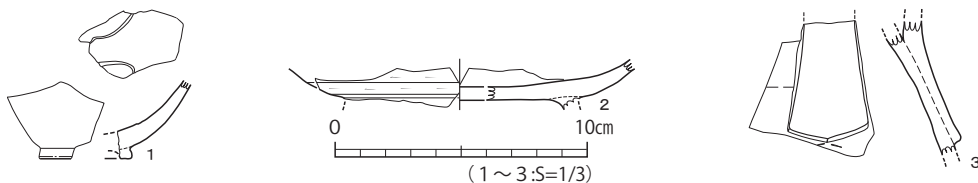
第 3 表 政庁地区（北端）出土施釉陶磁器の器種と産地



No.	次数	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1	表土	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(9.0)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	N46	2-4	B14928
2	2	炭混褐色土層	緑釉 埴	底部1/5	—	(6.4)	—	洛西?	I B2b	硬陶 底面部分施釉	高橋IV	N48	2-5	B14928
3	16	表土(北辺築地北側)	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(8.4)	—	猿投	II C1~2		尾野VI古~中	N43		B14928
4	5	表土(SK058?)	緑釉 埴	底部1/4	—	—	—	近江		底部:回転糸切り無調整、底面部分施釉 内面:底部と体部の境に沈線 内外面目跡あり	高橋 II	N45	2-3	B14928
5	16	SK090	緑釉 深埴	底部1/3	—	(7.5)	—	猿投	II C2a	底部内面 1 条圈線		N44	2-2	B14928
6	16	表土	緑釉 埴or皿	底部1/2	—	7.0	—	東海	II E3a	底部:回転糸切り無調整 底部周縁打ち欠き	尾野VII	N42	2-7	B14928
7	77	東様地区表土	緑釉 水注	把手	—	—	—	東海西部			尾野VII	77-2	2-6	B14928
8	9	表土	灰釉 深埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面漬け掛け		N6		B14928
9	76	表土(北辺地区)	灰釉 埴	底部1/4	—	(8.0)	—	尾張	II C1	体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI古	76-2		B14928
10	76	表土(北辺地区)	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(8.4)	—	尾張?	II D3a	転用硯、朱墨付着	尾野VI新	76-1		B14928
11	3	表土(南門)	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(6.0)	—	東濃?	II D3~4	底部:ナデ 内面漬け掛け? 被熱	尾野VI新~VII古	N53		B14928
12		表土	灰釉 埴	底部1/2	—	(9.0)	—	東濃	II D2b	底部:ナデ 底部内面 2 条圈線 内外面施釉	尾野VI中~新	N5	2-9	B14928
13	16	西辺築地中	灰釉 深埴	底部1/3	—	(7.3)	—	東濃	II F3a	底部:ナデ、墨書「口」 内面漬け掛け	尾野VII古~中	N2	2-8	B14928
14	16	表土(西辺築地外側)	灰釉 埴or皿	底部1/1	—	(5.0)	—	東海	II E3b	底部:ナデ 底部周縁打ち欠き	尾野VIII中~新	N15	2-10	B14928
15	16	SK375	灰釉 鉢	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面ハケ塗り		N3	2-11	B14928
16		表土	灰釉 瓶	底部1/2	—	(9.2)	—	東濃?		底部:回転糸切り無調整		N7		B14928
17	16	表土(東殿)	灰釉 広口瓶	頸部1/6	—	—	—	東濃		無釉	尾野VII	N8		B14928
18	4	表土(北西部)	灰釉 瓶	体部1/4	—	—	—	東濃		体部外面ハケ塗り		N4	2-12	B14928
19	16	SK066	灰釉 広口瓶	底部1/5	—	(15.8)	—	東濃		体部外面ハケ塗り	尾野VII	N9	2-13	B14928
20	9	SK064	灰釉 広口瓶	底部1/5	—	(14.8)	—	東海西部		体~底部:回転ヘラケズリ 体部下端シッタ痕 底部内面摩耗 須恵器として報告	尾野VII	N54	2-14	B14928
21	16	SK078	白磁 皿	口縁部片	—	—	—			白磁XI類 輪花:ヘラ押圧 内面に段		No. 0	2-15	B15000
22		表土	白磁 碗	1/2	(13.4)	(5.4)	4.0			白磁 I~5 類 輪花:ヘラ押圧(5分割) 畳付露胎		No. 191	2-1	B15000

第 11 図 政庁地区出土施釉陶磁器

野VII期に位置づけられ、20 は体部下端にはシッタ痕が確認できる。21 はヘラ押圧により輪花をつくりだしており、白磁ⅩⅠ類である。22 は削出輪高台で厚みのある角高台状を呈し、底面露胎である。輪花は残存状況から 5 輪花とみられ、体部から口縁部にかけてヘラ押圧によってつくりだされており、口縁端部がわずかに切り欠かれている。白磁碗Ⅰ-5 類である。

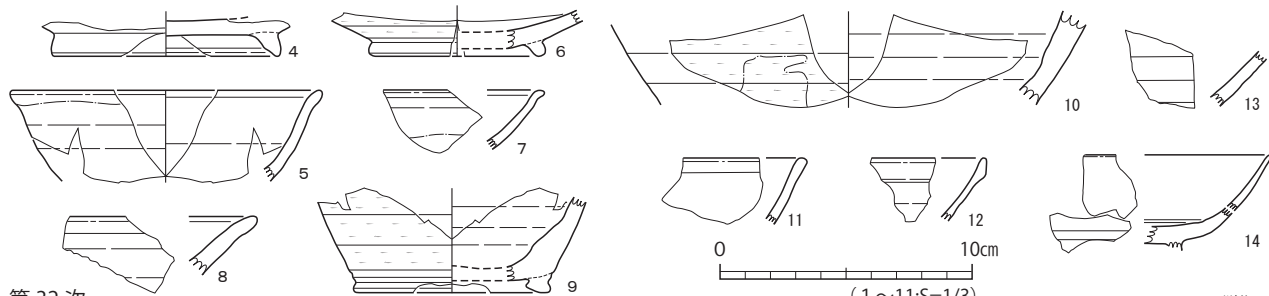


第31次

(1~3:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	2層	緑釉 埴	底部片	—	—	—	猿投	II C1	内面陰刻、草花文の可能性あり	尾野VI古	31-12	3-1	B14929
2	2層	灰釉 埴	底部1/4	—	—	—	東濃?		底部~体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		31-2	3-2	B14929
3	12層	灰釉 手付瓶		—	—	—	尾張		把手部下端圭頭状 外面ハケ塗り		31-6	3-3	B14929



第32次

(1~11:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
4	2層	緑釉 埴or皿	底部1/4	—	(8.8)	—	近江	II D2	底部:回転糸切り無調整	高橋II新	32-83	3-4	B14929
5	1・2層	灰釉 深埴	口縁1/5	(12.2)	—	—	東濃		内外面漬け掛け		32-2		B14929
6	K23-3層	灰釉 皿	底部1/5	—	(6.4)	—	尾張?	II C1	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	32-10	3-5	B14929
7	3層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		32-1		B14929
8	1b層	灰釉 鉢	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面施釉		32-6		B14929
9	2層	灰釉 広口瓶	底部1/4	—	(7.8)	—	東濃?		体部:回転ヘラケズリ	尾野VII	32-78	3-6	B14929
10	表土	灰釉 壺or瓶	体部1/6	—	—	—	東濃		底部~体部:回転ヘラケズリ 外面施釉		32-46		B14929
11	SE1066-3層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁I類		No. 36	3-7	B14314
12	2層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁XI類 玉縁口縁		No. 30	3-8	B14314
13	3層	白磁 碗	体部片	—	—	—			白磁I類		No. 37		B14314
14	2層	青磁 皿	口・体部片	—	—	—			越州窯系青磁I-2類 輪高台		No. 28		B14314

第12図 政庁地区（北端）出土施釉陶磁器

②政庁地区（北端）

【第31次】

出土破片数は、緑釉陶器4点、灰釉陶器6点の合計10点であり、器種と産地は第3表の通りである。調査面積は約1,033㎡であることから、100㎡あたり0.97点（緑釉0.39点／灰釉0.58点）である。

図示したものには緑釉陶器埴（第12図1）、灰釉陶器埴（2）・手付瓶（3）がある。1は猿投窯産で、高台がII C1であることから尾野VI期古に位置づけられる。内面には陰刻が施され、残存状況から草花文などの可能性がある。

【第32次】

出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器34点、白磁3点、青磁3点の合計42点である。器種と産地については第3表の通りであるが、灰釉陶器は東濃窯産が64.7%（22/34点）を占め、特に壺または瓶が79.4%（27/34点）と多いのが特徴的である。調査面積は、758㎡であることから、100㎡あたり5.54点（緑釉0.27点／灰釉4.49点／白磁0.39点／青磁0.39点）である。

図示したものには緑釉陶器埴または皿（第12図4）、灰釉陶器埴（7）・深埴（5）・皿（6）・鉢（8）・広口瓶（9）・壺または瓶（10）、白磁碗（11～13）、青磁皿（14）がある。4は近江産で、高台がII D2であることから高橋II期新に位置づけられる。6は尾張産で、高台がII C1であることから尾野VI期古に位置づけられる。9は東濃窯産の可能性があり、尾野VII期に位置づけられる。11は口縁端部をまるくおさめ白磁I類、12は玉縁状で白磁XI類である。14は口縁部片と底部片であるが同一個体とみられ、輪高台で体部にやや丸みをもち、越州窯系青磁皿I-2類である。

2. 政庁南面地区

(1) 地区の概要

政庁南面地区は大きく城前官衙、政庁南大路、鴻の池に分けられる。城前官衙は政庁南東に隣接する丘陵上にあり、第 69・71・74・78・79・89 次調査が行われている（『政庁南面Ⅰ・Ⅱ』）。その結果、大きく 4 時期の遺構変遷が確認され、i 期（8 世紀前半～中頃）は掘立柱建物が散在する程度であるが、ii 期（8 世紀中頃～宝亀 11 年）では中央に広場をもち、その南側に主屋となる二面廂付で瓦葺とみられる東西棟建物、東西両側に南北棟建物群が規則的に配置されていることが分かり（第 13 図）、この時期の実務官衙で計画的な建物配置が確認できるのは、現状で城前官衙だけである。また北西隅の SK3264 からは「府符□〔諸カ〕郡司□」と書かれた木簡が出土し、鎮守府にかかわる実務が行われていたことをうかがわせる。そして iii 期（宝亀 11 年～9 世紀後半）になると建物配置は踏襲するが、中央の広場にも建物群を配置するようになり、その後 iv 期の 10 世紀前半頃には廃絶する。

政庁南大路は政庁南門から外郭南門にのびており、第 43・44・50・78・79・89 次調査（『年報 1983・1987・2006・2007・2015』）によって、路幅が第Ⅰ・Ⅱ期は約 13 m、第Ⅲ・Ⅳ期は約 23 m に変遷することが明らかとなっている。また第Ⅰ期の南門が第Ⅱ期南門の北側約 120 m の政庁南大路上で確認され、第Ⅰ・Ⅱ期は道路西側に石垣を組んでいることも分かった。

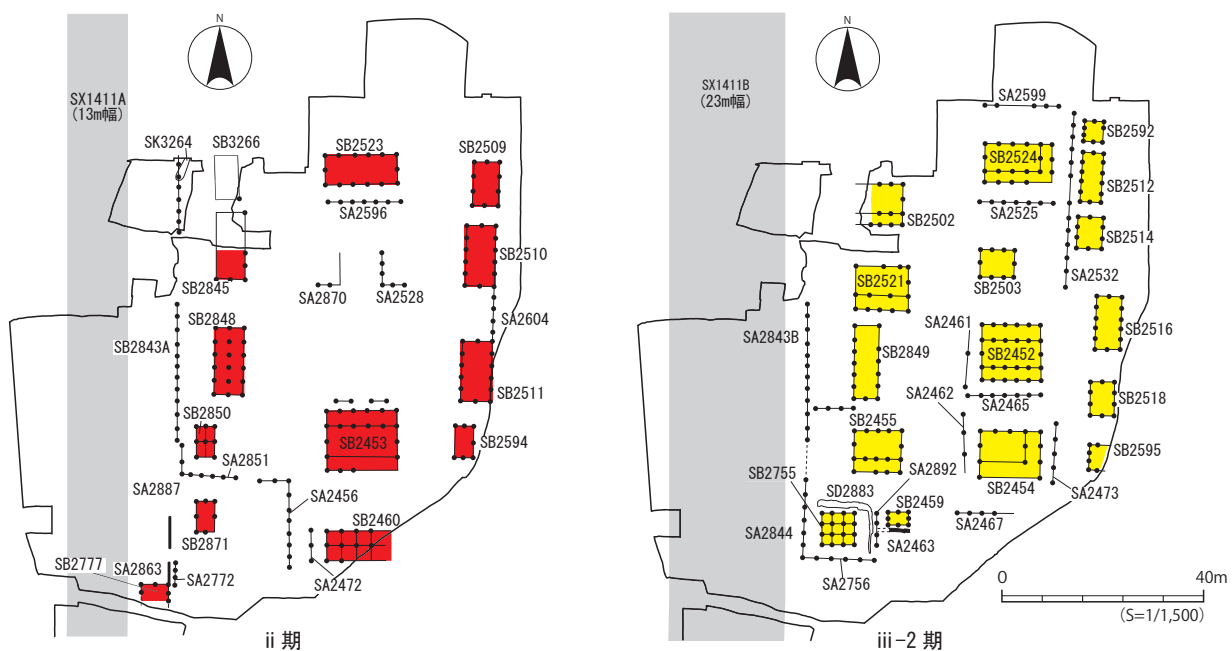
鴻の池は第 15・61・79・81・86・87b・90 次調査（『年報 1972・1991・2007・2009・2013～2016』）が行われており、特に第 81・86・90 次調査区では第Ⅰ期の外郭区画施設が検出され、第Ⅱ～Ⅳ期はそれを改修した通路が設けられたことが明らかとなった。そして 10 世紀中葉以降は小規模な掘立柱建物や溝、土坑、井戸などが点在するようになる。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

① 城前官衙

『政庁南面Ⅰ』で報告した資料を再検討したところ、破片数は緑釉陶器 39 点、灰釉陶器 115 点の合計 154 点であり（註 7）、器種構成と産地については第 4 表の通りである。調査面積は、城前官衙の西辺を区画する SA2772・2843・2844・3261 よりも東側に限った場合 5,629㎡となり、100㎡あたり 2.74 点（緑釉 0.69 点／灰釉 2.04 点）である。

出土状況（第 14 図）は、115 点中 56 点が E69～E81、S171～S237 の東側で確認でき、なかでも

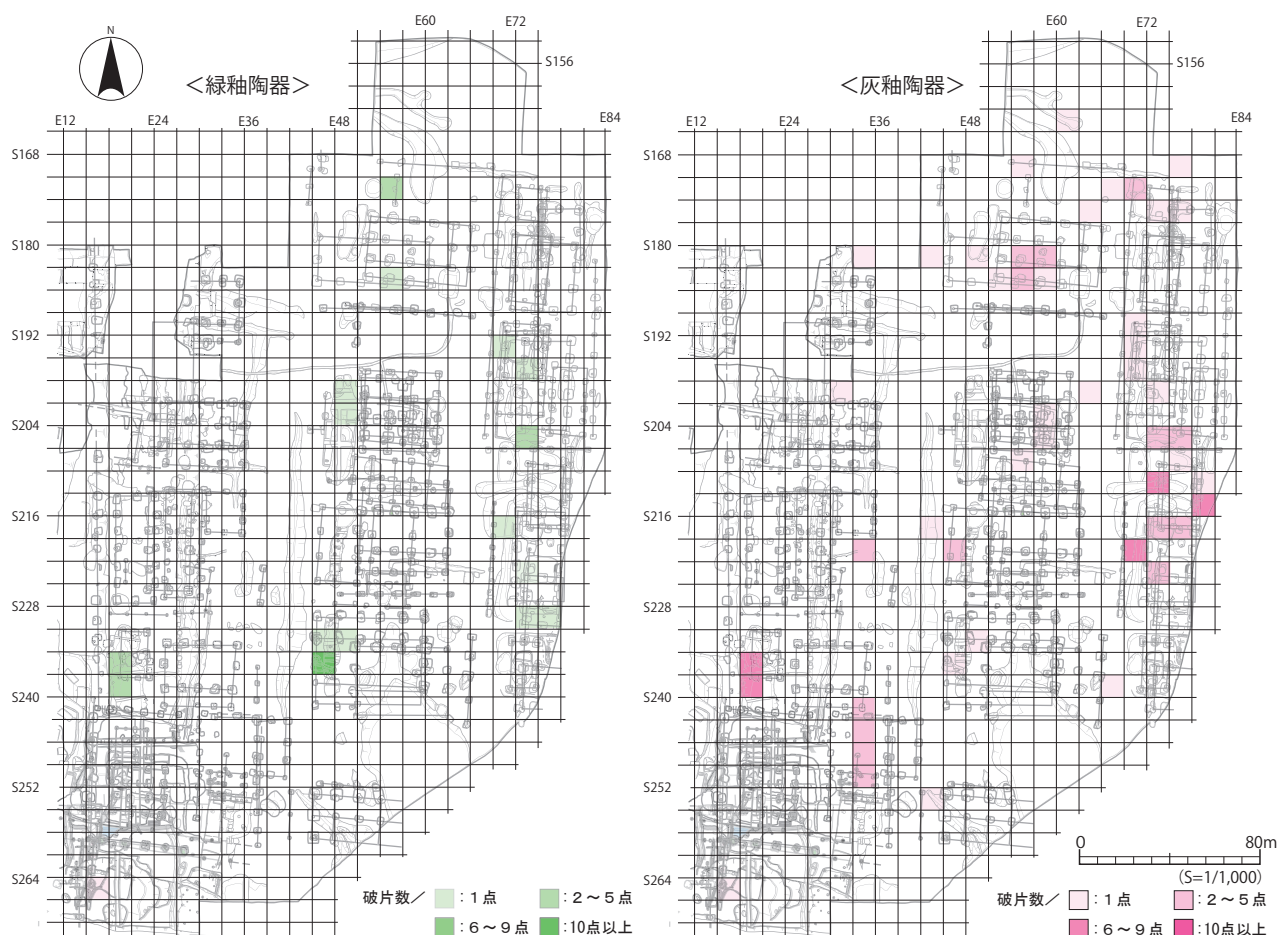


第 13 図 城前官衙建物配置模式図

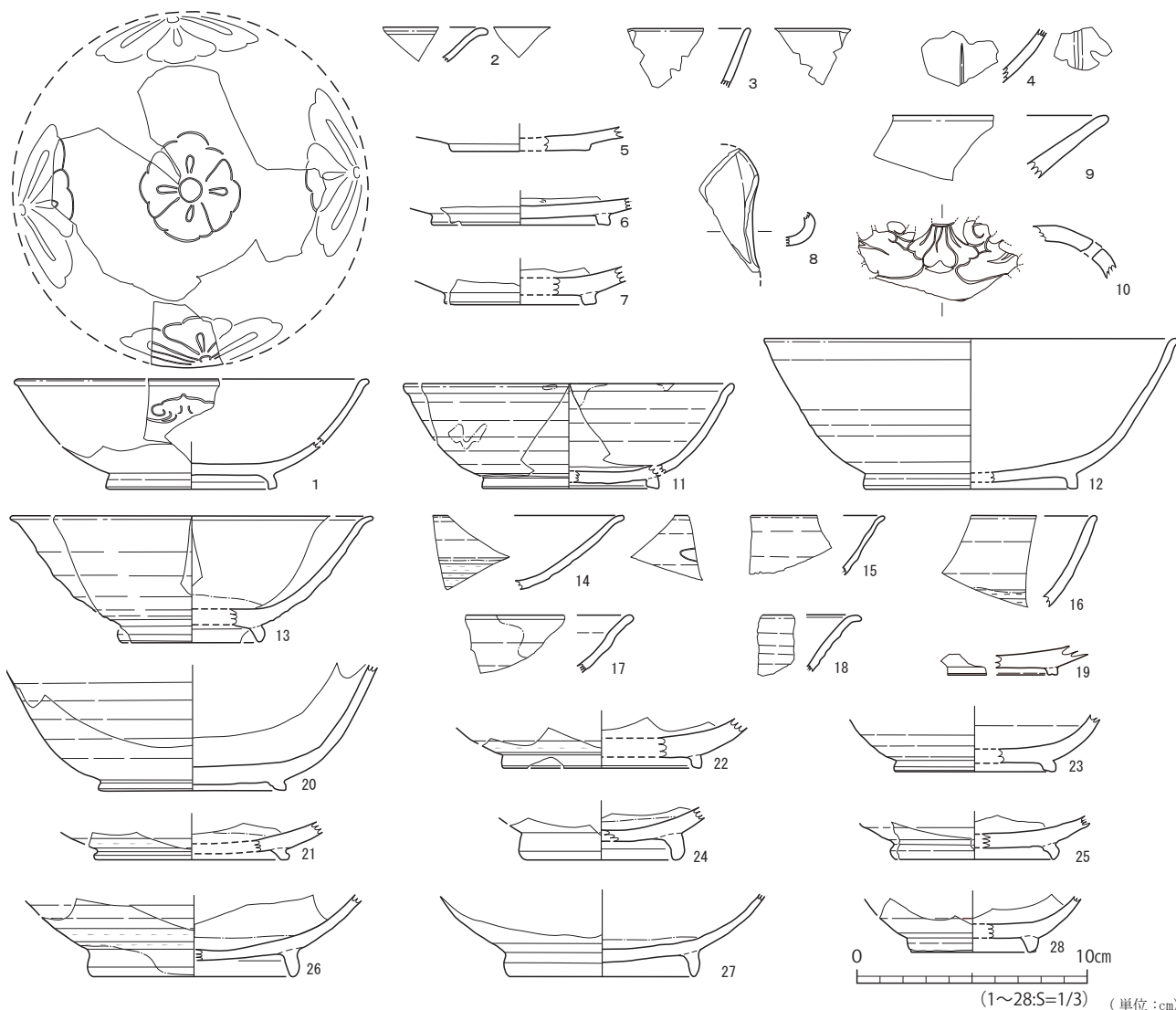
S207以南ではSK2482（灰釉7点）・2551（緑釉2点／灰釉3点）、東Ⅱ・Ⅳ層（緑釉2点／灰釉7点）を中心に41点が出土している（第63図）。そのほかE54～60、S174～186の中央北側でSB2524（緑釉4点／灰釉2点）を中心に12点、E45～51、S234～243の中央南側でSA2462抜取溝（緑釉13点）を中心に16点、E18～24、SS231～237のSK2834・2835（緑釉5点／灰釉8点）を中心に14点と一定量出土している。

図示したものには緑釉陶器埴（第15図1・3・4）・皿（5・6）・耳皿（8）・埴または皿（2・7）・唾壺（9）・香炉蓋（10）、灰釉陶器埴（第15図11～18・20～24・26～28、第16図1）・深埴（2）・皿（3～5）・段皿（6～10）・耳皿（11）・埴または皿（第15図19・25、第16図12～14）・鉢（15・16）・長頸瓶（17・18）・広口瓶（19）・小瓶（21）・手付瓶（23）・瓶（22・24）・水注（20）がある。

第15図1は内外面に陰刻花文が施されており、内面には底部に丸頭四弁ループ芯花文、口縁部に丸頭下垂半截ループ芯花文、外面口縁部には霊芝雲文が認められる（註8）。猿投窯産で、高台がⅡC2bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。5は洛北窯産で、高台がⅠAであることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。6・7は猿投窯産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。9は猿投窯産で、『政庁南面Ⅰ』において埴としたが、口縁部全体が厚く直線的にのびることから、ここでは唾壺と判断した。10は天井部外面に陰刻花文と透孔が穿たれており、内側に丸頭四弁条芯花文、外側に丸頭花卉を配置するほか、肩部に1条の沈線が施される。猿投窯産で、緻密な陰刻花文が施されることから、尾野Ⅵ期古～中に位置づけられる。11は『政庁南面Ⅰ』において別個体で図示したが、胎土や色調などが類似することから、接合しないものの同一個体と判断した。尾張産の可能性があり、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。12・19・20・22・23は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。13は東海西部産であり、高台がⅡD1bであることから尾野Ⅵ期中に位



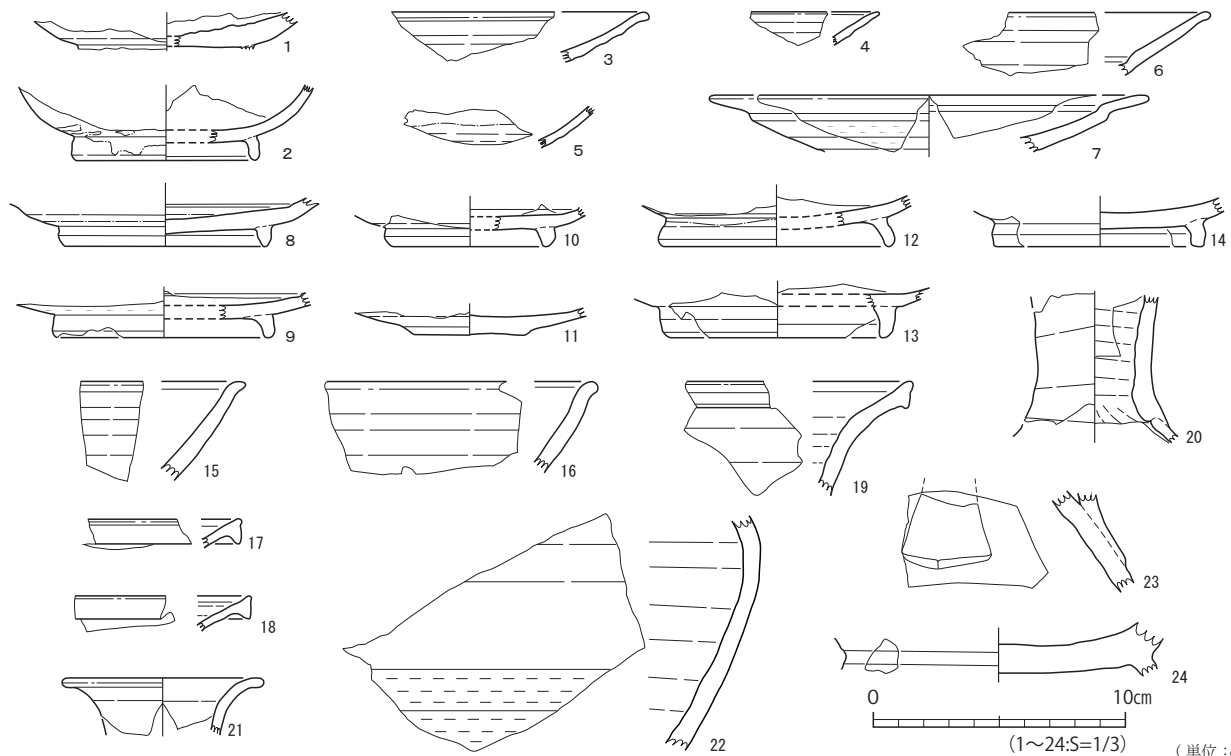
第14図 城前官衙における施釉陶磁器の出土状況



(1~28:S=1/3) (単位:cm)

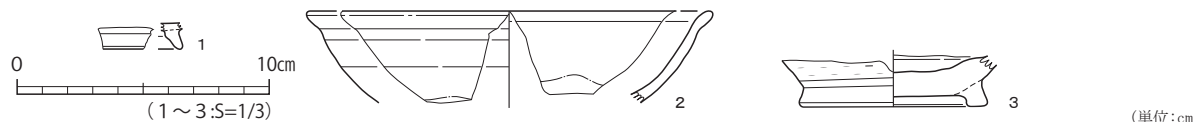
No.	次数	遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	69	SA2462 抜取溝	緑釉 埴	2/3	—	7.4	—	猿投	II C2b	外面:口縁部に雲芝雲文 内面:底部に丸頭四弁ループ 芯花文、体部に半截ループ芯花文	尾野VI中	69-31	4-1	B14945
2	69	東II層	緑釉 埴or皿	口縁部片	—	—	—	洛北		軟陶	高橋 I ~ II 古	69-33		B14945
3	71	SB2524B 堀方	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投		輪花:端部外面押圧		71-18		B14945
4	69	SA2463 抜取溝	緑釉 埴	体部片	—	—	—	猿投		輪花:外面縦位線刻、内面縦位貼付突帯		69-35		B14945
5	69	東II層	緑釉 皿	底部1/4	—	(6.0)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	69-32		B14945
6	69	カクラン	緑釉 皿	底部1/6	—	(7.8)	—	猿投	II C1	内外面目跡あり	尾野VI古	69-37	4-3	B14945
7	69	カクラン	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(6.6)	—	猿投	II C1		尾野VI古	69-38		B14945
8	78	SK2834	緑釉 耳皿	体部片	—	—	—	洛北		軟陶		78-20	4-4	B14945
9	70	D255	緑釉 唾壺	口縁部片	—	—	—	猿投				70-39	4-5	B14945
10	70	SK2551 2層	緑釉 香炉蓋	天井部1/3	—	—	—	猿投		天井部:丸頭四弁条芯花文・丸頭花弁文、透孔	尾野VI古~中	70-38	4-6	B14945
11	70	SK2551 2・3層	灰釉 埴	口縁部片	(14.2)	(7.5)	—	尾張?	II C1	底部:ナデ 無釉	尾野VI古	70-6・7・28		B14945
12	69	東II層	灰釉 埴	1/6	(18.0)	(9.3)	7.0	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ 内面目跡あり、ハケ塗り	尾野VI古	69-12	4-2	B14945
13	69	SK2482 1層	灰釉 埴	1/6	(15.6)	(6.0)	5.5	東海西部	II D1b	内面ハケ塗り	尾野VI中	69-8	5-2	B14945
14	69	表土	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張?		体部:回転ヘラケズリ 内面陰刻 内外面ハケ塗り		69-19		B14945
15	69	SK2480	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内面施釉		69-4		B14945
16	69	表土	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		69-24		B14945
17	71	SK2619	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面漬け掛け		71-6		B14945
18	69	SK2482	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張?		内外面ハケ塗り?		69-40		B14945
19	69	表土	灰釉 埴or皿	底部片	—	—	—	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	69-15		B14945
20	78	SK2834・2835検出面	灰釉 埴	2/5	—	8.0	(5.5)	尾張	II C1	底部:ナデ 内面目跡あり、ハケ塗り	尾野VI古	78-1	5-1	B14945
21	70	表土	灰釉 埴	底部1/5	—	(8.2)	—	尾張	II B1	内面施釉	尾野V新	70-13		B14945
22	71	SB2524B 抜取	灰釉 埴	底部1/5	—	(8.6)	—	尾張	II C1	体~底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	71-2	5-4	B14945
23	69	B26-P2	灰釉 埴	底部1/2	—	(7.0)	—	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	69-11・26	4-7	B14945
24	71	表土	灰釉 埴	底部1/3	—	(6.4)	—	尾張	II D1a	底部ナデ 内面ハケ塗り	尾野VI中	71-12	5-5	B14945
25	69	SK2495	灰釉 埴or皿	底部1/6	—	(6.8)	—	尾張?	II D1a	底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野VI中	69-10		B14945
26	70	K320 1層	灰釉 埴	底部1/3	—	(8.6)	—	尾張	II D1a	底部:回転ヘラケズリ 内外面施釉	尾野VI中	70-8	5-6	B14945
27	69	表土	灰釉 埴	1/3	—	(8.0)	—	東濃?	II D2b	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉、磨耗	尾野VI中	69-25	5-3	B14945
28	70	表土	灰釉 埴	底部1/5	—	(5.0)	—	尾張	II D2a	底部:ナデ 内面ハケ塗り	尾野VI古~中	70-25		B14945

第15図 政庁南面(城前官衙)地区出土施釉陶磁器(1)



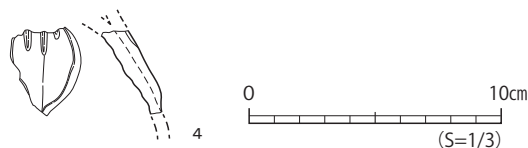
No.	次数	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1		表土	灰釉 碗	底部1/4	—	—	—	尾張		底部:ナデ 内底面釉が発泡、黒色化		70-22		B14945
2	69	SK2482 3層	灰釉 深碗	底部1/3	—	(7.2)	—	東濃	II F2	底部:ナデ 内外面ハケ塗り	尾野Ⅶ古～中	69-7	6-1	B14945
3	78	SB2522	灰釉 皿	口縁部片	—	(2.0)	—	東海		内面ハケ塗り		78-11		B14945
4	69	SK2495	灰釉 皿	口縁部片	—	(1.3)	—	東海西部		内面施釉		69-39		B14945
5	69	SK2481	灰釉 皿	体部片	—	—	—	東海西部		内外面ハケ塗り		69-5		B14945
6	78	SK2834・2335	灰釉 段皿	口縁部片	—	(2.5)	—	尾張?		内外面ハケ塗り		78-2		B14945
7	70	K335 1層	灰釉 段皿	口縁部片	(16.8)	(2.2)	—	東濃?		狭縁 体部:回転ケズリ 内面ハケ塗り、摩耗		71-5	6-4	B14945
8	69	表土	灰釉 段皿	底部1/5	—	(8.0)	—	尾張	II E1	底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	69-18	6-2	B14945
9	71	表土	灰釉 段皿	底部2/5	—	(8.4)	—	尾張	II D1b	体～底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	71-13	5-7	B14945
10	70	表土	灰釉 段皿	底部1/4	—	(6.0)	—	東濃?	II D4	底部:ナデ 内面施釉	尾野Ⅶ古～中	70-24	6-3	B14945
11	78	表土	灰釉 耳皿	底部4/5	—	(4.5)	—	尾張	III	底部:回転系切り無調整 内面施釉		78-12	6-5	B14945
12	70	表土	灰釉 碗or皿	底部1/5	—	(8.8)	—	尾張?	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	70-32	5-9	B14945
13	69	表土	灰釉 碗or皿	底部1/6	—	(8.4)	—	尾張?	II D1b	内面磨耗	尾野Ⅵ中	69-22		B14945
14	70	表土	灰釉 碗or皿	底部1/2	—	(8.1)	—	尾張	II C2a	底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り?	尾野Ⅵ中	70-27 ・71-11	5-8	B14945
15	70	表土	灰釉 鉢	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		70-33		B14945
16	71	表土	灰釉 鉢	口縁部片	—	—	—	東濃		内面施釉		71-14	6-6	B14945
17	70	カクラン	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		70-29		B14945
18	70	表土	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	尾張?		内外面施釉	尾野Ⅵ古～中	70-12		B14945
19	69	カクラン	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面施釉	尾野Ⅶ	69-29	5-10	B14945
20	78	表土	灰釉?水注?	胴部片	—	—	—	尾張?		外面施釉		70-26	5-11	B14945
21	70	SK2551 3層	灰釉 小瓶	口縁部1/3	(8.0)	—	—	尾張		外面施釉		70-5		B14945
22	78	SK2834	原始灰釉 瓶	胴部片	—	—	—	尾張		外面施釉	尾野Ⅴ新～Ⅵ古	78-6		B14945
23	71	SA2601・SK2619	灰釉 手付瓶	胴部片	—	—	—	尾張?		把手下端は圭頭状		71-4・8	5-12	B14945
24	78	SK2834	原始灰釉 瓶	底部片	—	—	—	尾張		底部:回転ヘラケズリ 摩耗	尾野Ⅴ新～Ⅵ古	78-7		B14945

第 16 図 政庁南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器（2）



第 43 次

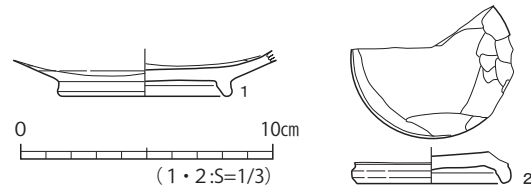
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	4層	緑釉 碗or皿	高台のみ	—	—	—	東海	II E3a		尾野Ⅶ	43-2		B14941
2	D105 埋土	灰釉 碗B	口縁1/6	(15.8)	—	—	東濃		内外面漬け掛け	尾野Ⅶ新～Ⅷ	43-1	7-1	B14941
3	SX1375	灰釉 長頸瓶	底部1/1	—	7.4	—	尾張		底部:回転系切り→ナデ	尾野Ⅵ	43-3		B14941



第 74 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	特徴	整理番号	写真図版	箱番号
4	SD2770	青磁 水注	把手のみ	—	—	—		越州窯系青磁 I 類 把手中央に 3 条の沈線状のくぼみ	No. 127	7-2	B14314

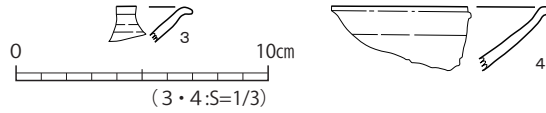
第 17 図 政庁南面（政庁南大路）地区出土施釉陶磁器



第61次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	10層上部	灰釉 皿	底部1/2	—	(6.6)	—	尾張?	ⅡE2	底部:回転ヘラケズリ 内面漬け掛け? 転用硯	尾野Ⅵ新	61-8	8-2	B14941
2	10層上部	灰釉 碗or皿	底部2/3	—	(5.8)	—	東濃	ⅡD3	底部:ナデ 底部周縁打ち欠き	尾野Ⅵ新	61-5	8-1	B14941

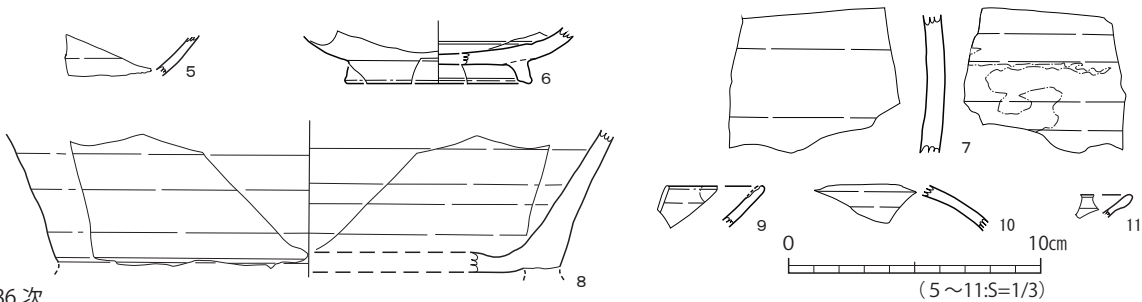
(単位:cm)



第79次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
3	表土	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東海		内面施釉		79-11		B14941
4	表土	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張?		内面施釉		79-12		B14941

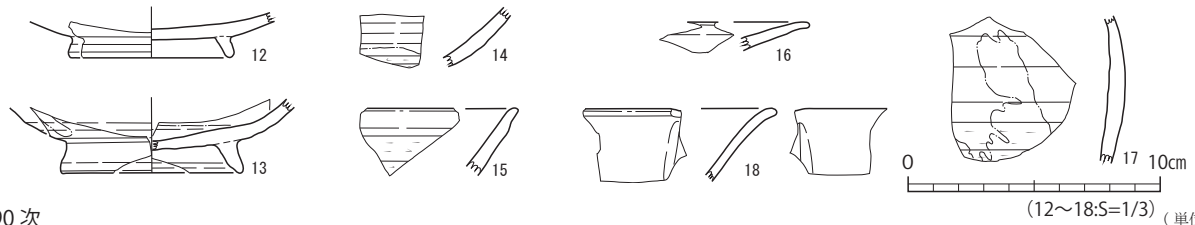
(単位:cm)



第86次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
5	9a~c・10ab層	緑釉 碗	底部1/2	—	—	—	猿投		緑釉銀化		86-3		B14941
6	6層	緑釉 碗	底部1/4	—	(7.2)	—	近江	ⅡD1	底部:回転糸切り無調整 内面圈線	高橋Ⅱ古	86-5	8-3	B14941
7	3・4層	緑釉 広口瓶	体部片	—	—	—	近・濃		緑釉銀化 硬陶	高橋Ⅰ~Ⅲ	86-6		B14941
8	6層	緑釉 広口瓶	底部1/4	—	(20.0)	—	近・濃		緑釉銀化 硬陶	高橋Ⅰ~Ⅲ	86-4	8-4	B14941
9	3・4層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		86-2		B14941
10	6層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	尾張		外面施釉		86-1		B14941
11	7層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁Ⅵ類? 玉縁口縁		No. 311		B14941

(単位:cm)



第90次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
12	6・7層	緑釉 碗	底部1/4	—	(7.0)	—	東海西部	ⅡF3a		尾野Ⅵ新~Ⅶ古	90-10	8-5	B14941
13	1~6層	灰釉 深碗	底部1/4	—	(7.0)	—	東濃	ⅡF3b	底部:ナデ 内面漬け掛け	尾野Ⅶ新	90-9	8-6	B14941
14	SX3301	灰釉 碗	体部片	—	—	—	尾張		内外面ハケ塗り		90-2		B14941
15	6・7層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		90-5		B14941
16	6層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面施釉		90-8		B14941
17	6・7層	灰釉 壺or瓶	体部片	—	—	—	東濃		外面ハケ塗り		90-7		B14941
18	遺構確認	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁Ⅰ-5類 輪花:口縁端部を切り欠き、体部はヘラ押圧		No. 320	8-7	B14941

(単位:cm)

第18図 政庁南面(鴻の池)地区出土施釉陶磁器

置づけられる。21は尾張産で、高台がⅡB1であることから尾野Ⅴ期新に位置づけられる。24・26は尾張産、25は尾張産の可能性があり、高台がⅡD1aであることからいずれも尾野Ⅵ期中に位置づけられる。27は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡE1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。28は尾張産で、高台がⅡD2aであることから尾野Ⅵ期古~中に位置づけられる。

第16図2は東濃窯産で、高台がⅡF2で体部の張りがやや弱いことから尾野Ⅶ期古~中に位置づけられる。8・9・14は尾張産、12・13は尾張産の可能性があり、高台が8はⅡE1、9・12・13はⅡD1b、14はⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。10は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡD4であることから尾野Ⅶ期古~中に位置づけられる。17は尾張産、18は尾張産の可能性があり、尾

野Ⅵ期に位置づけられる。19は東濃窯産で、尾野Ⅶ期に位置づけられる。22・24は尾張産の原始灰釉で、尾野Ⅴ期新～Ⅵ期古に位置づけられる。

②政庁南大路

【第43次】

出土破片数は、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点の合計3点である（第4表）。発掘調査面積は311㎡であることから、100㎡あたり0.96点（緑釉0.32点／灰釉0.64点）である。

図示したのは緑釉陶器壺（第17図1）、灰釉陶器壺B（2）・長頸瓶（3）である。1は東海産で、高台がⅡE3aであることから尾野Ⅶ期に位置づけられる。2は東濃窯産で、壺Bであることから尾野Ⅶ期新～Ⅷ期に位置づけられる。3は尾張産で、尾野Ⅵ期に位置づけられる。

【第74次】

出土破片数は、青磁1点（第17図4）である（第4表）。発掘調査面積が339㎡であることから、100㎡あたり0.29点である。4は把手部片とみられ、中心に3条の沈線状のくぼみがあり、越州窯系青磁Ⅰ類である。

③鴻の池

【第15次】

出土破片数は、灰釉陶器壺または瓶2点である（第4表）。発掘調査面積が112㎡であることから、100㎡あたり1.79点である。細片のため図化できるものはない。

【第61次】

出土破片数は、灰釉陶器9点で、器種と産地は第4表の通りである。発掘調査面積は153㎡で、100㎡あたり5.88点となる。

図示したものには灰釉陶器皿（第18図1）・壺または皿（2）がある。1は尾張産の可能性があり、高台がⅡE2であることから、尾野Ⅵ期新に位置づけられる。内面は漬け掛けの可能性があり、磨耗して墨痕が残ることから転用硯とみられる。2は東濃窯産で、高台がⅡD3であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。底部周縁は打ち欠かされている。

【第79次】

出土破片数は、灰釉陶器2点である（第4表）。発掘調査面積が32㎡であることから、100㎡あたり6.25点である。図示したものには灰釉陶器皿（第18図-3・4）がある。

地区	次数	種類 産地	緑釉陶器						灰釉陶器								合計	白磁	青磁
			猿投	東海西部	東海	洛北	近・濃	近江	合計	尾張	尾張?	東濃	東濃?	東海西部	東海東部	東海			
城前官衙		壺	27						27	25	15	6	2	10	1	1	60		
		深壺							0			1					1		
		後壺	1						1								0		
		皿	1						1	1		1	2	1		1	6		
		段皿		1					1		2		2			1	7		
		耳皿				1			1	1	1						2		
		三足盤							0					1			1		
		壺or皿		2	1	3			6	5	1	2	1	2		2	13		
		鉢							0			1					1		
		香炉蓋	1						1								0		
		唾壺	1						1								0		
		長頸瓶							0	3	3			1			7		
		広口瓶							0			1					1		
		小瓶							0	1							1		
		手付瓶							0	1							1		
		水注?							0			7					7		
		瓶							0	2		1					2		
		壺or瓶							0	1				2			4		
		不明							0							1	1		
		合計	31	3	1	4	0	0	39	40	22	20	7	19	1	6	115	0	0
政庁南大路	43	器種	壺B						0			1					1		
		器種	壺or皿	1					1								0		
		器種	長頸瓶						0					1			1		
		合計	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0
74		器種	水注						0								0		1
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		合計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	2	0	1
		合計	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	2	0	1
鴻の池	15	器種	瓶						0		1						1		
		器種	壺or瓶						0	1							1		
		合計	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0
	61	器種	壺						0					1			1		
		器種	皿						0		1						1		
		器種	壺or皿						0			2		1			3		
		合計	0	0	0	0	0	0	0		4						4		
	79	器種	皿						0		1						1	2	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0
	81	器種	小瓶						0					1			1		
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
	86	器種	壺			1		1	2			1					1	2	
		器種	広口瓶				2		2								0		
		合計	0	0	0	1	2	1	4	0	0	1	0	1	0	0	2	2	0
	87	器種	瓶						0			1					1		
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	90	器種	壺						0					3			3	1	
		器種	深壺						0			1					1		
		器種	皿						0					1			1		
		合計	2						2								0		
	90	器種	壺or皿						0	1		6					7		
		合計	0	2	0	0	0	0	2	1	0	7	0	4	0	0	12	1	0
		合計	0	2	0	1	2	1	6	2	3	15	0	8	0	1	29	3	0
		合計	31	6	1	5	2	1	46	42	25	38	7	28	1	7	146	3	1

第4表 政庁南面地区出土施釉陶磁器の器種と産地

【第 81 次】

出土破片数は、灰釉陶器瓶類 1 点である（第 4 表）。発掘調査面積が 515㎡であることから、100㎡あたり 0.19 点である。細片のため図化できるものはない。

【第 86 次】

出土破片数は、緑釉陶器 4 点、灰釉陶器 2 点、白磁 2 点の合計 8 点で、器種と産地は第 4 表の通りである。発掘調査面積が 350㎡であることから、100㎡あたり 2.28 点（灰釉 0.57 点／緑釉 1.14 点／白磁 0.57 点）である。

図示したものには緑釉陶器壺（第 18 図 5・6）・広口瓶（7・8）、灰釉陶器壺（9）・瓶（10）、白磁碗（11）がある。6 は近江産で、底部は回転糸切り無調整で内面に圈線がめぐり、高台がⅡ D1 であることから高橋Ⅱ期古に位置づけられる。7・8 は接合しないが胎土や釉調から同一個体の可能性があり、大型品である。東濃窯または近江産で、広口瓶であることから高橋Ⅰ～Ⅲ期、または尾野Ⅶ期に位置づけられる。11 は口縁部が玉縁状を呈し、図示できない細片 1 点とともに、白磁ⅩⅠ類の可能性はある。

【第 87b 次】

出土破片数は、灰釉陶器瓶類 1 点である（第 4 表）。発掘調査面積が 170㎡であることから、100㎡あたり 0.59 点である。細片のため図化できるものはない。

【第 90 次】

出土破片数は、緑釉陶器 2 点、灰釉陶器 12 点、白磁 1 点の合計 15 点で、器種と産地は第 4 表の通りである。発掘調査面積は 430㎡であることから、100㎡あたり 3.49 点（緑釉 0.47 点／灰釉 2.79 点／白磁 0.23 点）である。

図示したものには緑釉陶器壺（第 18 図 12）、灰釉陶器壺（14・15）・深壺（13）・皿（16）・壺または瓶（17）、白磁碗（18）がある。12 は東海西部産で、高台がⅡ F3a であることから尾野Ⅶ期新～Ⅶ期古に位置づけられる。13 は東濃窯産で、体部の張りが強く、高台はⅡ F3b で端部内面に沈線状のくぼみをもつ。こうした資料はⅦ期新の大針 1 号窯出土資料（多治見市教委 1987）にみられることから、尾野Ⅶ期新に位置づけられる。18 は口縁部が外反して端部を丸くおさめ、ヘラ押圧による輪花で、端部は小さく切り欠かれている。白磁碗Ⅰ-5 類である。

3. 政庁西方地区

（1）地区の概要

政庁西方地区は第 45・80・81 次調査、2001・2002 年に現状変更に伴う調査（『年報 1984・2002・2008・2009』、『補遺編』）が行われており、第 45 次では 8・9 世紀の竪穴建物群、10 世紀以降の掘立柱建物などが検出され、第 80・81 次では第Ⅰ期の石垣や第Ⅱ期以降で 10 世紀前葉以前の石敷遺構が確認されている。

（2）施釉陶磁器の出土状況と特徴

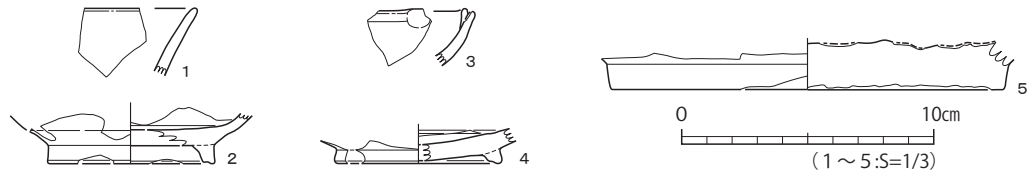
【第 45 次】

出土破片数は、緑釉陶器 6 点で、器種と産地は第 5 表の通りである。発掘調査面積は 74㎡であることから、100㎡あたり 8.11 点である。

図示したものには緑釉陶器壺（第 19 図 1～3）・壺または皿（4）・瓶（5）がある。2・4 は近江産で、底部は回転糸切り無調整であり、2 は高台がⅡ D1 であることから高橋Ⅱ期古、

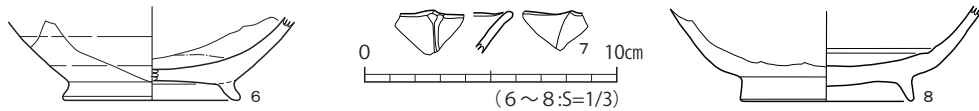
次 数	種類		緑釉陶器						合 計	灰釉陶器				合 計	白 磁	青 磁
	産地		猿 投	東 海 西 部	洛 北	尾 ・ 北	近 江	不 明		尾 張	東 濃	東 濃 ？	東 海 西 部			
45	器 種	壺					2		2					0		
		皿		1					1					0		
		壺or皿		1			1		2					0		
		瓶			1				1					0		
	合計	0	2	1	0	3	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
81	器 種	壺							0		1			1		1
		皿							0					0	1	
		瓶							0	1				1		
		壺or瓶							0		1			1		
		不明						1	1					0		
	合計	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	0	3	1	1	
現 変 01	器 種	深壺		1					1					0		
		壺or皿	4	5	1	1			11					0		
		長頸瓶							0	1				1		
		広口瓶							0				1	1		
		瓶							0		1			1		
		壺or瓶							0		1		2	3		
	合計	4	6	1	1	0	0	12	0	3	0	3	6	0	0	
現 変 02	器 種	稜壺	1						1					0		
		合計	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
		総計	5	8	2	1	3	1	20	1	5	0	3	9	1	1

第 5 表 政庁西方地区出土施釉陶磁器の器種と産地



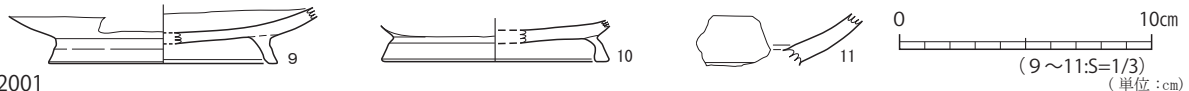
第 45 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	緑釉 埴	体部片	—	(7.0)	—	東海西部		硬陶	45-2			B14941
2	1層	緑釉 埴	底部1/3	—	(6.4)	—	近江	II D1	底部:回転糸切無調整 内面目跡あり 底面無施釉	高橋Ⅱ古	45-5	9-1	B14941
3	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	近江		輪花:口縁端部のみを指頭押圧 硬陶		45-6		B14941
4	D1	緑釉 埴or皿	底部1/3	—	(6.4)	—	近江	II D2	底部:回転糸切り無調整 内面圏線	高橋Ⅱ新	45-1	9-2	B14941
5	2層	緑釉 瓶	底部2/5	—	—	—	洛北		軟陶	高橋Ⅰ～Ⅱ古	45-4	9-3	B14941



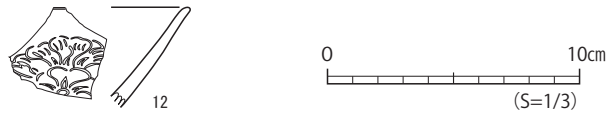
第 81 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
6	西区新D4	灰釉 埴	底部1/5	—	(6.8)	—	東濃	II E3a	高台:端部外方へのびる 底部:回転糸切り 内面漬け掛け	尾野Ⅷ古～中	81-2	9-4	B14941
7	SD3015	白磁 皿	口縁部片	—	(6.4)	—			白磁ⅩⅠ類 輪花:へら押圧 内面に段		No. 178	9-5	B14314
8	表土	青磁 碗	底部1/2	—	(7.0)	—			越州窯系青磁Ⅲ-1a類 高台内に白色棒状目3カ所 内面に沈線状の段		No. 186	9-6	B14314



現状変更 2001

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
9	SK2705	緑釉 深埴	底部1/3	—	(9.0)	—	東海西部	II F3a～b	硬陶	尾野Ⅶ古～中	現変01-7	9-8	B14941
10	SK2706	緑釉 埴	底部1/4	—	(8.8)	—	東海西部	II C2b		尾野Ⅵ新	現変01-10	9-7	B14941
11	SK2706	緑釉 埴	体部片	—	—	—	洛北		軟陶		現変01-11		B14941



現状変更 2002

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
12	SB2677 P1	緑釉 埴埴?	口縁部片	—	—	—	猿投		陰刻花文:丸頭二重四弁ループ・条芯脈花文	尾野Ⅶ中	現変02-1	9-9	B14941

第 19 図 政庁西方地区出土施釉陶磁器

4 はⅡ D2 であることから高橋Ⅱ期新に位置づけられる。5 は大型品で、軟陶の洛北窯産であることから、高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。

【第 81 次】

出土破片数は、緑釉陶器 1 点、灰釉陶器 3 点、白磁 2 点、青磁 1 点の合計 7 点で、器種と産地は第 5 表の通りである。発掘調査面積は 548㎡であることから、100㎡あたり 1.09 点（緑釉 0.18 点／灰釉 0.55 点／白磁 0.18 点／青磁 0.18 点）である。

図示したものには灰釉陶器埴（第 19 図 6）、白磁皿（7）、青磁碗（8）がある。6 は東濃窯産で、高台がⅡ E3a であるが、端部が外方へのびるものは、尾野Ⅷ期古～中の明和 27 号窯や 30 号窯（多治見市教委 1990a）などでみられることから、その時期の所産とみられる。7 はへら押圧により輪花をつくりだしており、白磁ⅩⅠ類である。8 は高台が細く高い三角形状を呈し、高台内 3 カ所に白色棒状の目跡が確認できる。越州窯系青磁碗Ⅲ-1a 類である。

【現状変更 2001】

出土破片数は、緑釉陶器 12 点、灰釉陶器 6 点の合計 18 点である。器種と産地は第 5 表の通りで、緑釉陶器が 66.6%を占める。発掘調査面積は 270㎡であることから、100㎡あたり 6.66 点（緑釉 4.44 点／灰釉 2.22 点）となる。

図示したものには緑釉陶器埴（第 19 図 10・11）・深埴（9）がある。9 は東海西部産で、高台がⅡ F3a とⅡ F3b の中間的な形態であることから、尾野Ⅶ期古～中に位置づける。10 は東海西部産で、高台がⅡ C2b であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。

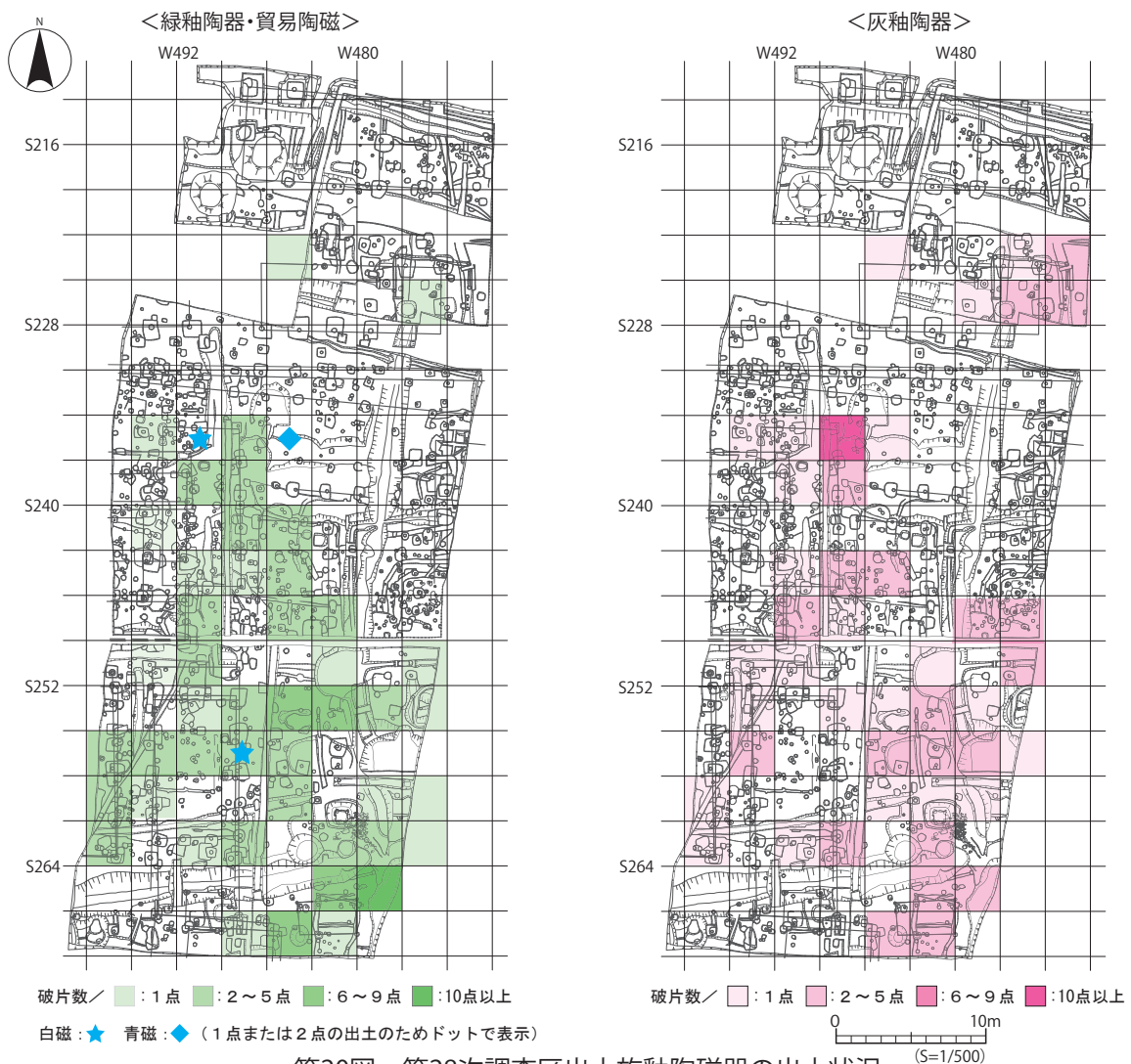
【現状変更 2002】

出土したのは緑釉陶器 1 点である。発掘調査面積は 27㎡であることから、100㎡あたり 3.7 点となる。図示した緑釉陶器坑（第 19 図 12）は、『年報 2002』において皿と報告されているが、皿の場合は陰刻花文が下向きに配置されることが多く、本資料のように上向きに配置されるものは少ないことから、口縁部が直線的にのびることも考慮し、ここでは稜坑と判断した。内面には丸頭二重四弁条芯脈花文の陰刻が施される。猿投窯産で、同様の文様のモチーフは黒笹 90 号窯（三好町誌編集委員会 2013）などでみられることから、尾野Ⅵ期中に位置づけられる。

4. 西門・五万崎地区

（1）地区の概要

西門・五万崎地区では、西門は第 30・33・46 次調査（『年報 1977・1978・1984』）、五万崎地区は第 28・29・83・84・92 次・83 次試掘調査、1991・1994・1997・2007 年の現状変更に伴う調査（『年報 1976・1993・1994・2001・2007・2011・2012・2018』）が行われている。西門は最初に掘立式の八脚門が建てられ、同位置で礎石式に建て替えられる。そして第Ⅲ期は掘立式で「コ」字形に城内側へ移動し、第Ⅳ期は再び元の位置に戻って礎石式となることが明らかとなっている。五万崎地区は第 28・83・84 次で第Ⅳ期を中心とした多数の掘立柱建物群が検出されているほか、金属器生産関係の工房も確認されている。



第20図 第28次調査区出土施釉陶磁器の出土状況

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第28次】

出土破片数は、緑釉陶器 184 点、灰釉陶器 121 点、白磁 4 点、青磁 5 点の合計 314 点である。器種構成と産地については第 6 表の通りで、緑釉陶器が 58.6% と卓越し、埴・皿類主体であるが香炉や唾壺なども出土する。産地では猿投窯産が 54.9% (101/184 点) で最も多く、次いで洛北窯産が 23.9% (44/184 点) を占める。灰釉陶器は埴・皿類主体で尾張産が 57.9% (70/121 点) で最も多く、東濃窯産は可能性のあるものを含めても 9.9% (12/121 点) と少ない。発掘調査面積は 1,248㎡であることから、100㎡あたり 25.16 点 (緑釉 14.74 点/灰釉 9.7 点/白磁 0.24 点/青磁 0.48 点) である。

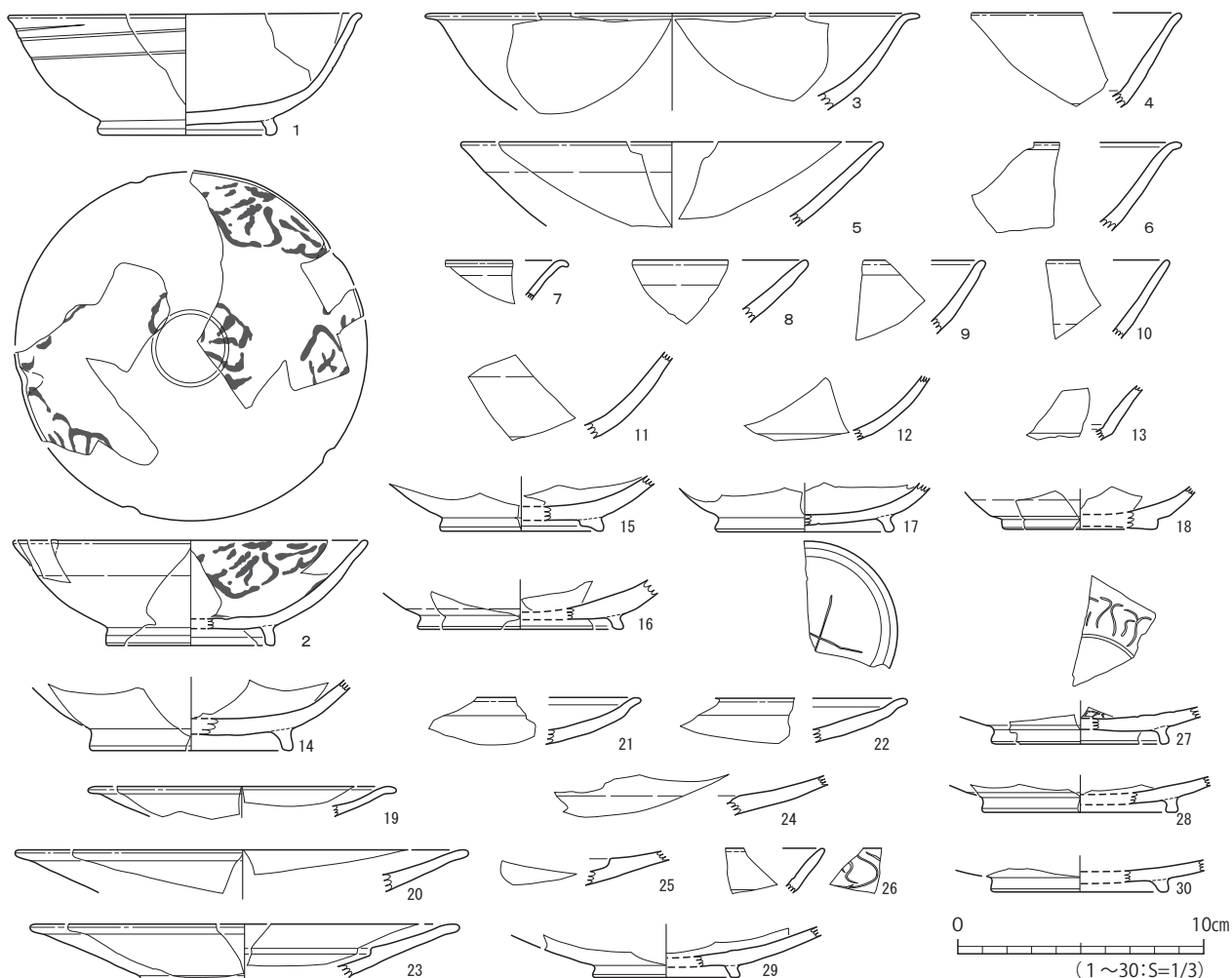
出土状況は、堆積層からの出土が多いものの、S234 以南での出土が多く、調査区南東に向けて出土が増加していく傾向にある (第 20 図)。東壁の S255 以南では下層に池状遺構が確認されており、多数出土する地点とも重なることから、関係が注目される。

図示したものには緑釉陶器埴 (第 21 図 1～12・14～18)・稜埴 (13)・皿 (第 21 図 19～22・27～30、第 22 図 1～3)・段皿 (第 21 図 23～25)・稜皿 (26)・耳皿 (第 22 図 4・14・15)・埴または皿 (5～13)・唾壺 (16・17)・香炉蓋 (18・19)・香炉 (20～22)、灰釉陶器埴 (23～33)・皿 (第 22 図 34、第 23 図 1～4・6・7・11)・段皿 (5)・埴または皿 (8～10・12・13)・長頸瓶 (14～16)・広口瓶 (17・23)・瓶 (18～22)、白磁碗 (24・25)、青磁碗 (29・30)・皿 (26～28) がある。

第 21 図 1 は猿投窯産で、高台が II C2b であることから尾野 VI 期中に位置づけられる。2 は体部の張りが弱く、口縁部には指頭押圧により輪花がつくりだされ、残存部の花文配置から 5 カ所に輪花が施されるものと判断した。内面は緑彩により花文が描かれており、口縁部に尖頭下垂半截四弁条芯花文、底面に尖頭四弁条芯花文を配す。猿投窯産で、高台は II C2a であるが、器壁がやや薄く体部の丸みも弱いことから、尾野 VI 期中～新に位置づけられる。3・5・8・21・22 は猿投窯産で、3・21・22 は口縁部が大きく外反することから尾野 V 期新～VI 期古、5・8 は口縁部が直線的にのびることから尾野 VI 期中に位置づけられる。14～17・27～30 は猿投窯産で、14・16・17・27 は高台が II C2a、15 は II A2 であることから尾野 VI 期中、28・29 は II C1 と II C2 の中間的な形態であることから尾野 VI 期古～中、30 は II C1 であることから尾野 VI 期古に位置づけられる。18 は洛北窯産で、高台が I A であることから高橋 I～II 期古に位置づけられる。

第 22 図 1～4 は洛北窯産で、高台が I A であることから高橋 I～II 期古に位置づけられ、4 の陰刻は蓮葉文の可能性がある。5～11 は猿投窯産で、5・8 は高台が II C1 と II C2 の中間的なものであることから尾野 VI 期古～中、6 は II B1 であることから尾野 V 期新、7・9～11 は II C2a であることから尾野 VI 期中に位置づけられる。12 は東海西部産で、底部回転糸切り無調整であり、高台が II F3a から II F3b の中間的な形態であることから、尾野 VII 期古～中に位置づけられる。13 は底部内面に緻密な陰刻花文が施される。16 は洛西窯産で、外面は全面施釉であり、高台が I C であることから高橋 II 期新～III 期に位置づけられる。18・22 は猿投窯産で、18 は天井部がドーム状で透孔が穿たれ、外面に陰刻花文が施される。22 は体部に横タガがめぐり、火舎香炉とみられる。天井部に陰刻花文が施される香炉蓋や火舎香炉は尾野 VI 期古～中に生産されることから、その時期の所産と考えられる。23・30 は尾張産で、高台が II B1 であることから尾野 V 期新に位置づけられる。28・29・31・34 は尾張産で、高台が II C1 であることから尾野 VI 期古に位置づけられるが、28 は外面まで施釉されるため、VI 期古～中の過渡的なものである。32・33 は尾張産で、32 は高台が II D3 であることから尾野 VI 期新、33 は II E1 であることから尾野 VI 期中に位置づけられる。

第 23 図 1～4・7 は尾張産で、1～4 は口縁部が大きく外反することから尾野 V 期新～VI 期古、7 は高台が II D2a であることから尾野 VI 期古～中に位置づけられる。6 は尾張産の可能性があり、高台が II C1 であることから尾野 VI 期古に位置づけられる。8～12 は、8・9・12 は尾張産またはその可能性があり、10 は東海西部産、11 は東濃窯産であり、高台が II D1a または II D1b であることから尾野 VI 期中に位置づけられる。13 は東海西部産で、高台が II D3 であることから尾野 VI 期新に位置づけられる。14 は尾張産で、頸部がやや太く口縁部にかけて大きく外反することから尾野 VI 期中～新と考えられる。15 は尾張産の可能性があり、口頸部が大きく外反することから尾野 VI 期中～新に位置づけられる。17・23 は尾張産またはそ

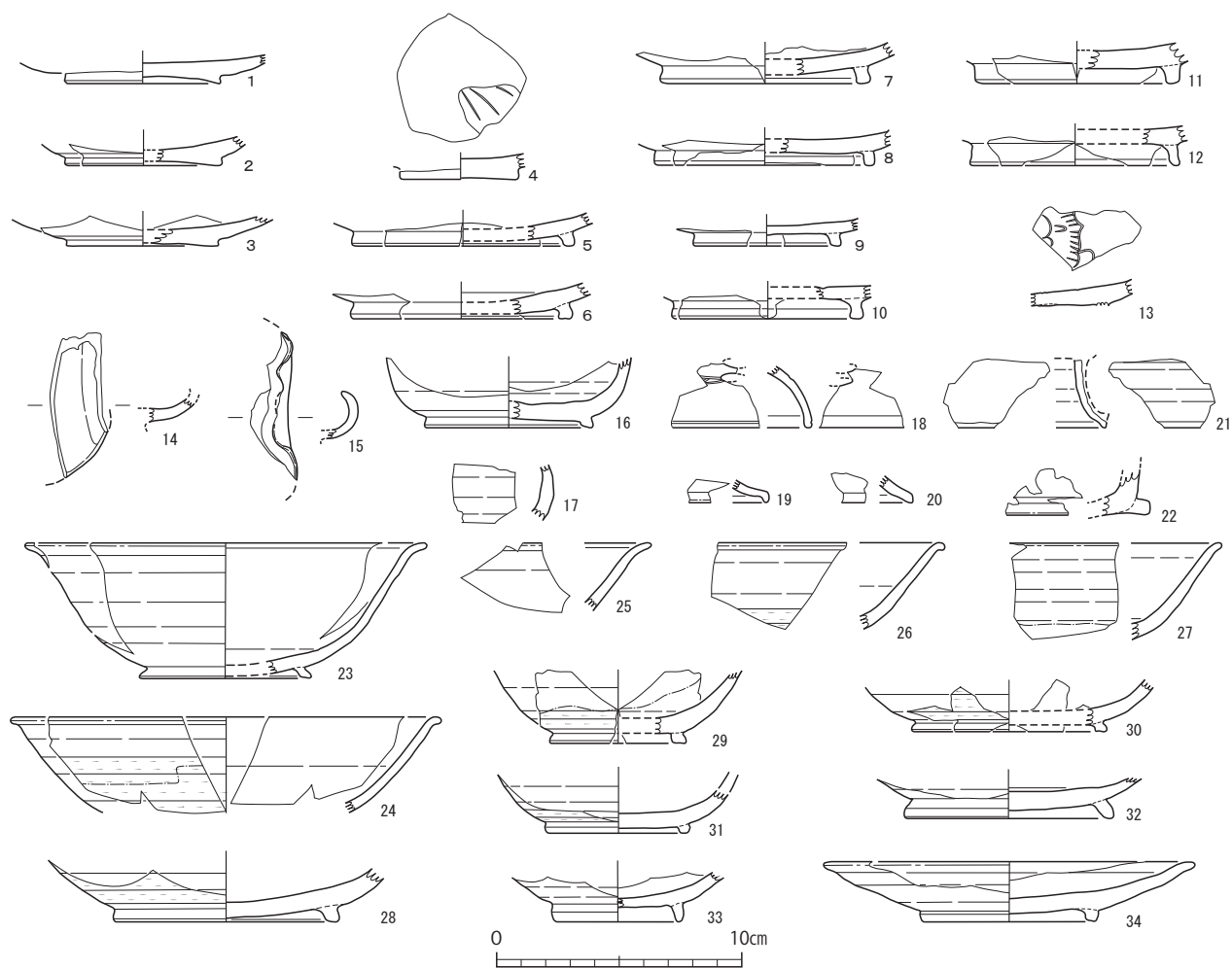


第28次

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SB889	緑釉 埴	4/5	14.2	7.0	4.9	猿投	II C2b	底面目跡あり	尾野VI中	28-311	10-1	B14946
2	2層	緑釉 埴	1/3	(14.2)	(6.7)	4.4	猿投	II C2a	輪花:口縁端部指頭押圧、5輪花 内面:緑彩(口縁部に尖頭下垂半截四弁条芯花文、底部に尖頭四弁条芯花文)、一条圈線	尾野VI中〜新	28-310	11-1 巻頭図版 1	B14946
3	2層	緑釉 埴	口縁1/6	(21.0)	—	—	猿投		口縁端部を水平方向へ強くひきだす	尾野V新〜VI古	28-315	11-5	B14937
4	2層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛西		硬陶		28-316	11-8	B14937
5	表土	緑釉 埴	口縁1/6	(17.0)	—	—	猿投		口縁部から体部は直線的	尾野VI中	28-323	11-6	B14937
6	2層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛北		軟陶		28-162		B14937
7	SD920	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投				28-160		B14937
8	P21	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投		口縁部から体部は直線的	尾野VI中	28-161		B14937
9	SD932	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投				28-151		B14937
10	2層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投?				28-141		B14937
11	SE921 裏込	緑釉 埴	体部片	—	—	—	洛北		軟陶		28-220		B14937
12	表土	緑釉 埴	体部片	—	—	—	洛北		軟陶		28-207		B14937
13	2層	緑釉 稜埴	体部片	—	—	—	猿投			尾野VI中	28-235		B14937
14	2層	緑釉 埴	底部1/4	—	—	—	猿投	II C2a		尾野VI中	28-293	11-10	B14937
15	2層	緑釉 埴	底部1/4	—	—	—	猿投	II A2		尾野VI中	28-291	11-9	B14937
16	SK915	緑釉 埴	底部1/6	—	—	—	猿投	II C2a		尾野VI中	28-281		B14937
17	SK915 下層	緑釉 埴	底部1/4	—	—	—	猿投	II C2a	底部:ヘラ書き「×」	尾野VI中	28-292	11-7	B14937
18	表土	緑釉 埴	底部1/6	—	—	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I〜II 古	28-288		B14937
19	2層	緑釉 皿	口縁1/5	(12.0)	—	—	洛北		軟陶		28-313		B14937
20	2層	緑釉 皿	口縁1/5	(18.0)	—	—	猿投				28-271	11-13	B14937
21	表土	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投		口縁部大きく外反	尾野V新〜VI古	28-148		B14937
22	SK917 2層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投		口縁部大きく外反	尾野V新〜VI古	28-174	11-14	B14937
23	表土	緑釉 段皿	口縁1/5	(17.0)	—	—	猿投		広縁	尾野VI古〜中	28-319	11-11	B14937
24	表土	緑釉 段皿	口縁1/5	—	—	—	猿投		広縁		28-193	11-12	B14937
25	SD920	緑釉 段皿	口縁部片	—	—	—	猿投		広縁		28-134		B14937
26	SK915	緑釉 稜皿	口縁部片	—	—	—	東海西部		内面陰刻花文 硬陶		28-139		B14937
27	表土	緑釉 皿	底部1/8	—	—	—	猿投	II C2a	内面陰刻花文	尾野VI中	28-283	12-7	B14937
28	2層	緑釉 皿	底部1/4	—	—	—	猿投	II C1〜2		尾野VI古〜中	28-280	12-2	B14937
29	SB889	緑釉 皿	底部1/5	—	—	—	猿投	II C1〜2		尾野VI古〜中	28-265	12-3	B14937
30	2層	緑釉 皿	底部1/4	—	—	—	猿投	II C1		尾野VI古	28-277		B14937

第21図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器(1)



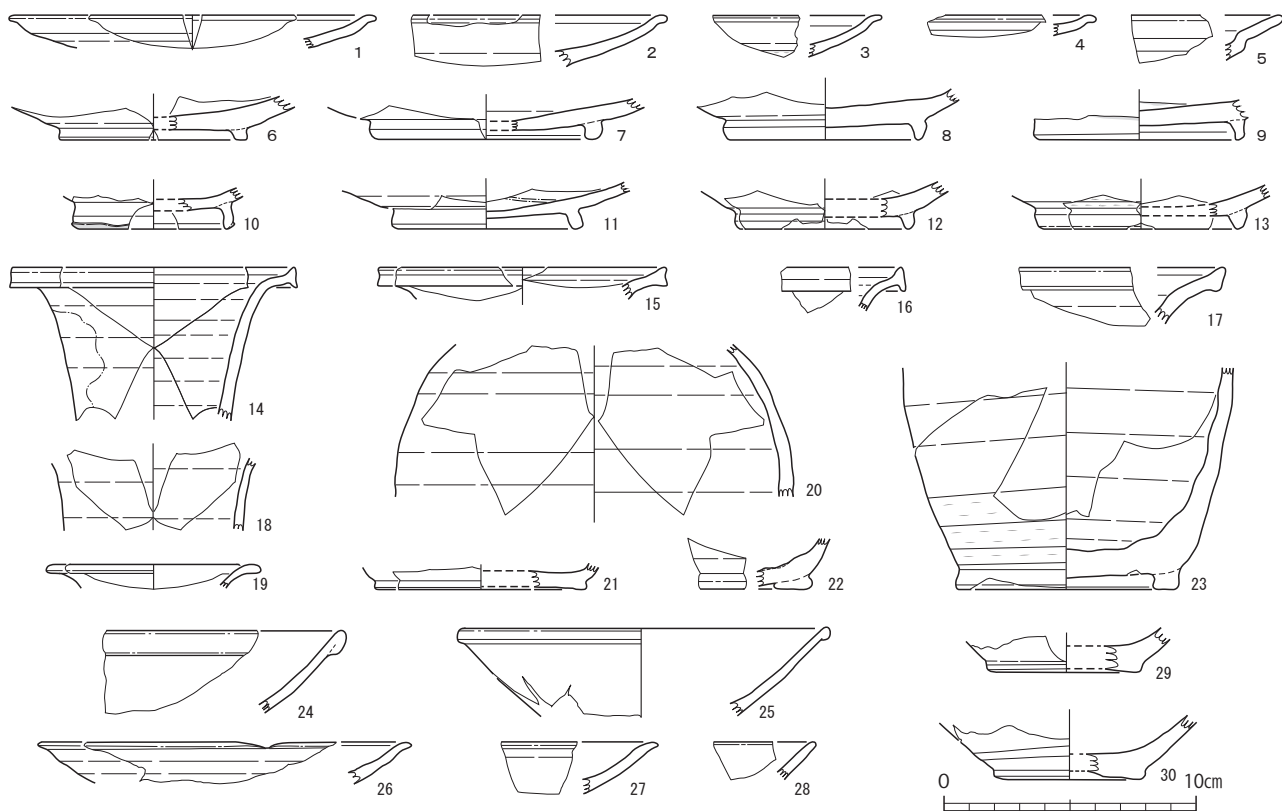
第 28 次

(1~34:S=1/3)

(単位:cm)

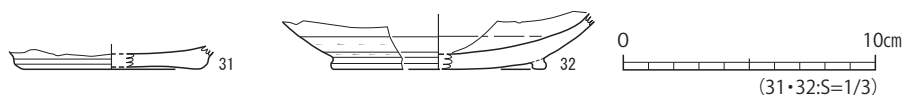
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	表土	緑釉 皿	底部1/1	—	6.2	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	28-272	12-10	B14937
2	SK915	緑釉 皿	底部1/6	—	(6.4)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	28-267		B14937
3	2層	緑釉 皿	底部1/4	—	(6.2)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	28-276	12-9	B14937
4	2層	緑釉 耳皿	底部1/1	—	4.7	—	洛北	I A	内面:3条の陰刻(蓮葉文か)、中央摩滅しくぼむ 軟陶	高橋 I ~ II 古	28-273	12-11	B14937
5	灰黒土	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(9.2)	—		II C1~2		尾野VI古~中	28-282		B14937
6	SE921 上層	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(8.8)	—	猿投	II B1		尾野V新	28-266		B14937
7	2層	緑釉 碗or皿	底部1/4	—	(8.0)	—	猿投	II C2a		尾野VI中	28-278	12-1	B14937
8	2層	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(8.8)	—	猿投	II C1~2		尾野VI古~中	28-275	12-4	B14937
9	表土	緑釉 碗or皿	底部1/5	—	(7.6)	—	猿投	II C2a		尾野VI中	28-279	12-5	B14937
10	表土	緑釉 碗or皿	底部1/5	—	(7.6)	—	東海	II C2b		尾野VI中	28-274		B14937
11	SD927	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(7.6)	—	猿投	II C2a		尾野VI中	28-268		B14937
12	P5	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(8.4)	—	東海西部	II C2b	底部:回転糸切り無調整	尾野VII古~中	28-290		B14937
13	表土	緑釉 碗or皿	底部片	—	—	—	猿投		内面陰刻花文		28-269	12-6	B14937
14	SK915	緑釉 耳皿	体部片	—	—	—	洛北		軟陶	高橋 I ~ II 古	28-302	12-8	B14937
15	SD920	緑釉 耳皿	体部片	—	—	—	猿投				28-301		B14937
16	表土	緑釉 唾壺	体~底部1/2	—	(6.8)	—	洛西	I C	硬陶 底部削出後にナデ	高橋 II 新~III	28-322	12-12	B14937
17	表土	緑釉 唾壺	体部片	—	—	—	猿投?				28-216		B14937
18	SK915 下層	緑釉 香炉蓋	口縁部片	—	—	—	猿投		天井部透孔、陰刻	尾野VI古~中	28-153	11-15	B14937
19	表土	緑釉 香炉蓋?	口縁部片	—	—	—	猿投			尾野VI古~中	28-325		B14937
20	P31柱痕跡	緑釉 香炉	脚部片	—	—	—	猿投			尾野VI古~中	28-165		B14937
21	P31抜取	緑釉 香炉	脚部片	—	—	—	猿投		外面剥離	尾野VI古~中	28-137		B14937
22	表土	緑釉 香炉	不明	—	—	—	猿投		体部下端に突帯	尾野VII古~中	28-285		B14937
23	SK904	灰釉 碗	1/3	(16.0)	6.8	5.5	尾張	II B1	底部:ナデ	尾野V新	28-332	11-4	B14936
24	P13	灰釉 碗	口縁1/5	(17.2)	—	—	東濃?		体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		28-338		B14936
25	SD926	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		28-9		B14936
26	表土	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		28-344		B14936
27	SK915 2層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		28-339		B14936
28	2層	灰釉 碗	底部1/2	—	9.2	—	尾張	II C1	底部:ナデ 内外面施釉、目跡あり	尾野VI古~中	28-59		B14936
29	2層	灰釉 碗	底部1/4	—	(5.4)	—	尾張	II C1	体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉	尾野VI古	28-51		B14936
30	P4	灰釉 碗	底部1/6	—	(7.8)	—	尾張	II B1	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野V新	28-48		B14936
31	1層	灰釉 碗	底部1/2	—	7.6	—	尾張	II C1	底~体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	28-337	13-1	B14936
32	表土	灰釉 碗	底部1/3	—	(8.2)	—	尾張	II D3	底部:回転ヘラケズリ	尾野VI新	28-56	13-3	B14936
33	表土	灰釉 碗	底部1/4	—	(5.0)	—	尾張	II E1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI中	28-334	13-4	B14936
34	SK916 3層	灰釉 皿	口~底部1/4	(14.2)	(6.7)	4.4	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	28-333	11-2	B14936

第 22 図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器 (2)



第28次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	溝24	灰釉 皿	口縁部1/6	(14.0)	—	—	尾張		口縁部大きく外反 内面ハケ塗り	尾野Ⅴ新〜Ⅵ古	28-6		B14936
2	SK904	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		口縁部大きく外反 内面施釉	尾野Ⅴ新〜Ⅵ古	28-341		B14936
3	SD920	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		口縁部大きく外反 内面施釉	尾野Ⅴ新〜Ⅵ古	28-14		B14936
4	表土	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		口縁部大きく外反 内面ハケ塗り	尾野Ⅴ新〜Ⅵ古	28-10		B14936
5	表土	灰釉 段皿	口縁部片	—	—	—	尾張?		狭縁 内面施釉		28-60		B14936
6	SD925	灰釉 皿	底部1/4	—	(7.4)	—	尾張?	ⅡC1	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野Ⅵ古	28-340	12-16	B14936
7	SK915 下層	灰釉 皿	底部1/4	—	(8.6)	—	尾張	ⅡD2a	底部:回転ヘラケズリ 内面自然釉?	尾野Ⅵ古〜中	28-47・121	13-2	B14936
8	2層	灰釉 碗or皿	底部1/2	—	7.4	—	尾張	ⅡD1b	底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	28-336	12-15	B14936
9	表土	灰釉 碗or皿	底部1/2	—	7.8	—	尾張	ⅡD1a	底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	28-123	12-14	B14936
10	2層	灰釉 碗or皿	底部1/4	—	(5.8)	—	東海西部	ⅡD1a	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野Ⅵ中	28-54		B14936
11	2層	灰釉 皿	底部1/2	—	7.0	—	東濃	ⅡD1a	底部:ナデ 内底面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	28-335	12-13	B14936
12	表土	灰釉 碗or皿	底部1/5	—	(6.6)	—	尾張?	ⅡD1b	内面ハケ塗り	尾野Ⅵ中	28-50		B14936
13	SD930	灰釉 碗or皿	底部1/6	—	(7.6)	—	東海西部	ⅡD3	底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野Ⅵ新	28-55		B14936
14	2層	灰釉 長頸瓶	口頸部1/4	(11.2)	—	—	尾張		頸部はやや太く、大きくひらく 外面ハケ塗り	尾野Ⅵ中〜新	28-65		B14936
15	2層	灰釉 長頸瓶	口縁部1/6	(11.2)	—	—	尾張?		口頸部おおきくひらく 内面釉	尾野Ⅵ中〜新	28-75		B14936
16	表土	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	尾張?		内外面施釉	尾野Ⅵ	28-71		B14936
17	2層	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	尾張		内面釉	尾野Ⅶ	28-66		B14936
18	SK904	灰釉 瓶	頸部片	—	—	—	東海西部		外面施釉		28-90		B14936
19	P21	灰釉 瓶	口頸部1/5	(7.8)	—	—	尾張?		内外面施釉		28-73		B14936
20	表土	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	尾張		外面施釉		28-98		B14936
21	2層	灰釉 瓶	底部1/5	—	(8.2)	—	東海		底部:手持ちヘラケズリ		28-118		B14936
22	2層	灰釉 瓶	底部片	—	—	—	東濃				28-117		B14936
23	P21	灰釉 広口瓶	体下半〜底部2/3	—	8.8	—	尾張		底〜体部:回転ヘラケズリ 外面施釉、自然釉厚くかかる	尾野Ⅶ	28-124	11-3	B14936
24	表土	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁Ⅰ類 玉縁口縁		No. 13	13-6	B14314
25	表土	白磁 碗	口頸部1/4	(14.8)	—	—			白磁Ⅰ類 玉縁口縁		No. 12	13-5	B15001
26	P23	青磁 皿	口頸部1/4	(14.8)	—	—			越州窯系青磁Ⅰ類 輪花		No. 9	13-7	B14314
27	P27	青磁 皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁Ⅰ類		No. 17		B14314
28	SK915	青磁 皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁Ⅰ類		No. 211		B14314
29	SD926	青磁 碗	底部1/4	—	(6.0)	—			越州窯系青磁Ⅰ類 蛇目高台		No. 11		B14314
30	2層	青磁 碗	底部1/3	—	(6.0)	—			越州窯系青磁Ⅰ類 蛇目高台		No. 8	13-8	B14314



第29次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
31	溝2	緑釉 碗or皿	底部1/4	—	(7.0)	—	洛北	ⅠA	軟陶	高橋Ⅰ〜Ⅱ古	29-6	13-10	B14938
32	3層	灰釉 碗	底部1/6	—	(8.4)	—	尾張	ⅡC1	底部〜体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野Ⅵ古	29-1	13-9	B14938

第23図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器 (3)

の可能性があり、尾野Ⅶ期と考えられる。24・25は口縁部が玉縁状を呈し、白磁Ⅰ類である。26～30はいずれも越州窯系青磁Ⅰ類で、26は口縁端部に輪花を有し、29・30は蛇の目高台である。

【第29次】

出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器3点の合計5点である（第6表）。発掘調査面積が912㎡であることから、100㎡あたり0.55点（緑釉0.22点／灰釉0.33点）である。

図示したものには緑釉陶器壺または皿（第23図31）、灰釉陶器壺（32）がある。31は洛北窯産で、高台がⅠAであることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。32は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。

【第30次】

出土破片数は、緑釉陶器14点、灰釉陶器30点、白磁1点、青磁3点の合計48点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は2,190㎡であることから、100㎡あたり2.15点（緑釉0.64点／灰釉1.37点／白磁0.05点／青磁0.13点）である。

図示したものには緑釉陶器壺（第24図1・3・5）・皿（2）・壺または皿（4）・香炉蓋（6）、灰釉陶器壺（7・8）・壺または皿（9・10）・手付瓶（11）・長頸瓶（12）、白磁碗（13）、青磁杯（14）・皿（15）がある。4は洛北窯産で、高台がⅠAであることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。5は猿投窯産で、高台がⅡA2であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。6は天井部に透孔が穿たれ、陰刻花文が施されており、被熱している。猿投窯産で、尾野Ⅵ期古～中に位置づけられる。9は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。10は尾張産の可能性があり、高台がⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。12は体部下端にシッタ痕が確認でき、外面全体にハケ塗りの痕跡が明瞭に認められる。尾張産で、頸部と体部の接合部が太いことから、尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。13は口縁部が外反して端部を丸くおさめており、白磁碗Ⅰ-5類である。14は口縁端部に輪花と体部外面にヘラ押圧縦線文を有し、越州窯系青磁杯Ⅰ-2類である。15は削出輪高台で畳付露胎となり、体部の屈曲はやや丸みをもち、口縁部へ向けて直線的にのびる。越州窯系青磁皿Ⅰ-1b類である。

【第33次】

出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器12点の合計14点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は1,471㎡であることから、100㎡あたり0.95点（緑釉0.14点／灰釉0.82点）である。

図示したものには緑釉陶器壺（第24図16・17）、灰釉陶器壺（18～21）・長頸瓶（22）がある。18・19は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。22は東濃窯産の可能性があり、尾野Ⅵ期に位置づけられる。

【第46次】

出土破片数は、灰釉陶器3点である（第6表）。発掘調査面積は422㎡であることから、100㎡あたり0.71点である。図示したものには灰釉陶器壺（第24図23）・長頸瓶（24）がある。23は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。24は尾張産で、尾野Ⅵ期に位置づけられる。

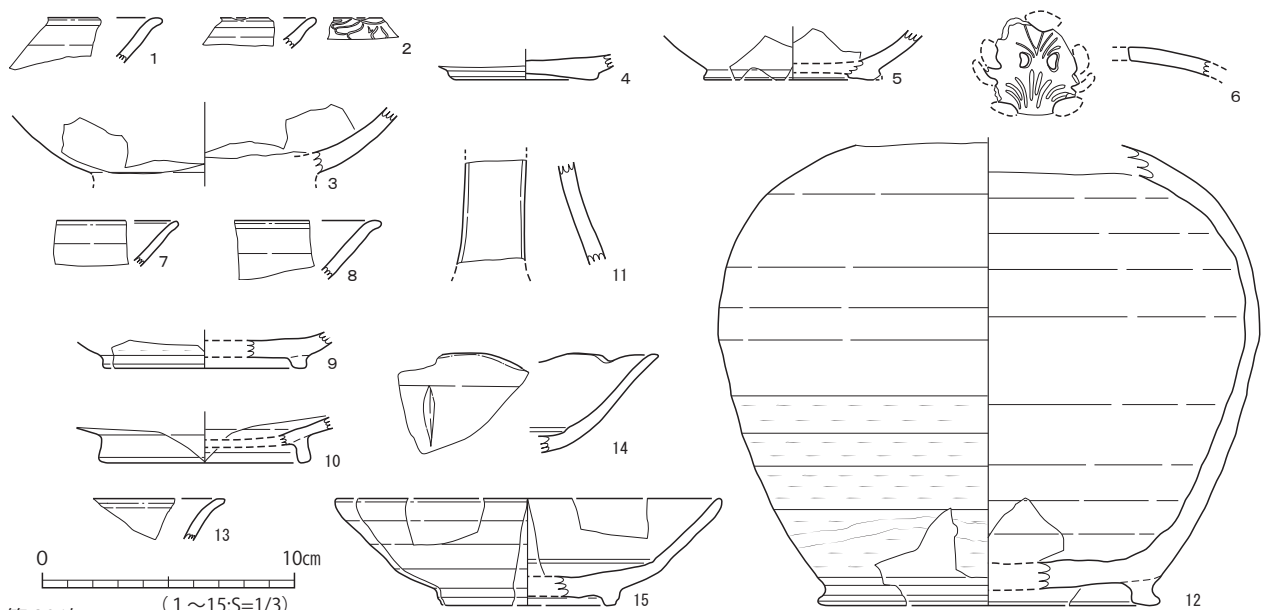
【第83次】

出土破片数は、緑釉陶器7点、灰釉陶器11点の合計18点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は640㎡であることから、100㎡あたり2.81点（緑釉1.09点／灰釉1.72点）である。

図示したものには緑釉陶器壺（第25図3）・壺または皿（1・2）、灰釉陶器皿（4）がある。1は猿投窯産で、高台がⅡA2であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。2・3は洛北窯産で、2は高台がⅠCであることから高橋Ⅱ期新～Ⅲ期、3は底面無釉であり、高台がⅢであることから高橋Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる。4は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。

【第83次試掘区】

第92次調査の試掘区にあたり、出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器9点の合計11点で、器種と産地は第6表の通りである。図示したのは緑釉陶器壺（第25図5）・壺または皿（6）、灰釉陶器壺（7）・皿（8）・瓶（9・10）である。6は洛北窯産で、高台がⅠB1であることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。3

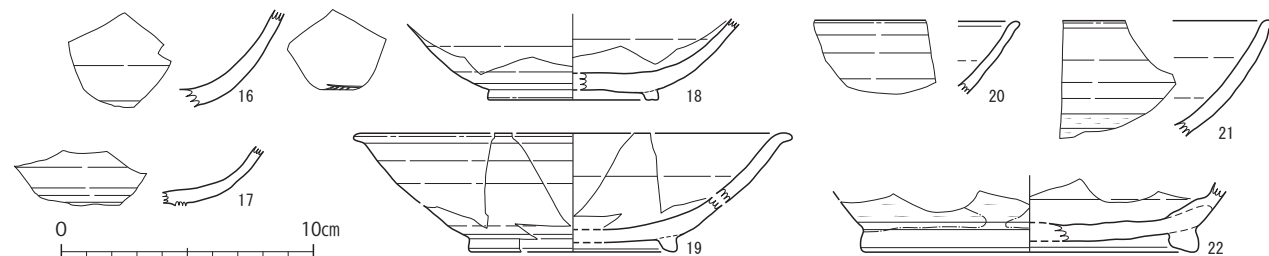


第30次

(1~15:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛北?		軟陶	高橋 I ~ II 古	30-31		B14938
2	表土	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投		内面陰刻花文		30-40		B14938
3	SK981 4層	緑釉 埴	体部1/5	—	—	—	山城?		硬陶		30-17		B14938
4	1層	緑釉 埴or皿	底部1/4	—	(5.5)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	30-38	13-13	B14938
5	D13	緑釉 埴	底部1/6	—	(7.0)	—	猿投	II A2		尾野VI中	30-39	13-15	B14938
6	SK981 5層	緑釉 香炉蓋	天井部のみ	—	—	—	猿投		天井部陰刻花文、透孔 被熱	尾野VI古~中	30-26	13-14	B14938
7	SK987 1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面施釉		30-2		B14938
8	SD1008 1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		30-5		B14938
9	SD1008 1層	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(7.8)	—	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ	尾野VI古	30-11		B14938
10	SK987 1層	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(7.8)	—	尾張?	II C2a	内外面ハケ塗り	尾野VI中	30-8		B14938
11	SK981 2層	灰釉 手付瓶	把手のみ	—	—	—	尾張		外面施釉		30-25		B14938
12	SK981・987	灰釉 長頸瓶	体~底部1/2	—	(13.0)	—	尾張		体下半~底部:回転ヘラケズリ、シッタ痕あり 外面ハケ塗り、肩部に自然釉	尾野VI中~新	30-12	13-12	B14938
13	SD1008 2層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁 I-5類		No. 24		B14314
14	K105 1層	青磁 坏	口縁部片	—	—	—			輪花 越州窯系青磁 I-2類 内面に沈線状の段		No. 22		B14314
15	SD1004	青磁 皿	1/5	(15.2)	(6.8)	4.2			越州窯系青磁 I-1b類 高台:輪高台、畳付露胎 内面に沈線状の段		No. 23	13-11	B15000



第33次

(16~22:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
16	1層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内面陰刻花文		33-37		B14938
17	1層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部				33-38		B14938
18	表土	灰釉 埴	底部1/4	—	(5.5)	—	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	33-5・6	14-2	B14938
19	SK1076 3層	灰釉 埴	口~底部1/6	(16.8)	(8.0)	4.7	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	33-2	14-1	B14938
20	SK1076 3層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		33-1		B14938
21	SK1076 3層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面ハケ塗り		33-3		B14938
22	1層	灰釉 長頸瓶	底部1/5	—	(13.0)	—	東濃?		底部~体部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VI	32-27		B14938



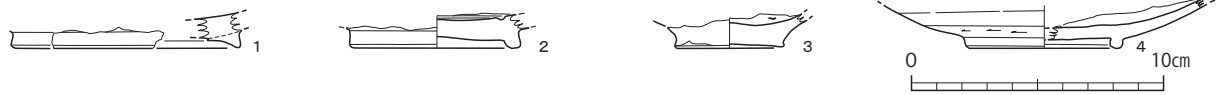
第46次

(23・24:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
23	4層	灰釉 埴	底部1/4	—	(9.0)	—	尾張	II C1	体部:回転ヘラケズリ 内面自然釉	尾野VI古	46-1	14-4	B14939
24	D14 1層	灰釉 長頸瓶	底部1/4	—	(7.6)	—	尾張		体~底部:回転ヘラケズリ	尾野VI	46-2	14-5	B14939

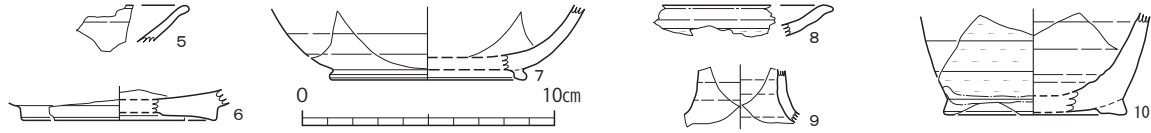
第24図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器(4)



第 83 次

(1~4:5=1/3) (単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	表土 東トレンチ	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(8.9)	—	猿投	II A2		尾野VI中	83-14	14-7	B14939
2	I a層(中央部)	緑釉 埴or皿	底部1/1	—	6.8	—	洛北	I C	内面圈線 底面施釉	高橋II~III	83-15		B14939
3	III層	緑釉 埴	底部1/1	—	4.2	—	洛北	II~III	底部:回転糸切り無調整 底部無釉 内面目跡あり	高橋II~III	83-13	14-6	B14939
4	I a層(南部)	灰釉 埴or皿	底部1/3	—	(8.0)	—	尾張	II C1	体~底部:回転ヘラケズリ 内面施釉、目跡あり	尾野VI古	83-9		B14939

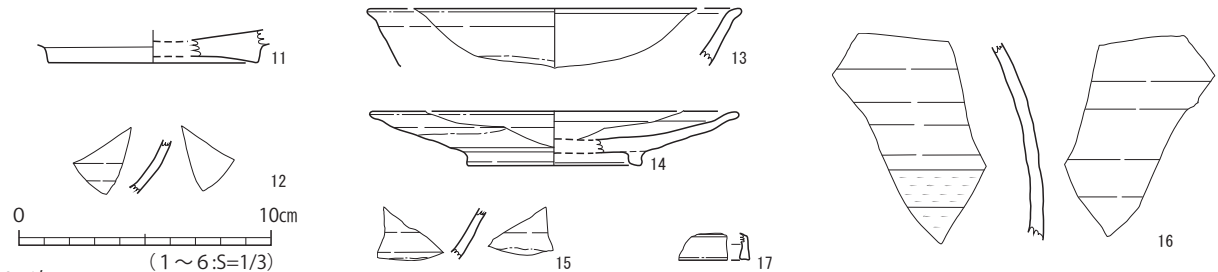


第 83B 次

(1~6:5=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
5	西トレンチ 5層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛北		軟陶	83B-6			B14939
6	西トレンチ 3層	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(7.6)	—	洛北	I B1	軟陶	高橋I~II古	83B-7		B14939
7	西トレンチ 8層	灰釉 埴	底部1/5	—	(7.6)	—	尾張	II B1	内面施釉	尾野V新	83B-1		B14939
8	西トレンチ 遺構確認	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	83B-4			B14939
9	西トレンチ 5層	灰釉 小瓶	頸部1/5	—	—	—	尾張		外面ハケ塗り	83B-2			B14939
10	西トレンチ SX3139	灰釉 瓶	底部1/4	—	(7.2)	—	東海		体部:回転ヘラケズリ 外面ハケ塗り	83B-3			B14939



第 84 次

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
11	表土	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(8.2)	—	洛北	I A	軟陶	高橋I~II古	84-7		B14939
12	SX3091	緑釉 埴	体部片	—	—	—	山城		全面施釉、釉は薄い 硬陶		84-5		B14939
13	SB3071 S3E1抜取	灰釉 埴	口縁1/5	(14.6)	—	—	尾張		内外面施釉		84-1		B14939
14	P22	灰釉 皿	1/5	(14.4)	(6.6)	2.2	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ 内外面施釉	尾野VI古~中	84-3	14-8	B14939
15	表土	灰釉 埴	体部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		84-4		B14939
16	SA3082 E4	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	東濃		体部:回転ヘラケズリ 外面ハケ塗り		84-2		B14939
17	SK3223	青磁 合子蓋	口縁1/5	—	—	—			越州窯系青磁I類		No. 310		B14939

第 25 図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器 (5)

は尾張産で、高台がII B1 であることから尾野V期新に位置づけられる。

【第 84 次】

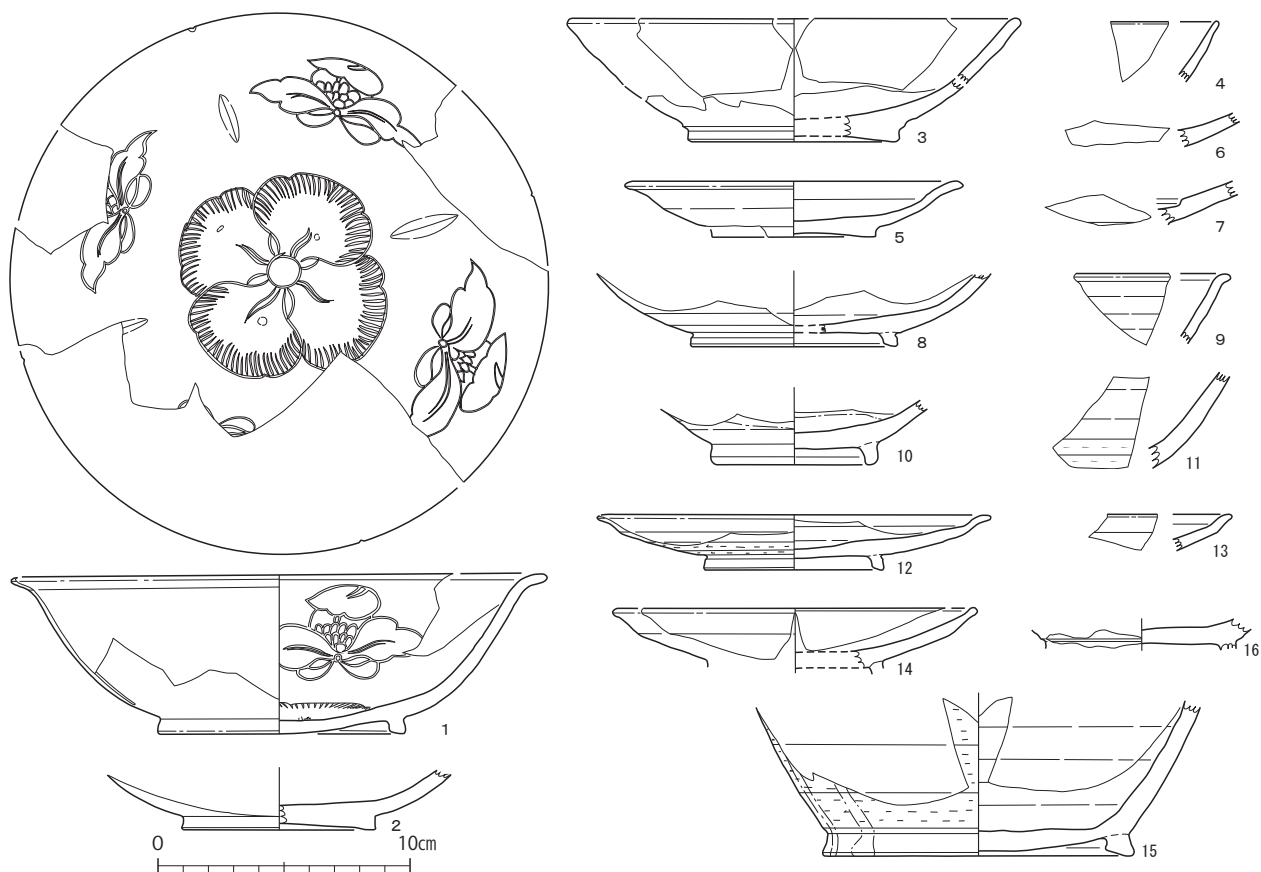
出土破片数は、緑釉陶器7点、灰釉陶器5点、青磁1点の合計13点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は445㎡であることから、100㎡あたり2.91点(緑釉1.57点/灰釉1.12点/青磁0.22点)である。

図示したものには緑釉陶器埴(第25図12)・埴または皿(11)、灰釉陶器埴(13・15)・皿(14)・瓶(16)、青磁合子蓋(17)がある。11は洛北窯産で、高台がI Aであることから高橋I~II期古に位置づけられる。14は尾張産で、高台がII C1であるが外面までハケ塗りされることから、尾野VI期古~中に位置づけられる。17は口縁端部に面をもち、肩部が屈曲する。越州窯系青磁I類である。

【第 92 次】

出土破片数は、緑釉陶器27点、灰釉陶器17点、青磁1点の合計45点である。器種構成と産地については第6表の通りで、緑釉陶器が63.3%と卓越し、なかでも洛北窯産が81.5%を占める。発掘調査面積は200㎡で、これに第83次試掘区の破片数を加えて100㎡あたりの破片数を求めれば、28.0点(緑釉14.5点/灰釉13.0点/青磁0.5点)となる。

図示したものには緑釉陶器埴(第26図1~4)・皿(5・6)・段皿(7)、灰釉陶器埴(8・10・11)・皿(9・12~14)・長頸瓶(15)、青磁碗(16)がある。1は口縁端部を小さく切り欠き、その延長線上に内面では縦方向の小隆線、外面には沈線を施すことで輪花を表現しており、残存状況から4ヵ所に施されたと考え



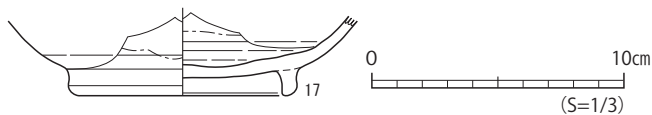
第 92 次

(1~16:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	II層 (SX3382 5b層)	緑釉 埴	1/2	21.2	9.8	6.3	猿投	II B1	輪花:口縁部切り欠き、体部外面は沈線、内面は小隆線 陰刻花文:内面中央に丸頭四弁条芯脈花文、体部4か所に横向宝相花文を配置 内外面目跡あり 口縁端部を強くひきだす	尾野 V 新	92-18	14-9 巻頭図版 1	B15974
2	II層 (SX3382 5b層)	緑釉 埴	体~底部1/4	—	(7.6)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	92-22		B15974
3	II層 (SX3382 4層)	緑釉 埴	口縁・底部片	(17.6)	(6.4)	(4.9)	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	92-27・37	14-12・13	B15974
4	II層 (SX3382 3a層)	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		硬陶		92-41		B15974
5	II層 (SX3382 5b層)	緑釉 皿	1/2	(12.8)	6.4	2.2	洛北	I A	軟陶	高橋 I ~ II 古	92-20	14-10	B15974
6	II層 (SX3382 4層)	緑釉 皿	体部片	—	—	—	洛北		軟陶	高橋 I ~ II 古	92-39		B15974
7	II層 (SX3382 3a層)	緑釉 段皿	体部片	—	—	—	猿投		広縁		92-42		B15974
8	II層 (SX3382 5b層)	灰釉 埴	体~底部1/3	—	(8.2)	—	尾張	II B1	底部:回転ヘラケズリ 内面自然釉 須恵器質	尾野 V 新	92-2	14-14	B15975
9	I c層	灰釉 皿	—	—	—	—	東濃		内面施釉		92-15		B15975
10	II層 (SX3382 3a層)	灰釉 埴	体~底部1/3	—	(6.0)	—	東海西部	II D1b	底部:ナデ 内外面ハケ塗り	尾野 VI 中	92-6	14-15	B15975
11	II層 (SX3382 4層)	灰釉 埴	体部片	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内面施釉		92-11		B15975
12	II層 (SX3382 5b層)	灰釉 皿	1/2	(15.0)	(7.2)	2.2	尾張	II C1	体~底部:回転ヘラケズリ 内面自然釉 須恵器質	尾野 VI 古	92-1	14-11	B15975
13	II層 (SX3382 5b層)	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉	尾野 V 新~VI 古	92-3		B15975
14	II層 (SX3382 4層)	灰釉 皿	口~体部1/5	(14.2)	—	—	尾張		内面自然釉	尾野 V 新~VI 古	92-10	15-1	B15975
15	II層 (SX3382 4層)	灰釉 長頸瓶	体~底部1/3	—	(12.0)	—	尾張		体~底部:回転ヘラケズリ 外面ハケ塗り	尾野 VI	92-7	14-16	B15975
16	SX3379 確認	青磁 碗	底部1/3	—	—	—			越州窯系青磁 I-2類 輪高台 全面施釉		No. 321	15-2	B15974

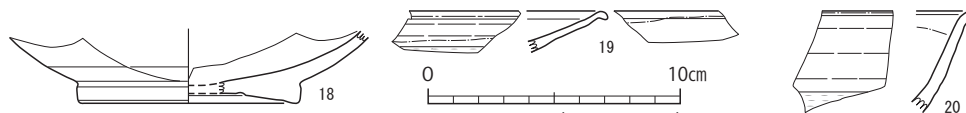
現状変更 1991



(S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
17	I層	灰釉 埴	底部1/3	—	(9.0)	—	東濃	II D1b	底部ナデ 内外面ハケ塗り	尾野 VI 中	現変91-2	15-3	B14939



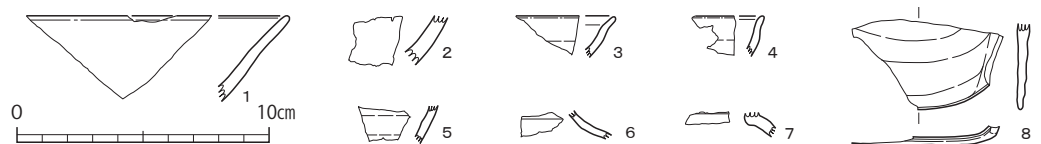
現状変更 1994

(1~3:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
18	SK2270	緑釉 埴	底部1/3	—	(8.6)	—	洛西	I B1	硬陶 底部施釉	高橋 II ~ III	現変94-4	15-4	B14939
19	SK2270	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面漬け掛け?		現変94-1		B14939
20	I層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉		現変94-3		B14939

第 26 図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器 (6)



現状変更 1997 (1~3.5=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	2層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛北		軟陶		現変97-8		B14939
2	2層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	不明		体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉		現変97-7		B14939
3	3層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内面施釉		現変97-4		B14939
4	8層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		現変97-2		B14939
5	2層	灰釉 埴	体部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		現変97-5		B14939
6	8層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	東海西部		内面施釉		現変97-3		B14939
7	2層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	東海西部		外面施釉		現変97-6		B14939
8	9層	灰釉 耳皿	口縁部片	—	—	—	東濃?		内面漬け掛け?		現変97-1		B14939

第 27 図 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器 (7)

られる。内面には陰刻花文が4分割された小隆線の間に横向きの宝相華文、底面には花卉に接して脈が緻密に描かれた丸頭四弁条芯脈花文が施されている。猿投窯産で、高台がⅡ B1であることから尾野Ⅴ期新に位置づけられる。2・3・5は洛北窯産で、高台がⅠ Aであることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。8・12～14は尾張産で、8は高台がⅡ B1であることから尾野Ⅴ期新、12はⅡ C1であることから尾野Ⅵ期古、13・14は口縁部が大きく外反することから尾野Ⅴ期新～Ⅵ期古に位置づけられる。10は東海西部産で、高台がⅡ D1bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。15は尾張産で、尾野Ⅵ期に位置づけられる。16は輪高台で全面施釉され、越州窯系青磁碗Ⅰ-2類である。

【現状変更 1991】

出土破片数は、灰釉陶器4点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は76㎡であることから、100㎡あたり5.26点である。図示したものには灰釉陶器埴(第26図17)があり、東濃窯産で、高台がⅡ D1bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。

【現状変更 1994】

出土破片数は、緑釉陶器4点、灰釉陶器3点の合計7点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は80㎡であることから、100㎡あたり8.75点(緑釉5.0点/灰釉3.75点)である。図示したものには緑釉陶器埴(第26図18)、灰釉陶器埴(20)・皿(19)がある。18は洛西窯産で、高台がⅠ B1であることから高橋Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる。

【現状変更 1997】

出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器6点の合計8点で、器種と産地は第6表の通りである。発掘調査面積は143㎡であることから、100㎡あたり5.6点(緑釉1.4点/灰釉4.2点)である。図示したものには緑釉陶器埴(第27図1・2)、灰釉陶器埴(3～5)・耳皿(8)・瓶(6・7)がある。

5. 金堀地区

(1) 地区の概要

金堀地区は第21次調査、1994年に現状変更に伴う調査(『年報1973・1994』)が行われており、第21次では多数の掘立柱建物や竪穴建物が検出され、掘立柱建物のなかには第Ⅰ・Ⅱ期にさかのぼる可能性のあるものや四面廂付の可能性のある建物が存在する。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第21次】

出土破片数は、緑釉陶器3点、灰釉陶器1点の合計4点で、器種と産地は第7表の通りである。発掘調査面積は1,790㎡であることから、100㎡あたり0.22点(緑釉0.17点/灰釉0.05点)である。図示したものには緑釉陶器皿(第28図1)・埴または皿(2)、灰釉陶器埴(3)がある。1は近江産で、底部は回転糸切り無調整であり、高台がⅡ D1であることから高橋Ⅱ期古に位置づけられる。2は篠窯産で、底面無釉で

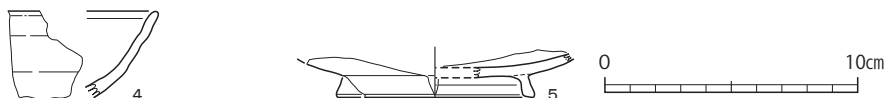
次 数	種類		緑釉陶器										合 計	灰釉陶器						合 計	白 磁	青 磁
	産地		猿 投	猿 投 ?	東 海 西 部	東 海	洛 北	洛 北 ?	洛 西	山 城	尾 ・ 北	不 明		尾 張	尾 張 ?	東 濃	東 濃 ?	東 海 西 部	東 海			
28	器 種	埴	40	3	9	3	26		2	1	5		89	26	7	3	3	3	4	46	3	4
		稜埴	5						1				6							0		
		皿	10		1		6						17	10	1	1		2		14		2
		段皿	7	1	1								9		1		2		1	4		
		耳皿	1				2						3			1				1		
		埴or皿	25	5	3	2	10						45	4	1		1	5		11		
		蓋											0	1	1			1	1	4		
		香炉	5										5							0		
		香炉蓋	6										6							0		
		唾壺		1					1				2							0		
		長頸瓶											0	3	3			1		7		
		広口瓶											0	14	1					15		
		手付瓶	1										1		1					1		
		瓶											0	5	1	1		2		9		
29	器 種	壺or瓶											0	7	1			1		9		
		不明	1									1							0			
		合計	101	10	14	5	44	0	4	1	5	0	184	70	18	6	6	15	6	121	3	6
		埴					1						1	2				1		3		
		埴or皿	1										1							0		
		合計	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	1	0	3	0	0
		埴	1	1			1	2			2		7	5	1	1		1		8	1	
		坏											0							0		1
		皿	1	1	2							1	5							0		2
		埴or皿					1						1					1		1		
		香炉蓋	1										1							0		
		長頸瓶											0	16						16		
		手付瓶											0	1						1		
		瓶											0	2		1			1	4		
33	器 種	合計	3	2	2	0	2	2	0	0	2	1	14	24	1	2	0	2	1	30	1	3
		埴			2								2	6		1	1	1		9		
		鉢											0			1				1		
		長頸瓶											0				1			1		
		不明											0					1		1		
46	器 種	合計	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	6	0	2	2	2	0	12	0	0
		埴											0	1						1		
		長頸瓶											0					1		1		
		手付瓶											0	1						1		
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	3	0
83	器 種	埴			2		2						4	2	2					4		
		皿											0	1						1		
		埴or皿	1		2								3							0		
		鉢											0					1		1		
		瓶											0					1		1		
83 試掘	器 種	壺・瓶											0		4					4		
		合計	1	0	4	0	2	0	0	0	0	0	7	3	6	0	0	2	0	11	0	0
		埴					1						1	1				2		3		
		皿											0	1						1		
		埴or皿					1						1							0		
84	器 種	長頸瓶											0	3						3		
		小瓶											0	1						1		
		壺・瓶											0	1						1		
		合計	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	7	0	0	0	2	0	9	0	0
		埴					5		1				6	1				1		2		
92	器 種	皿											0	1						1		
		合子蓋											0							0		1
		長頸瓶											0			2				2		
		不明					1						1							0		
		合計	0	0	0	0	6	0	1	0	0	0	7	2	0	2	0	1	0	5	0	1
現 変 91	器 種	埴	3	1			19						23	8		2	2	1	1	14		1
		皿					3						3	1						1		
		段皿	1										1							0		
		長頸瓶											0	1						1		
		壺or瓶											0			1				1		
現 変 94	器 種	合計	4	1	0	0	22	0	0	0	0	0	27	10	0	3	2	1	1	17	0	1
		埴								1			1	1						4		
		皿											0			1				1		
		埴or皿	1				1						2					1		1		
		瓶類					1						1							0		
現 変 97	器 種	合計	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0	4	1	0	1	0	1	0	3	0	0
		埴					1						2			1				1		
		皿											0	1						1		
		耳皿											0					1		1		
		埴or皿											0					1		1		
現 変 99	器 種	小瓶											0					1		1		
		瓶											0					1		1		
		合計	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	1	0	1	0	4	0	6	0	0
		總計	111	13	22	5	82	2	6	1	7	2	251	128	25	19	10	34	8	224	4	11

第6表 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器の器種と産地



第 21 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SK474	緑釉 皿	ほぼ1/1	11.7	7.0	2.5	近江	II D1	底部:回転糸切り無調整 底面施釉	高橋Ⅱ古	21-10	16-1	B14943
2	表土	緑釉 埴or皿	底部1/4	—	(6.2)	—	篠	I C	高台端面に回転糸切り痕が残る 底部無施釉	高橋Ⅳ	21-11	16-2	B14943
3	表土	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(8.0)	—	尾張	II B1	体～底部:回転ヘラケズリ 内面自然釉?	尾野Ⅴ新	21-20		B14943



現状変更 1994

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
4 1層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	—	猿投				現変94-21		B14943
5 1層	緑釉 埴or皿	底部1/4	—	(7.6)	—	—	東海西部	II B2	硬陶	尾野VII古~中	現変94-24	16-3	B14943

第 28 図 金堀地区出土施釉陶磁器

あり、高台が I C であることから高橋IV期に位置づけられる。3は尾張産で、高台が II B1 であることから尾野V期新に位置づけられる。

【現状変更 1994】

出土破片数は、緑釉陶器 2 点である（第 7 表）。発掘調査面積は 77㎡であることから、100㎡あたり 2.6 点である。図示したものには緑釉陶器埴（第 28 図 4）・埴または皿（5）がある。5は東海西部産で、高台が II B2 であることから尾野VII期古~中に位置づけられる。

6. 六月坂地区

（1）地区の概要

六月坂地区は第 12・18 次調査、1993・1996 年に現状変更に伴う調査（『年報 1971・1972・1993・2001』）が行われている。第 12・18 次では大きく 2 時期の遺構変遷が捉えられており（第 29 図）、第Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。A 期は外郭東門と西門をつなぐ東西道路の南側で実務官衙が整備され、大型の四面廂付掘立柱建物を東西に 2 棟配置した格式の高い官衙であった可能性が高く、それに小規模な掘立柱建物が付属する状況が明らかとなっている。B 期になると礎石式の総柱建物にかわり、倉庫とみられる。礎石式の総柱建物は多賀城内の実務官衙では唯一のものである。

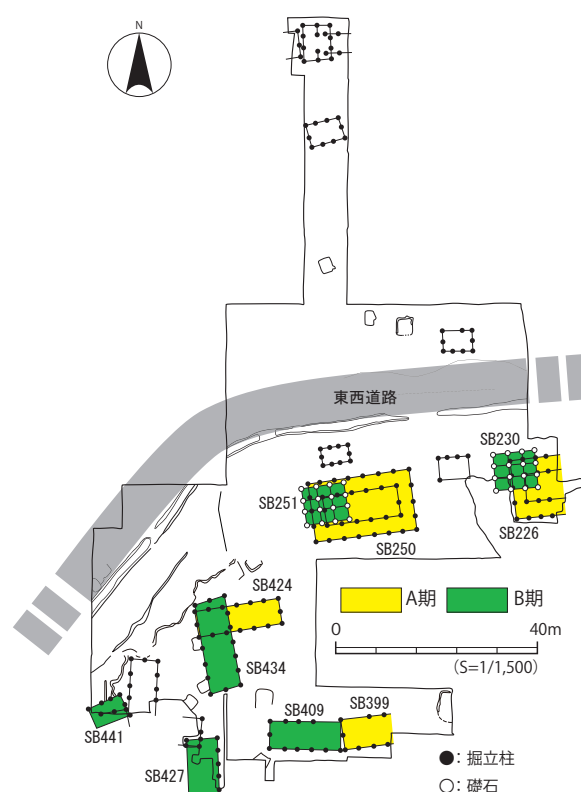
（2）施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第 12 次】

出土破片数は、灰釉陶器 5 点で、器種と産地は第 8 表の通りである。発掘調査面積は 3,622㎡であることから、100㎡あたり 0.14 点である。図示したものには灰釉陶器小瓶（第 30 図 1）がある。

【第 18 次】

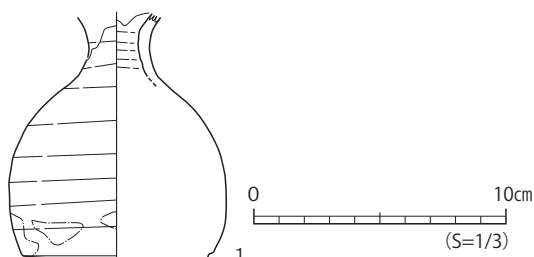
出土破片数は、灰釉陶器小瓶 1 点（第 30 図 2）である（第 8 表）。発掘調査面積は 2,046㎡であることから 100㎡あたり 0.05 点である。



第 29 図 第 12・18 次調査区建物配置模式図

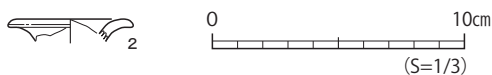
第12次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1		灰釉 小瓶	4/5	—	7.6	—	尾張		底部:回転糸切り無調整 外面ハケ塗り		12-1	17-1	B14930



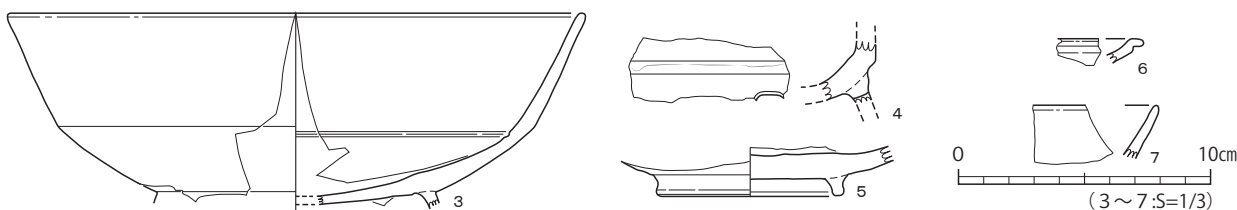
第18次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
2	溝 埋土	灰釉 小瓶	口縁部1/4	(5.0)	—	—	東濃		内外面施釉		18-1		B14930



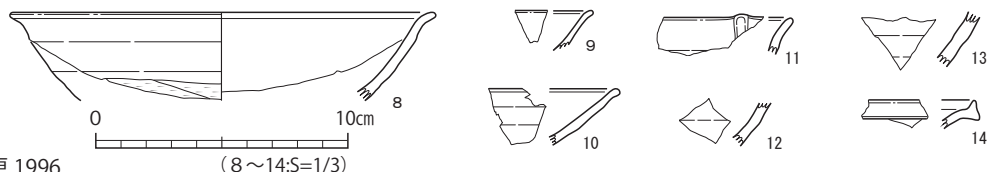
現状変更 1993

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
3	第2層	緑釉 稜埴	1/3	(22.6)	—	—	猿投		内面屈曲部に沈線	尾野VI中	現変93-4	17-2	B14946
4	第2層	緑釉 香炉	体部片	—	—	—	猿投		脚部に透孔あり	尾野VI古〜中	現変93-3	17-4	B14930
5	第1層	灰釉 皿	底部1/1	—	7.3	—	尾張	II C2a	底部:ナデ 内面 ハケ塗り、金泥付着 底部周縁打ち欠き	尾野VI中	現変93-2	17-3	B14930
6	SA2226 柱穴	灰釉 折縁皿	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		現変93-1		B14930
7	第2層	青磁 碗or皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 209	17-5	B14314



現状変更 1996

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
8	6層	灰釉 埴	口縁1/4	(17.0)	—	—	尾張		内面施釉		現変96-3		B14930
9	4層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内面施釉		現変96-6		B14930
10	4層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内面施釉		現変96-5		B14930
11	SK2581 堆積層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		埴B? 輪花:へら状工具による押圧 内外面漬け掛け	尾野VII新〜VIII	現変96-4		B14930
12	7層	灰釉 埴	体部片	—	—	—	東濃		内面施釉		現変96-2		B14930
13	4層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	東海西部		内面施釉		現変96-1		B14930
14	4層	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		現変96-7		B14930



第30図 六月坂区出土施釉陶磁器

次数	種類	緑釉陶器				灰釉陶器			
		猿投	東海西部	近江	合計	尾張	東濃	合計	青磁
21	器種								
	埴		1		1	1		1	
	皿		1		1	2		0	
	合計	0	1	1	3	1	0	1	
現変94	器種								
	埴	1			1			0	
	碗or皿	1			1			0	
	合計	1	1	0	2	0	0	0	
	総計	1	2	1	5	1	0	1	

第7表 金堀地区出土施釉陶磁器の器種と産地

次数	種類	緑釉陶器			灰釉陶器				青磁
		猿投	東海西部	合計	尾張	東濃	東海西部	合計	
12	器種								
	小瓶			0	2			2	
	瓶			0	3			3	
	合計	0	0	0	5	0	0	5	
18	器種								
	小瓶			0	1			1	
	合計	0	0	0	1	0	0	1	0
現変93	器種								
	埴		1	1	1			1	
	稜埴	7		7				0	
	折縁皿			0		1		1	
	碗or皿			0				0	1
	香炉	1		1				0	
	合計	8	1	9	1	1	0	2	1
現変96	器種								
	埴			0	1	4	1	6	
	長頸瓶			0		1	1		
	合計	0	0	0	1	4	2	7	0
	総計	8	1	9	8	5	2	15	1

第8表 六月坂地区出土施釉陶磁器の器種と産地

【現状変更 1993】

出土破片数は、緑釉陶器 9 点、灰釉陶器 2 点、青磁 1 点の合計 12 点で、器種と産地は第 8 表の通りである。発掘調査面積は 104㎡であることから、100㎡あたり 11.53 点(緑釉 8.65 点／灰釉 1.92 点／青磁 0.96 点)である。図示したものには緑釉陶器稜碗(第 30 図 3)・香炉(4)、灰釉陶器皿(5)・折縁皿(6)、青磁碗または皿(7)がある。3 は復元口径 22.6cm と大きく、猿投窯産で、尾野Ⅵ期中に位置づけられる。4 は脚部に透孔が穿たれており、猿投窯産で、Ⅵ期古～中に位置づけられる。5 は内面が磨耗しており、金泥が付着している。尾張産で、高台がⅡ C2a であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。7 は越州窯系青磁Ⅰ類である。

【現状変更 1996】

出土破片数は、灰釉陶器 7 点で、器種と産地は第 8 表の通りである。発掘調査面積は 15㎡であることから、100㎡あたり 4.67 点である。図示したものには灰釉陶器碗(8～12)・長頸瓶(14)・瓶(13)がある。11 はへら状工具の押圧によって輪花がつくりだされており、こうした輪花は碗 B に伴うものと考えられ(尾野 2008)、東濃窯産で尾野Ⅶ期新～Ⅷ期に位置づけられる。

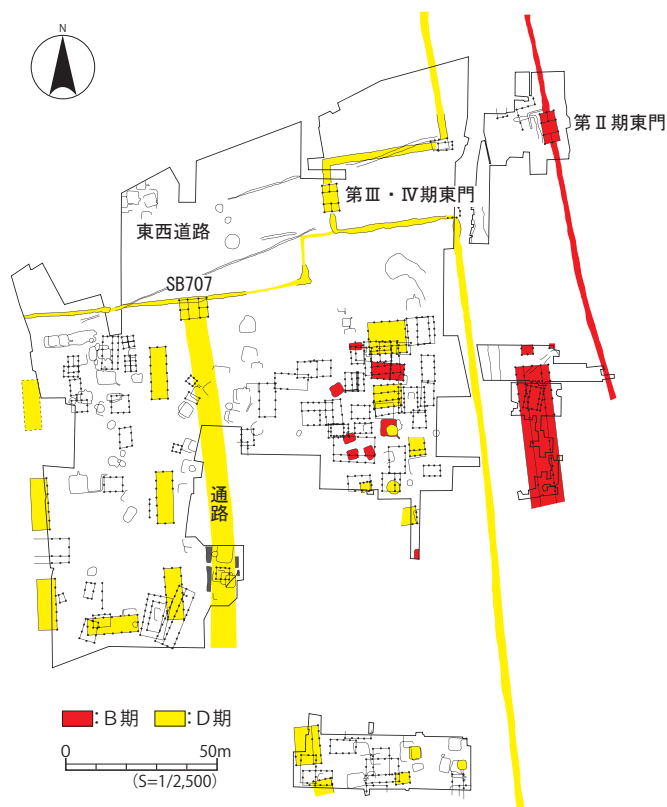
7. 東門・大畑地区

(1) 地区の概要

東門・大畑地区は、東門を第 13・53・54・65・82 次(『年報 1971・1987・1988・1994・2010』)、大畑地区を第 14・23・56・58～60・62～68 次(『年報 1971・1974・1989～1997』)で調査している。東門は、第Ⅰ期に第Ⅱ期の位置で棟門、そしてそこから南へ約 160 m のところに掘立式の八脚門があり、第Ⅱ期になると棟門の位置に八脚門が移され礎石式となる。第Ⅲ・Ⅳ期には東辺の移動に伴って西に移動し、逆「コ」字形に内側に入り込み、第Ⅲ期は掘立式、第Ⅳ期は礎石式となる。

大畑地区は多賀城内最大規模の実務官衙とみられ、7 時期の遺構変遷が確認されている。第Ⅰ期の A 期は遺構が少なく不明確であるが、第Ⅱ期の B 期には東辺沿いに長大な両廂付の南北棟建物が確認され、西側に竪穴建物群がつくられる(第 31 図)。第Ⅲ・

Ⅰ・Ⅱ期の C 期になると掘立柱建物の数が増加し、第Ⅲ・Ⅱ期の D 期には東西道路に面した部分は材木堀によって区画されており、入口には掘立式の八脚門である SB707 が設けられ、そこから南へ伸びる通路によって空間が東西に分けられている。西側には 7 棟の大型掘立柱建物が「コ」字状に計画的に配置され、東側には掘立柱建物だけでなく、多数の竪穴建物や鍛冶工房が検出されている。第Ⅳ期の E 期には D 期に設けられた八脚門や通路西側の建物群は廃絶するが、東側を中心に掘立柱建物が多く確認でき、この時期に建物数が最も多くなる。第Ⅳ期の F・G 期では建物数は減少するが、G 期には四面廂付建物が確認されている。



第31図 東門・大畑地区建物配置模式図

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

① 第 14・23・56・58・60・63～67 次

調査区が重複していることから、最初に全体の破片数や調査面積、出土状況について触れ、その後調査回数ごとに破片数や器種構成



第32図 東門・大畑地区第14・23・56・58・60・63～67次調査区における施釉陶磁器の出土状況

などを詳述する。

破片数は緑釉陶器 51 点、灰釉陶器 573 点、白磁 7 点、青磁 5 点で、合計 636 点が出土している。調査面積は 16,298㎡であることから、100㎡あたり 3.90 点（緑釉 0.31 点／灰釉 3.52 点／白磁 0.04 点／青磁 0.03 点）である。

出土状況は（第 32 図）、大畑地区の官衙を東西に分ける SB707 とそこから南へのびる通路を境として、西側は 1 つのグリットあたり 10 点以上する箇所は存在するが散漫な分布である一方、東側は面的に出土する傾向にあり、なかでも N276～291、E258～294 で 1 つのグリットあたり 10 点以上出土する箇所が複数認められる。ここは第 58 次と第 60 次調査区にあたり、両者を合わせた出土破片数は緑釉陶器 27 点、灰釉陶器 367 点、白磁 2 点、青磁 3 点の合計 399 点で、発掘調査面積は 2,169㎡であることから、100㎡あたり 18.39 点（緑釉 1.25 点／灰釉 16.92 点／白磁 0.09 点／青磁 0.13 点）となる。

10 点以上出土する古代の遺構では、第 60 次の 25 点(緑釉 1 点／灰釉 24 点)出土した SK2113、21 点(全て灰釉) 出土した SD2116、第 14 次の 14 点(全て灰釉) 出土した SI324 がある(第 64 図)。

【第 14 次】

出土破片数は、灰釉陶器 22 点で、器種と産地は第 9 表の通りである。図示したものには灰釉陶器碗(第 33 図 1～3)・皿(5・6)・蓋(4)・瓶(7)がある。3 は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡ D3 であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。4 は東海東部産で、愛知県豊橋市苗畑 5 号窯(豊橋市教委 2000)において同様の蓋が出土していることから、三河産の可能性があり。苗畑 5 号窯は折戸 53 号窯式に併行する時期とされ(贅 2002)、鈴木編年Ⅲ期に併行すると考えられる。7 は東海西部産で、尾野Ⅵ期に位置づけられる。

【第 23 次】

出土破片数は、灰釉陶器 53 点、青磁 2 点の合計 55 点である。器種と産地は第 9 表の通りであるが、灰釉陶器の器種は碗・皿類が 54.1% (29/53 点)、壺または瓶が 41.5% (22/53 点) を占めており、産地は尾張産またはその可能性のあるものが 57.1% (32/53 点) と半数以上を占める。

図示したものには灰釉陶器碗(第 33 図 8～12)・碗または皿(13)・耳皿(14)・蓋(15)・長頸瓶(16・18・19)・瓶(17)、青磁碗(20)がある。8・13 は東濃窯産で、高台がⅡ D1b であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。11・12・14 は尾張産で、高台がⅡ C1 であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられるが、11 は外面までハケ塗りされていることから、Ⅵ期古～中の過渡的な様相を示すものと考えられる。18 は尾張産で、頸部がやや太く上半がひらく器形であることから尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。20 は口縁端部に輪花と体部外面にヘラ押圧縦線文を有しており、越州窯系青磁Ⅰ類である。

【第 56 次】

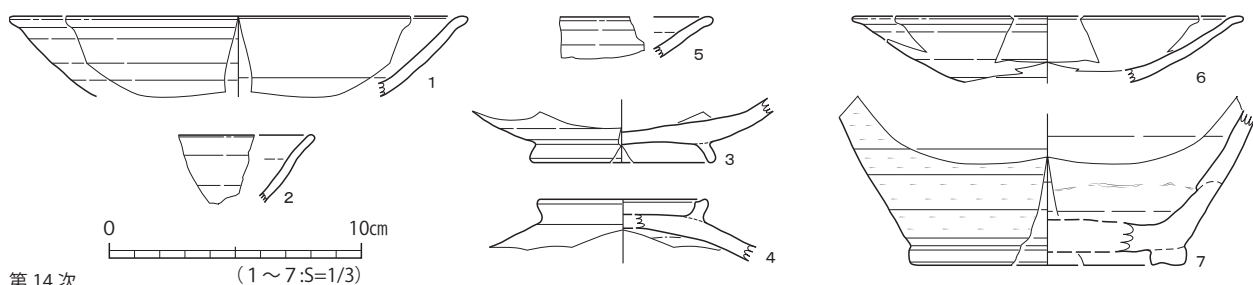
出土破片数は、緑釉陶器 3 点、灰釉陶器 44 点の合計 47 点である。器種構成と産地については第 9 表の通りであるが、灰釉陶器の器種は碗・皿類が 95.5% (42/44 点) と卓越し、産地は東濃窯産またはその可能性のあるものが 45.5% (20/44 点) で主体となる。

図示したものには灰釉陶器碗(第 34 図 1～3)・皿(4・5・8)・段皿(6・7)・壺(9)がある。2・8 は東濃窯産の可能性があり、3 は東海西部産で、高台がⅡ D1 であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。4 は内外面ハケ塗りの東海東部産で、高台がⅡ E3a であることから鈴木Ⅲ期に位置づけられる。6 は尾張産で、高台がⅡ B1 であることから尾野Ⅴ期新に位置づけられる。7 は東濃窯産で、段が形骸化して沈線状となり、尾野Ⅶ期新～Ⅷ期中に位置づけられる。9 は東濃窯産で、双耳壺の脚端部の可能性がある。

【第 58 次】

出土破片数は、緑釉陶器 8 点、灰釉陶器 128 点、青磁 2 点の合計 138 点である。器種構成と産地については第 9 表の通りであるが、灰釉陶器の器種は碗・皿類が 56.3% (72/128 点)、壺または瓶が 43.8% (56/128 点) を占めており、産地は可能性のあるものを含めて尾張産が 36.7% (47/128 点)、東濃窯産が 43.8% で、やや東濃窯産が多い。

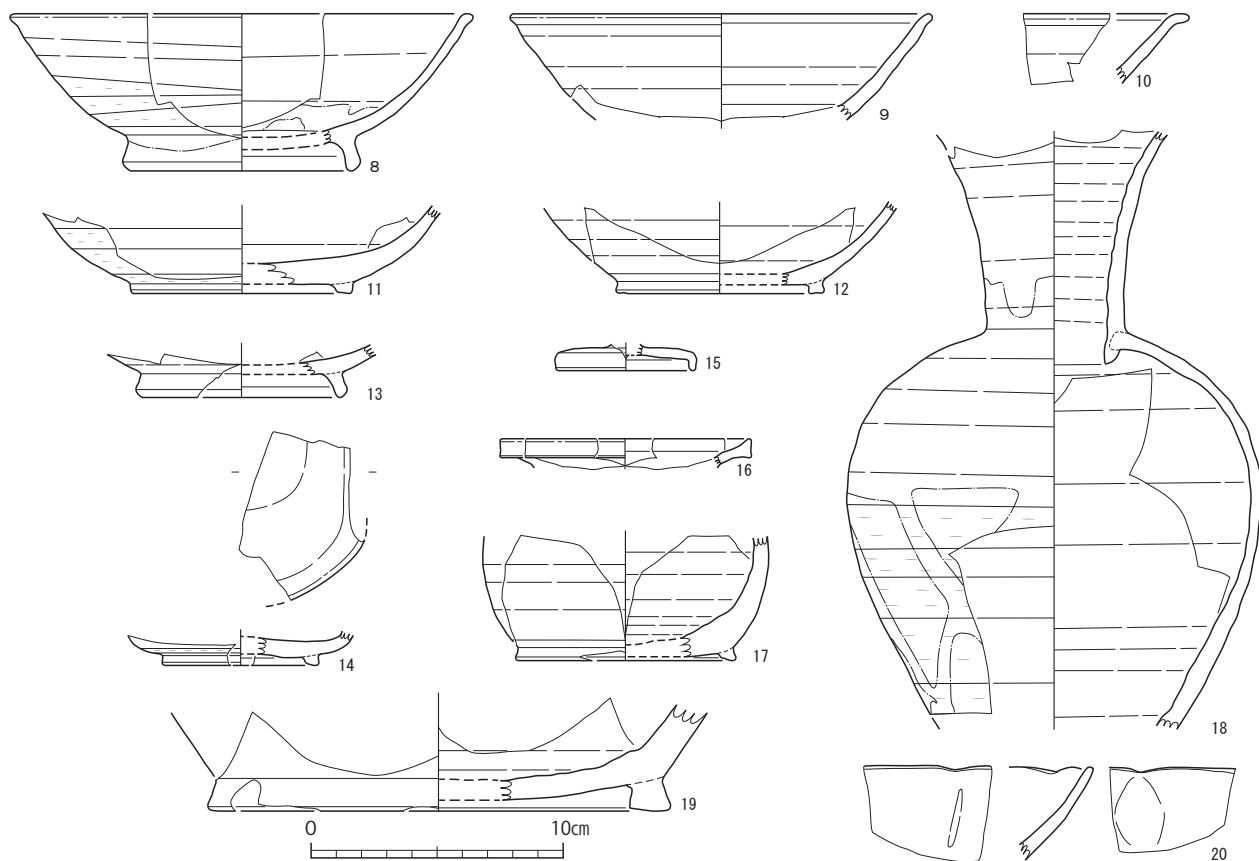
図示したものには緑釉陶器碗または皿(第 34 図 10・11)・香炉蓋(12)、灰釉陶器碗(13～18)・深碗(19)・皿(20～23)・段皿(24・25)・折縁皿(26)・耳皿(第 35 図 1)・碗または皿(2～6)・長頸瓶(9・10)・広口瓶(8)・手付瓶(11)・瓶(12・13)・壺または瓶(7)がある。10 は猿投窯産で、高台がⅡ C2b であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。11 は東濃窯または近江産で、高台がⅡ C2c であることから高橋Ⅰ期に位置づけられる。14 は底部に回転ヘラケズリ後線刻「+」が施される。尾張産の可能性があり、高台がⅡ E2 であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。15 は底部にヘラ書き「+」が確認でき、尾張産で、高台がⅡ D2a であることから尾野Ⅵ期古～中に位置づけられる。16 は尾張産、17 は東濃窯産、18 は尾張産の可能性があり、23 は東海西部産で、高台がⅡ D1 またはⅡ E1 であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。19 は東濃窯産で、底部回転糸切り無調整であり、高台がⅡ F2 であることから尾野Ⅶ期古～中に位置づけられる。24 は尾張産の可能性があり、内底面ハケ塗りであることから尾



第14次

(1~7:S=1/3)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	溝	灰釉 碗	口縁1/5	(17.8)	—	—	尾張		内面施釉		14-14	18-2	B14931
2	表土	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	東濃?		碗B? 内面施釉		14-3		B14931
3	SI324	灰釉 碗	底部1/4	—	(7.0)	—	東濃?	II D3	底部:回転糸切り→回転ヘラケズリ 内面施釉、摩耗	尾野VI新	14-2	18-3	B14931
4	黒色土	灰釉 蓋	天井部1/4	—	—	—	三河?		環状摘み 外面自然釉 内面ハケ塗り	贅5群	14-4	18-4	B14931
5	SI324	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東濃?		内面施釉		14-13		B14931
6	SI324	灰釉 皿	口縁1/5	(15.0)	—	—	尾張		内面施釉		14-1	18-1	B14931
7	黒色土	灰釉 瓶	底部1/4	—	—	—	東海西部		体~底部:回転ヘラケズリ	尾野VI	14-8	18-5	B14931

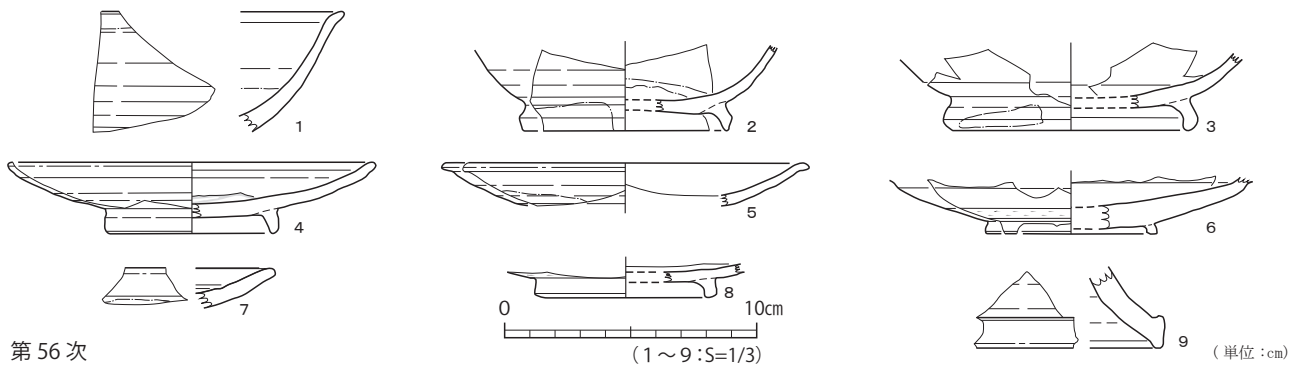


第23次

(8~20:S=1/3)

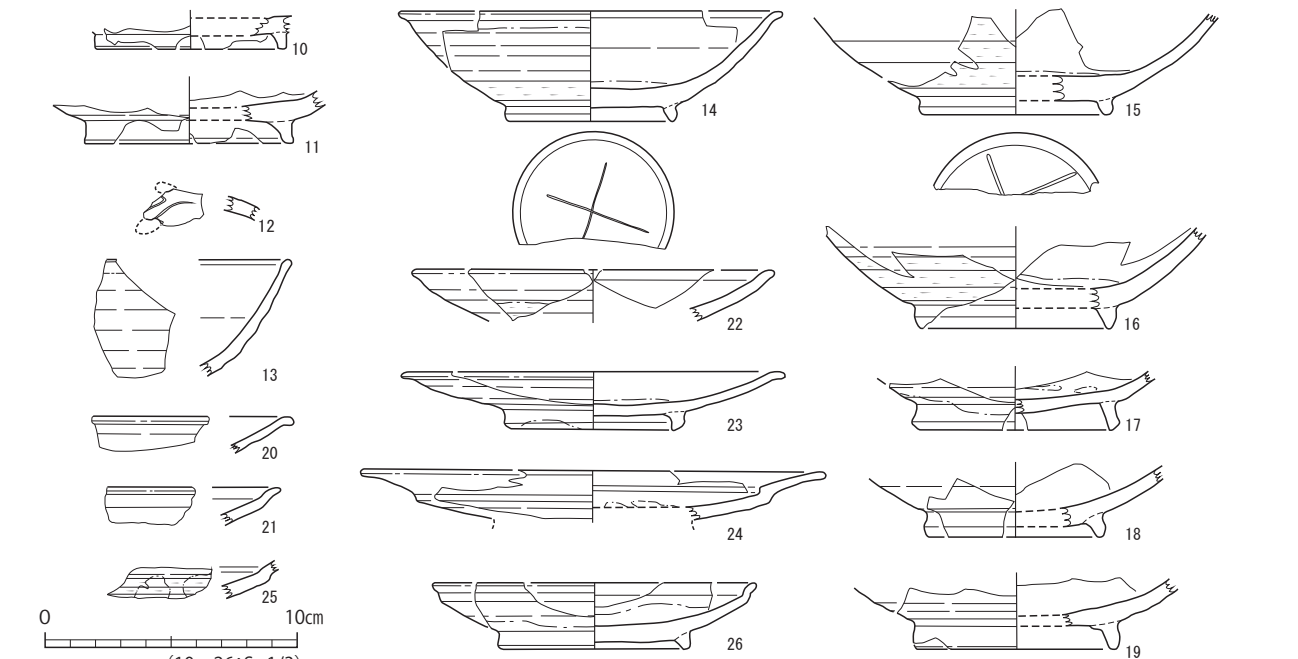
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
8	土坑	灰釉 碗	1/4	(18.0)	(8.6)	6.3	東濃	II D1b	体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	23-44	18-6	B14947
9	表土	灰釉 碗	口縁1/4	(16.6)	—	—	東濃?		内面施釉		23-15・19	19-1	B14931
10	SI1738 埋土	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張		内面施釉		23-1・9		B14931
11	黒褐色土	灰釉 碗	体~底部1/4	—	(8.6)	—	尾張	II C1	体~底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI古~中	23-12	18-10	B14931
12	溝1 埋土	灰釉 碗	底部1/4	—	(8.0)	—	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	23-11	18-9	B14931
13	2A層	灰釉 碗or皿	底部1/4	—	(7.8)	—	東濃	II D1b	内面施釉	尾野VI中	23-13		B14931
14	褐色土	灰釉 耳皿	1/5	—	(6.0)	—	尾張	II C1	内面施釉	尾野VI古	23-20	18-7	B14931
15	溝1 埋土	灰釉 蓋	1/4	(5.4)	—	—	東海西部		外面施釉		23-17		B14931
16	77住 埋土	灰釉 長頸瓶	体~底部1/6	(9.8)	—	—	東海西部		外面施釉	尾野VI	23-18		B14931
17	SD77 黒褐色土	灰釉 瓶	底部1/5	—	(8.8)	—	東濃?		底部:ナデ		23-21		B14931
18	2B層	灰釉 長頸瓶	頸~体部1/2	—	—	—	尾張		体部下半:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VI中~新	23-43	18-8	B14947
19	表土	灰釉 瓶	底部1/4	—	(18.4)	—	東海西部		底部:回転ヘラケズリ 体~底部ハケ塗り		23-35	19-2	B14931
20	黒色土	青磁 碗	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類 輪花		No. 6	19-3	B14314

第33図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器(1)



第 56 次

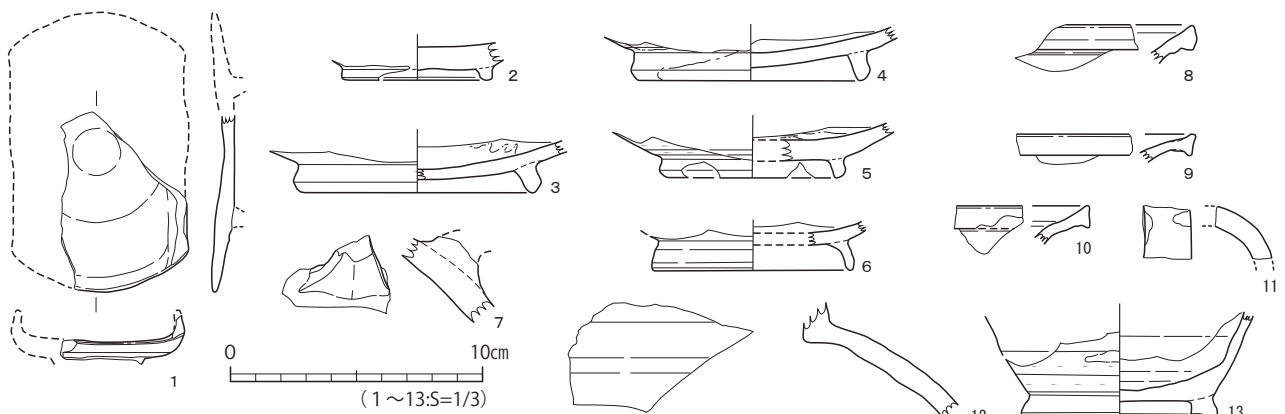
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面ハケ塗り		56-16		B14932
2	SD1911	灰釉 埴	底部1/5	—	(8.0)	—	東濃?	II D1b	内面摩耗 内外面ハケ塗り	尾野VI中	56-29		B14932
3	SK1912 5層	灰釉 埴	底部1/4	—	(9.0)	—	東海西部	II D1a	底部:ナデ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	56-37	19-5	B14932
4	1層	灰釉 皿	1/5	(14.2)	(6.4)	2.8	東海東部	II E3a	底部:ナデ 内面摩耗 内外面ハケ塗り	鈴木III	56-38	19-7	B14932
5	1b層	灰釉 皿	口縁1/5	(14.0)	—	—	尾張		内外面ハケ塗り		56-9	19-6	B14932
6	1層	灰釉 段皿	底部1/5	—	(6.6)	—	尾張	II B1	狭縁体部:回転ヘラケズリ 底部:ナデ 内面施釉	尾野V新	56-5	19-4	B14932
7	3層	灰釉 段皿	口縁部片	—	—	—	東濃?		段は沈線状 内外面漬け掛け	尾野VII新~VIII中	56-17		B14932
8	SD1911	灰釉 皿	底部1/5	—	(6.4)	—	東濃?	II D1a	底部:ナデ 体部回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野VI中	56-28		B14932
9	1層	灰釉 瓶	脚部片	—	—	—	東濃				56-13		B14932



第 58 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
10	SD2042	緑釉 埴or皿	口縁部片	—	(7.4)	—	猿投	II C2b		尾野VI中	58-131		B14932
11	1層	緑釉 埴or皿	底部1/5	—	(8.0)	—	濃・近	II C2c		高橋 I	58-132	19-11	B14932
12	SK2022	緑釉 香炉蓋	天井部片	—	—	—	尾張		天井部陰刻花文、透孔あり		58-136	19-12	B14932
13	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張				58-39		B14932
14	SD2050	灰釉 埴	1/3	(14.8)	6.4	4.4	尾張?	II E2	底部:回転ヘラケズリ→線刻「+」 内面摩耗 内外面漬け掛け?	尾野VI新	58-51	19-9	B14947
15	SK2013 4層	灰釉 埴	底部1/4	—	(7.4)	—	尾張	II D2b	体~底部:回転ヘラケズリ、ヘラ書き「×」 内面施釉、摩耗	尾野VI古~中	58-127	20-1	B14932
16	2層	灰釉 埴	底部1/4	—	(7.4)	—	尾張	II E1	底部:回転ヘラケズリ	尾野VI中	58-73・74		B14932
17	D317	灰釉 埴	底部1/5	—	(7.6)	—	東濃	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	58-66	20-4	B14932
18	SD2050	灰釉 埴	底部1/4	—	(6.8)	—	尾張?	II D1b		尾野VI中	58-54		B14932
19	1層	灰釉 深埴	底部1/4	—	(7.8)	—	東濃	II F2	底部:回転糸切り無調整 内面摩耗、施釉	尾野VII古~中	58-82	20-5	B14932
20	2層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面施釉		58-13		B14932
21	1層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		口縁部大きく外反 内面施釉	尾野V新~VI古	58-7		B14932
22	1層	灰釉 皿	口縁1/6	(14.0)	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉		58-46		B14932
23	4層	灰釉 皿	1/2	(14.6)	6.3	2.4	東海西部	II D1a	底部:回転ヘラケズリ 内面摩耗 内外面ハケ塗り	尾野VI中	58-126	19-10	B14947
24	1層	灰釉 段皿	口縁1/6	(18.0)	—	—	尾張?		内底面~外面ハケ塗り	尾野VI中	58-48	20-8	B14932
25	SD2050 1層	灰釉 段皿	口縁部片	—	—	—	東濃?		体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉		58-49		B14932
26	X138	灰釉 折縁皿	1/5	(12.6)	(7.0)	2.6	東濃	II D4	底部:ナデ 内外面漬け掛け	尾野VII中~新	58-75・76	19-8	B14947

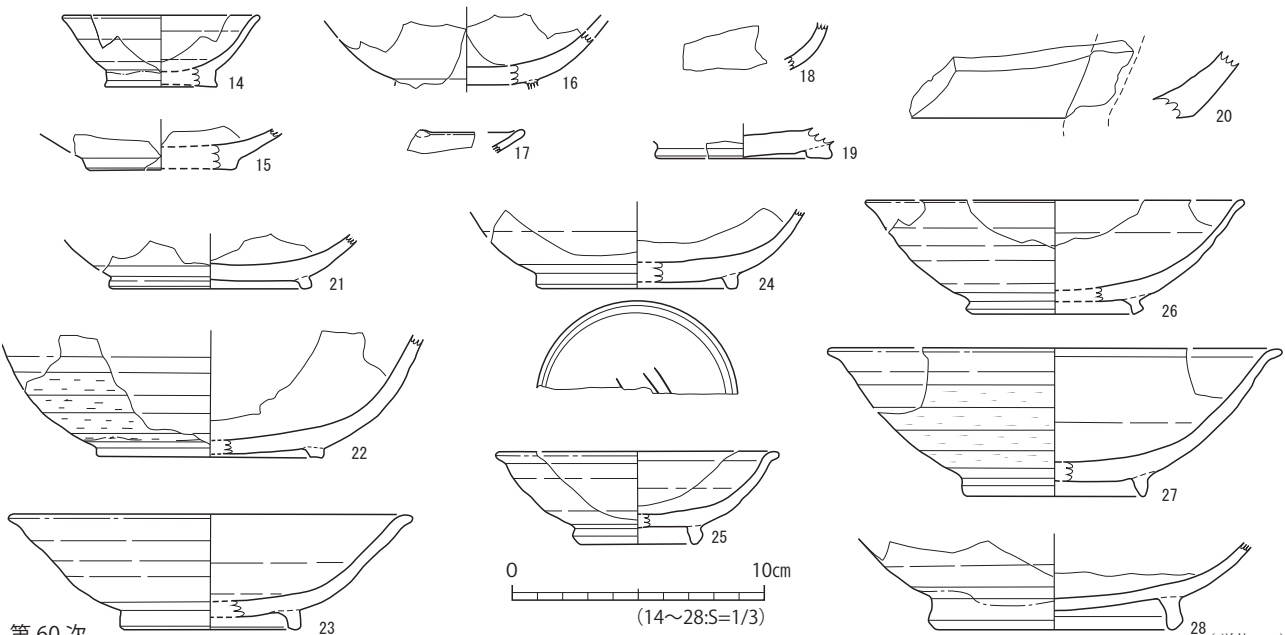
第 34 図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器 (2)



第 58 次

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	2層	灰釉 耳皿	1/5	—	—	—	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	58-24	20-9	B14932
2	SD2042	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(6.0)	—	尾張	II C1	底部:ナデ	尾野VI中	58-31		B14932
3	SD2050 2層	灰釉 埴or皿	底部1/3	—	(9.2)	—	東濃?	II D1b	底部:ナデ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	58-103	20-6	B14932
4	2層	灰釉 埴or皿	底部2/5	—	(8.6)	—	東海西部	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	58-17	19-13	B14932
5	1層	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(6.6)	—	尾張?	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り、摩耗	尾野VI中	58-45	20-7	B14932
6	表土	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(7.7)	—	尾張?	II F2	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI中〜新	58-119		B14932
7	SD2050 2層	灰釉 壺or瓶	把手部片	—	—	—	東海西部		外面施釉		58-18		B14932
8	2層	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃?		外面施釉	尾野VII	58-69		B14932
9	1層	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	東濃?		外面施釉	尾野VI	58-116		B14932
10	1層	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	尾張		外面施釉	尾野VI	58-5		B14932
11	SD2050	灰釉 手付瓶	把手部片	—	—	—	尾張		湾曲		58-2		B14932
12	1層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	尾張?		外面施釉		58-107	20-2	B14932
13	1層	灰釉 瓶	底部1/3	—	7.6	—	東海西部		底部:回転糸切り無調整 体部:回転ヘラケズリ、シッタ痕あり	尾野VI	58-37	20-3	B14932



第 60 次

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
14	K560	緑釉 埴	1/4	(7.6)	(4.4)	2.8	篠?	III	底部:回転糸切無調整、底面無釉 硬陶	高橋III〜IV	60-152	21-2	B14933
15	3・4層	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(6.0)	—	洛北	I A	軟陶	高橋 I 〜 II 古	60-154	21-3	B14933
16	SD2116	緑釉 埴	底部1/4	—	—	—	尾張	II C1?	底部目跡あり	尾野VI古	60-161	21-4	B14933
17	SD2117 2層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	東海西部		輪花:指頭押圧 硬陶		60-169		B14933
18	SD2116	緑釉 瓶	体部のみ	—	—	—	猿投				60-162		B14933
19	2B層	緑釉 唾壺?	底部1/5	—	(6.6)	—	猿投		貼付高台	尾野VI古〜中	60-165		B14933
20	SK2113	緑釉 四足短頸壺	体部片	—	—	—	猿投		脚部欠損	尾野VI古〜中	60-153	21-5	B14933
21	SK2113 1層	灰釉 埴	底部1/4	—	(8.0)	—	尾張		底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	60-17	22-3	B14933
22	K556埋土・D553-2層	灰釉 埴	体〜底部1/4	—	(8.8)	—	尾張	II C1	体〜底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI古〜中	60-241	21-11	B14933
23	SK2106	灰釉 埴	2/5	(15.6)	(7.2)	4.6	東海東部?	II C2a	底部:ナデ 内面摩耗	鈴木II	60-7	20-10	B14947
24	表土	灰釉 埴	体〜底部1/2	—	(7.8)	—	尾張	II C1	底部:ナデ、ヘラ書き「×」内面金泥付着、内面施釉	尾野VI古	60-93	21-10	B14933
25	SK2113 1層	灰釉 埴	1/5	(10.8)	(4.4)	3.6	尾張	II D1b	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI中	60-2	20-13	B14947
26	2層	灰釉 埴	1/5	(14.8)	(6.4)	4.5	尾張	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野VI中	60-138	20-11	B14947
27	SK2113	灰釉 埴	1/4	(17.6)	(7.0)	5.9	尾張	II E2	体〜底部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	尾野VI新	60-1	21-1	B14947
28	P165	灰釉 埴	底部1/1	—	9.2	—	尾張	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-80	21-9	B14947

第 35 図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器 (3)

野Ⅵ期中に位置づけられる。26は東濃産で、復元口径が12.6cmと小さく、高台がⅡD4であることから尾野Ⅶ期中～新に位置づけられる。

第35図2は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。3は東濃窯産の可能性があり、4は東海西部産、5は尾張産の可能性があるので、高台がⅡD1bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。6は尾張産の可能性があり、高台がⅡF2であることから尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。8は東濃窯産で、尾野Ⅶ期に位置づけられる。9は東濃窯産の可能性があり、10は尾張産で、口縁部が大きく外反することから尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。

【第60次】

出土破片数は、緑釉陶器19点、灰釉陶器239点、白磁2点、青磁1点の合計261点である。器種構成と産地については第9表の通りであるが、緑釉陶器は埴・皿類だけでなく香炉や四足短頸壺もみられ、産地は猿投窯産が57.9%（11/19点）と半数以上を占める。灰釉陶器の器種は埴・皿類が91.6%（219/239点）と卓越しており、産地は東海西部産が26.4%（63/239）存在するが、可能性のあるものを含めて尾張産が54.8%（131/239点）で主体となり、東濃窯産は17.1%（41/239点）と少ない。

図示したものには緑釉陶器埴（第35図14・16）・皿（17）・埴または皿（15）・唾壺？（19）・瓶（18）・四足短頸壺（30）、灰釉陶器埴（第35図21～28、第36図1～12）・皿（13～22）・段皿（23）・埴または皿（24）・鉢（25）・長頸瓶（27）・小瓶（28）・瓶（26・29）、青磁壺（30）がある。

第35図14は硬陶で篠窯産の可能性があり、高台はⅢで底面は施釉されていないことから、高橋Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。15は洛北窯産で、高台がⅠAであることから高橋Ⅰ～Ⅱ期古に位置づけられる。16は猿投窯産で、高台は残存状況からⅡC1の可能性があるので、尾野Ⅵ期古に位置づけられる。19・20は猿投窯産で、19は底径が小さく唾壺の可能性があり、20は四足短頸壺の大型品で、脚部が剥離している。これらは尾野Ⅵ期古～中に生産されることから、その時期の所産と考えられる。21・22・24は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古と考えられるが、22は外面までハケ塗りされることから、Ⅵ期古～中の過渡的な資料である。また24は内面に金泥が付着し、底部にヘラ書き「三」がみられる。23は施釉の痕跡がみられず、東海東部産の可能性があり、高台がⅡC2aであることから鈴木Ⅱ期に位置づけられる。25・26・28は尾張産で、高台がⅡD1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。27は尾張産で、高台がⅡE2であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。

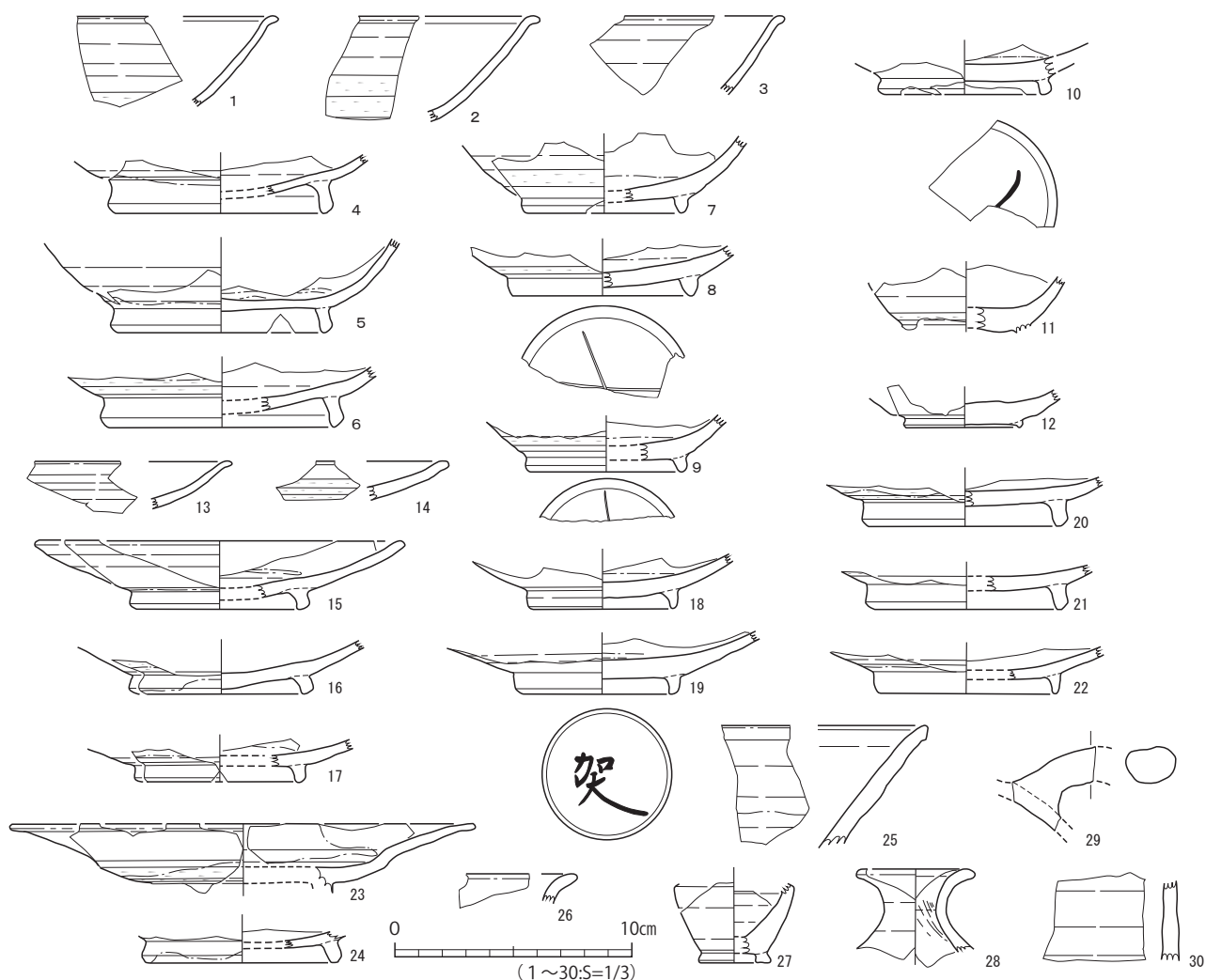
第36図4～6・16・24は東濃窯産の可能性があり、10・18・21は東海西部産、17は尾張産で、高台がⅡD1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。10は底部に墨書「□」、20は墨書「契」がみられる。7・8は底部にヘラ書き「一」または「×」がみられ、尾張産であり、7は高台がⅡD2b、8はⅡE1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。12は東海東部産の可能性があり、高台がⅡE3bであることから鈴木Ⅳ期に位置づけられる。18は東海西部産、22は尾張産で、高台がⅡD3であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。23は東濃窯産の可能性があり、内外面ハケ塗りであることから尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる可能性がある。

【第63次】

出土破片数は、灰釉陶器3点である（第9表）。図示したものには灰釉陶器広口瓶（第37図1）があり、東濃窯産で尾野Ⅶ期に位置づけられる。

【第64次】

出土破片数は、緑釉陶器1点、灰釉陶器8点、白磁1点の合計10点で、器種と産地は第9表の通りである。図示したものには緑釉陶器埴または皿（第37図2）、灰釉陶器瓶（3）、白磁碗（4）がある。2は猿投窯産で、高台がⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。3は高台が三角形を呈し、底部回転糸切り無調整である。東濃窯産で、高台が三角形を呈することから尾野Ⅷ期に位置づけられる。4は畳付露胎の蛇の目高台で、白磁Ⅰ類である。

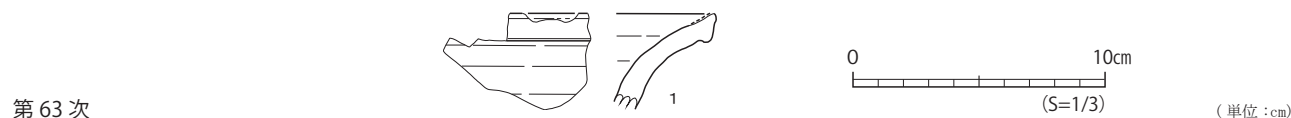


第60次

(単位:cm)

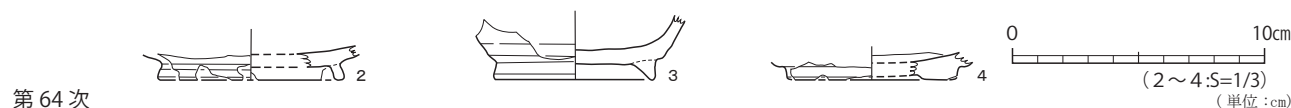
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		60-43		B14934
2	2B層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃?		体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		60-119		B14933
3	D167	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張?		内外面ハケ塗り		60-205		B14933
4	3層	灰釉 埴	底部1/3	—	(8.8)	—	東濃?	II D1b	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-63	21-6	B14933
5	2・3層	灰釉 埴	底部1/1	—	8.6	—	東濃?	II D1b	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-87	21-7	B14933
6	SK2113 1層	灰釉 埴	底部1/4	—	(9.6)	—	東濃?	II D1b	体~底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-33	22-6	B14933
7	SK2113 1層	灰釉 埴	底部1/5	—	(6.2)	—	尾張	II D2a	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内面摩耗、ハケ塗り	尾野VI古~中	60-18		B14933
8	3層	灰釉 埴	底部1/4	—	(7.6)	—	尾張	II E1	底部:ナデ、ヘラ書き「×」 内面施釉	尾野VI中	60-99	22-5	B14933
9	SD2116	灰釉 埴	底部1/4	—	(6.6)	—	尾張	II E1	底部:ナデ、ヘラ書き「一」 体部:回転ヘラケズリ 内面施釉、摩耗	尾野VI中	60-236		B14933
10	D58	灰釉 埴	底部1/5	—	(6.6)	—	東海西部	II D1b	底部:ナデ、墨書「□」 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-8	22-8	B14933
11	1層	灰釉 埴	体部1/4	—	—	—	尾張		底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内面漬け掛け		60-73		B14933
12	SD2116	灰釉 埴	底部3/4	—	(4.8)	—	東海東部?	II E3b	底部:回転糸切無調整 内面施釉	鈴木IV	60-127・148	22-9	B14933
13	2層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面ハケ塗り		60-50		B14933
14	SK2113 1層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り		60-29		B14933
15	SE2101 1層	灰釉 皿	1/6	(15.2)	(6.6)	2.9	東濃	II D1a	底部:ナデ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	60-6	20-12	B14947
16	D59	灰釉 皿	底部2/5	—	(7.0)	—	東濃?	II D1b	体~底部:回転ヘラケズリ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-42	22-2	B14933
17	D7	灰釉 皿	底部1/6	—	(6.6)	—	尾張	II D1b	底部:ナデ 内面ハケ塗り	尾野VI中	60-180		B14933
18	SK2113 1層	灰釉 皿	底部1/2	—	(5.8)	—	東海西部	II D3	底部:ナデ 内面摩耗、ハケ塗り	尾野VI新	60-32	22-1	B14933
19	SE2102 3層	灰釉 皿	底部1/1	—	6.2	—	尾張?	II D1b	底部:回転ヘラケズリ、墨書「契」 内面摩耗 内底面ハケ塗り	尾野VI中	60-3	21-8	B14933
20	P65	灰釉 皿	底部1/4	—	(8.2)	—	東濃?	II D1b	体~底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	60-57		B14933
21	SK2113 1層	灰釉 皿	底部1/3	—	(7.8)	—	東海西部	II D1b	体~底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	60-16	22-4	B14933
22	SD2116	灰釉 皿	底部1/4	—	(7.6)	—	尾張	II D3	底部:ナデ 内底面ハケ塗り	尾野VI新	60-224	22-7	B14933
23	D14	灰釉 段皿	口縁1/5	(19.2)	—	—	東濃?		体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI中~新	60-104		B14933
24	2B層	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(8.2)	—	東濃?	II D1b	体~底部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI新	60-130	22-10	B14933
25	1層	灰釉 鉢	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面漬け掛け?		60-123	22-11	B14933
26	D19 2層	灰釉 瓶	口縁部片	—	—	—	尾張		内外面施釉		60-191		B14933
27	3層	灰釉 長頸瓶	体~底部1/4	—	(2.8)	—	尾張		小型品		60-141		B14933
28	2層	灰釉 小瓶	口頸部1/5	(4.4)	—	—	尾張		外面施釉		60-136		B14933
29	SK2113 1層	灰釉 瓶	把手部片	—	—	—	尾張		環状把手、断面円形 外面施釉		60-34		B14933
30	2層	青磁 壺	頸部	—	—	—			越州窯系青磁I類		No. 220	22-12	B14314

第36図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器(4)



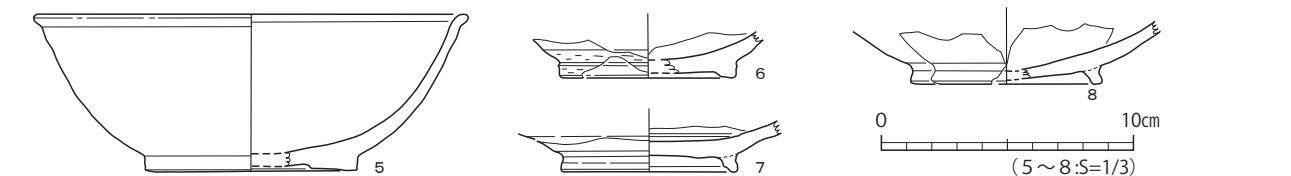
第 63 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃			尾野Ⅶ	63-1	23-7	B14934



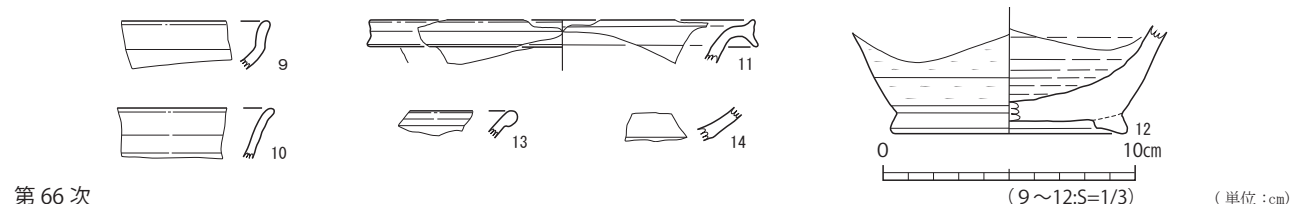
第 64 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
2	2層	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(7.2)	—	猿投	Ⅱ C2a		尾野Ⅵ中	64-8		B14934
3	1層	灰釉 瓶	底部1/2	—	(6.2)	—	東濃		高台: 三角形 底部: 回転糸切り無調整 内面摩耗	尾野Ⅷ	64-1	23-1	B14934
4	1層	白磁 碗	底部1/4	—	(6.8)	—			白磁Ⅰ類 高台: 蛇の目高台、疊付露胎		No. 201	23-2	B14314



第 65 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
5	SD2258B 1層	緑釉 埴	2/5	(16.8)	(8.4)	6.2	山城	Ⅰ B2a	硬陶 底面施釉	高橋Ⅱ～Ⅲ	65-2	23-3	B14934
6	1層	緑釉 埴	底部2/5	—	(6.8)	—	山城	Ⅰ C	内外面無釉	高橋Ⅱ新～Ⅲ	65-3	23-4	B14934
7	SD2257	緑釉 皿	底部1/1	—	(6.8)	—	近江	Ⅱ D1	硬陶 底部: 回転糸切り無調整 内面圏線、摩耗 底面部分施釉	高橋Ⅱ古	65-5	23-5	B14934
8	1層	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(6.8)	—	尾張	Ⅱ C2a	内面摩耗	尾野Ⅵ中	65-4	23-6	B14934



第 66 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
9	SD2312	緑釉 稜皿	口縁部片	—	—	—					66-11		所在不明
10	SE2314 1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面漬け掛け		66-7	23-9	B14934
11	SK2321 3層	灰釉 長頸瓶	口縁部片	—	—	—	尾張?			尾野Ⅵ中～新	66-10		B14934
12	SI2311 確認	灰釉 長頸瓶	底部1/3	—	(9.0)	—	東海西部		底部: 回転糸切り一回転ヘラケズリ 体部: 回転ヘラケズリ	尾野Ⅵ	66-2	23-8	B14934
13	SK2325	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁Ⅰ類 玉縁口縁		No. 122		B14314
14	SK2321 3・4層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁Ⅰ類		No. 121		B14314

第 37 図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器 (5)

【第 65 次】

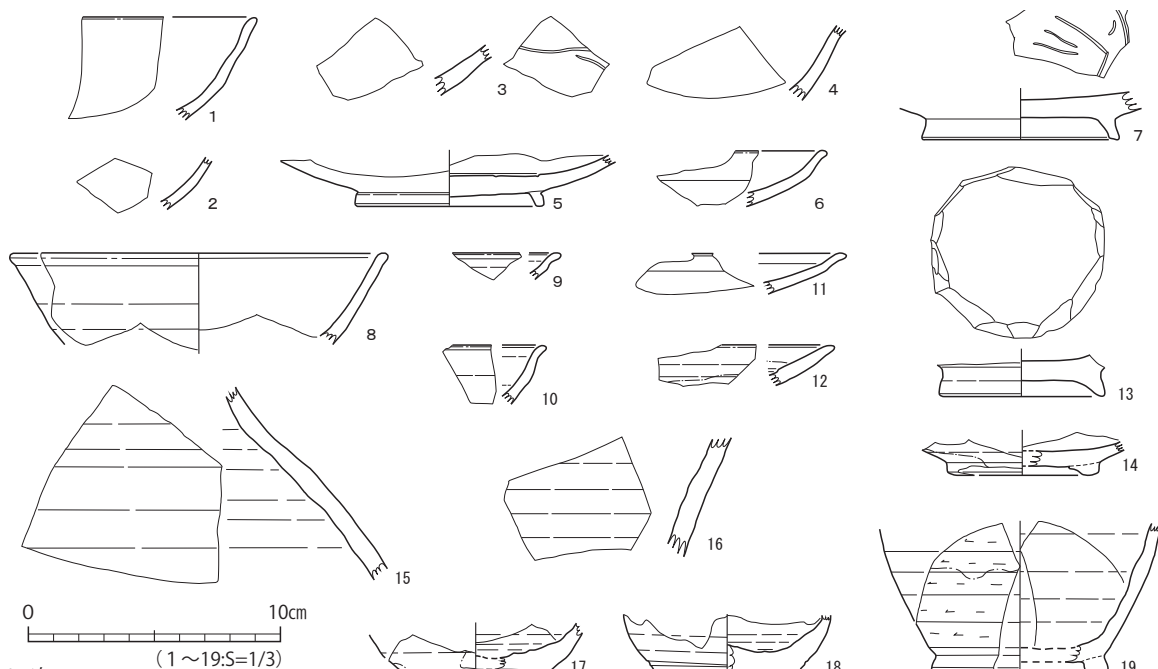
出土破片数は、緑釉陶器 4 点である (第 9 表)。図示したのは埴 (第 37 図 5・6)・皿 (7)・埴または皿 (8) である。5 は山城産で、高台がⅠ B2a であることから高橋Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる。6 は無釉で、山城産であり、高台がⅠ C であることから高橋Ⅱ期新～Ⅲ期に位置づけられる。7 は近江産で、底部回転糸切り無調整であり、高台がⅡ D1 であることから高橋Ⅱ期古に位置づけられる。8 は猿投産で、高台がⅡ C2a であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。

【第 66 次】

出土破片数は、灰釉陶器 10 点、白磁 4 点の合計 14 点で、器種と産地は第 9 表の通りである。図示したのものには緑釉陶器稜皿 (第 37 図 9)、灰釉陶器埴 (10)・長頸瓶 (11・12)、白磁碗 (13・14) がある。11 は尾張産の可能性があり、口頸部が大きく外反することから、尾野Ⅵ期中～新に位置づけられる。13 は口縁部が玉縁状を呈し、14 は体部が屈曲しており、いずれも白磁Ⅰ類である。

【第 67 次】

出土破片数は、緑釉陶器 14 点、灰釉陶器 66 点の合計 80 点である。器種構成と産地については第 10 表の通りであるが、緑釉陶器は埴・皿類のみで、灰釉陶器の器種は壺または瓶が 65.1% (43/66 点) で主体となり、埴・皿類は 28.8% (19/66 点) と少ない。産地は可能性があるものを含め、尾張産 36.4% (24/66 点)、東濃産 25.7% (17/66 点)、東海西部産 36.4% (24/66 点) と拮抗している。



第 67 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投				67-50	23-11	B14935
2	SD2403 1層	緑釉 埴	体部片	—	—	—	東海西部		硬陶		67-54		B14935
3	1層	緑釉 埴	体部片	—	—	—	猿投		内面陰刻花文		67-52		B14935
4	SI2371 1層	緑釉 埴	体部片	—	—	—	猿投				67-59		B14935
5	SK2392	緑釉 皿	底部1/1	—	7.4	—	東海西部	II C2a	内面圈線 硬陶	尾野VI新	67-55	23-10	B14935
6	SI2371 1層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投				67-51		B14935
7	1層	緑釉 埴or皿	底部1/5	—	(7.8)	—	猿投	II C2b	内面陰刻花文	尾野VI中	67-56	23-12	B14935
8	SK2389・SI2375B	灰釉 埴	口縁1/5	(14.6)	—	—	尾張		内面施釉	尾野VI中	67-40	23-14	B14935
9	2層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃?		内面施釉		67-34		B14935
10	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—					67-64		所在不明
11	1層	灰釉 皿	口縁部片	—	—	—	東海		口縁部は大きく外反 内面施釉	尾野V新〜VI古	67-47	23-13	B14935
12	2層	灰釉 段皿	口縁部片	—	—	—	東濃		内面の段は鈍く形骸化 内外面漬け掛け	尾野VII新〜VIII中	67-45	24-3	B14935
13	1層	灰釉 埴or皿	底部1/1	—	6.4	—	東濃	II E3a	底部:回転糸切り→ナデ 周縁打ち欠き	尾野VII新〜VIII古	67-38	24-2	B14935
14	SA2364 掘方	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(6.0)	—	東海西部	II D4	底部:回転糸切り無調整 内面施釉	尾野VII新	67-26	24-1	B14935
15	SE2381 4層	灰釉 瓶	体部片	—	—	—	東海西部		外面施釉		67-23	24-5	B14935
16	SD2403 1層	灰釉 広口瓶	頸部片	—	—	—	東濃		外面ハケ塗り		67-42		B14935
17	1層	灰釉 小瓶	底部1/4	—	(5.4)	—	尾張		底部:回転糸切り無調整		67-46		B14935
18	1層	灰釉 小瓶	底部1/2	—	(5.6)	—	尾張		底部:回転糸切り無調整		67-5	24-4	B14935
19	K147	灰釉 長頸瓶	底部1/6	—	(6.8)	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VI	67-28		B14935



第 53 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
20	2層	青磁 壺or水注	体部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 69	24-6	B14314

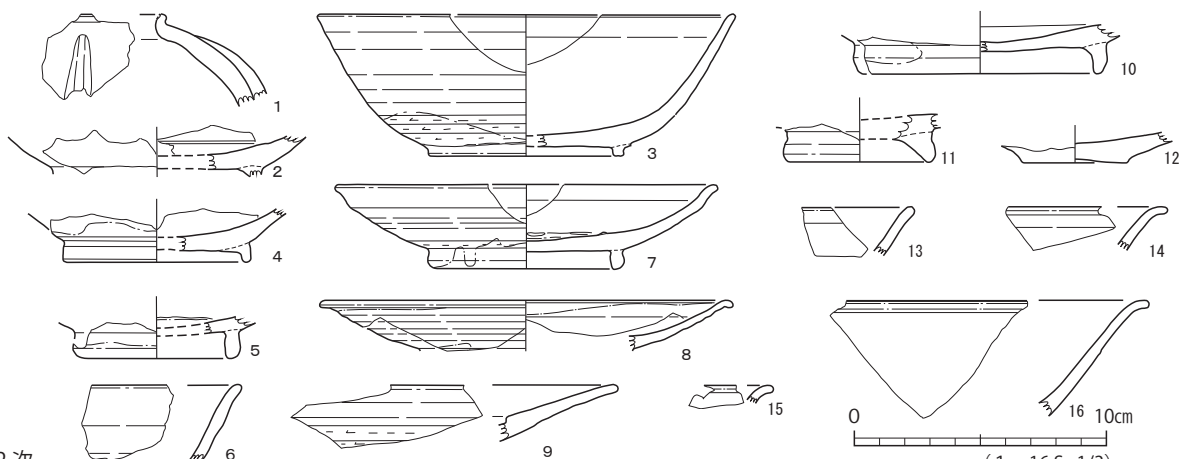


第 54 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
21	7B層	緑釉 深埴	底部1/5	—	(7.2)	—	東海西部	II F3a	内外面目跡あり	尾野VI新〜VII古	54-1	24-7	B14932

第 38 図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器 (6)

図示したものには緑釉陶器埴 (第 38 図 1~4)・皿 (5・6)・埴または皿 (7)、灰釉陶器埴 (8~10)・皿 (11)・段皿 (12)・埴または皿 (13・14)・長頸瓶 (19)・広口瓶 (16)・小瓶 (17・18)・瓶 (15) がある。5 は東海西部産で、高台が II C2a であることから尾野 VI 期新に位置づけられる。7 は内面に陰刻が施されており、猿投窯産で、高台が II C2b であることから尾野 VI 期中に位置づけられる。11 は東海産で、口縁部が大きく外反することから尾野 V 期新〜VI 期古に位置づけられる。12 は東濃窯産で、内面の段が鈍く形骸化していることから、尾野 VII 期新〜VIII 期中に位置づけられる。13 は底部周縁は打ち欠か

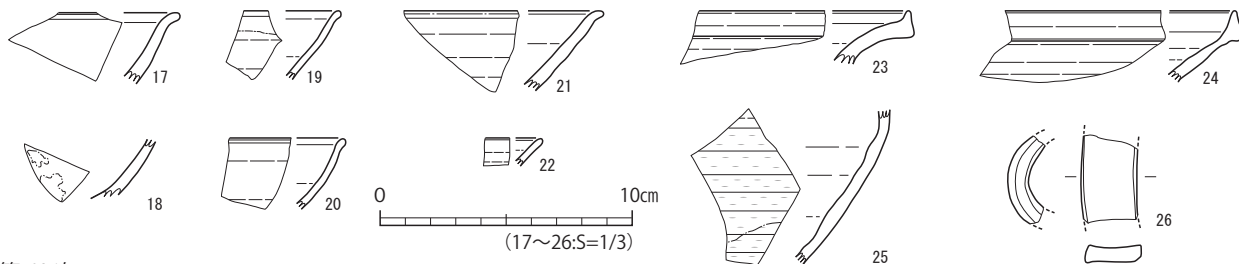


第 62 次

(1~16:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SD2199	緑釉 四足壺	口縁部片	—	—	—	猿投		縦タガのみ	尾野VI古~中	62-45	24-11	B14934
2	1層	緑釉 埴	底部1/6	—	—	—	濃・近				62-46	24-10	B14934
3	SD2193	灰釉 埴	1/4	(16.4)	(7.6)	5.6	尾張	II C1	体~底部:回転ヘラケズリ 内面目跡あり 内外面施釉	尾野VI古	62-40	24-9	B14934
4	1層	灰釉 埴	底部1/4	—	(7.0)	—	東濃	II D4	底部:ナデ 内面摩耗 内外面漬け掛け	尾野VII古	62-27	24-13	B14934
5	1層	灰釉 埴	底部1/5	—	(5.8)	—	東濃?	II D1b	底部:ナデ		62-32		B14934
6	1層	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面施釉		62-1		B14934
7	SB2142 掘方	灰釉 皿	1/3	(14.8)	7.0	3.3	尾張	II D3	体~底部:回転ヘラケズリ 内面摩耗 内外面ハケ塗り	尾野VI新	62-35	24-8	B14934
8	SB2142 掘方	灰釉 皿	口縁1/4	(15.8)	—	—			内外面ハケ塗り		62-36	25-1	B14934
9	SK2174	灰釉 段皿	口縁部片	—	—	—	尾張?		体部:回転ヘラケズリ 内面施釉		62-12	24-14	B14934
10	1層	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(9.4)	—	東海西部	II D1a	底部:ナデ 内底面ハケ塗り	尾野VI中	62-9	24-12	B14934
11	2層	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(5.6)	—	東濃?	II E3a		尾野VII新~VIII古	62-22		B14934
12	1層	灰釉 耳皿	底部1/1	—	4.2	—	尾張	III	底部:回転糸切無調整		62-29	24-15	B14934
13	1層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁 I 類		No. 114		B14314
14	2層	青磁 碗	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 152		B14314
15	D14	青磁 碗	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 113		B14314
16	SK2168	青磁 碗	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 111	25-2	B14314



第 68 次

(17~26:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
17	SB2421 P5掘方	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	猿投				68-21	25-3	B14935
18	SX2449 カクラン	緑釉 埴	体部片	—	—	—	洛北		軟陶		68-20		B14935
19	SB2429 P4切取穴	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面漬け掛け		68-1		B14935
20	SB2412	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東濃		内面漬け掛け		68-14		B14935
21	SD2463	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	尾張?		内外面ハケ塗り		68-12		B14935
22	SK2455	灰釉 埴	口縁部片	—	—	—	東海西部		内外面ハケ塗り		68-16		B14935
23	SX2449 3層	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃?		内外面施釉	尾野VII	68-4		B14935
24	SX2449 1層	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃		内外面施釉	尾野VII	68-5	25-4	B14935
25	SI2446	灰釉 壺or瓶	体部片	—	—	—	東濃		体部:回転ヘラケズリ 外面ハケ塗り		68-10		B14935
26	表土	灰釉 瓶	把手部片	—	—	—	東海西部		外面施釉		68-8		B14935

第 39 図 東門・大畑地区出土施釉陶磁器 (7)

れており、東濃窯産で、高台が II E3a であることから尾野VII期新~VIII期古に位置づけられる。14 は東海西部産で、高台が扁平な II D4 はVII期新の篠岡 100 号窯 (小牧市教委 1987) でみられることから、尾野VII期新に位置づけられる。

②第 53・54・59・62・68 次

【第 53 次】

出土破片数は、青磁壺または水注 1 点 (第 38 図 20) である (第 10 表)。第 53 次調査区は第 54 次調査区と重複しており、両者合わせて発掘調査面積が 1,359㎡であることから、100㎡あたり 0.07 点である。20 は越州窯系青磁 I 類である。

次 数	種類		緑釉陶器											合 計	灰釉陶器							合 計	白 磁	青 磁		
	産地	猿 投	猿 投 ?	東 海 西 部	東 海	洛 北	洛 北 ?	洛 西	山 城	山 城 ?	篠 ?	濃 ・ 近	江		尾 張	尾 張 ?	東 濃	東 濃 ?	東 海 西 部	三 河 ?	東 海 東 部				東 海	
14	器 種	埴 皿												0 0	1 13			3					4 13			
		蓋 瓶												0 0						1			1 1			
		壺or瓶												0 0				3					3 3			
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	3	3	1	1	0	0	22	0	0
23	器 種	埴 皿												0 0	10 1		8	3	1				22 3		2	
		耳皿												0 0	1 1				2				1 3			
		埴or皿												0 0	1 1	2							3 1			
		鉢												0 0				1					1 1			
		蓋												0 0	1 1								1 1			
		長頸瓶												0 0	16 1				1				17 5			
		瓶												0 0			1	2	2							
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	2	9	6	6	0	0	0	53	0	2	
56	器 種	埴 皿	1	1			1							3 0	2	2	6	6				16 11				
		皿												0 0	1	2		2	4		2		3 12			
		段皿												0 0			2	1								
		埴or皿												0 0	2		6	4					1 12			
		双耳壺?												0 0			1						1 1			
		瓶												0 0			1									
58	器 種	合計	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	5	2	6	14	15	0	2	0	44	0	0	
		埴			1								1	2	8	4	8	3	4			1	28		1	
		深埴												0		1	1						2			
		皿												0	4			1	5				10		1	
		段皿												0		1		1					2			
		耳皿												0	1				1				2			
		折縁皿												0				4					4			
		埴or皿	1		3									4	2	3	6	7	6				24			
		香炉蓋			1									1									0			
		長頸瓶												0	2	2	3	1	2				10			
		広口瓶												0	1								1			
		手付瓶												0	1								1			
		平瓶												0		1							1			
		瓶												0				5	1	3		1	10			
60	器 種	壺or瓶			1									1	5	11	9	2	6				33			
		合計	1	0	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	24	23	36	16	27	0	0	2	128	0	2
		埴	3		1		1						1	6	44	31	2	14	25		3	1	120	2		
		皿												0	4	6	1	2	2				15			
		段皿												0				2	5				7			
		折縁皿												0			1	1					2			
		埴or皿	3		2		1							6	10	22	4	11	28				75			
		香炉	1											1									0			
		四足短頸壺	1											1									0			
		短頸壺												0				1					1			
		唾壺	1				1							2									0			
		長頸瓶												0	1	1							2			
		広口瓶												0	1								1			
		小瓶												0	1								1			
		手付瓶												0	1								1			
		63	器 種	水注?											0									0		
				壺												0								0		1
瓶	1													1	1							1				
壺or瓶	1													1	8		1	1	3				13			
不明								1						1									0			
64	器 種	合計	11	0	3	0	3	1	0	0	0	1	0	0	19	71	60	9	32	63	0	3	1	239	2	1
		埴												0			1						1			
		埴or皿												0	1								1			
		長頸瓶												0			1						1			
65	器 種	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	3	2	1	0	0	0	3	0	0
		埴												0					2				2			
		皿												0		1	1						2			
		埴or皿	1											1		1							1	1		
		広口瓶												0			1						1			
66	器 種	小瓶											0			1							1			
		瓶												0					1				1			
		合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	3	2	1	0	0	0	8	1	0	
		合計	2	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第9表 東門・大畑地区出土施釉陶磁器の器種と産地（1）

次 数	種類		緑釉陶器											合 計	灰釉陶器							合 計	白 磁	青 磁		
	産地		猿 投	猿 投？	東 海 西 部	東 海	洛 北	洛 北？	洛 西	山 城	山 城？	篠 濃・ 近	江		尾 張	尾 張？	東 濃	東 濃？	東 海 西 部	三 河？	東 海 東 部				東 海	
67	器 種	埴	2		3									5	5		2	2	2			1	12			
		稜埴	1											1									0			
		皿	5		2									7		1		1	1				3			
		段皿												0			1						1			
		埴or皿	1											1		1	1		1				3			
		鉢												0				1	1				2			
		広口瓶												0			1	1					2			
		小瓶												0	1		3	1					5			
		瓶												0	5	5		1	5				16			
		壺or瓶												0	4	2		2	12				20			
不明												0					2				2					
53	器種	壺or水注	9	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	14	15	9	8	9	24	0	0	1	66	0	0	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
54	器種	深埴			1									1									0			
		合計	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
59	器種	埴												0								1	1			
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	
62	器 種	埴	1	1	2							1		1	6	8	3	2	4	5			22	1	2	
		深埴?												0				1					1			
		埴B												0			1						1			
		皿												0	7		3		2		2		14		1	
		耳皿												0	1								1			
		段皿												0		1							1			
		縁折皿												0									0			
		埴or皿												0	1								1			
		四足短頸壺	1											1									0			
		瓶												0	3	1			1				5			
		壺or瓶												0	2	1	1						4			
		不明					1							1									0			
		68	器 種	合計	2	1	2	0	1	0	0	0	1	0	1	0	8	22	6	7	5	8	0	2	0	50
埴	1			2							1				4	1	1	1						3		
皿															0			1		2				3		
広口瓶														0				1	1					2		
壺or瓶														0				2						2		
瓶														0	2	3	1		3				1	10		
合計			1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	3	4	6	1	5	0	0	1	20	0	0	
総計			28	4	18	0	5	1	0	1	2	2	2	1	64	186	110	90	89	155	1	7	6	644	8	9

第 10 表 東門・大畑地区出土施釉陶磁器の器種と産地（2）

【第 54 次】

出土破片数は、緑釉陶器深埴 1 点（第 38 図 21）である（第 10 表）。発掘調査面積は第 53 次調査と合わせて 1,359㎡であることから、100㎡あたり 0.07 点である。21 は内外面に目跡が確認でき、東海西部産で、高台がⅡ F3a であることから尾野Ⅵ期新～Ⅶ期古に位置づけられる。

【第 59 次】

出土破片数は、灰釉陶器埴または皿 1 点である（第 10 表）。発掘調査面積が 365㎡であることから、100㎡あたり 0.27 点である。細片のため図化できるものはない。

【第 62 次】

出土破片数は、緑釉陶器 8 点、灰釉陶器 50 点、白磁 1 点、青磁 3 点の合計 62 点である。器種構成と産地については第 10 表の通りであるが、灰釉陶器の器種は埴・皿類が 82%（41/50 点）と卓越し、壺または瓶は 18%（9/50 点）と少ない。産地は、可能性のあるものを含めて尾張産が 56%（28/50 点）で主体となり、東濃窯産は 24%（12/50 点）と少ない。発掘調査面積は 1,163㎡であることから、100㎡あたり 5.34 点（緑釉 0.69 点／灰釉 4.3 点／白磁 0.09 点／青磁 0.26 点）である。

図示したものには緑釉陶器埴（第 39 図 2）・四足短頸壺（1）、灰釉陶器埴（3～6）・皿（7・8）・段皿（9）・耳皿（12）・埴または皿（10・11）、白磁碗（13）、青磁碗（14～16）がある。1 は猿投窯産で、縦タガが口縁部近くまで付され、残存状況から横タガは付されなかった可能性が高く、尾野Ⅵ期古～中に位置づけられる。2 は東濃窯また近江産で、高台の残存状況からⅡ C2 の可能性があり、内面の底部と体部の境には段がある。3 は尾張産で、高台がⅡ C1 であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。4 は東濃窯産で、内外面漬け掛けであり、高台がⅡ D4 であることから尾野Ⅶ期古に位置づけられる。5 は東濃窯産の可能性があり、10 は東海西部産で、高台がⅡ D1b であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。7 は尾張産で、高台がⅡ D3 であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。11 は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡ E3a

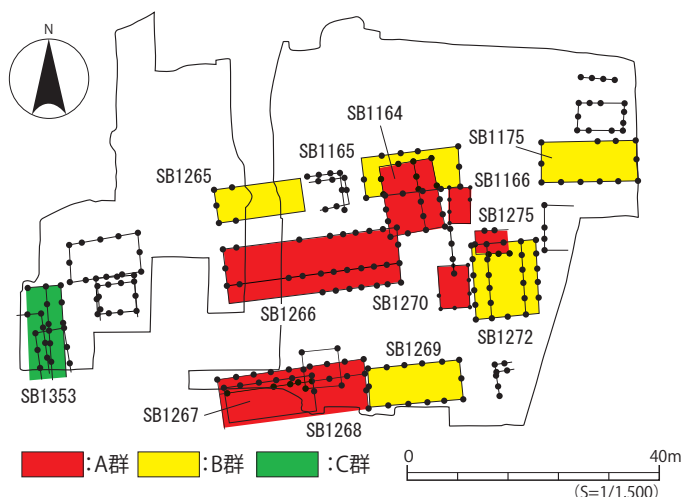
であることから尾野Ⅶ期新～Ⅷ期古に位置づけられる。13は口縁端部を丸くおさめ、白磁Ⅰ類である。14～16はいずれも口縁部が大きく外反しており、越州窯系青磁Ⅰ類である。

【第68次】

出土破片数は、緑釉陶器4点、灰釉陶器20点の合計24点で、器種と産地は第10表の通りである。発掘調査面積が2,527㎡であることから、100㎡あたり0.91点（緑釉0.16点／灰釉0.75点）である。

図示したものは緑釉陶器坑（第39図17・18）、灰釉陶器坑（19～22）・広口瓶（23・

24）・瓶（26）・壺または瓶（25）がある。23は東海西部産、24は東濃窯産で、尾野Ⅶ期に位置づけられる。



第40図 作貫地区建物配置模式図

8. 作貫地区

(1) 地区の概要

作貫地区は第36・39・42次調査（『年報1980～1982』）が行われており、3時期の遺構変遷が確認されている（第40図）。第Ⅱ期のA群では長大な片廂付の東西棟建物が向かい合うように配置され、第Ⅲ・Ⅳ期のB群は西方の政庁へ向けて「コ」字形に配置された建物群となり、2度の建て替えがある。第Ⅳ期のC群は南北棟の片廂付建物のみとなる。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第36次】

出土破片数は、緑釉陶器1点、灰釉陶器20点の合計21点で、器種と産地は第11表の通りである。発掘調査面積が1,547㎡であることから、100㎡あたり1.35点（緑釉0.06点／灰釉1.29点）である。

図示したものは緑釉陶器坑（第41図1）、灰釉陶器坑（2～4）・深坑（5）・広口瓶（7）・壺または瓶（6）がある。1は近江産で、高台がⅡD2であることから高橋Ⅱ期新に位置づけられる。2は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。3は東海東部産で、高台がⅡD1bであることから鈴木Ⅱ期に位置づけられる。4は東海東部産で、底部に回転糸切り痕が残り、高台がⅡE3aであることから鈴木Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。5は東濃窯産で、高台がⅡF2であることから尾野Ⅶ期古～中に位置づけられる。6は東海西部産で尾野Ⅵ期、7は東濃窯産で尾野Ⅶ期に位置づけられる。

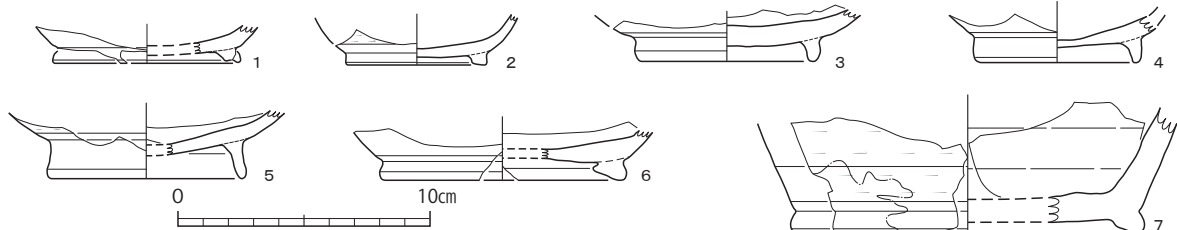
【第39次】

出土破片数は、緑釉陶器2点、灰釉陶器3点の合計5点である（第11表）。発掘調査面積が1,972㎡であることから、100㎡あたり0.26点（緑釉0.1点／灰釉0.16点）である。

図示したものは緑釉陶器坑（第41図9）・坑または皿（8）、灰釉陶器段皿（10）がある。8は東海西部産で、高台がⅡC2cであることから尾野Ⅵ期新からⅦ期古に位置づけられる。9は近江産で、底部回転糸切り無調整であり、高台がⅡD1とⅡD2の中間的

次 数	種類 産地	緑釉陶器			灰釉陶器						
		東 海 西 部	近 江	合 計	尾 張	東 濃	東 濃 ?	東 海 西 部	東 海 東 部 ?	東 海	合 計
36	器種										
	坑		1	1	2	1			2		5
	深坑			0		1					1
	段皿			0			1				1
	広口瓶			0	1	2					3
	瓶			0							1
39	器種										
	壺or瓶			0	1	4	1	3			9
	合計	0	1	1	4	8	2	4	2	0	20
	器種										
	坑	1	1	2							0
	段皿			0		2					2
42	器種										
	瓶			0			1				1
	壺or瓶			0		1					1
	合計	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3
	器種										
	坑			0				1			1
総計		1	2	3	4	11	3	5	2	1	26

第11表 作貫地区出土施釉陶磁器の器種と産地

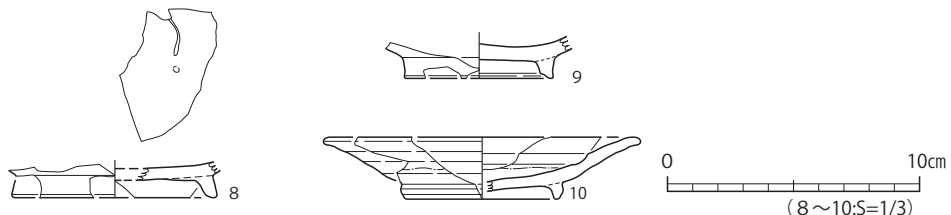


第 36 次

(1~7:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	表土	緑釉 埴	底部1/6	—	(7.2)	—	近江	II D2	底面無施釉	高橋 II 新	36-26	26-1	B14940
2	P1	灰釉 埴	底部1/2	—	5.4	—	尾張	II C1	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野 VI 古	36-5	26-3	B14940
3	1層	灰釉 埴	底部1/1	—	6.8	—	東海東部	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	鈴木 II	36-3	26-2	B14940
4	SD1185	灰釉 埴	底部1/2	—	6.2	—	東海東部	II F1	底部:回転糸切り→ナデ	鈴木 III~IV	36-6	26-5	B14940
5	1層	灰釉 深埴	底部1/4	—	(7.6)	—	東濃	II F2	体~底部:回転ヘラケズリ	尾野 VII 古~中	36-2	26-4	B14940
6	SX1186 積土	灰釉 壺or瓶	底部1/5	—	(9.4)	—	東海西部		底部:回転ヘラケズリ	尾野 VI	36-18	26-6	B14940
7	1層	灰釉 広口瓶	底部1/6	—	(14.0)	—	東濃		体~底部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野 VII	36-19		B14940



第 39 次

(8~10:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
8	1層	緑釉 埴or皿	底部1/6	—	(8.0)	—	東海西部	II C2c	内面陰刻、目跡あり	尾野 VI 新~VII 古	39-3	26-9	B14940
9	1層	緑釉 埴	底部1/4	—	(5.8)	—	近江	II D1~2	底部:回転糸切り→ナデ	高橋 II	39-4	26-8	B14940
10	SD1296 1層	灰釉 段皿	1/6	(12.0)	(5.8)	2.5	東濃	II D3b	底部:ナデ 内面摩耗 内外面漬け掛け	尾野 VIII 古	39-1	26-7	B14940

第 41 図 作貫区出土施釉陶磁器

な形態であることから高橋 II 期に位置づけられる。10 は東濃窯産で、復元口径 12.0cm と小さく、内面の段は鈍く形骸化しており、高台が II D4 であることから尾野 VIII 期古に位置づけられる。

【第 42 次】

出土したのは灰釉陶器埴・壺または瓶 3 点のみである (第 11 表)。発掘調査面積が 497㎡であることから、100㎡あたり 0.6 点である。細片のため図化できるものはない。

9. 南門地区

(1) 地区の概要

南門地区は南門とそれに取り付く築地塀部分を第 7・48・72・73・79・87a 次 (『外郭跡 I』)、そこから南側の南北大路を第 80・91 次 (『年報 2008・2017』) で調査している。その結果、南門は第 II 期に南辺の移動に伴って現在の丘陵上に礎石式の八脚門としてつくられ、伊治公告麻呂の乱で焼失するが、第 III 期に再建され、補修されながら第 IV 期まで維持されることが明らかとなった。また南北大路は大きく 2 時期の変遷が確認され、路幅は古い時期が約 18 m であるが、新しい時期には約 23 m に拡幅されることが分かっている。

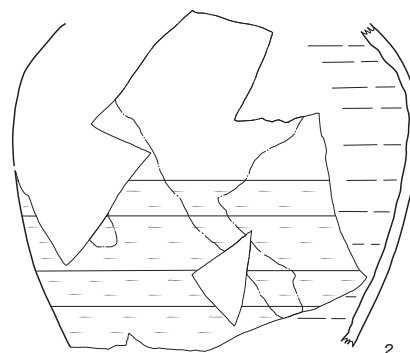
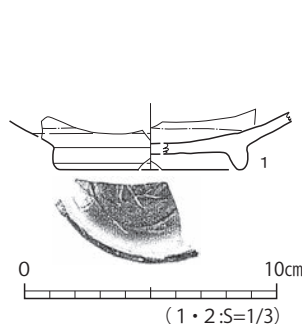
(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【南門】

出土したのは灰釉陶器 6 点のみである (第 12 表)。調査面積が 7,150㎡であることから、100㎡あたり 0.08 点である。図示したものには灰釉陶器埴または皿 (第 42 図 1)・長頸瓶 (2) がある。1 は東濃窯産で、高台が II D3 であることから尾野 VI 期新に位置づけられる。

【第 91 次】

出土したのは灰釉陶器壺または瓶 2 点のみである (第 12 表)。発掘調査面積が 720㎡であることから、100㎡あたり 0.28 点である。細片のため図化できるものはない。



(単位:cm)

No.	次	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	整理番号	写真図版	箱番号
1	48	SK1550 2層	灰釉 壺or皿	底部1/4	—	(7.5)	—	東濃	II D3	底部:ナデ、爪形痕 内外面施釉	48-1		B14930
2	73	SF202c以降 崩壊土	灰釉 長頸瓶	体部1/6	—	—	—	尾張		体部:回転ヘラケズリ 外面施釉	73-1		B14930

第 42 図 南門地区出土施釉陶磁器



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	灰釉 深埵	底部1/5	—	(8.7)	—	東海西部	II C2c	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内外面漬け掛け	尾野Ⅶ古へ中	34-1	27-2	B14930



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
2	表土	灰釉 皿	底部片	—	—	—	尾張	II C1	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野Ⅵ古	41-2		B14930

第 43 図 南辺東地区出土施釉陶磁器

10. 南辺東地区

(1) 地区の概要

南辺東地区は第 11・24・34・40・41・88 次調査（『年報 1971・1974・1979・1981・1982・2015』）が行われている。その結果、南辺は湿地部分に大規模な基礎地業を行い築地塀が築かれ、第Ⅱ期に構築されてから補修を加えながら第Ⅳ期まで維持されており、約 80 ｍ間隔で櫓が設けられていたことも明らかとなった。また第 34 次調査では、多賀城内から城外へ排水するための木樋暗渠や「大垣」と書かれた墨書土器が出土している。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第 34 次】

出土破片数は、灰釉陶器深埵 1 点（第 43 図 1）である（第 12 表）。発掘調査面積は 1,368㎡で、100㎡あたり 0.07 点である。1 は東濃窯産で、高台がⅡ C2c であることから尾野Ⅶ期古～中に位置づけられる。

【第 41 次】

出土破片数は、灰釉陶器皿（第 43 図 2）・長頸瓶の 2 点である（第 12 表）。発掘調査面積が 921㎡であることから、100㎡あたり 0.22 点である。2 は尾張産で、高台がⅡ C1 であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。

11. 南辺西地区

(1) 地区の概要

南辺西地区は第 8・20・35・37 次調査、2001 年に現状変更に伴う調査（『年報 1970・1973・1979・1980・2001』）が行われており、南辺東地区と同様に第Ⅱ期以降に築地塀が築かれ、改修されながら第Ⅳ期まで存続することが明らかとなった。また第 37 次調査では、8 世紀代に小溝群、9 世紀前半に掘立柱建物や溝、10～11 世紀前半に運河や道路、井戸という遺構の変遷が確認されている（第 44 図）。特に南北

に延びる運河とされたSD1221は大きく2時期の変遷があり、新しい時期のSD1221Bは断面箱堀形で上幅最大5.0m以上、下幅約2.5mと大規模なもので、約45mにわたって検出されている。SD1221Bは4層、SD1221Aは3層に大別され、A-2層は灰白色火山灰の一次堆積層である。SD1221A・Bともに施釉陶磁器を含めた多量の土器が出土しており、特にB-4層を中心に多数の墨書土器や呪符木簡が出土している。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第37次】

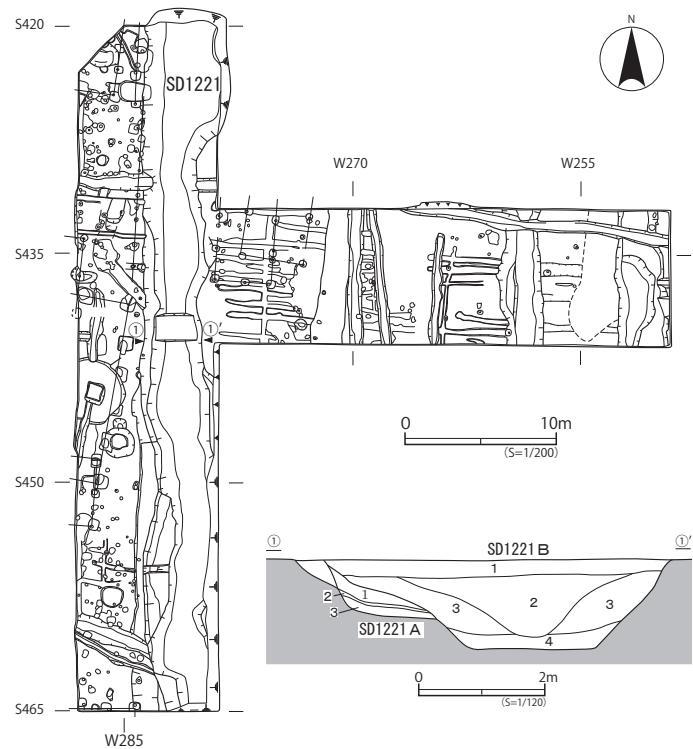
出土破片数は、緑釉陶器32点、灰釉陶器120点、白磁9点、青磁6点の合計167点で、器種構成と産地については第12表の通りである。緑釉陶器の器種は壺・皿類だけでなく、短頸壺や水注がみられ、産地は尾張産と東海西部産がそれぞれ40.6% (13/32点) を占める。灰釉陶器の器種は壺・皿類が91.6% (110/120点) と卓越し、産地は可能性のあるものを含め東濃窯産が54.2% (65/120点) で、尾張産は16.7% (20/120点) と少ない。発掘調査面積が695㎡であることから、100㎡あたり24.02点 (緑釉4.6点/灰釉17.27点/白磁1.29点/青磁0.86点) である。

出土の傾向として、167点中149点 (緑釉28点/灰釉108点/白磁5点/青磁8点) がSD1221から出土しており、なかでもB-4層で68点 (緑釉12点/灰釉56点) と最も多く確認できる。

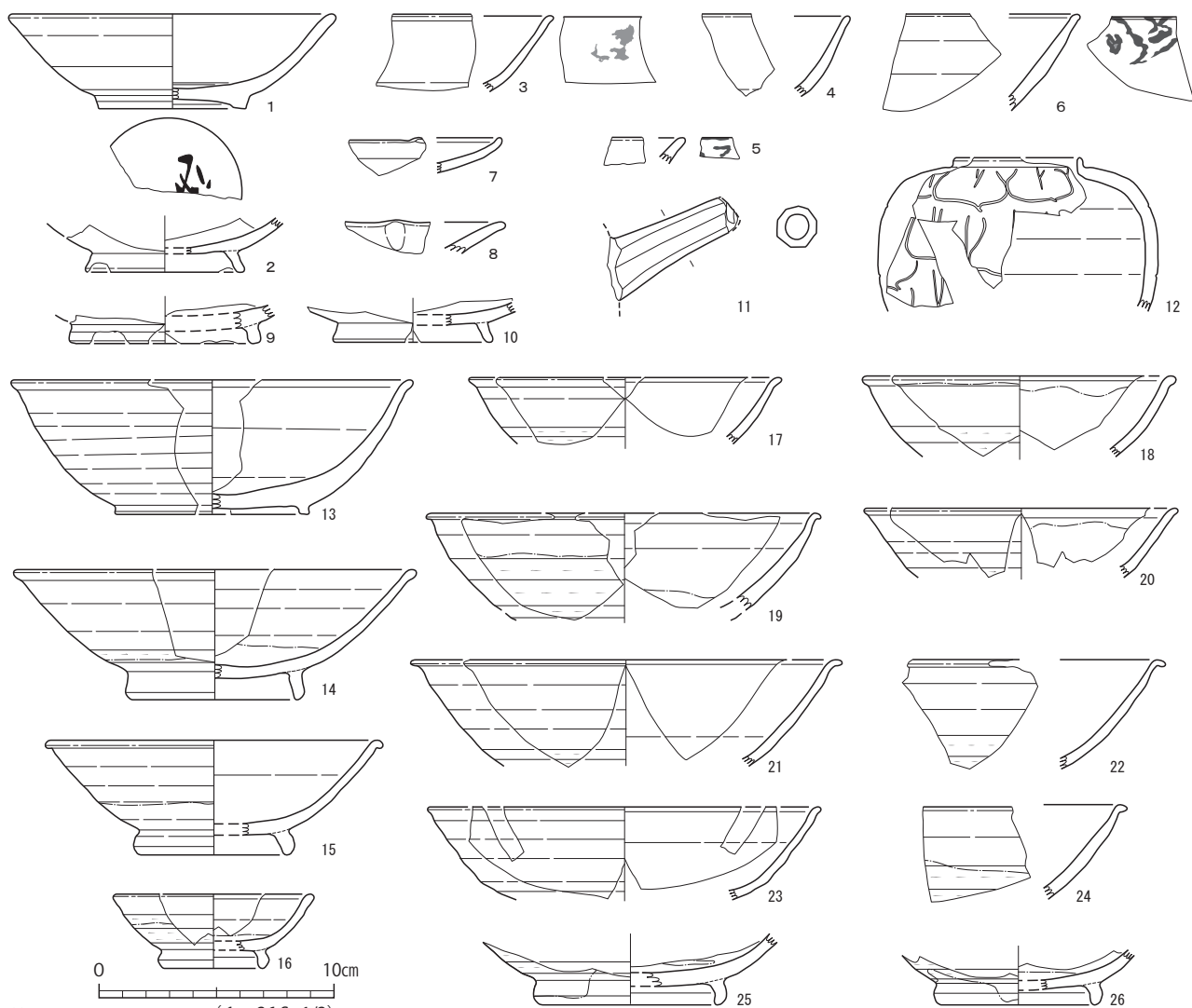
図示したものには緑釉陶器壺 (第45図1～6)・皿 (7・8)・壺または皿 (9・10)・水注 (11)・短頸壺 (12)、灰釉陶器壺 (第45図13～26、第46図1・2)・皿 (3～9)・壺または皿 (10～12)・長頸瓶 (13)、白磁碗 (14～16)・水注 (17)・壺または水注 (18・19)、青磁皿 (20)・碗または皿 (21～23) がある。

第45図1は山城産で、高台がⅠCであり、底面無釉であることから高橋Ⅳ期に位置づけられる。底面に墨書「□」がみられ、被熱している。2・10は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡF3bであることから尾野Ⅶ期中に位置づけられ、2は被熱している。3は東海西部産で、内面に油煙が付着している。5・6は猿投窯産で、内面に緑釉緑彩が施され、被熱している。9は猿投窯産で、高台がⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。11は東海西部産で、尾野Ⅶ期に位置づけられる。側面が面取りされて九角形となり、被熱している。12は外面に陰刻花文が施され、現状で下垂尖頭条芯花文が三段配置されており、全体に被熱している。猿投窯産の可能性があり、尾野Ⅵ期中に位置づけられる。13は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。14・16・25・26は東濃窯産または東海西部産で、高台がⅡD1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられ、14は内面が磨耗して朱墨の痕跡が残ることから、転用硯とみられる。15は東濃窯産で、高台がⅡD2aであることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。

第46図3は尾張産、8は東海産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられ、3は底部に墨書「□」、8は「七団」がみられる。4・9は東濃窯産の可能性があり、11は産地不明、12は東濃窯産で、高台がⅡD1bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。10は尾張産の可能性があり、高台がⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。14～19はいずれも白磁Ⅰ類で、14・15は口縁部が玉縁状を呈す。20～23はいずれも越州窯系青磁Ⅰ類であり、23は体部に輪花を有する。



第44図 第37次調査区遺構図

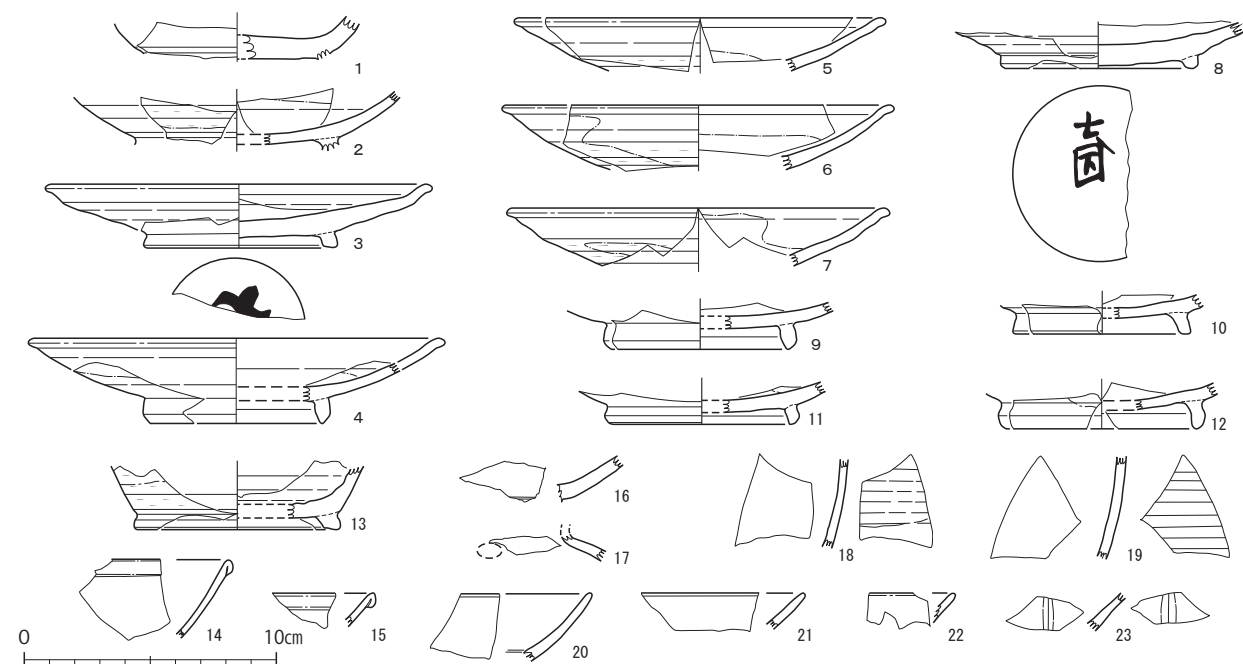


第 37 次 (1~26:5=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SD1221A 1層	緑釉 碗	2/3	(13.6)	(6.2)	4.0	山城	I C	底部墨書「口」 底面無釉 被熱	高橋IV	37-124	28-1	B14949
2	SD1221B 4層	緑釉 碗	底部1/5	—	(6.6)	—	東濃?	II F3b	硬陶 被熱	尾野VII中	37-135	28-11	B14944
3	SD1221B 3層	緑釉 碗	口縁部片	—	—	—	東海西部	—	硬陶 油煙付着	—	37-139	28-8	B14944
4	表土	緑釉 碗	口縁部片	—	—	—	東海西部	—	硬陶	—	37-146	—	B14944
5	SD1221A 2層	緑釉 碗	口縁部片	—	—	—	猿投	—	内面緑彩 被熱	—	37-121	—	B14944
6	SD1221A 2層	緑釉 碗	口縁部片	—	—	—	猿投?	—	内面緑彩 被熱	—	37-122	28-9	B14944
7	SD1221B 4層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投	—	輪花:端部指頭押圧 被熱	—	37-129	28-12	B14944
8	SD1221B 4層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	猿投	—	輪花:端部指頭押圧	—	37-128	—	B14944
9	1層	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(8.1)	—	猿投	II C2a	—	尾野VI中	37-145	—	B14944
10	SD1221B 4層	緑釉 碗or皿	底部1/6	—	(6.6)	—	東濃?	II F3b	硬陶	尾野VII中	37-137	28-10	B14944
11	SD1221B 1層	緑釉 水注	注口部片	—	—	—	東海西部	—	注口面取 硬陶 被熱	尾野VII	37-142	28-13	B14944
12	SD1221B 3層	緑釉 短頸壺	口~体部1/4	(5.2)	—	—	猿投?	—	外面陰刻花文 被熱	尾野VII中	37-138	28-14	B14944
13	SD1221B 4層	灰釉 碗	1/4	(16.8)	(8.0)	5.8	尾張	II C1	底部:ナデ 内面施釉	尾野VI古	37-73	28-2	B14949
14	SD1221A 2層	灰釉 碗	1/3	(16.8)	(7.0)	5.6	東濃	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内面朱墨付着、転用硯 内外面ハケ塗り?	尾野VI中	37-19	28-4	B14949
15	SD1221A 2層	灰釉 碗	1/3	(14.0)	(6.2)	4.9	東濃	II D2a	底部:ナデ 内外面漬け掛け	尾野VI新	37-12	28-3	B14949
16	SD1221A 1層	灰釉 碗	1/4	(8.2)	(4.2)	3.2	東濃	II D1a	体部:回転ヘラケズリ 内外面施釉	尾野VI中	37-26	28-7	B14949
17	SD1221B 4層	灰釉 碗	口縁1/5	(13.0)	—	—	尾張	—	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	—	37-44	—	B14944
18	SD1221A 3層	灰釉 碗	口縁1/6	(13.0)	—	—	東濃	—	体部:回転ヘラケズリ 内面漬け掛け?	—	37-3	—	B14944
19	SD1221B 4層	灰釉 碗	口縁1/6	(16.2)	—	—	尾張	—	内外面漬け掛け	—	37-63	—	B14944
20	SD1221A 3層	灰釉 碗	口縁1/6	(13.2)	—	—	東濃?	—	体部:回転ヘラケズリ 内面ハケ塗り	37-4・21	29-3	—	B14944
21	SD1221	灰釉 碗	口縁1/6	(18.0)	—	—	東海西部	—	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	—	37-91	—	B14944
22	SD1221B 4層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	東海西部	—	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	—	37-33	—	B14944
23	SD1221A 2層	灰釉 碗	口縁1/6	(18.6)	—	—	東海東部	—	内外面施釉	—	37-20	29-2	B14944
24	SD1221B 4層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	東濃	—	体部:回転ヘラケズリ 内面漬け掛け	—	37-38	—	B14944
25	SD1221B 1層	灰釉 碗	底部1/3	—	(7.4)	—	東海西部	II D1a	底部:回転ヘラケズリ 内面摩耗 内底面ハケ塗り	尾野VI中	37-96	28-15	B14944
26	SD1221B 1層	灰釉 碗	底部2/5	—	(6.4)	—	東濃	II D1b	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI中	37-92	28-16	B14944

第 45 図 南辺西地区出土施釉陶磁器 (1)



第 37 次 (1～23:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	4層	灰釉 埴	体部1/5	—	—	—	尾張		底部:ナデ 内面施釉		37-104		B14944
2	SD1221B 4層	灰釉 埴	体部1/6	—	—	—	東濃		底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内外面漬け掛け		37-78		B14944
3	SD1221B 4層	灰釉 皿	1/2 (14.8)	7.5	2.5	尾張	II C1		底部:回転ヘラケズリ、墨書「口」内面施釉	尾野VI古	37-107	28-5	B14944
4	SD1221B 4層	灰釉 皿	1/6 (16.0)	(6.8)	3.4	東濃?	II D1b		内面摩耗 内外面施釉	尾野VI中	37-76	28-6	B14949
5	SD1221B 2層	灰釉 皿	口縁1/6 (14.6)	—	—	東濃			体部:回転ヘラケズリ 内外面漬け掛け		37-87		B14944
6	SD1221B 4層	灰釉 皿	口縁1/6 (15.2)	—	—	東濃			体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		37-47		B14944
7	SD1221B 4層	灰釉 皿	口縁1/3 (14.6)	—	—	東濃			体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り		37-31	29-1	B14944
8	SD1221B 4層	灰釉 皿	底部1/2	—	—	東海	II C1		底部:回転ヘラケズリ、墨書「七団」内面施釉	尾野VI古	37-80	29-4	B14944
9	SD1221A 3層	灰釉 皿	底部2/5	—	(7.0)	—	東濃?	II D1b	底部:ナデ 内面摩耗	尾野VI中	37-27	30-13	B14944
10	1層	灰釉 埴or皿	底部1/6	—	(6.8)	—	尾張?	II C2a	底部:ナデ 内面ハケ塗り	尾野VI中	37-109		B14944
11	SD1221B 4層	灰釉 埴or皿	底部1/4	—	(6.6)	—	不明	II D1b	底部:回転ヘラケズリ 内外面漬け掛け	尾野VI中	37-77		B14944
12	SD1221B 4層	灰釉 埴or皿	底部1/5	—	(7.4)	—	東濃	II D1b	底部:ナデ 内面摩耗	尾野VI中	37-82		B14944
13	1層	灰釉 長頸瓶	底部1/5	—	(8.0)	—	東濃		底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VI	37-113		B14944
14	SD1221B 2層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁 I 類 玉縁口縁		No. 52	29-6	B14314
15	SD1221B 1層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁 I 類 玉縁口縁		No. 51		B14314
16	SD1221B 1層	白磁 碗	口縁部片	—	—	—			白磁 I 類		No. 50		B14314
17	SD1221B 4層	白磁 水注	体部片	—	—	—			白磁 I 類 注口あり		No. 53		B14314
18	SD1221B 4層	白磁 壺or水注	体部片	—	—	—			白磁 I 類		No. 48		B14314
19	SD1221B 4層	白磁 壺or水注	体部片	—	—	—			白磁 I 類		No. 54	29-7	B14314
20	SD1221A 1層	青磁 皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 42		B14314
21	SD1221B 4層	青磁 碗or皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 44	29-5	B14314
22	表土	青磁 碗or皿	口縁部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類		No. 41		B14314
23	SD1221A 1層	青磁 碗or皿	体部片	—	—	—			越州窯系青磁 I 類 輪花		No. 46		B14314

第 46 図 南辺西地区出土施釉陶磁器 (2)

12. 北辺地区

(1) 地区の概要

北辺地区はこれまでに第 17・27・49・51・75 次調査、1994 年に現状変更に伴う調査 (『年報 1972・1975・1985・1986・1994・2003』) が行われている。その結果、外郭北辺の築地塀は第Ⅱ期以前に造営され、第Ⅳ期まで補修しながら維持されたことが明らかとなった。また第 17 次では外郭北西隅の屈曲部分で櫓状建物が確認されているほか、第 75 次では築地基礎の土留めに石垣が用いられていることも分かった。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第 75 次】

出土破片数は、緑釉陶器段皿 1 点 (第 47 図 1) である (第 12 表)。掘調査面積が 378㎡であることから、100㎡あたり 0.26 点である。1 は東海西部産であり、高台がⅡ B2 であることから尾野Ⅶ期古～中に位置づけられる。

【現状変更 1994】

出土破片数は、緑釉陶器埴 1 点 (第 47 図 2) である (第 12 表)。発掘調査面積が 186㎡であることから、100㎡あたり 0.54 点である。

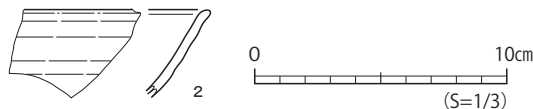
第 75 次



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SX390 崩壊土	緑釉 段皿	底部1/6	—	—	—	東海西部	II B2	内面目跡あり	尾野Ⅶ古～中	75-1	27-1	B14930

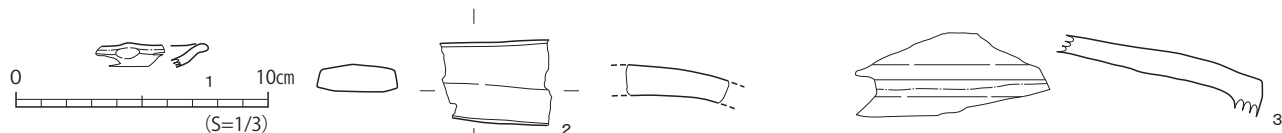
現状変更 1994



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
2	D2	緑釉 埴	口縁部片	—	—	—	洛北		軟陶		現変94-12		B14932

第 47 図 北辺地区出土施釉陶磁器

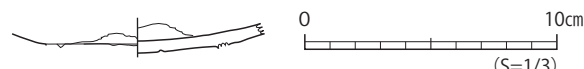


(単位:cm)

第 52 次

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	1層	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	東海西部		輪花:端部指頭押圧 硬陶		52-5		B14930
2	1層	灰釉 平瓶	把手片	—	—	—	尾張		内外面ヘラケズリ、施釉		52-2		B14930
3	SD1709 4層	灰釉 平瓶	体部片	—	—	—	尾張		外面施釉		52-3		B14930

第 82 次



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
4	SB3033 遺構確認	緑釉 皿	底部1/6	—	—	—	猿投		内外面目跡あり		82-1		B14930

第 48 図 東辺地区出土施釉陶磁器

地区	次数	種類		緑釉陶器							灰釉陶器								合計	白磁	青磁		
		産地		猿投	猿投？	東濃？	東海西部	洛北	洛西	近江	合計	尾張	尾張？	東濃	東濃？	東海西部	東海東部？	東海				不明	
南門	南門	器種	埴or皿								0				1				1				
			長頸瓶								0	3							3				
			広口瓶								0			1						1			
			壺or瓶								0	1								1			
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	1	0	0	0	0	6	0	0	
南辺東	91	器種	壺or瓶								0			2					2				
			合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	
			器種	深埴								0			1						1		
			合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	
南辺西	37	器種	皿								0	1							1				
			長頸瓶											1						1			
			合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	
			合計	6		3	8			2	19	9	8	17	21	23	7	3		88	4		
		合計	1	1		2				4	1	1	8	4	1					15		1	
東辺	52	器種	埴								1								0				
			深埴								0			2						2			
			皿	1	1		2				4	1	1	8	4	1				15		1	
			埴or皿				1				1	1		3					1	5		5	
		短頸壺	4							4										0			
北辺	75	器種	水注				1				1								0	1			
			瓶								0			9	1				10				
			壺or瓶	2			1				3									0	4		
			合計	13	1	3	13	0	2	0	32	11	9	39	26	24	7	3	1	120	9	6	
		合計	0	0	0	2	0	0	0	2	3	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	0	
東辺	82	器種	皿	1							1								0				
			平瓶				1				1	1							1				
			瓶								0	2							2				
			合計	0	0	0	2	0	0	0	2	3	0	1	0	0	0	0	0	4	0	0	
		合計	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
北辺	現変94	器種	段皿				1				1								0				
			合計	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
			器種	埴					1			1								0			
			合計	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		合計	14	1	3	16	1	2	0	37	19	9	43	27	24	7	3	1	135	9			

第 12 表 南門・南辺東・南辺西・東辺・北辺地区出土施釉陶磁器の器種と産地

13. 東辺地区

(1) 地区の概要

東辺地区ではこれまでに第 52・55・57 次調査が行われている（『年報 1987～1989』）。東辺の築地堀は中央南寄りで東西に分岐するが、東側は第Ⅱ期以前、西側が第Ⅲ・Ⅳ期であることが明らかとなった。

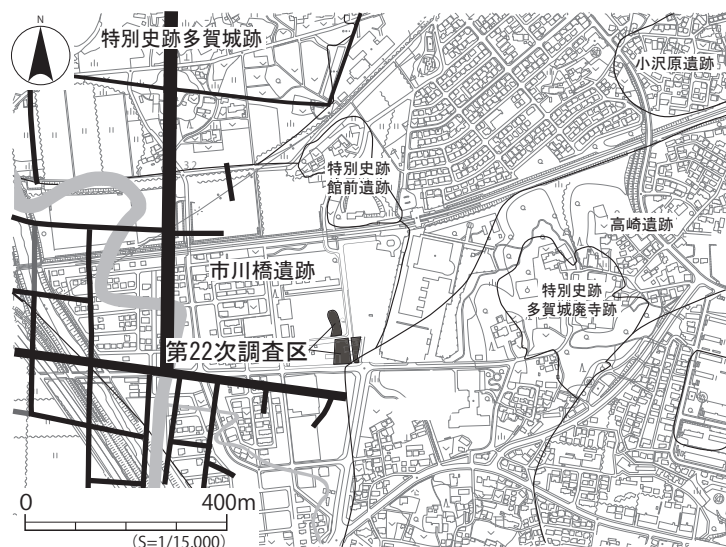
(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第52次】

出土したのは緑釉陶器2点、灰釉陶器4点の合計6点で(第12表)、発掘調査面積が461㎡であることから、100㎡あたり1.30点(緑釉0.43点/灰釉0.87点)である。図示したのは緑釉陶器皿(第48図1)と灰釉陶器平瓶(2・3)である。2・3は胎土や釉調から同一個体とみられる。

【第82次】

出土したのは緑釉陶器皿1点(第48図4)である(第12表)。発掘調査面積が580㎡であることから、100㎡あたり0.17点である。

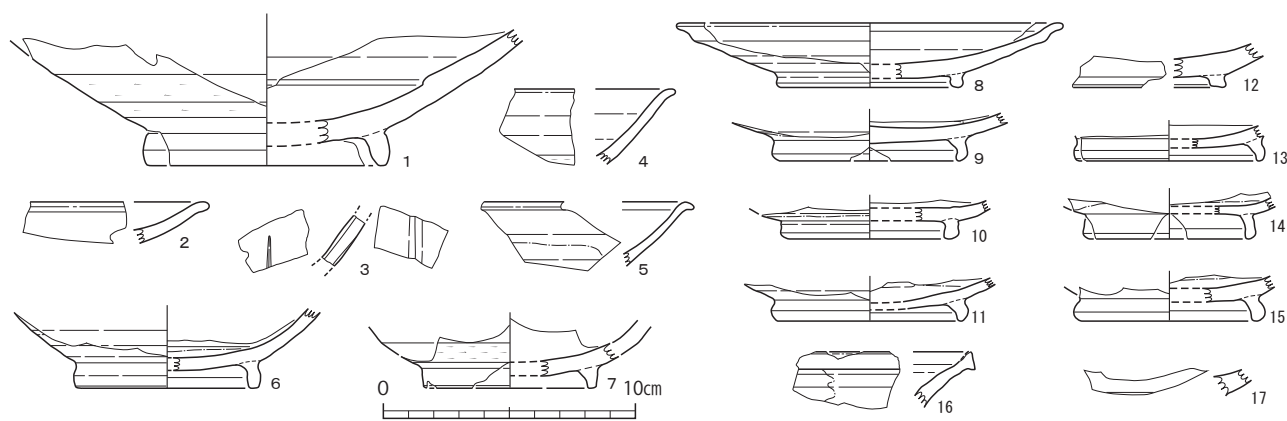


第49図 市川橋遺跡高平地区の位置

14. 市川橋遺跡高平地区

(1) 地区の概要

市川橋遺跡高平地区(註9)は、多賀城外郭東南隅から南へ約0.5km、多賀城廃寺跡から西へ約0.5kmのところに位置し(第49図)、多賀城周辺集落实態解明と区画された地割の有無の確認を目的として、第22次調査(『年報1973』)が行われている。その結果、小規模な掘立柱建物と竪穴建物、土坑や溝などが確認された。



第22次

(1~17:S=1/3)

(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	SB3 掘方	緑釉? 段皿	体~底部1/5	—	(9.5)	—	猿投	II C2b	緑釉素地? 広縁	尾野VI中	22-36	30-2	B14943
2	表土	緑釉 皿	口縁部片	—	—	—	洛西	—	硬陶 釉は薄い	—	22-58	—	B14943
3	表土	緑釉 碗	体部片	—	—	—	猿投	—	輪花:外面線刻、内面小隆帯	—	22-59	—	B14943
4	表土	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	尾張	—	体部:回転ヘラケズリ 内面施釉	—	22-33	—	B14943
5	灰褐色整地層	灰釉 碗	口縁部片	—	—	—	東濃	—	内外面ハケ塗り	—	22-42a	—	B14943
6	2層	灰釉 碗	底部1/5	—	(6.8)	—	尾張	II D3	体~底部:回転ヘラケズリ 内面摩耗	尾野VI新	22-52	30-3	B14943
7	2層	灰釉 碗	底部2/5	—	(7.2)	—	東海西部	II D3	底部:ナデ 内面摩耗	尾野VI新	22-53	30-7	B14943
8	表土	灰釉 皿	1/6	(15.0)	(6.2)	2.5	尾張	II C1	底部:回転ヘラケズリ 内面施釉	尾野VI古	22-1	30-1	B14943
9	大溝	灰釉 皿	底部1/4	—	(7.0)	—	尾張	II D1a	底部:回転ヘラケズリ 内面摩耗 内外面ハケ塗り	尾野VI中	22-45	30-4	B14943
10	灰褐色整地層	灰釉 皿	底部1/3	—	(6.4)	—	東濃	II D1b	内面摩耗 内外面ハケ塗り	尾野VI中	22-42b	30-8	B14943
11	表土	灰釉 皿	底部1/3	—	(7.2)	—	東濃	II D3	内面施釉 被熱	尾野VI新	22-55	30-5	B14943
12	2層	灰釉 碗or皿	底部片	—	—	—	尾張	II C1	内面施釉	尾野VI古	22-57	—	B14943
13	表土	灰釉 碗or皿	底部1/5	—	(7.4)	—	東濃	II D3	底部:ナデ	尾野VI新	22-40	—	B14943
14	2層	灰釉 碗or皿	底部1/5	—	(6.2)	—	尾張	II D1b	底部:ナデ 内面摩耗 内外面施釉	尾野VI中	22-49	—	B14943
15	表土	灰釉 碗or皿	底部1/4	—	(7.0)	—	東濃	II D3	底部:ナデ 内面摩耗	尾野VI新	22-51	30-6	B14943
16	表土	灰釉 広口瓶	口縁部片	—	—	—	東濃	—	外面施釉	尾野VII	22-41	—	B14943
17	表土	青磁 碗	体部片	—	—	—	—	—	越州窯系青磁I類	—	No. 210	—	B14314

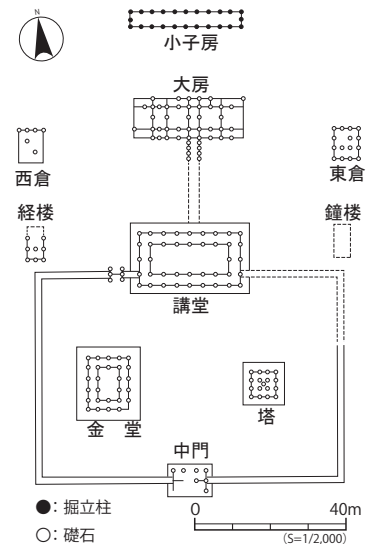
第50図 市川橋遺跡高平地区出土施釉陶磁器

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

【第22次】

出土破片数は、緑釉陶器3点、灰釉陶器34点、青磁1点の合計38点で、器種構成と産地については第13表の通りである。発掘調査面積が3,519㎡であることから、100㎡あたり1.09点(緑釉0.09点/灰釉0.97点/青磁0.03点)である。

図示したものには緑釉陶器碗(第50図3)・皿(2)・段皿(1)、灰釉陶器碗(4~7)・皿(8~11)・碗または皿(12~15)・広口瓶(16)、青磁碗(17)がある。1は無釉であることから緑釉素地の可能性があり、猿投窯産で、高台がⅡC2bであることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。6は尾張産、7は東海西部産、13・15は東濃窯産で、高台がⅡD3であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。8・12は尾張産で、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。9~11は尾張産、14は東濃窯産で、高台がⅡD1であることから尾野Ⅵ期中に位置づけられる。17は越州窯系青磁Ⅰ類である。



第51図 多賀城廃寺跡伽藍模式図

15. 多賀城廃寺跡

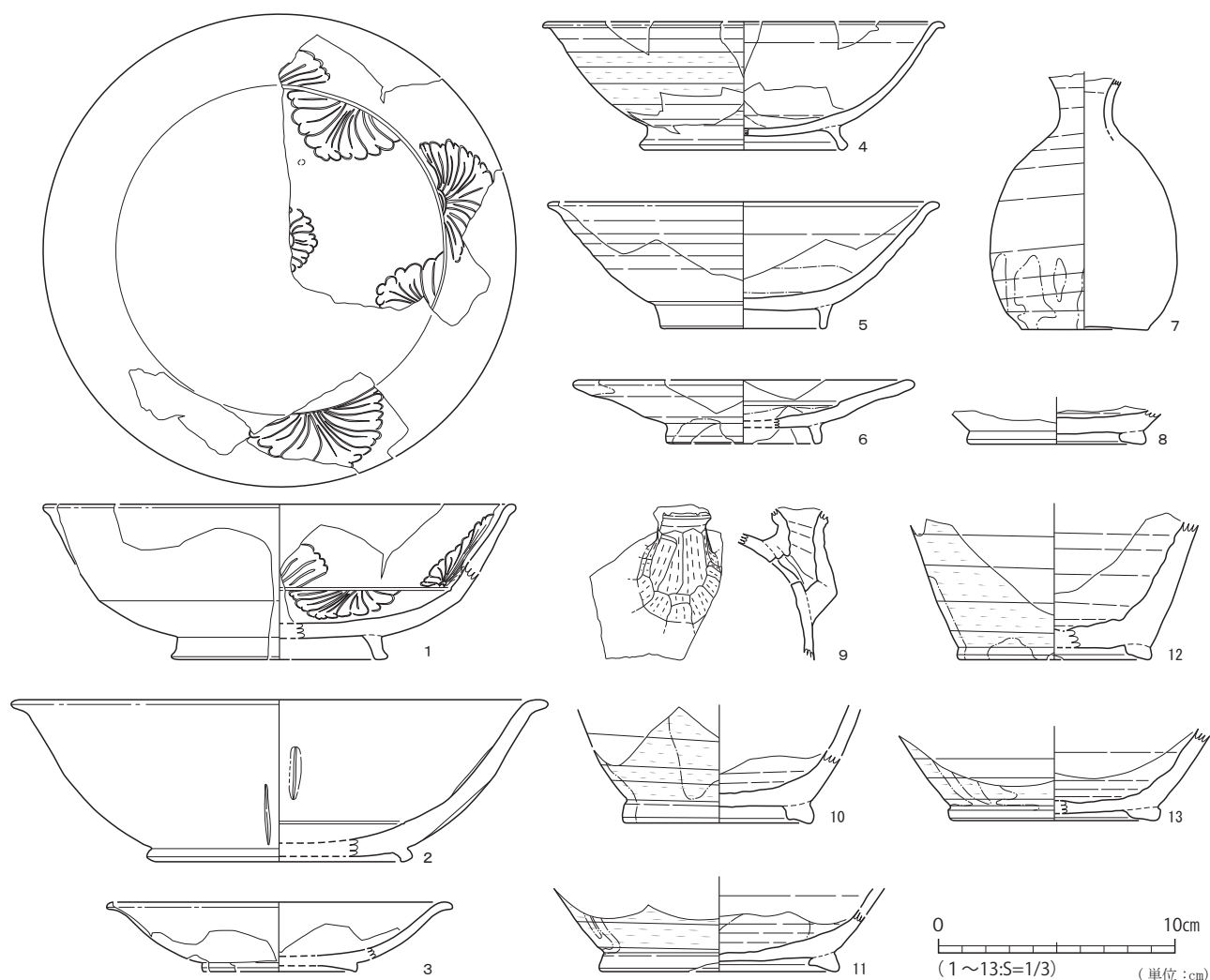
(1) 地区の概要

多賀城跡の南東約1kmの丘陵上にあり、1960~1962年に多賀城跡発掘調査委員会、1966・1967年に多賀城町、1975年に当研究所で第25・26次調査を行っている(宮城県教委1970、『年報1975』)。その結果、中門と講堂を築地塀で方形に連結し、内部には東に三重と推定される塔、西に金堂を配置する構造であることが分かった(第51図)。また講堂の左右後ろには経楼・鐘楼、東西の倉を置き、北正面には軒廊で連結した僧坊、さらにその北に小子房が配置される。寺跡の西方約2kmにある山王遺跡東町浦地区から「観音寺」と墨書された土器が出土したことから(多賀城市1991)、「観音寺」または「観世音寺」と称されていた可能性が高い。多賀城と同時に造営され、12世紀頃まで存続した可能性がある。

(2) 施釉陶磁器の出土状況と特徴

出土破片数は、緑釉陶器13点、灰釉陶器49点の合計62点で、器種と産地は第14表の通りである。発掘調査面積が15,310㎡であることから、100㎡あたり0.40点(緑釉0.08点/灰釉0.32点)である。

図示したものには緑釉陶器碗(第52図2)・稜碗(1)・皿(3)、灰釉陶器碗(4・5)・段皿(6)・小瓶(7)・浄瓶(9)・長頸瓶(10・11)・広口瓶(8・12・13)がある。1は屈曲部を境に口縁部側と底部側で入れ違いになるよう半截丸頭四弁無房条芯花文が配置され、底面には丸頭四弁条芯花文が描かれており、屈曲部には沈線がめぐる。陰刻花文のモチーフや配置が黒笹90号窯(三好町誌編纂委員会2013)や89号窯(愛知県埋蔵文化財センター1994)など猿投窯で生産されるものに確認できないことから、尾北窯産の可能性があり、高台がⅡC2aであることから尾野Ⅵ期中~新に位置づけられる。2は現物不明であるが、猿投窯産の可能性があり、高台がⅡC1であることから尾野Ⅵ期古に位置づけられる。3は洛北窯産で、高台がⅠAで扁平な器形であることから、高橋Ⅰ期に位置づけられる。4は東濃窯産の可能性があり、高台がⅡD3であることから尾野Ⅵ期新に位置づけられる。5・6は尾張産の可能性があり、5は高台がⅡF1、6はⅡC2aで内底面までハケ塗りされていることから、尾野Ⅵ期中に位置づけられる。8・13は東濃窯産、12は東海産で、尾野Ⅶ期に位置づけられる。9は注口部の口縁部下に突帯がめぐり、側面はヘラケズリによって面取されている。尾張産の可能性があり、外面が施釉されていることや尾野Ⅶ期に浄瓶はみられないことから、尾野Ⅵ期に位置づけられる。10・11は尾張産で、尾野Ⅵ期に位置づけられる。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	産地	高台	特徴	編年	整理番号	写真図版	箱番号
1	僧坊表土	緑釉 稜埴	1/3	(19.6)	(9.2)	6.6	尾北?	II C2a	内面の屈曲部を境に上下互い違いになるよう丸頭半截四弁無房条芯花文、底面に丸頭四弁条芯花文 目跡あり	尾野VI中〜新	廃寺 21	31-1	B14942
2	表土	緑釉 埴		(22.0)	(10.2)	6.8	猿投?	II C1	輪花:外面線刻、内面小隆線	尾野VI古	廃寺 20		所在不明
3	小子房 Pit	緑釉 皿	1/3	(14.0)	(6.6)	2.9	洛北	I A	軟陶 扁平な器形	高橋 I	廃寺 19	31-2	B14942
4	塔基壇南斜面裾部	灰釉 埴	2/5	(16.4)	8.4	5.4	東濃?	II D3	底部:ナデ 体部:回転ヘラケズリ 内外面ハケ塗り	尾野VI新	廃寺 3		B14942
5	僧坊軒廊東側溝中	灰釉 埴	1/3	(16.2)	7.0	5.4	尾張?	II F1	底部:ナデ 内底面〜外面ハケ塗り	尾野VI中	廃寺 4	31-4	B14942
6	塔基壇南斜面裾部	灰釉 段皿	1/4	(14.0)	(6.6)	2.7	尾張?	II C2a	底部:ナデ 内底面〜外面ハケ塗り	尾野VI中	廃寺 18	31-3	B14942
7	表土	灰釉 小瓶	4/5	—	5.4	—	東濃		底部:回転糸切り無調整 外面ハケ塗り		廃寺 2	31-5	B14942
8	小子房 Pit	灰釉 広口瓶	底部1/2	—	(7.6)	—	東濃		底部:回転ヘラケズリ	尾野VII	廃寺 6		B14942
9	塔基壇東辺裾部	灰釉 浄瓶	注口部片	—	—	—	尾張?		注口上部に隆線、下部面取り 外面施釉	尾野VII	廃寺 1	31-6	B14942
10	小子房 床土	灰釉 長頸瓶	底部1/1	—	7.9	—	尾張		底部:回転糸切り無調整 体部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VI	廃寺 8	31-9	B14942
11	金堂	灰釉 長頸瓶	底部1/1	—	9.9	—	尾張		底部:回転糸切り→回転ヘラケズリ 体部:回転ヘラケズリ	尾野VI	廃寺 7	31-10	B14942
12	東倉	灰釉 広口瓶	底部2/5	—	(8.0)	—	東海		体〜底部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VII	廃寺 11	31-8	B14942
13	東西溝中	灰釉 広口瓶	底部1/2	—	(8.8)	—	東濃		体〜底部:回転ヘラケズリ 外面施釉	尾野VII	廃寺 5	31-7	B14942

第 52 図 多賀城廃寺跡出土施釉陶磁器

種類		緑釉陶器			灰釉陶器							青磁
産地		猿投	洛北?	合計	尾張	尾張?	東濃	東濃?	東海西部	東海	合計	
器種	埴	1		1	2	1	2		1	1	7	1
	深埴			0			1				1	
	皿		1	1	1		4				5	
	段皿	1		1							0	
	埴or皿			0			5	2	2		9	
	長頸瓶			0					2	1	3	
	瓶			0	5				1	3	9	
合計		2	1	3	8	1	12	2	6	5	34	1

第 13 表 市川橋遺跡高平地区出土施釉陶磁器の器種と産地

種類		緑釉陶器				灰釉陶器						合計
産地		尾北?	猿投?	洛北	合計	尾張	尾張?	東濃	東濃?	東海	合計	
器種	埴		2		2	1	1		32		34	
	稜埴	9			9						0	
	皿			2	2						0	
	段皿			0	0		1				1	
	三足盤?			0	0	1					1	
	長頸瓶			0	0	1					1	
	小瓶			0	0			1			1	
	浄瓶			0	0		1				1	
	瓶			0	0	4		1	1	1	7	
	壺or瓶			0	0	1				2	3	
合計		9	2	2	13	8	3	2	33	3	49	

第 14 表 多賀城廃寺跡出土施釉陶磁器の器種と産地

図版番号	整理番号	登録	原図
第11図1	N46	R211	『図録編』 PL129-623
2	N48	R73	
3	N43	R5	『図録編』 PL129-624
4	N45	R2	『図録編』 PL129-626
5	N44	R11	『図録編』 PL129-625
6	N42	R209	『図録編』 PL129-627
7	77-2	R2	『年報2005』 第6図2
8	N6		『補遺編』 第48図6
9	76-2	R114	『年報2004』 第24図54
10	76-1	R113	『年報2004』 第24図55
12	N5		『補遺編』 第48図5
13	N2		『図録編』 PL129-617
14	N15	R11	『図録編』 PL129-618
15	N3		『図録編』 PL129-619
16	N7	R264	『補遺編』 第48図7
17	N8	R8	『補遺編』 第48図11
18	N4		『図録編』 PL129-621
19	N9		『補遺編』 第48図12
20	N54	R10	『図録編』 PL134-112
22	No. 0		『補遺編』 第49図2
23	No. 191		『補遺編』 第49図1
第12図1	31-12	R19	『年報1977』 第92図29
2	31-2	R4	
3	31-6	R51	『年報1977』 第92図30
4	32-83	R-3	
5	32-2	R2	
6	32-10	R-52	
7	32-1	R3	
8	32-6	R-11	
9	32-78	R-12	
10	32-46	R-49	
11	No. 36		『年報2005』 第21図36
12	No. 37		『年報2005』 第21図37
13	No. 30		『年報2005』 第21図30
第15図1	69-31	R2	『南面 I』 図版128-1
2	69-33	R20	『南面 I』 図版128-2
3	71-18	R4	『南面 I』 図版128-3
4	69-35	R7	『南面 I』 図版128-5
5	69-32	R1	『南面 I』 図版128-6
6	69-37	R40	『南面 I』 図版128-7
7	69-38	R41	『南面 I』 図版128-8
8	78-20	R40	『南面 I』 図版128-9
9	70-39	R21	『南面 I』 図版128-4
10	70-38	R24	『南面 I』 図版128-11
11	70-6・7・28	R18・35	『南面 I』 図版128-18・129-5
12	69-12	R23	『南面 I』 図版128-12
13	69-8	R3	『南面 I』 図版128-14
14	69-19	R16	『南面 I』 図版128-15
15	69-4	R7	『南面 I』 図版128-16
16	69-24	R24	『南面 I』 図版128-21
17	71-6	R2	『南面 I』 図版128-20
18	69-40	R23	『南面 I』 図版128-17
19	69-15	R4	『南面 I』 図版129-4
20	78-1	R8	『南面 I』 図版128-13
21	70-13	R8	『南面 I』 図版129-2
22	71-2	R3	『南面 I』 図版129-3
23	69-11・26	R28	『南面 I』 図版129-1
24	71-12	R3	『南面 I』 図版129-7
25	69-10	R5	『南面 I』 図版129-6
26	70-8	R15	『南面 I』 図版129-9
27	69-25	R27	『南面 I』 図版129-11
28	70-25	R28	『南面 I』 図版129-8
第16図1	69-22	R14	
2	69-7	R7	『南面 I』 図版129-12
3	78-11	R2	『南面 I』 図版128-24
4	69-39	R3	『南面 I』 図版128-25
5	69-5	R1	『南面 I』 図版128-26
6	78-2	R7	『南面 I』 図版128-22
7	71-5	R16	『南面 I』 図版128-23
8	69-18	R11	『南面 I』 図版130-16
9	71-13	R4	『南面 I』 図版130-15
10	70-24	R27	『南面 I』 図版130-17
11	78-12	R7	『南面 I』 図版130-18
12	70-32	R46	『南面 I』 図版130-10
13	69-22	R22	『南面 I』 図版130-13
14	70-27・71-11	R2・34	『南面 I』 図版130-14
15	70-33	R48	『南面 I』 図版130-19
16	71-14	R5	『南面 I』 図版130-20
17	70-29	R38	『南面 I』 図版130-21
18	70-12	R7	『南面 I』 図版130-22
19	69-29	R42	『南面 I』 図版130-23
20	70-5	R15	
21	70-26	R29	『南面 I』 図版130-25
22	78-6	R37-1	『南面 I』 図版130-24
23	71-4・8	R1	『南面 I』 図版130-27
24	78-7	R37-2	『南面 I』 図版130-26
第17図1	43-2	R9	

図版番号	整理番号	登録	原図
第17図2	43-1	R10	
4	74-1	R9	『年報2003』 第13図11
第18図1	61-8	R36	『年報1991』 第86図16
2	61-5	R138	『年報1991』 第99図2
3	79-11	R89	『年報2007』 第20図3
4	79-12	R88	『年報2007』 第20図4
5	86-3	R82	『年報2013』 図版19-12
6	86-5	R152	『年報2013』 図版31-11
7	86-6	R253	『年報2013』 図版32-21
8	86-4	R151	『年報2013』 図版31-10
9	86-2	R254	『年報2013』 図版32-22
10	86-1	R153	『年報2013』 図版31-12
11	No. 311	R88	『年報2013』 図版19-18
12	90-10	R381	『年報2016』 図版19-19
13	90-9	R391	『年報2016』 図版20-7
14	90-2	R384	『年報2016』 図版13-18
15	90-5	R387	『年報2016』 図版19-17
16	90-1	R390	『年報2016』 図版20-6
17	90-7	R389	『年報2016』 図版19-18
18	90-16	R320	『年報2016』 図版20-12
第19図1	45-2	R1	
2	45-6	R2	
3	45-3	R1	
4	45-1	R3	
5	45-4	R2	
6		R153	
7	No. 178		『年報2009』 図版48-11
8	No. 172		『年報2009』 図版50-9
9	No. 186		『年報2009』 図版50-10
10	現変01-7	R1	『年報2002』 第31図70
11	現変01-10	R1	『年報2002』 第31図71
12	現変01-11	R1	
13	現変02-1	R1	『年報2002』 第27図58
第21図1	28-311		『年報1976』 第43図7
2	28-310	R1	『年報1976』 第56図16
4	28-316	R6	
6	28-162	R8	
7	28-160	R2	
8	28-161	R2	
9	28-151	R1	
10	28-141	R2	
11	28-220	R16	
13	28-235	R7	
14	28-293	R3	
15	28-291	R2	『年報1976』 第56図18
16	28-281	R21	
17	28-292	R2	『年報1976』 第52図16
19	28-313	R1	
20	28-271	R2	
22	28-174	R2	
23	28-319	R61	『年報1976』 第58図13
24	28-193	R6	
26	28-139	R3	
27	28-283	R1	『年報1976』 第58図14
28	28-280	R7	
29	28-265	R1	
第22図1	28-272	R3	『年報1976』 第58図15
2	28-267	R1	
3	28-276	R6	
4	28-273	R4	『年報1976』 第56図17
5	28-282	R3	
7	28-278	R8	『年報1976』 第56図19
8	28-275	R1	
16	28-322	R1	
17	28-216	R14	
20	28-165	R1	
23	28-332		『年報1976』 第52図11
24	28-338	R7	
25	28-9	R1	
26	28-344	R12	
27	28-339	R4	
28	28-59	R1	
29	28-51	R5	
30	28-48	R1・2	
31	28-337		『年報1976』 第58図16
33	28-334	R1	『年報1976』 第52図13
第23図2	28-341	R3	
5	28-60	R1	
6	28-340	R5	
7	28-47	R1・2	
8	28-336	R1	『年報1976』 第56図21
9	28-123	R4	『年報1976』 第52図14
10	28-54	R3	
11	28-335	R1	『年報1976』 第56図20
12	28-50	R7	
14	28-65	R3	
15	28-75	R1	
16	28-71	R21	
17	28-66	R3	

図版番号	整理番号	登録	原図
第23図18	28-90	R61	
19	28-73	R5	
21	28-118	R7	
22	28-117	R7	
23	28-124	R2	
24	No. 13	R9	『年報1976』 第58図17
25	No. 12	R10	『年報1976』 第58図18
26	No. 9		『年報2005』 第21図9
27	No. 17		『年報2005』 第21図17
29	No. 11		『年報2005』 第21図11
30	No. 8		『年報2005』 第21図8
32	28-304	R1	『年報1976』 第42図3
第24図6	30-26	R3	『年報1977』 第43図1
12	30-12	R24	『年報1977』 第44図2
13	No. 24		『年報2005』 第21図24
14	No. 22		『年報2005』 第21図22
15	No. 23		『年報1977』 第44図3
17	33-38	R11	
22	32-27	R-2	
23	46-1	R9	
24	46-2	R11	
第25図1	83-14	R191	『年報2011』 図版31-9
2	83-15	R242	『年報2011』 図版30-9
3	83-13	R190	『年報2011』 図版30-10
4	83-9	R240	『年報2011』 図版30-8
5	83B-6	R48	
6	83B-7	R65	
7	83B-1	R36	
8	83B-4	R81	
9	83B-2	R49	
10	83B-3	R3	
11	84-7	R36	『年報2012』 図版11-12
12	84-5	R16	『年報2012』 図版10-3
13	84-1	R1	『年報2012』 図版6-1
14	84-3	R21	『年報2012』 図版10-8
15	84-4	R39	『年報2012』 図版11-13
16	84-2	R14	『年報2012』 図版10-1
17	No. 310	R55	
第26図1	92-18	R448	『年報2018』 図版15-5
2	92-22	R456・467	『年報2018』 図版15-6
3	92-27・37	R456・467	『年報2018』 図版16-4
4	92-41	R473	
5	92-20	R449	『年報2018』 図版15-7
6	92-39	R471	
7	92-42	R474	
8	92-2	R476	『年報2018』 図版15-8
9	92-15	R489	
10	92-6	R480	『年報2018』 図版16-12
11	92-11	R485	
12	92-1	R475	『年報2018』 図版15-9
13	92-3	R477	
14	92-10	R484	『年報2018』 図版16-5
15	92-7	R481	『年報2018』 図版16-6
16	No. 321	R447	『年報2018』 図版12-4
17	現変91-2	R3	『年報1993』 第49図4
18	現変94-4	R53	『年報1994』 第45図12
19	現変94-1	R81	『年報1994』 第45図11
20	現変94-3	R31	『年報1994』 第59図7
第27図1	現変97-8	R37	『年報2001』 第21図21
2	現変97-7	R14	『年報2001』 第21図24
3	現変97-4	R32	『年報2001』 第21図16
4	現変97-2	R28	『年報2001』 第21図3
5	現変97-5	R34	『年報2001』 第21図22
6	現変97-3	R29	『年報2001』 第21図4
7	現変97-6	R42	『年報2001』 第21図23
8	現変97-1	R26	『年報2001』 第21図22
第28図1	21-10		『年報1973』 第31図6
2	21-11	R1	
3	21-20	R1	
4	現変94-21	R1	『年報1994』 第67図4
5	現変94-24	R6	『年報1994』 第67図5
第30図1	12-1		『年報1971』 第9図1
3	現変93-4	R20	『年報1993』 第44図10
4	現変93-3	R8	『年報1993』 第44図9
5	現変93-2	R22	『年報1993』 第44図13
6	現変93-1	R2	『年報1993』 第43図3
7	No. 209	R21	『年報1993』 第44図11
8	現変96-3	R87	『年報2001』 第28図30
9	現変96-6	R100	『年報2001』 第29図35
10	現変96-5	R99	『年報2001』 第29図33
11	現変96-4	R133	『年報2001』 第27図5
12	現変96-2	R62	『年報2001』 第28図20
13	現変96-1	R93	『年報2001』 第29図35
14	現変96-7	R105	『年報2001』 第29図36
第33図18	23-43		『年報1974』 第41図14
20	No. 6		『年報2005』 第21図6
第34図1	56-16	R2	『年報1989』 第50図14
2	56-29	R15	

第 15 表 整理・登録・原図番号対応表（1）

*整理番号のみのものは省略

図版番号	整理番号	登録	原図
第34図3	56-37	R16	『年報1989』第47図11
4	56-38	R7	『年報1989』第50図4
14	58-51		『年報1990』第56図2
17	58-66	R9	
19	58-82	R2	
24	58-48	R4	『年報1990』第59図14
25	58-49	R2	
26	58-75・76	R1	
第35図1	58-24	R1	
2	58-31	R2	
3	58-103	R7	
4	58-17	R1	
5	58-45	R1	
6	58-119	R2	
7	58-18	R1	
11	58-2	R1	
23	60-7		『年報1991』第46図17
25	60-2		『年報1991』第50図7
27	60-1		『年報1991』第50図8
第36図16	60-6	R24	『年報1991』第32図10
20	60-3	R9	『年報1991』第39図9
第37図2	64-8		『年報1993』第31図3
5	65-2	R162	『年報1994』第17図20
6	65-3	R3	『年報1994』第29図19
7	65-5	R2	『年報1994』第16図3
8	65-4	R2	『年報1994』第29図20
9	66-11		『年報1995』第84図2
10	66-7	R67	『年報1995』第51図36
11	66-10	R346	『年報1995』第70図202
12	66-2	R95	
13	No. 122	R34	『年報1995』第85図2
14	No. 121		『年報1995』第69図170
第38図1	67-50	R84	『年報1996』第75図25
2	67-54	R35	『年報1996』第69図28
3	67-52	R86	『年報1996』第75図26
4	67-57	R28	『年報1996』第32図26
5	67-55	R1	『年報1996』第64図5
6	67-70	R29	『年報1996』第32図25
7	67-56	R85	『年報1996』第75図27
8	67-40	R55	『年報1996』第63図28
9	67-34	R26	『年報1996』第71図25
10	67-64	R92	『年報1996』第75図22
11	67-47	R91	『年報1996』第75図23
12	67-45	R27	『年報1996』第71図24
13	67-38	R90	『年報1996』第75図24
14	67-26	R2	『年報1996』第24図3
15	67-23	R16	
16	67-42	R37	『年報1996』第69図26
17	67-46	R101	
18	67-5	R100	
19	67-28	R1	
第38図20	No. 69		『年報2005』第21図69

図版番号	整理番号	登録	原図
第38図21	54-1		
第39図1	62-45	R3	『年報1992』第76図6
2	62-46	R2	
3	62-40	R6	『年報1992』第71図3
4	62-27	R4	
5	62-32	R1	
6	62-1	R14	
7	62-35	R11	『年報1992』第10図1
8	62-36	R2	
9	62-12	R16	『年報1992』第69図7
10	62-9	R7	
13	No. 114		『年報2005』第21図114
16	No. 111		『年報1992』第64図6
17	68-21	R1	『年報1997』第30図10
18	68-20	R187	『年報1997』第13図15
19	68-1	R7	『年報1997』第16図7
20	68-14	R2	『年報1997』第7図9
21	68-12	R20	『年報1997』第36図19
22	68-16	R9	『年報1997』第33図26
23	68-4	R181	
24	68-5	R184	『年報1997』第30図11
25	68-10	R12	『年報1997』第25図19
26	68-8	R17	『年報1997』第38図7
第41図1	36-26		『年報1980』第24図1
2	36-5		『年報1980』第13図9
3	36-3	R4	『年報1980』第39図11
4	36-6	R1	
5	36-2	R1	
6	36-18	R2	『年報1980』第6図5
8	39-3	R1	
9	39-4	R1	
10	39-1	R4	『年報1981』第32図9
第42図1	48-1	R26	『外郭跡Ⅰ』図版54-5
2	73-1	R1	『外郭跡Ⅰ』図版79-10
第43図1	R5	34-1	
2	R5	41-2	『年報1982』第24図14
第45図1	37-124	R8	『年報1980』第50図6
2	37-135	R19	
3	37-139	R23	
4	37-146	R18	
6	37-122	R29	
7	37-129	R26	
8	37-128	R31	
9	37-145	R8	
10	37-137	R20	
11	37-142	R11	『年報1980』第62図11
12	37-138	R14	『年報1980』第62図10
13	37-73	R20	『年報1980』第55図4
14	37-19	R7	『年報1980』第51図7
15	37-12	R2	『年報1980』第51図6
16	37-26		『年報1980』第50図5
17	37-44	R34	

図版番号	整理番号	登録	原図
第45図18	37-3	R21	
19	37-63	R41	
20	37-4・21	R23	
21	37-91	R17	
22	37-33	R21	
24	37-38	R21	
25	37-96	R19	
26	37-92	R18	
第46図1	37-104	R5	
2	37-78	R19	
3	37-107	R39	『年報1980』第55図2
4	37-76	R6	
5	37-87	R19	
6	37-47	R16	
7	37-31	R18	
8	37-80	R35	『年報1980』第55図1
10	37-109	R5	
11	37-77	R9	
12	37-82	R40	
13	37-113	R6	『年報1980』第55図3
14	No. 52		『年報2005』第21図52
15	No. 51		『年報2005』第21図51
16	No. 50		『年報2005』第21図50
17	No. 53		『年報2005』第21図53
18	No. 48		『年報2005』第21図48
19	No. 54		『年報2005』第21図54
20	No. 42		『年報2005』第21図42
21	No. 44		『年報2005』第21図44
第47図1	75-1	R5	『年報2003』第19図4
2	現変94-12	R10	『年報1994』第69図5
第48図1	52-5	R1	
2	52-2	R1	『年報1987』第48図6
3	52-3	R9	
第51図1	22-36		『年報1973』第42図
4	22-33	R5	
5	22-42a		『年報1973』第48図7
7	22-53		『年報1973』第49図18
8	22-1		『年報1973』第53図15
10	22-42b		『年報1973』第48図7
第52図1	廃寺21		『多賀城廃寺跡』第21図3
2	廃寺20		『多賀城廃寺跡』第21図2
3	廃寺19		『多賀城廃寺跡』第21図1
4	廃寺3		『多賀城廃寺跡』第21図9
5	廃寺4		『多賀城廃寺跡』第21図10
6	廃寺18		『多賀城廃寺跡』第21図8
7	廃寺2		『多賀城廃寺跡』第21図7
8	廃寺6		『多賀城廃寺跡』第21図12
9	廃寺1		『多賀城廃寺跡』第21図5
10	廃寺8		『多賀城廃寺跡』第21図14
11	廃寺7		『多賀城廃寺跡』第21図13
13	廃寺5		『多賀城廃寺跡』第21図11

*整理番号のみのものは省略

第 16 表 整理・登録・原図番号対応表（2）

第Ⅲ章 総括

本章では、まず前章で提示した施釉陶磁器の破片数・器種・産地・時期などを地区ごとに整理し、また共伴資料などから施釉陶磁器利用のあり方についても検討する。地区ごとに比較する際は、発掘調査面積が広く、出土数の多い政庁地区、政庁南面（城前官衙）地区、西門・五万崎地区、東門・大畑地区を中心に取り上げ、それ以外の地区については、特記すべき事項がある場合に触れることとした。その後、多賀城城外や宮城県域出土例と比較し、多賀城出土施釉陶磁器の特徴についてまとめる。

1. 多賀城出土施釉陶磁器の特徴

（1）破片数の割合と 100 m²あたりの破片数

多賀城跡と多賀城廃寺跡から出土した施釉陶磁器について、全体の種類別では緑釉陶器 25.1%（463/1,842 点）、灰釉陶器 71.6%（1,318/1,842 点）、貿易陶磁 3.3%（61/1,842 点）である。注目すべきは緑釉陶器の割合で、20%以上を占める遺跡は国府やその関連遺跡に多いことが指摘されており（高橋 1994b）、多賀城が陸奥国府である性格を反映したものと評価できる。ただし地区別にみると（第 53 図）、西門・五万崎地区では緑釉陶器が 51.3%（251/489 点）と約半数を占め、政庁地区では 23.7%（9/38 点）、政庁南面（城前官衙）地区は 25.3%（39/154 点）、東門・大畑地区は 8.8%（64/725 点）となり、その他の政庁西方地区や作貫地区の状況を踏まえても、政庁地区から西側の地区で緑釉陶器の割合が高く、東側では低くなるという傾向が見いだせる。

貿易陶磁は白磁 31 点、青磁 30 点で、東日本において古代の貿易陶磁が 10 点以上出土する遺跡は、35 点（白磁 13 点 / 青磁 22 点）の胆沢城跡（村田 2016）、約 76 点（白磁約 16 点 / 青磁約 60 点）の斎宮跡（大川 2010）のみで、東日本でも有数の貿易陶磁の消費地であったといえる。地区別では西門・五万崎地区は白磁 5 点・青磁 9 点と青磁が多く、東門・大畑地区は白磁 8 点・青磁 9 点、政庁地区（北端）は白磁 3 点・青磁 3 点と同数であり、南辺西地区は白磁 9 点・青磁 6 点と白磁が多い。

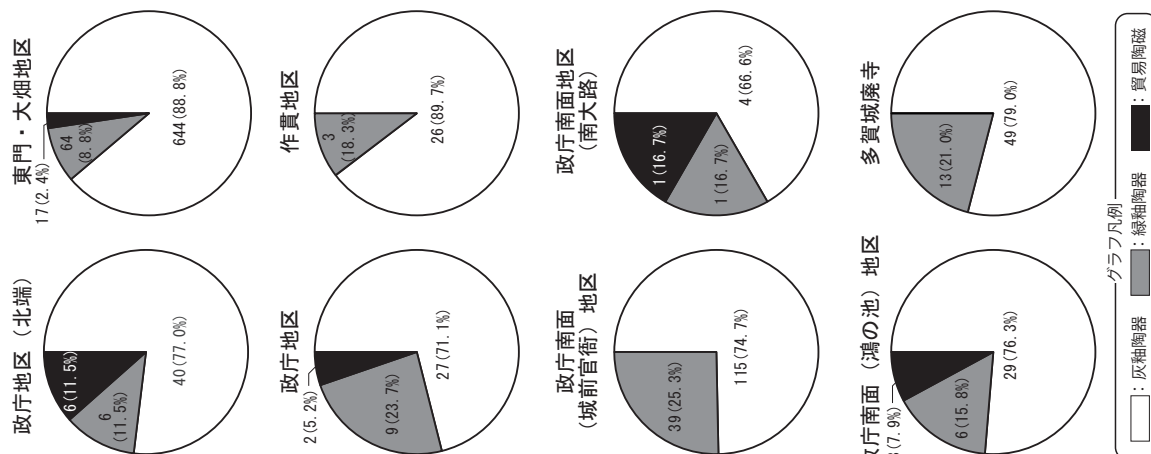
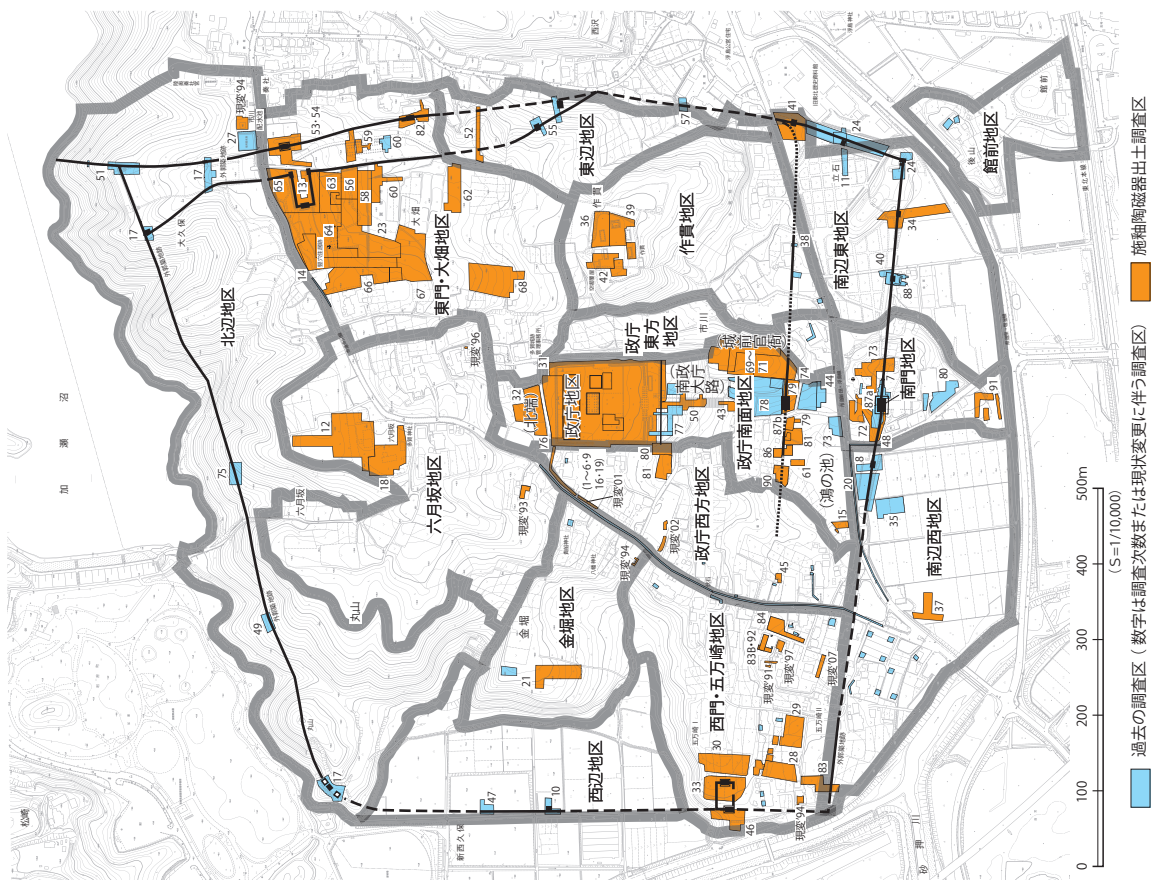
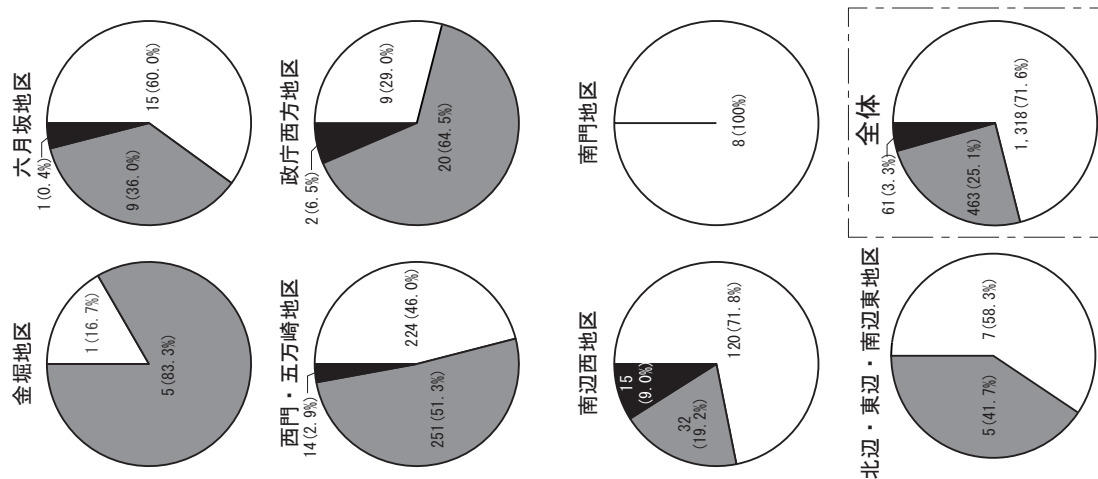
100 m²あたりの破片数では（第 18 表）、1 点未満の政庁地区、1～4 点の政庁南面（城前官衙）地区、東門・大畑地区、4 点以上の西門・五万崎地区に分けられ、種類別の割合と同様に、多賀城内で一様に出土するわけではないことが指摘できる。その要因として、各地区の性格或使用形態の違いが挙げられる。すなわち、1 点未満の政庁地区は政務や儀礼の場であり（山中 1994）、そうした場所では空間を清浄にするため、土器はその場に廃棄されなかったと考えられる（高橋 2001）。また発掘調査面積は広いが 100 m²あたり 1 点未満の六月坂地区や作貫地区についても、前者では第 12・18 次調査において A 期に四面廂付建物が 2 棟ならぶ格式の高い空間であったこと、後者では B 群において政庁と類似した「コ」の字形の建物配置で中央に広場をもつことから、政庁地区と同様に施釉陶磁器が廃棄されなかったとみられる。

対して 1～4 点の政庁南面（城前官衙）地区や東門・大畑地区の場合、官衙の様子が明らかにされており、政庁地区などに比べ施釉陶磁器が利用されたと考えられる。そして 4 点以上の西門・五万崎地区は、具体的な遺構の様相は不明確であるものの、第 92 次調査において平安宮の儀式などで使用されたことが想定される白色土器が出土し（『年報 2018』）、また第 28 次調査では陸奥国府域で特徴的に出土するミガキ須恵器が集中して認められるなど（宮城県教委 2018）、儀礼や饗宴などに関わる施設あるいはその物品を保管した施設が存在した可能性があり、そこで緑釉陶器が多数用いられたと推定される。

これまで、出雲国府跡では 100 m²あたりの緑釉陶器の破片数が地区ごとに異なることが指摘されているが（島根県教育庁埋文センター 2013、高橋 2015）、多賀城においてもそうした地区ごとの違いを明らかにできたことは大きな成果といえる。

	白磁		青磁	
	破片数 (点)	割合 (%)	破片数 (点)	割合 (%)
碗・坏	21	67.7	11	36.7
皿	3	9.7	7	23.3
碗・坏・皿類	2	6.5	8	26.7
壺・水注	5	16.1	3	10.0
その他	0	0.0	1	3.3
合計	31	100	30	100

第 17 表 白磁・青磁の器種構成



第 53 図 各地区における施釉陶磁器破片数と割合

地区・次数		調 査 面 積 (㎡)	緑釉		灰釉		白磁		青磁		合計	
			破 片 数	/100㎡	破 片 数	/100㎡	破 片 数	/100㎡	破 片 数	/100㎡	破 片 数	/100㎡
政庁		11,587	9	0.08	27	0.23	2	0.02			38	0.33
政庁(北端)	31次	1,033	4	0.39	6	0.58					10	0.97
	32次	758	2	0.26	34	4.49	3	0.40	3	0.40	42	5.54
	合計	1,791	6	0.34	40	2.23	3	0.17	3	0.17	52	2.90
政庁南面	城前官衙	5,629	39	0.69	115	2.04	0	0.00	0	0.00	154	2.74
	43次	311	1	0.32	2	0.64					3	0.96
	74次	339							1	0.29	1	0.29
	91次	720			2	0.28					2	0.28
	合計	1,370	1	0.07	4	0.29	0	0.00	1	0.07	6	0.44
	15次	112			2	1.79					2	1.79
	61次	153			9	5.88					9	5.88
	79次	32			2	6.25					2	6.25
	81次	515			1	0.19					1	0.19
	86次	350	4	1.14	2	0.57	2	0.57			8	2.28
	87b次	170			1	0.59					1	0.59
	90次	430	2	0.47	12	2.79	1	0.23			15	3.49
	合計	1,762	6	0.34	29	1.65	3	0.17	0	0.00	38	2.16
	45次	74	6	8.11							6	8.11
	81次	548	1	0.18	3	0.55	1	0.18	1	0.18	6	1.09
	現変01	270	12	4.44	6	2.22					18	6.66
	現変02	27	1	3.70							1	3.70
	合計	919	20	2.18	9	0.98	1	0.11	1	0.11	31	3.37
	28次	1,248	184	14.74	121	9.70	4	0.32	5	0.40	314	25.16
西門・五万崎	29次	912	2	0.22	3	0.33					5	0.55
	30次	2,190	14	0.64	30	1.37	1	0.05	2	0.09	47	2.15
	33次	1,471	2	0.14	12	0.82					14	0.95
	46次	422			3	0.71					3	0.71
	83次	640	7	1.09	11	1.72					18	2.81
	84次	445	7	1.57	5	1.12			1	0.22	13	2.92
	83B・92次	200	29	14.50	26	13.00			1	0.50	56	28.00
	現変91	76			4	5.26					4	5.26
	現変94	80	4	5.00	3	3.75					7	8.75
	現変97	143	2	1.40	6	4.20					8	5.60
	合計	7,827	251	3.20	224	2.86	5	0.06	9	0.11	489	6.25
	21次	1,790	3	0.17	1	0.05					4	0.22
	現変94	77	2	2.60							2	2.60
	合計	1,867	5	0.27	1	0.05	0	0.00	0	0.00	6	0.32
金堀	12次	3,622			5	0.14					5	0.14
	18次	2,046			1	0.05					1	0.05
	現変93	104	9	8.65	2	1.92			1	0.96	12	11.54
	現変96	15			7	46.67					7	46.67
	合計	5,787	9	0.16	15	0.26	0	0.00	1	0.02	25	0.43
東門・大畑	14・23・56・58・60・63～67次	16,298	51	0.31	573	3.52	7	0.04	5	0.03	636	3.90
	53・54次	1,353	1	0.07					1	0.07	2	0.15
	59次	365			1	0.27					1	0.27
	62次	1,163	8	0.69	50	4.30	1	0.09	3	0.26	62	5.33
	68次	2,527	4	0.16	20	0.79					24	0.95
	合計	21,706	64	0.39	644	3.99	8	0.04	9	0.04	725	3.34
	36次	1,547	1	0.06	20	1.29					21	1.35
作貫	39次	1,927	2	0.10	3	0.16					5	0.26
	42次	497			3	0.60					3	0.60
	合計	3,971	3	0.08	26	0.65	0	0.00	0	0.00	29	0.73
	7・48・72・73・79・87a次	7,150			6	0.08					6	0.08
南門	91次	720			2	0.28					2	0.28
	合計	7,870	0	0.00	8	0.10	0	0.00	0	0.00	8	0.10
	34次	1,368			1	0.07					1	0.07
南辺東	41次	921			2	0.22					2	0.22
	合計	2,289	0	0.00	3	0.13	0	0.00	0	0.00	3	0.13
南辺西	37次	695	32	4.60	120	17.27	9	1.29	6	0.86	167	24.03
	75次	378	1	0.26							1	0.26
	現変94	186	1	0.54							1	0.54
北辺	合計	564	2	0.35	0	0.00	0	0.00	0	0.00	2	0.35
	52次	461	2	0.43	4	0.86					6	1.30
	82次	580	1	0.17							1	0.17
	合計	1,041	3	0.29	4	0.38	0	0.00	0	0.00	7	0.67
東辺												
多賀城廃寺跡		15,310	13	0.08	49	0.32					62	0.40
総計		91,985	463	0.50	1,318	1.43	31	0.03	30	0.03	1,842	2.00

第18表 各地区における100㎡あたりの破片数

(2) 器種構成

器種は緑釉・灰釉陶器の場合、埴、皿、埴・皿類、壺・瓶類、その他の器種、貿易陶磁は碗・坏、皿、碗・坏・皿類、壺・水注、その他の器種に整理して計数したところ、緑釉陶器は全体で埴・皿類が90.3% (418/463点) と大半を占め (第19表)、壺・瓶類は5.2% (24/463点) と非常に少なく、どの地区でも同様である。一方、灰釉陶器については全体で埴・皿類が67.3% (887/1,318点) と主体で、壺・瓶類は31.2% (411/1,318点) である。ただし、この割合については地区ごとにやや様相が異なっており、壺・瓶類が半数以上となる政庁地区 (55.5%、15/27点) や、埴・皿類が8割以上を占める政庁南面 (城前官衙) 地区 (80.0%、90/115点)

があり偏差が大きい。

貿易陶磁について（第17表）、白磁・青磁ともに碗・杯・皿類全体で8割以上と卓越するが、なかでも青磁は皿と同定できたものが23.3%（7/30点）と一定量存在する。土橋理子（1994）の集成によれば、越州窯系青磁の場合、全国的には皿・杯・盤・鉢は10%（66/635片）で1割前後であることから、多賀城では全国と比較しても皿が多く利用されたと考えられる。

また壺・水注は少ないものの白磁で16.1%（5/31点）、青磁で10.0%（3/30点）みられ、特に白磁の壺・水注は日本国内でも極めて少なく（太宰府市教委2000：pp.27-28）、注目すべき資料である。

（3）産地

緑釉陶器全体では（第20表）、可能性があるものを含めて猿投窯産が48.6%（225/463点）と半数近くを占め、洛北窯産が22.0%（102/463点）、東海西部産が16.2%（75/463点）と続く。

地区別では、政庁南面（城前官衙）地区で猿投窯産が79.5%と他地区に比べて卓越する。また西門・五万崎地区では猿投窯産が44.2%（111/251点）に対して洛北窯産が32.7%（82/251点）であるが、これは政庁南面（城前官衙）地区10.3%（4/39点）、東門・大畑地区7.8%（5/64点）に比べて高い割合となっている。

灰釉陶器は可能性があるものを含めて尾張産が43.9%（578/1,318点）で最も多く、東濃窯産は32.7%（431/1,318点）であるが、東海西部産も19.7%（260/1,318点）存在する。東海東部産は三河産の可能性もあるものを含めても1.4%

<緑釉陶器>

地区 器種	政庁	政庁（北端）	政庁南面			政庁西方	西門・五万崎	金堀	六月坂	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	東辺	北辺	多賀城廃寺	合計	
			城前官衙	南大路	鴻の池													破片数（点）	割合（%）
碗	5	5	28			2	4	142	2	8	34	3		19	1	1	11	265	57.2
皿	0	1	3			1	38	2		7				4	2	1	2	61	13.2
碗・皿	3		6	1	2	13	53	1		12				1				92	19.9
壺・瓶	1		1		2	1	4			7				8				24	5.2
その他			1			1	14		1	4								21	4.5
合計	9	6	39	1	6	20	251	5	9	64	3	0	0	32	3	2	13	463	100

<灰釉陶器>

地区 器種	政庁	政庁（北端）	政庁南面			政庁西方	西門・五万崎	金堀	六月坂	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	東辺	北辺	多賀城廃寺	合計	
			城前官衙	南大路	鴻の池													破片数（点）	割合（%）
碗	9	8	61	1	6	1	96	1	7	235	7		1	90			34	558	42.3
皿		1	16		3		26		1	98	3		1	15	1		2	167	12.7
碗・皿	2		13		4		14			124		1		5				162	12.3
壺・瓶	15	30	23	3	16	8	81		7	179	16	7	1	10	3		13	411	31.2
その他	1	1	2				7			8								20	1.5
合計	27	40	115	4	29	9	224	1	15	644	26	8	3	120	4	0	49	1,318	100

第19表 緑釉・灰釉陶器の器種構成

<緑釉陶器>

地区 産地	政庁	政庁（北端）	政庁南面			政庁西方	西門・五万崎	金堀	六月坂	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	東辺	北辺	多賀城廃寺	合計	
			城前官衙	南大路	鴻の池													破片数（点）	割合（%）
猿投	2	5	31			5	111	1	8	28				13	1			205	44.3
猿投？							13			4				1			2	20	4.3
尾北？																	9	9	1.9
東濃？														3				3	0.7
東海西部	1		3	1	2	8	22	2	1	18	1			13	2	1		75	16.2
東海	1		1				5											7	1.5
洛北	1		4		1	2	82			5						1	2	98	21.2
洛北？	1						2			1								4	0.8
山城・篠	1						7	1		1				2				12	2.6
山城・篠？										4								4	0.9
近江		1			1	3		1		1	2							9	1.9
近江？	2																	2	0.4
猿・北					2	1	7											10	2.2
濃・近										2								2	0.4
不明						1	2											3	0.7
合計	9	6	39	1	6	20	251	5	9	64	3	0	0	32	3	2	13	463	100

<灰釉陶器>

地区 産地	政庁	政庁（北端）	政庁南面			政庁西方	西門・五万崎	金堀	六月坂	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	東辺	北辺	多賀城廃寺	合計	
			城前官衙	南大路	鴻の池													破片数（点）	割合（%）
尾張	2	3	40			2	1	128	1	8	186	4	4	1	11	3	8	402	30.5
尾張？	2	2	22			3		25		110					9		3	176	13.4
東濃	17	23	20	3	15	5	19		5	90	11	3	2	39	1		2	255	19.3
東濃？	3	4	7					10		89	3	1		26			33	176	13.4
東海西部	2	7	19	1	8	3	34		2	155	5			24				260	19.7
三河？										1								1	0.1
東海東部			1							7								8	0.6
東海東部？											2			7				9	0.7
東海	1	1	6		1		8			6	1			3			3	30	2.3
不明														1				1	0.1
合計	27	40	115	4	29	9	224	1	15	644	26	8	3	120	4	0	49	1,318	100

第20表 緑釉・灰釉陶器の産地

緑釉陶器

<猿投窯・東海西部・東海産>

産地	期	編年	政庁	政庁(北端)	政庁南面	城前官衙	鴻の池	政庁西方	西門・五万崎	金堀	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	北辺	東辺	多賀城廃寺跡	合計
尾野編年	A	V新							2										2
		V新～VI古																	0
		VI古		1	2				1		1								6
		VI古～中	1						8										9
		VI中	1	1				10	1	5				1	1				20
	B	VI中～新						1										1	2
		VI新					1	1											2
		VI新～VII古					1				1	1							3
		VII古														1			0
		VII古～VII中					1	1		1						2			4
	C	VII中													2				2
		VII中～新																	0
		VII新																	0
		VII	1		1														2
		合計	3	1	3	1	2	2	23	1	1	7	1	0	0	3	1	2	52

灰釉陶器

<尾張・東濃窯・東海西部・東海産>

産地	期	編年	政庁	政庁(北端)	政庁南面	城前官衙	鴻の池	政庁西方	西門・五万崎	金堀	東門・大畑	作貫	南門	南辺東	南辺西	北辺	東辺	多賀城廃寺跡	合計
尾野編年	A	V新				2			3	1	2								8
		V新～VI古							1		1								2
		VI古	1	1	8				13		8	1		1	6				39
		VI古～中				1			4		8								13
		VI中				10			8		45	1			9			2	75
	B	VI中～新	1	1	2				1	1					2				8
		VI新				1	2		1		6		1		3			1	15
		VI新～VII古	2						1										3
		VII古									1								1
		VII古～VII中	2		2				1		1	1		1					8
	C	VII中～新									2	1							3
		VII新					1												2
		VII新～VIII古									2								2
	D	VIII古～中						1											1
		VIII中～新	1																1
		合計	7	2	26	3	1	33	1	1	77	4	1	2	20	0	0	3	181

<洛北・洛西・山城・篠窯産>

産地	期	編年	政庁	政庁南面	城前官衙	西門・五万崎	金堀	東門・大畑	多賀城廃寺跡	合計
高橋編年	A	I				1				1
		I～II古	1	1	15		1		1	19
		II～III				1	1			2
	B	II新～III			2					2
	B～C	III～IV					1			1
	C	IV古～新	1			1	1	1		4
	合計		2	1	19	1	4	1	1	29

<東濃または近江・近江産>

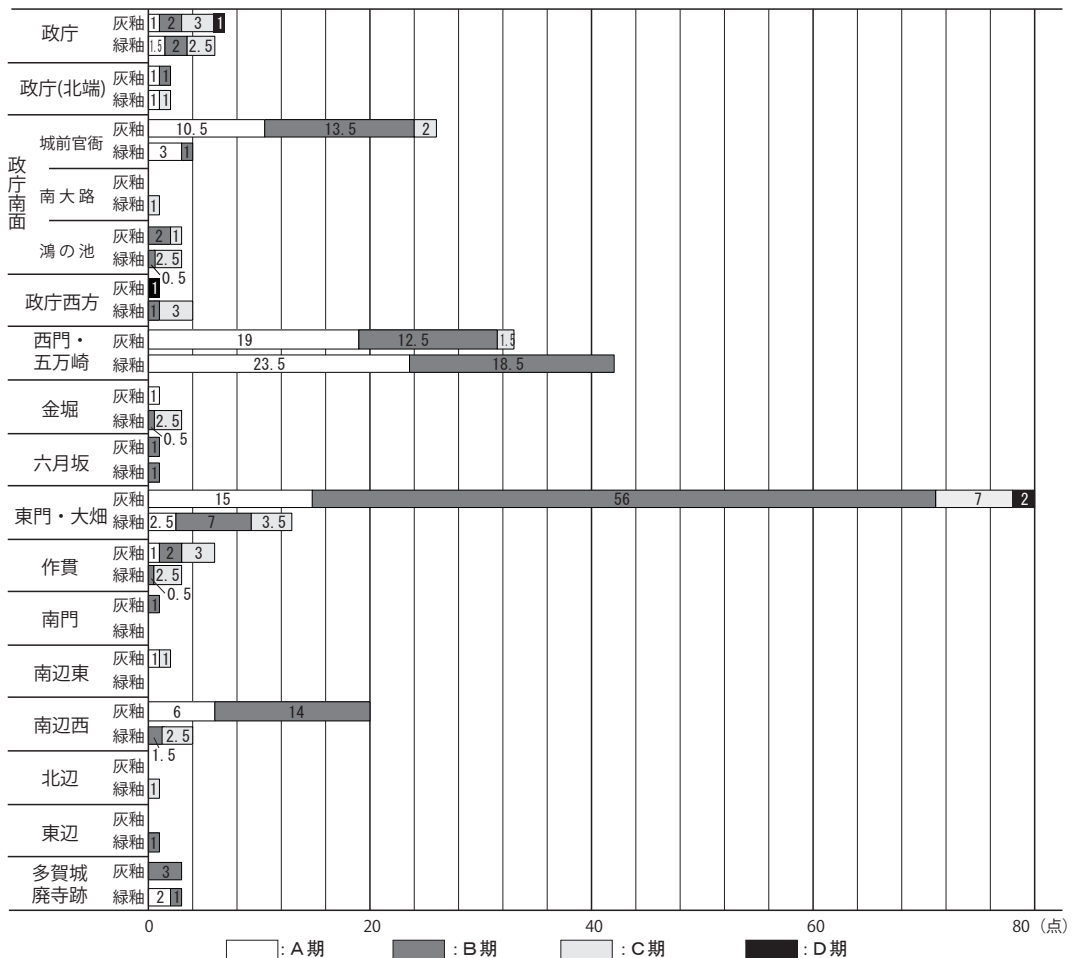
産地	期	編年	政庁	政庁(北端)	政庁南面	政庁西方	金堀	東門・大畑	作貫	合計
高橋編年	C	I						1		1
		II古			1	1	1	1		4
		II新		1				1		3
		II	1					1	2	2
	合計		1	1	1	2	1	1	2	10

<東海東部産>

産地	期	編年	東門・大畑	作貫	合計
鈴木編年	B	II	1	1	2
		III	1		1
	C	III～IV		1	1
		V	1		1
	D	合計	3	2	5

*いずれの産地も可能性があるものを含む。

第 21 表 緑釉・灰釉陶器塚・皿類の各編年の点数



第 54 図 各地区における緑釉・灰釉陶器塚・皿類の時期ごとの点数

(18/1,318 点) で非常に少ない。

地区別では、西門・五万崎地区で可能性があるものを含めて尾張産が 68.3% (153/224 点) を占め、東濃窯産は 13.0% (29/224 点) と少なく、政庁南面 (城前官衙) 地区は東海西部産が一定量存在するものの、尾張産が 53.9% (62/115 点) と半数以上となる。一方、政庁地区では東濃窯産が 74.1% (20/27 点) を占め、産地についても地区ごとの違いが認められる。

(4) 時期変遷

①緑釉・灰釉陶器

【時期区分】

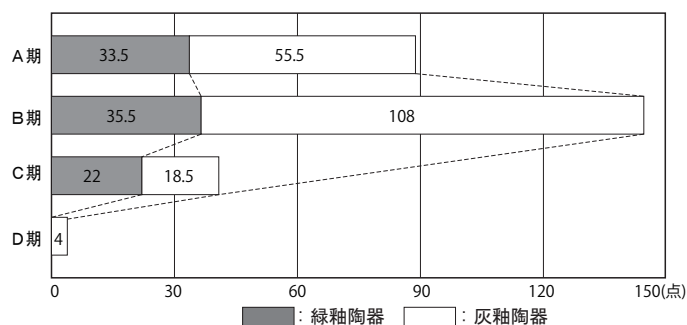
第 21 表は、時期比定可能な底部の残存する埴・皿類を編年ごとに点数をまとめたものである。それぞれの編年別にみていくこともできるが、緑釉・灰釉陶器全体の時期変遷が捉えにくくなってしまうことから、本書では第 1 表で示した併行関係をもとに、各編年の出土量の変化や産地の推移から、大きく A～D 期の 4 時期に区分する。すなわち、A 期 (9 世紀前半～中葉)：尾張産の尾野編年 V 期新～VI 期古、洛北窯・山城産の高橋編年 I 期～II 期古にあたり、緑釉陶器では後者が主

体で、灰釉陶器では尾張産がほとんどの時期。B 期 (9 世紀後半～10 世紀前半)：尾張・東濃窯・東海西部・東海産の尾野編年 VI 期中～新、山城・篠窯産の高橋編年 II 期新～IV 期古、東海東部産の鈴木編年 II 期にあたり、出土量が最も多い時期。緑釉陶器では山城・篠窯産が減少して猿投窯産が主体となり、灰釉陶器では尾張産だけでなく東濃窯産が一定量存在するようになり、東海東部産もわずかにみられる。C 期 (10 世紀前半～11 世紀初頭)：尾張・東濃窯産の尾野編年 VII 期、山城・篠窯産の高橋編年 IV 期新～V 期、近江産の高橋編年 I～III 期、東海東部産の鈴木編年 III～IV 期にあたり、前時期に比べ出土量が急減する時期。編年上は前半と後半に分けることも可能であるが、資料数が少なく、明確に分けられるものも限られることから一括した。緑釉陶器では東海西部産と近江産が大半を占め、灰釉陶器は東濃窯産が主体で、尾張産はほとんどみられなくなる。D 期 (11 世紀前半～後半)：尾張・東濃窯産の尾野編年 VIII 期、東海東部産の鈴木編年 V 期にあたり、出土量が極めて少ない時期。この時期区分をもとに、以下では全体の傾向や、出土量の多い政庁南面 (城前官衙) 地区、西門・五万崎地区、東門・大畑地区を中心に各期の状況についてみていく。

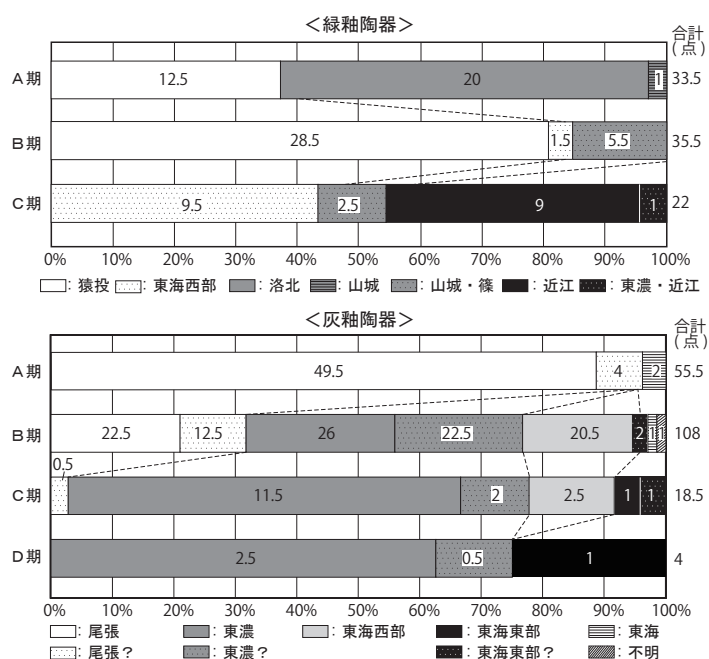
【全体の傾向】

各期の緑釉・灰釉陶器埴・皿類を地区ごとに計数して図化したのが第 54・55 図である。A 期から B 期、あるいは C 期から D 期などのように明確に分けられないものについては、A 期 0.5 点、B 期 0.5 点というように数値を均等割りして計数した。その結果、緑釉・灰釉陶器全体で A 期 89 点、B 期 143.5 点、C 期 40.5 点、D 期 4 点と変遷する状況が確認できる。

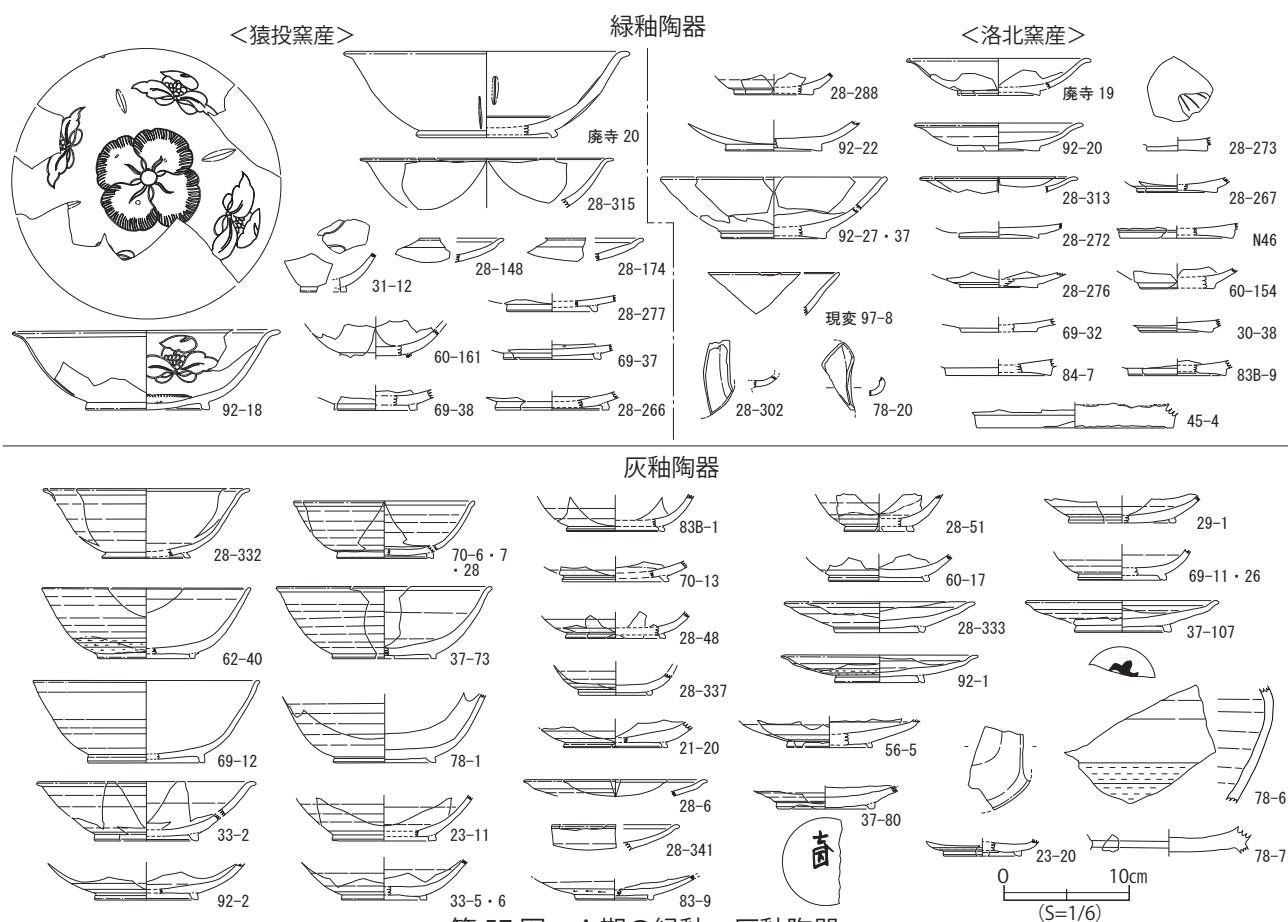
緑釉・灰釉陶器の割合をみれば、緑釉陶器は A 期に 37.6% (33.5/89 点) で、B 期に 32.9% (35.5/108 点)



第 55 図 時期ごとの緑釉・灰釉陶器埴・皿類の点数



第 56 図 緑釉・灰釉陶器埴・皿類の時期ごとの産地の変遷



第 57 図 A 期の緑釉・灰釉陶器

と低くなるが、C 期は 54.3% (22/40.5 点) となり、全体の出土量が少なくなる C 期に再び高くなる。こうした埴・皿類の状況に対し、壺・瓶類をみた場合、時期比定可能な口頸部や底部を計数すると、緑釉陶器は A 期 3 点、B 期 4 点、C 期 3 点とほとんど変化せず、灰釉陶器についても A 期 13 点、B 期 15 点、C 期 15 点、D 期 1 点で、D 期を除き顕著な減少傾向はみられない^(註 10)。つまり、C 期においては灰釉陶器埴・皿類が急減している状況を指摘でき、注目すべき現象といえる。

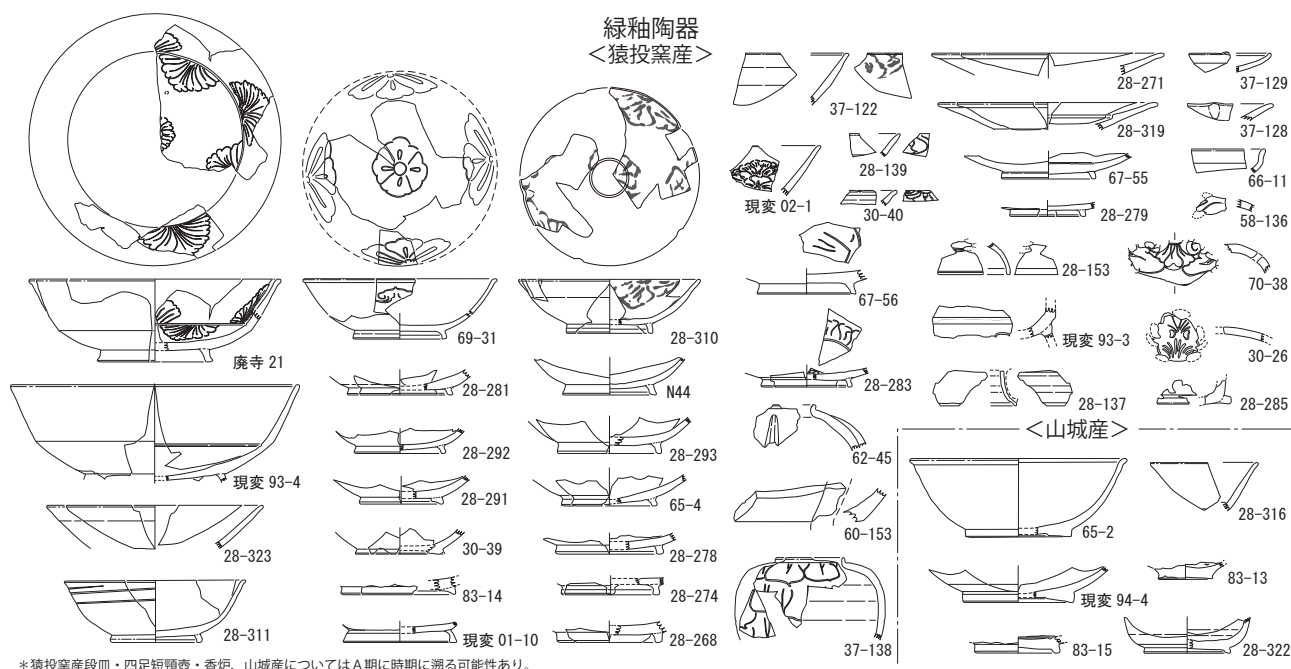
時期ごとの産地の変遷について (第 56 図)、緑釉陶器は猿投窯産、東海西部産、洛北窯産、山城・篠窯産、近江産にまとめてみたところ、A 期は洛北窯産が 59.7% (20/33.5 点) で主体となるが、B 期は猿投窯産が 80.3% (28.5/35.5 点) と大半を占め、洛北窯産を含めた山城・篠窯産は 15.5% (5.5/35.5 点) に減少し、C 期には東海西部産が 43.2% (9.5/22 点)、近江産が 40.9% (9/22 点) で拮抗する。

灰釉陶器では、A 期は尾張産がほとんどであるが、B 期には可能性があるものを含めても 32.4% (35/108 点) となり、かわって東濃窯産とその可能性のあるものが 44.9% (48.5/108 点) 存在し、わずかに東海東部産の可能性のあるものがみられる。そして C 期は尾張産がほとんど確認できず、東濃窯産が 80.0% (13.5/18.5 点) を占め、D 期は東濃窯産とその可能性のあるものや東海東部産が確認できる。

【A 期】(第 57 図)

西門・五万崎地区では 42.5 点 (緑釉 23.5 点 / 灰釉 19 点) 確認でき、他地区と比較しても最も出土が多い。緑釉陶器で主体となるのは洛北窯産であり (28-288、92-20・22・37 など)、内面に陰刻の施されるものもみられる (28-273)。一方、猿投窯産では 28-266 や 92-18 のように最も古い時期のものが存在し、特に 92-18 は口径が 21.2cm と大きく、こうした大型品は平安宮・京でも出土例に限られる希少品である (京都市文化市民局 2016、『年報 2018』)。灰釉陶器についても 28-48・332、92-2 など同様の時期のものが確認でき、こうした資料がまとまって確認できる点がこの地区の 1 つの特徴といえる。

政庁南面 (城前官衙) 地区では 13.5 点 (緑釉 3 点 / 灰釉 10.5 点) 確認でき、緑釉陶器では洛北窯産の



耳皿（78-20）といった特殊な器形のものがみられ、灰釉陶器では大小の法量の異なる埴（69-11・12）がみられる。

東門・大畑地区は 17.5 点（緑釉 2.5 点 / 灰釉陶器 15 点）である。灰釉陶器主体であり、埴（62-40）だけでなく段皿（56-5）や耳皿（23-20）など、複数の器種がみられる。

その他の地区では、政庁西方地区において洛北窯産の大型の緑釉陶器瓶（45-4）が出土しており、南辺西地区では墨書の確認できる灰釉陶器皿が 2 点（37-80・107）みられる。

【B期】(第 58 図)

西門・五万崎地区は 31 点（緑釉 18.5 点 / 灰釉 12.5 点）で、全体の出土量は減るものの、緑釉陶器の占める割合は A 期の 55.3% (23.5/42.5 点) から 59.7% とわずかに高くなる。緑釉陶器は猿投窯産が多く、埴・皿類はヴァリエーションが豊富で、口縁部が直線的にのびるもの (28-323)、幅狭の蛇の目高台のもの (28-291、30-39、83-14)、陰刻花文や緑彩をもつもの (28-139・283・310、30-40) がある。ほかにも A 期に遡る可能性はあるが、段皿や透孔が穿たれ陰刻花文の施された香炉蓋 (28-153、30-26) や火舎香炉 (28-285)、そして洛西窯産の唾壺 (28-322) も確認でき、多様な器種構成である。灰釉陶器は埴・皿類の出土は少なくなるが、長頸瓶 (28-65、30-12) が確認できるようになる。

政庁南面（城前官衙）地区は 14.5 点（緑釉 1 点 / 灰釉 13.5 点）で A 期に比べわずかに出土量が増える。灰釉陶器主体であるが、内面だけでなく外面にも陰刻の施された緑釉陶器埴 (69-31)、A 期まで遡る可能性がある香炉蓋 (70-38) など特殊な器種が出土している。

東門・大畑地区は 63 点（緑釉 7 点 / 灰釉 56 点）で、B 期の多賀城のなかで最も出土が多い。灰釉陶器主体で、埴は口径 11cm 前後のもの (60-2) から 18cm 前後のもの (23-44) まで多様な法量があり、尾張・東濃窯産以外にも東海東部産またはその可能性があるものもみられる (36-3、60-7)。皿は口径 15cm 前後のもので (58-126、60-6、62-35)、ほかにも広縁と狭縁の段皿 (58-48、60-104)、墨書「契」の書かれたもの (60-3) が確認できる。緑釉陶器は 11.1% (7/63 点) と少ないが、A 期に遡る可能性のある猿投窯産の四足短頸壺 (60-153、62-45) のような特殊器種が出土している点は注目される。

その他の地区では、六月坂地区において復元口径 22.6cm の猿投窯産の緑釉陶器稜埴 (現変 93-4) や、A 期に遡る可能性のある香炉 (現変 93-3) が出土しており、前者は多賀城で最も口径の大きいもので希少性が高く、後者は方形の透孔が穿たれ、他地区ではみられないものである。南辺西地区は灰釉陶器主体であるが、外面に陰刻花文が施された猿投窯産の緑釉陶器短頸壺 (37-138) がみられる。多賀城廃寺跡では内面陰刻花文の施された緑釉陶器稜埴 (廃寺 21) や灰釉陶器段皿 (廃寺 18) のほか、A 期に遡る可能性のある浄瓶 (廃寺 1) が出土し、仏教系の資料として貴重なものである。

【C期】(第 59 図)

西門・五万崎地区や政庁南面（城前官衙）地区では出土がほとんど確認できなくなる。一方、東門・大畑地区では 10.5 点（緑釉 3.5 点 / 灰釉 7 点）と減少はするものの、東海西部産の緑釉陶器埴 (54-1)・皿 (60-169)、山城・篠窯産の埴 (60-152、65-3) がみられる。灰釉陶器では東濃窯産またはその可能性がある深埴 (58-82)・広口瓶 (63-3、68-5)、そして東海東部産の皿 (56-38)、三河産の可能性のある蓋 (14-4) など、各産地の多様な器種が確認できる。

その他の地区では、政庁地区は 5.5 点（緑釉 2.5 点 / 灰釉 3 点）でこの時期の出土が最も多い。また全体の出土数は少ないものの、政庁南面（鴻の池）地区や作貫地区、政庁西方地区も A・B 期に比べこの時期の出土が多く、政庁南面（鴻の池）地区では東海西部産や近江産の緑釉陶器埴 (86-5、90-10)、東濃窯または近江産の広口瓶 (86-4) が出土している。

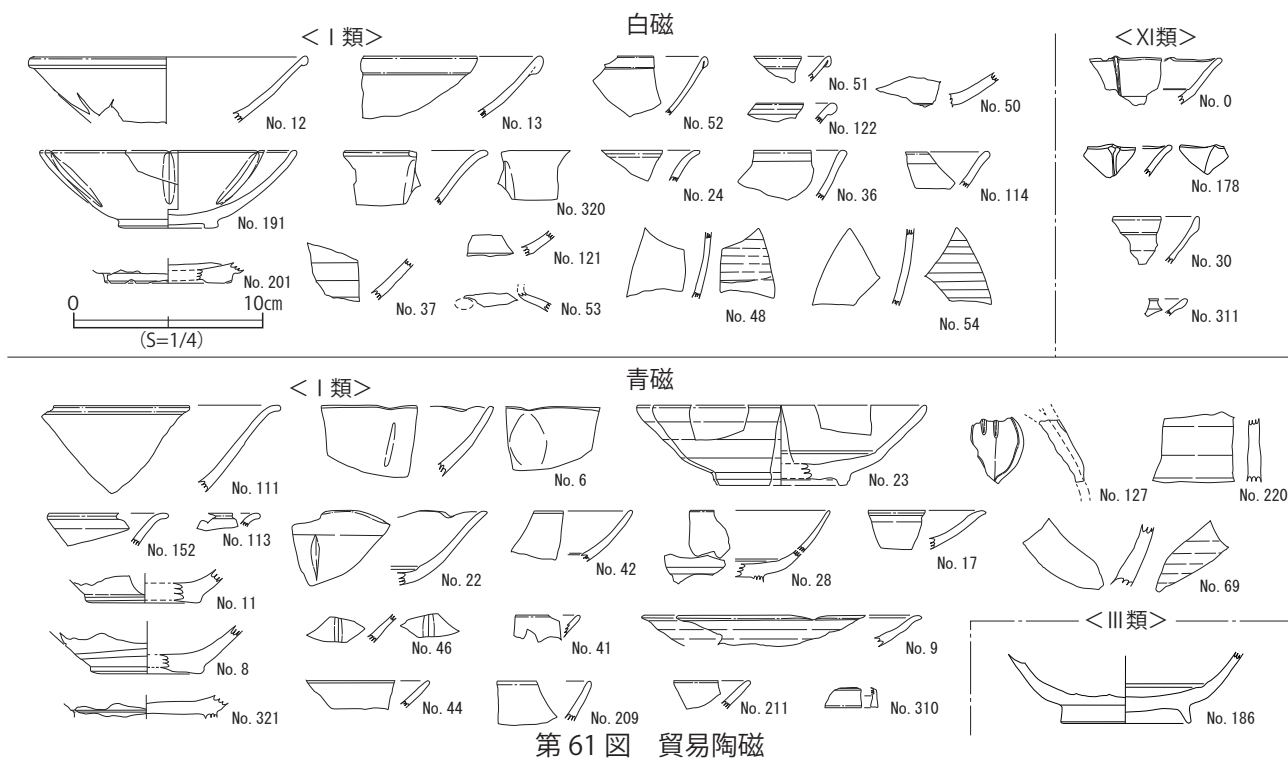
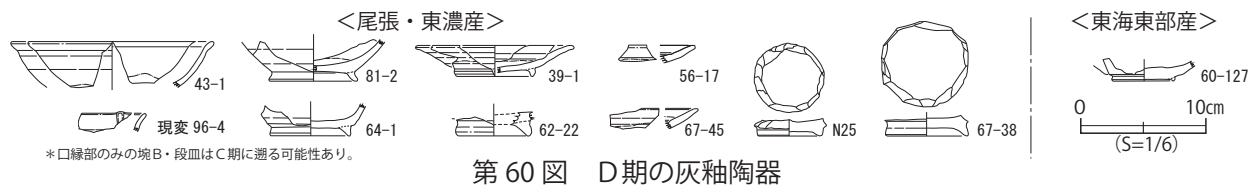
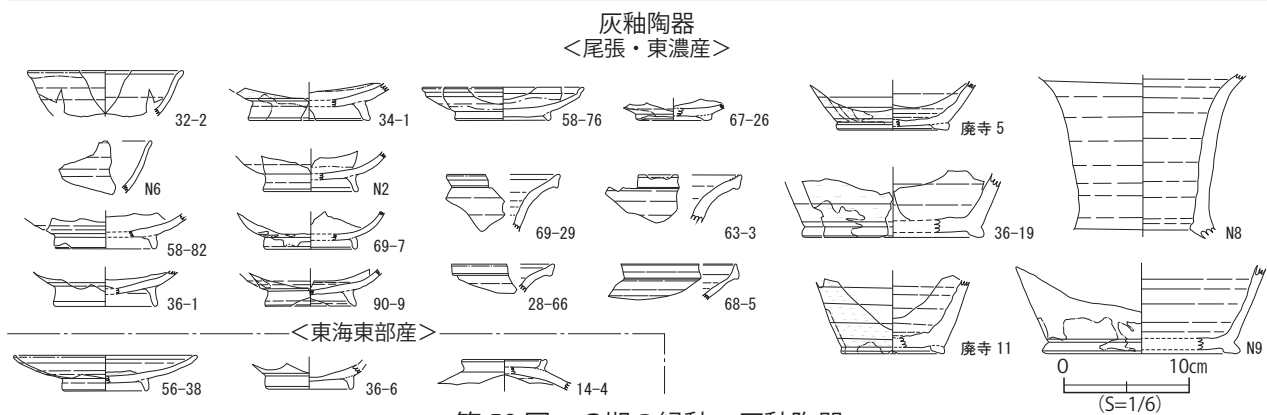
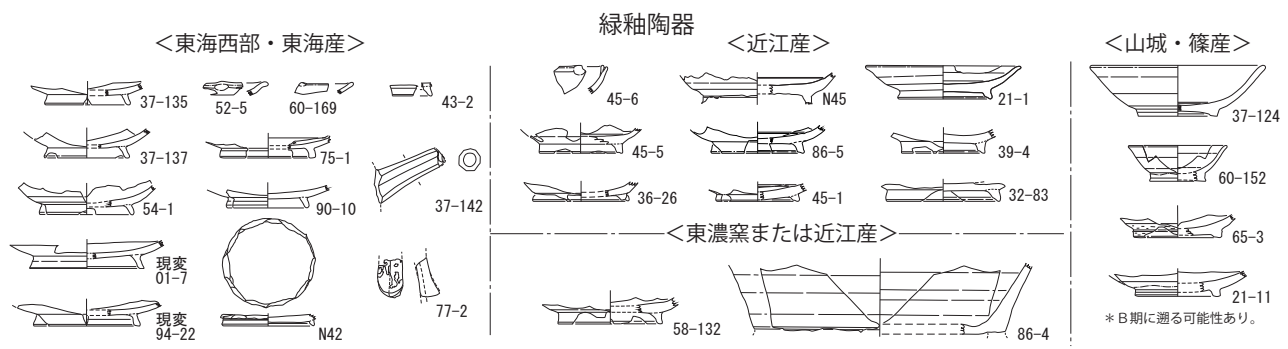
【D期】(第 60 図)

D 期は全体の資料数が極めて少ないが、出土するのは政庁地区・政庁西方地区・作貫地区で、C 期の出土が高い地区で確認できる傾向にある。器形の分かるものには埴 B (43-1・現変 96-4)・埴 (81-2)・段皿 (39-1、56-17、67-45)・瓶 (64-1) があり、少ないながら複数の器種が確認できる。

②貿易陶磁 (第 61 図)

白磁は I 類が 26 点、XI 類が 3 点、XI 類の可能性のあるもの 2 点が出土している。I 類は 8 世紀末～10 世紀中頃、XI 類は 10 世紀後半～11 世紀中頃とみられることから、10 世紀後半以降に出土が減る傾向を指摘できる。東北地方において確実な白磁 XI 類は青森県八戸市大仏遺跡 SI10 出土例 (八戸市教委 2000) のみで、そのほかは全て白磁 I 類であり、多賀城でこれらが複数点出土するのは、特筆すべき事例といえる。

分布としては、I 類は政庁地区 1 点、政庁地区（北端）2 点、政庁南面（鴻の池）地区 1 点、西門・



五万崎地区 5 点、東門・大畑地区 8 点、南辺西地区 9 点、広い範囲で確認できるのに対し、Ⅺ類は可能性があるものを含め政庁地区 1 点、政庁地区（北端） 1 点、政庁南面（鴻の池）地区 2 点、政庁西方地区 1 点、政庁周辺の地区に限られる。

碗・皿類には、口縁部が玉縁状を呈するⅠ-1 類が 5 点（No. 12・13・51・52・122）に対し、外反するⅠ-2 類または 5 類（No. 24・36・114・191・320）が 5 点と同数確認できるのが特徴的である。高台の分かるものは少ないが、蛇の目高台（No. 201）と輪高台（No. 191）のものがある。Ⅺ類には口縁部に輪花をもつもの（No. 0・178）と玉縁状のもの（No. 30・311）がある。

青磁は、越州窯系青磁Ⅰ類が 29 点、Ⅲ類が 1 点、Ⅰ類がほとんどである。Ⅰ類は 8 世紀末～10 世紀中頃、Ⅲ類は 10 世紀後半～11 世紀中頃とみられることから、白磁と同様に 10 世紀後半以降に出土が減る。分布としては、政庁地区（北端） 3 点、政庁南面（南大路）地区 1 点、西門・五万崎地区 9 点、六月坂地区 1 点、東門・大畑地区 8 点、南辺西地区 6 点と白磁Ⅰ類とほぼ同様の地区で出土している。

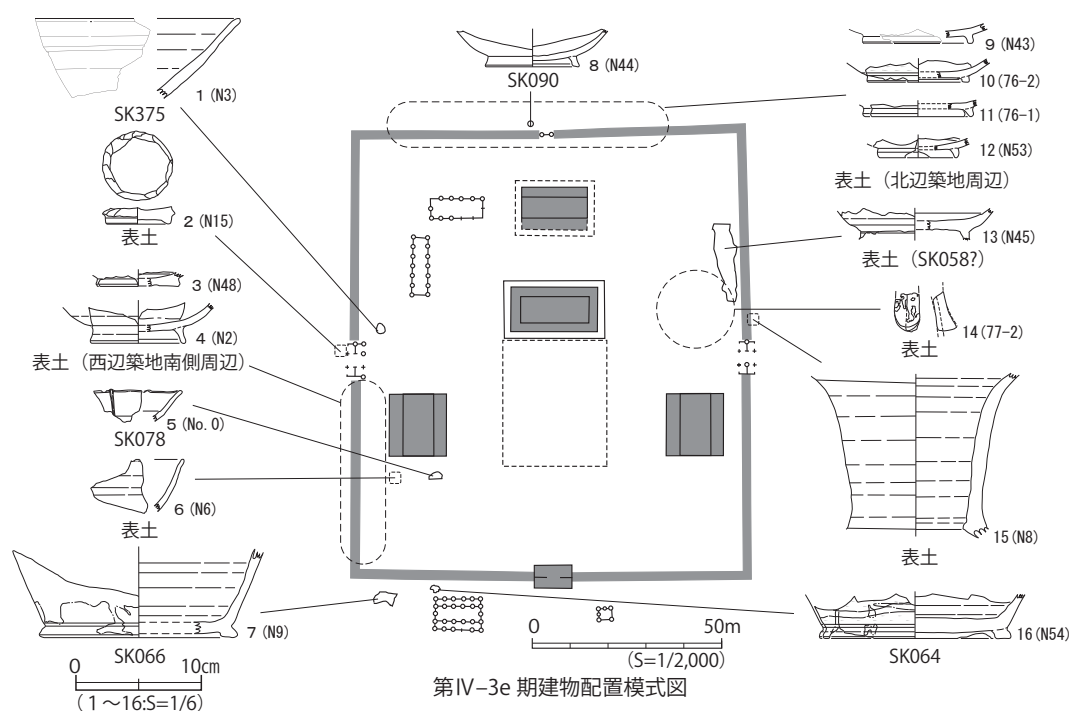
Ⅰ類で底部の分かるものは、蛇の目高台が 2 点（No. 8・11）、輪高台が 3 点（No. 23・28・321）で、後者の方が多い点の特徴的であり、さらに No. 23 に比べ No. 28・321 は高台幅が狭い。輪高台は低いものから高く幅の狭いものへ変化することが指摘されていることから（亀井 1986）、型式学的にやや新しく位置づけられる。このほかにも輪花をもつものが 4 点（No. 6・9・22・46）と少ないながら一定量存在する。

（５）遺構や共伴遺物からみた施釉陶磁器利用について

施釉陶磁器は多くが堆積層や表土からの出土であるが、少ないながら遺構出土資料も存在する。ここでは政庁地区、政庁南面（城前官衙）地区、東門・大畑地区、南辺西地区を対象に、その分布や周辺の遺構との関係、共伴資料、使用の痕跡に着目し、施釉陶磁器利用のあり方について検討する。

①政庁地区

政庁で出土した施釉陶磁器のうち、出土したグリッドから位置が特定できるもの、あるいはおおまかな出土位置の分かるものを図示したのが第 62 図である。第Ⅱ章でも触れたように、遺構出土例として SK064（16）・066（7）・078（5）・090（8）・375（1）があり、また表土でも出土位置が把握できるものでは、築地塀周辺で多い傾向にある。



遺構出土資料のうち、それぞれの施釉陶磁器の時期としては、8・16がB期、7がC期、5が10世紀後半から11世紀中頃でC～D期となるが、いずれも須恵系土器杯・皿が共伴している（『本文編』、『補遺編』）。須恵系土器は多賀城土器編年（白鳥1980、『本文編』）のE群土器で出現し、F群土器において主体となり、年代はE群が10世紀前半頃、F群を10世紀後半から11世紀中頃とみていることから（『補遺編』）、上記の遺構は10世紀以降の所産とみられる^{（註11）}。政庁では出土する土器の78%が須恵系土器で、10世紀以降の土器廃棄土坑も多数確認できる。つまり、緑釉・灰釉陶器はC期の出土が多く、また遺構出土例も多いことは、上記の状況を反映したものとみられ、特にSK078は西脇殿、SK064・066は政庁南門前殿に近接していることから、そこでの儀式に供された施釉陶磁器や在地の土器が一括廃棄されたものと推定できる^{（註12）}。

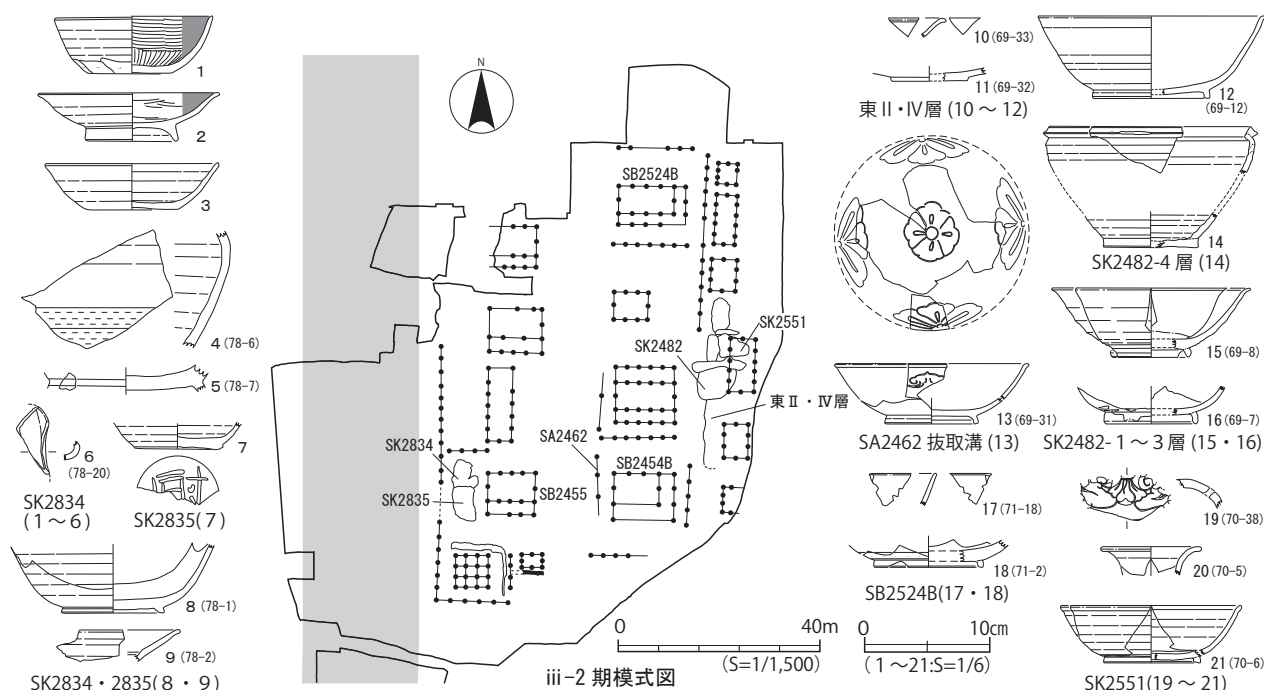
②政庁南面（城前官衙）地区

城前官衙で緑釉・灰釉陶器が複数点出土する遺構として、A期の洛北窯産緑釉陶器耳皿などが出土したSK2834（第63図1～6）や東Ⅱ・Ⅳ層（10～12）、緑釉・灰釉陶器碗が出土したSB2524B（17・18）、猿投窯産緑釉陶器香炉蓋やA期の灰釉陶器碗が出土したSK2551（19～21）、B期の緑釉陶器碗が出土したSA2462抜取溝（13）、C期の灰釉陶器深碗などが出土したSK2482（15・16）が挙げられる。

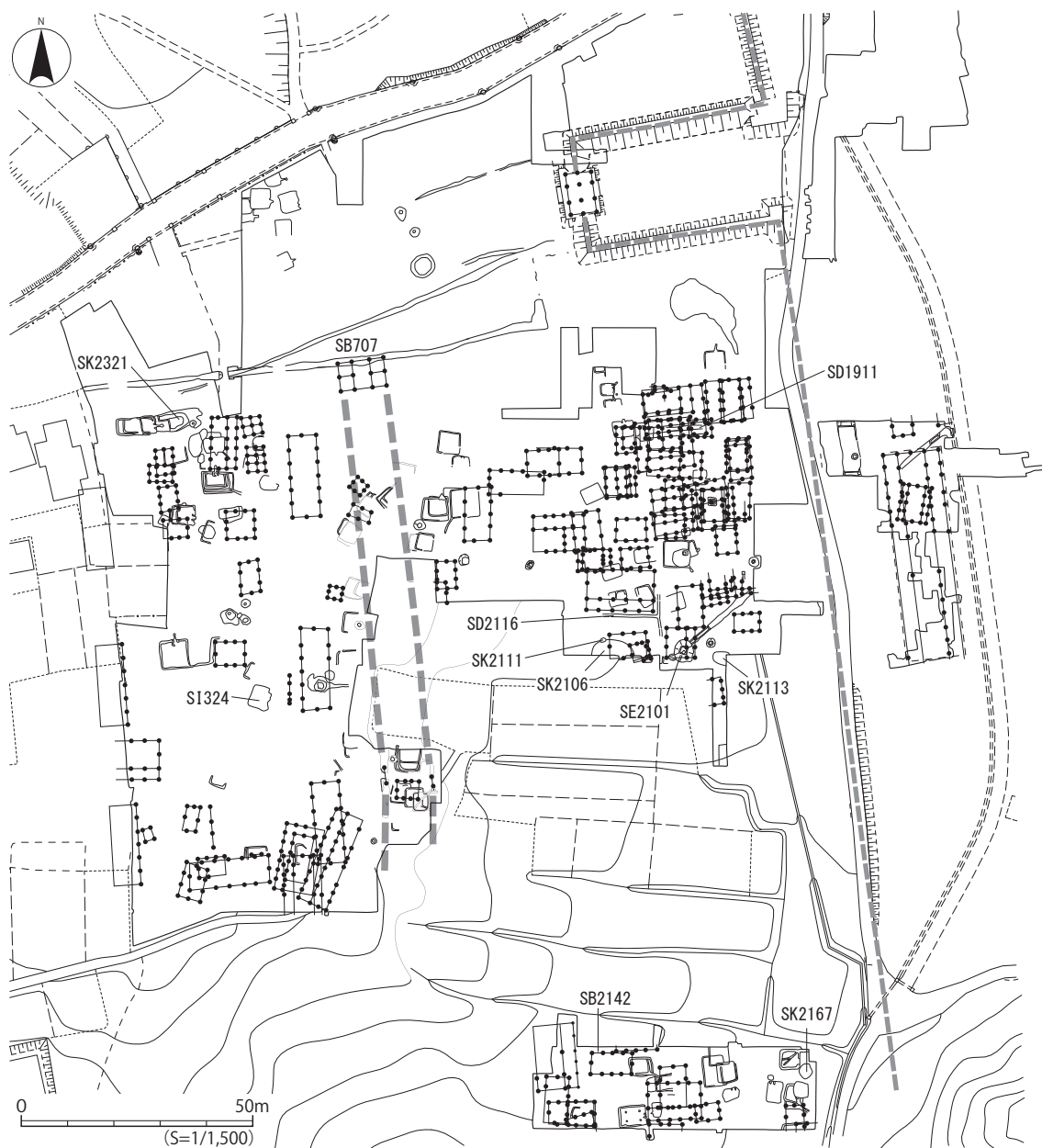
SK2834はⅢ-2期でも後半に位置づけられ（『政庁南面Ⅰ・Ⅱ』）、周囲に建物のない空間に土坑をつくり土器が廃棄された状況がうかがえる。共伴する土器は、C群土器でもSE2101B-Ⅱ・Ⅲ層出土例と類似し、年代は9世紀中葉～第3四半期頃とみられる。土師器杯や高台皿・高台碗・甕、須恵器杯・甕など多様な器種とともに施釉陶磁器が用いられたことが分かり、城前官衙で用いられた土器様相を知ることができる貴重な出土例である。加えて、ほぼ同位置で重複するSK2835からは底部に「厨」とへら書きされた須恵器杯（7）が出土しており、これらの土器が厨から供給されたことを示唆している^{（註13）}。

SA2462は城前官衙Ⅲ-2期のSB2454Bの西側を画す材木堀であり、その廃絶に伴い一括して抜取溝に廃棄されたと考えられ、SB2454B周辺で用いられた可能性もある。

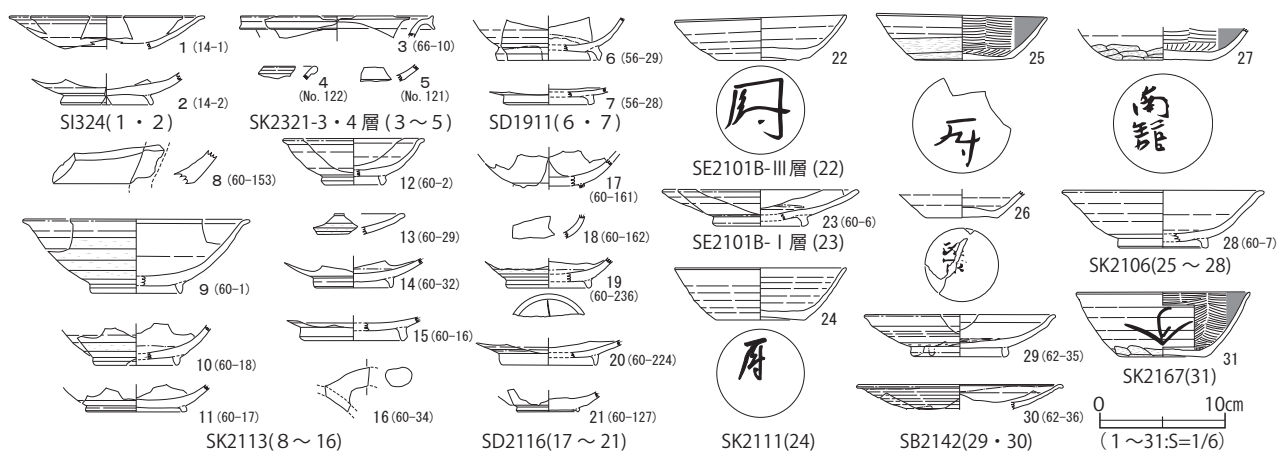
SK2482・2551はⅣ期に位置づけられ、これらが存在する東列は、第Ⅱ章でも述べたように中央列や西列に比べて緑釉・灰釉陶器の出土量が多い。またSK2482からは9世紀第4四半期頃とみられる篠窯産須恵器鉢（14）も出土し、Ⅳ期に施釉陶磁器や搬入土器も廃棄される空間として利用されていたと考えられる。



第63図 城前官衙における土器の出土状況



東門・大畑地区第13・14・53・54・56・58～67次遺構配置図



第64図 東門・大畑地区における土器の出土状況

③東門・大畑地区

東門・大畑地区で施釉陶磁器が複数出土した遺構として、B期の灰釉陶器碗または皿が出土したSB2142（第64図29・30）・SI324（1・2）・SE2101B（23）・SK2106（28）・SD1911（6・7）、A～B期の緑釉陶器四足短頸壺やB期の灰釉陶器碗が出土したSK2113（8～16）、B期の灰釉陶器長頸瓶や白磁碗の出土したSK2321（3～5）、緑釉陶器碗・瓶やB～D期の灰釉陶器碗の出土したSD2116（17～21）がある。

分布は大きくSB707とそこから南へのびる通路の西側と東側に分けられる。西側にはSI324やSK2321-3・4層があり、前者は第64図2からB期でも新し

い段階、後者は共伴する在地の土器がD～E群土器であることから（『年報1995』）、年代は9世紀第4四半期から10世紀前半頃とみられ、大畑地区D期で9世紀前半頃の北側へ「コ」の字形配置をとる掘立柱建物群が廃絶したあとに築かれたものである。第II章でも触れたように、西側では施釉陶磁器の出土が東側に比べ少ないことを踏まえれば、「コ」の字形配置をとる掘立柱建物群が機能した時期の西側の空間では、施釉陶磁器は積極的に用いられなかったといえるだろう。

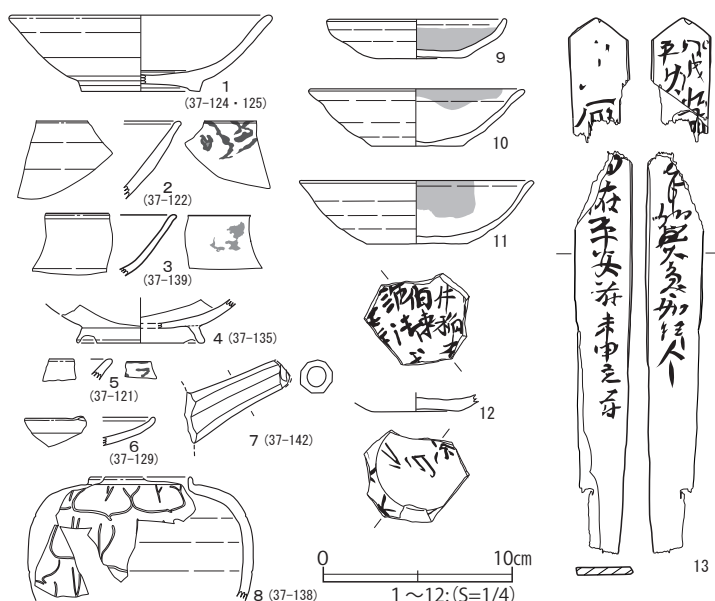
東側では、SK2106・2113、SE2101など第60次調査区でも南側の地点で多く認められ、共伴する土器は、SE2101B-I層やSK2106がC群土器でもSE2101B-II・III層出土例あるいはそれよりも新しい時期のもの（『年報1991』）、SK2113はD群土器（『年報1992』）で、9世紀中葉から9世紀第4四半期にかけてのものである。

共伴する墨書土器をみれば、SK2106からは「厨」（25）、「政所」（26）、「南館」（27）と書かれたものが出土している。この「厨」墨書土器の分布に注目すれば、SE2101B-III層（22）やSK2111（24）など施釉陶磁器の多い第60次調査区南側に集中し、これらが共伴するのはC群土器でもSE2101B-II・III層出土例あるいはそれよりも新しい時期のものを含む土器で、施釉陶磁器の出土する時期と重なる。このことから、これらの土器群は厨から供給されて廃棄された可能性があり、そのなかに施釉陶磁器も含まれていたとみられる。なお、第62次調査では土師器坏に「介」と書かれた墨書土器（31）が出土している。

④南辺西地区

第37次調査ではSD1221から施釉陶磁器が多数出土しているが、そのなかで注目すべきは、被熱した緑釉陶器が多く確認できる点である。層位別でみれば、B-4層で7点と最も多く（4・6）、B-3層は6点（3・8）、B-1層は1点（7）、A-2層は3点（1・2・5）、A-1層は1点認められる。被熱の痕跡は灰釉陶器ではみられず、それらがまとまって出土する地区は南辺西地区のみで、この地区の特徴といえる。

こうした使用の痕跡を考えるうえで参考となるのが、B-4層から出土した多賀城跡第72号木簡である（第65図13）。第72号木簡には表面に「百怪平安符未申立符」、裏面に「奉如実急々如律令」と書かれており、災いをもたらす百怪を鎮めるため、未申（西南）の方向にこの符を立てるとともに幣帛をささげるという内容である（『木簡I』：pp.28-29）。出土地点が多賀城外南西であることから、都城の宮・京城の四隅などで行われた鬼魅や疫神の侵入を防ぐための道饗祭との類似が指摘されている（平川1981、山里2005）。この木簡に加え、同層からは油煙の付着した須恵系土器坏・小皿（9～11）や「件稻」「百束」と書かれた墨書土器（12）も出土し、『延喜式』巻一道饗祭条の祭料には稻も含まれることから、木簡以外の共伴遺物からもその祭祀の様子がうかがえる。なお、B-4層から出土する土器はF群土器でも古いSK058出土例に併行す



第65図 SD1221出土の被熱した緑釉陶器と灯火器・墨書土器・木簡

る時期のもので、10 世紀後半頃とみられる。

これらの共伴遺物や、B-4 層で被熱したものが多いことを踏まえれば、緑釉陶器が道饗祭で用いられた可能性が指摘できる。ただし、被熱した緑釉陶器は全てが同時期に用いられたわけではなく、層位的に古いものにも認められる。そうした祭祀が B-4 層以前から行われていたかどうかを含め、更なる検討が必要である。

2. 多賀城城外出土例との比較

(1) 緑釉・灰釉陶器

多賀城の南面には、方格地割の確認されている山王・市川橋遺跡や、多賀城跡の東側に位置する西沢遺跡、多賀城廃寺跡に隣接する高崎遺跡があり、合わせて 2,000 点以上の緑釉・灰釉陶器が報告されている。ここでは出土破片数や 100 m²あたりの点数が報告されている山王遺跡多賀前地区（宮城県教委 1996ab）、山王遺跡千刈田地区（多賀城市教委 1991a・1993）、市川橋遺跡高平地区（多賀城市教委 2001・2004、本書）と比較し、多賀城城内と城外の違いを検討する。

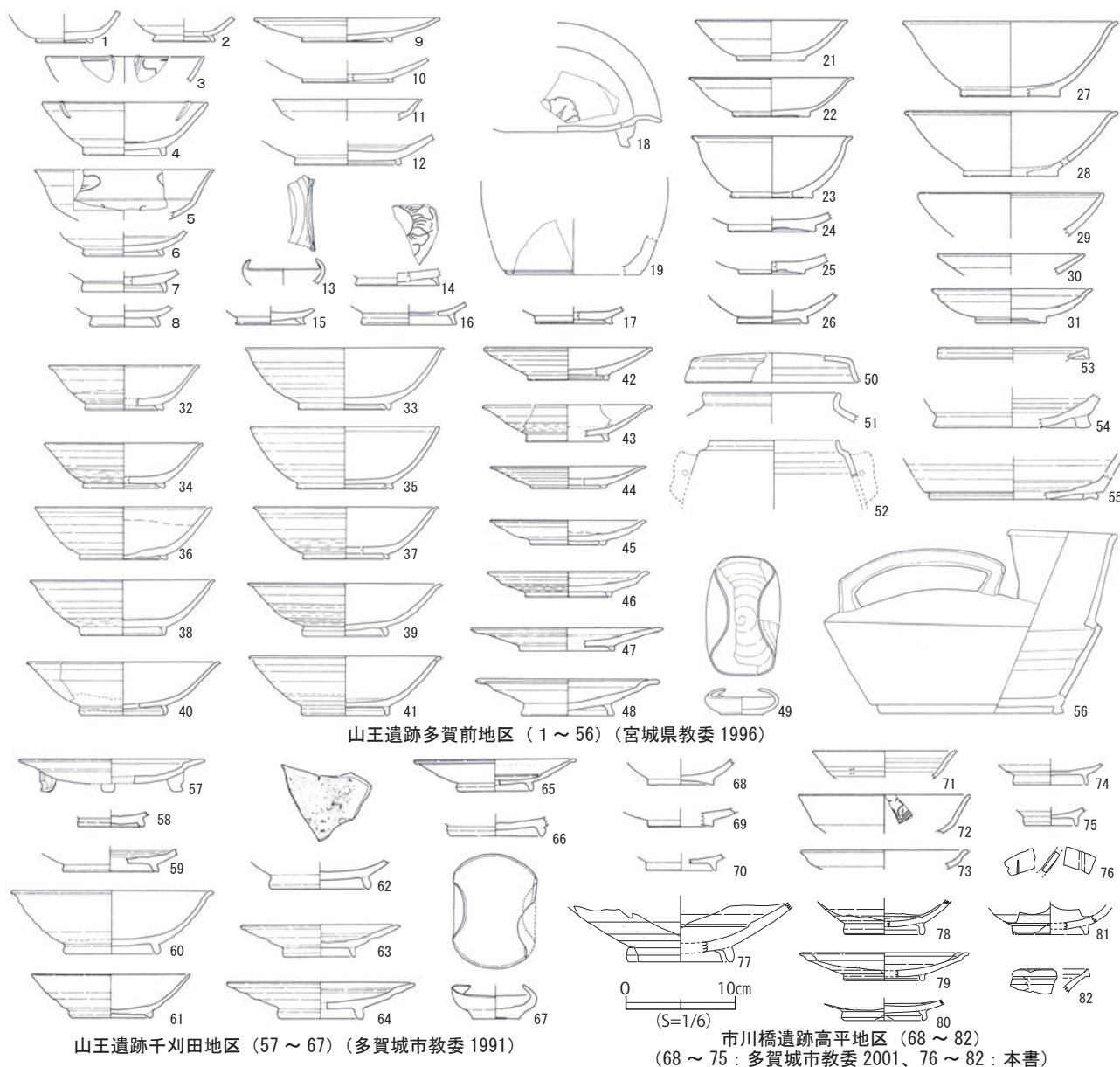
①山王遺跡多賀前地区

方格地割の北 1 西 3 区、南 1 西 2 区、南 2 西 1 区にあたり（第 67 図方格地割図参照）、調査の結果、北 1 西 3 区は 9 世紀後半頃に 1 町占地で街区の南側において建物が「コ」の字状に配置され、小規模な倉庫を多数伴う建物群が形成されることから、国司の館と推定されている。同様に南 1 西 2 区では、9 世紀中葉頃に街区南東側で「コ」の字状の配置をとる建物群や遣り水状遺構が存在すること、多量の施釉陶磁器や木製品・金属製品など多様な遺物が出土すること、「守」の墨書土器が 5 点出土していることなどから、国司の館とみられる。南 2 西 1 区では、9 世紀前半から後半頃に小規模な掘立柱建物や工房の可能性がある堅穴建物で構成され、10 世紀前半頃には街区南側で規則的に掘立柱建物が並び、「西曹司」と書かれた墨書土器が出土している。

緑釉・灰釉陶器全体の出土破片数は、緑釉陶器 313 点（20.8%）、灰釉陶器 1,194 点（79.2%）で灰釉陶器が卓越し、100 m²あたりの破片数は 6.1 点（緑釉 2.4 点／灰釉陶器 3.7 点）となる。街区別では、遺構出土資料の場合、北 1 西 3 区は緑釉陶器 36 点（24%）、灰釉陶器 114 点（76%）、100 m²あたり 4.19 点（緑釉 1.01 点／灰釉 3.18 点）、南 1 西 2 区は緑釉陶器 90 点（27.8%）、灰釉陶器 233 点（72.2%）、100 m²あたり 9.05 点（緑釉 2.52 点／灰釉 6.53 点）、南 2 西 1 区は緑釉陶器 3 点（15%）、灰釉陶器 17 点（85%）、100 m²あたり 0.23 点（緑釉 0.03 点／灰釉 0.21 点）で、南 1 西 2 区での出土が目立つ。

器種構成は遺構出土資料の場合、緑釉陶器は埴・皿類 174 点で壺・瓶類 2 点、壺蓋 1 点でほとんどが埴・皿類である。灰釉陶器は埴・皿類が 549 点、壺・瓶類が 160 点、壺蓋が 2 点で、埴・皿類が 77.2%と 3/4 以上を占める。産地では、緑釉陶器は洛北窯産が 157 点で 50.1%、洛西窯産 28 点を含めると 59.1%にのぼり、猿投窯産は 118 点で 37.7%と 4 割に満たず、尾北または美濃産や近江産などは 10 点と非常に少ない。灰釉陶器は猿投窯産が 1,105 点で 92.5%を占める（註 14）。

時期別では、緑釉陶器は明確な時期比定はされていないが、洛北窯産埴・皿類の多さが示すように（第 66 図 21～23・27～30）、本書の A 期が多いとみられ、猿投窯産は少ない（1・9・10・12）。B 期は猿投窯産が主体となり、埴（2・7・8）や稜埴（5・6）、輪花や陰刻花文の施される埴（3・4・14）がみられ、洛西窯産も少量出土している（24～26・31）。しかし C 期のものは尾北または美濃産とされたもの（15・16）や近江産（17）がわずかにあるのみである。灰釉陶器は黒笹 14 号窯式とされたものが 172 点で（32～37・42～48）、黒笹 90 号窯式とされたものは 120 点（38～41）と前者の方が多く、それ以降のものは出土していないようである。そのほか、壺・瓶類が一定量出土している（50～56）。黒笹 14 号窯式は本書の A 期、黒笹 90 号窯式は B 期におおむね併行することから、緑釉陶器と同様、A 期に出土のピークがあるといえる。



第 66 図 多賀城城外出土の緑釉・灰釉陶器

②山王遺跡千刈田地区

方格地割の北 1 西 7 区にあたり、調査の結果、10 世紀前半頃に 9 × 4 間の東西棟の四面廂付建物を主屋として、南西に南北棟建物を配した建物群が検出された。また「右大臣殿 餞馬収文」と書かれた題箋軸が出土し、右大臣就任に際して餞馬を贈る可能性が高いのは国守クラスと考えられることから、国司館と推定されている。

出土破片数の詳細は不明であるが、100 m²あたりの破片数は 22.3 点（緑釉 1.2 点／灰釉 21.1 点）とされる（宮城県教委 1996b）。緑釉陶器は全体の 5.3%と少ないが、東海産の埴（59）や三足盤（57）、山城産の埴（58）がある。灰釉陶器は黒笹 14 号窯式が全体の 27.8%で多賀前地区より割合が低く、黒笹 90 号窯式が 37.8%で最も高い数値を示すが（60・62 ~ 65）、折戸 53 号窯式は 2.4%とわずかであり（61・66）、東濃窯産は 26.8%みられる。

③市川橋遺跡高平地区

南北大路東側で東西大路の北側にあたり、方格地割が確認されていない地区で、多賀城市教育委員会の調査によって、南北大路に近いところでは 8 世紀末から 9 世紀中葉頃にかけて 10 × 2 間の大規模な南北棟建物が存在することが分かったが、それ以降は遺構数が減少し、多賀城跡第 22 次調査の成果にあるよ

うに、小規模な掘立柱建物や竪穴建物が展開する。

多賀城市教育委員会による市川橋遺跡第5・7・9・24・25次調査では、緑釉陶器30点(10.2%)、灰釉陶器263点(89.8%)が出土している(多賀城市教委2001: pp. 161-163)。多賀城跡第22次調査では緑釉陶器8.1%、灰釉陶器91.9%でその割合は近似しており、100㎡あたりの破片数は1.09点(緑釉0.09点/灰釉0.97点)である。

市川橋遺跡第5・7・9・24・25次調査では、緑釉陶器は全て埴・皿類で、灰釉陶器は埴・皿類が99点で37.6%に対し、壺・瓶類が164点で62.4%と6割以上を占める。多賀城跡第22次調査では、緑釉は埴・皿類のみ、灰釉陶器は埴・皿類が64.7%、壺・瓶類が35.3%となり、壺・瓶類の割合が異なる。時期別にみれば、前者の場合、緑釉陶器の68・69は山城産で、平安京出土土器編年のⅡ期中とされ、本書のB期にあたる。灰釉陶器は74・75が黒笹90号窯式で、こちらもB期と考えられる。後者では77の緑釉陶器段皿がB期、灰釉陶器では79がA期、78・80・81がB期であり、全体的にみてB期が主体であったとみられる。

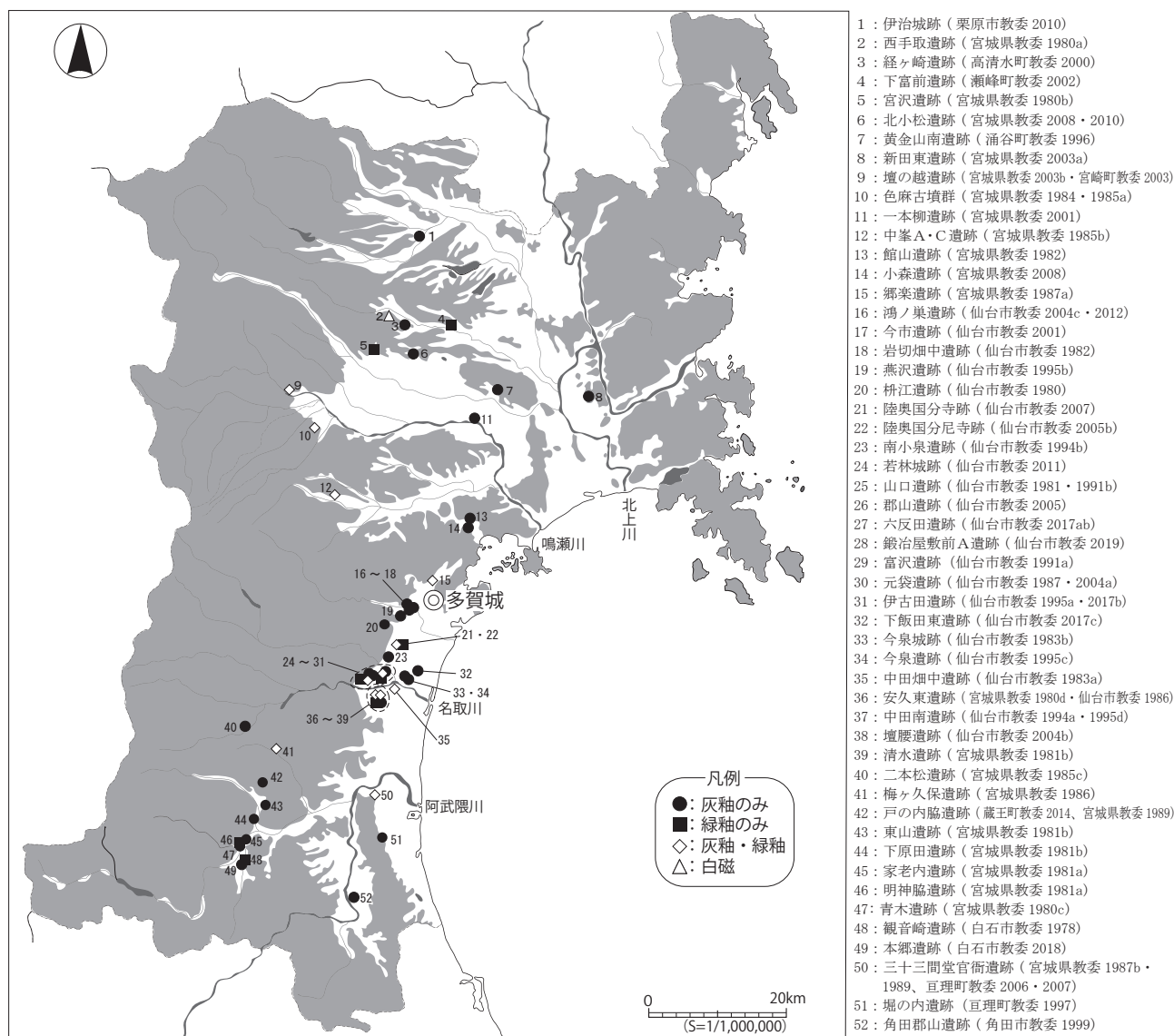
④多賀城城内との比較

以上の3例と比較した場合、まず着目すべきは緑釉陶器の占める割合で、城内では25.9%(461/1,779点、貿易陶磁を除いた数値)に対し、最も高い山王遺跡多賀前地区の20.8%を上回っている。ただし、国司館とみられる南1西2区では遺構出土のもので27.8%、工房や曹司の可能性のある南2西1区では15.0%、小規模な建物が展開する市川橋遺跡高平地区は15.0%で、城内と同様、街区の性格の差に伴ってその割合が異なっていたと考えられる。一方、同じ国司館でも北1西7区では100㎡あたり22.3点と多いが、緑釉陶器の割合は5.3%と低く、この点は今後の検討課題である。

次に産地をみれば、城内の場合、緑釉陶器は猿投窯産の可能性のあるものを含め48.6%と主体となり、洛北窯産は22.0%と少なく、多賀前地区とは逆の傾向である。また多賀前地区では近江産や尾北または美濃産は合わせて3.2%とわずかで、城内では尾北窯や東濃窯産を含む東海西部産が16.2%、近江産が2.3%と客体的ではあるが認められる。灰釉陶器は、城内では可能性のあるものを含めて尾張産43.9%であるが、東濃窯産が32.7%と3割以上存在し、多賀前地区で猿投窯産が9割以上を占める状況と異なる。ただし山王遺跡千刈田地区では東濃窯産が26.8%と3割近く存在し、市川橋遺跡の多賀城跡第22次調査では可能性のあるものを含めて41.2%あることを踏まえれば、むしろ多賀前地区の状況が特殊であり、全体には東濃窯産が一定量存在していたと推定される。

器種をみたところ、緑釉陶器では国司館とみられる南1西2区や北1西7区で猿投窯産の三足盤(第66図18・67)といった特殊な器種がみられるものの、城内で複数出土している香炉(第58図28-137・153・285、70-38など)や四足短頸壺(第58図60-153、62-45)、水注(第59図37-142、77-2)は出土していない。また埴類は口径の小さいもの(第66図1・2)は出土するものの、20cmを超えるもの(第57図92-18、第58図現変93-4)は確認できない。ただし緑釉陶器香炉は山王遺跡第10次調査(多賀城市教委1991)や市川橋遺跡第24～29次調査(多賀城市教委2001)で出土しており、城外で全く認められないわけではないが、複数まとまって出土する状況は確認できない。これらのことから、城内に優品が多く出土する傾向を指摘できるだろう。

時期ごとの変遷に関して、城内ではA期の緑釉陶器埴・皿類の場合、猿投窯産が37.3%存在しており、最も古い時期のものも見いだせる。(第57図92-18)。しかし多賀前地区ではA期の資料が多いにもかかわらず、洛北窯産が主体で、猿投窯産の同様の時期のものは認められない。一方でC期以降をみれば、城内ではC・D期の資料が少ないながら44.5点と一定量存在するが、多賀前地区ではC期に併行する近江産や尾北または美濃産緑釉陶器がわずかにみられるものの、折戸53号窯式の灰釉陶器は見られない。千刈田地区でも黒笹90号窯式の灰釉陶器が主体で、折戸53号窯式のものは2.4%とわずかである。これらのことから、城内では猿投窯産の最も古い時期の資料がみられること、そして城外と比べ10～11世紀にあたるC・D期の新しい時期まで緑釉・灰釉陶器が一定量出土する点が特徴として抽出できる。またC期は



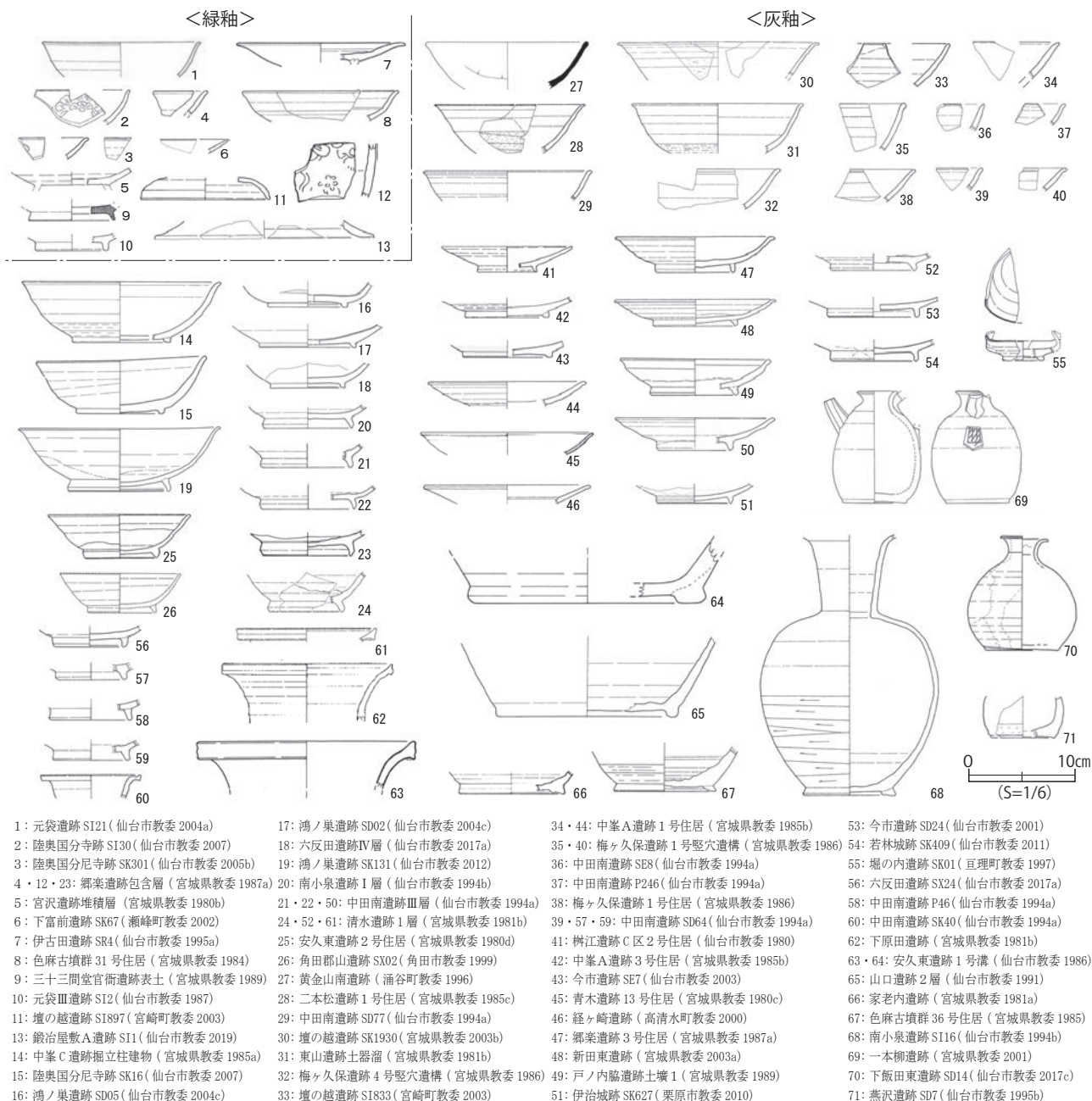
第 69 図 宮城県域における古代の施釉陶磁器出土遺跡

認められない黄釉が存在する点で（第 68 図 19・20）、特に国司館とみられる南 1 西 2 区や北 1 西 7 区で確認されることから、城外でも格式の高い街区で用いられたといえる。また多賀城においては、白磁 31 点と青磁 30 点で拮抗するが、城外では白磁が卓越する。

土橋理子（1994）によれば、本州全体では越州窯系青磁が 62%（550/880 片）で、白磁は 27%（239/880 片）とされ、田中広明（2001）による東日本で出土する初期貿易陶磁の集成においても、白磁 50 点、越州窯系青磁 56 点、黄釉 3 点で、わずかに青磁優位である。また、近年の東方地方北部における古代の貿易陶磁の集成（村田 2016）によれば、白磁 26 点、青磁 30 点で青磁優位となり、多賀城周辺における白磁優位の状況が際立っている点は興味深い（註 15）。

器種で見たところ、城内では壺・水注が白磁・青磁合わせて 9 点出土し、全体の 13% 前後存在するが、城外では北 1 西 7 区の 1 点（25）のみで、壺・水注は城内を中心に用いられた可能性が高い。また碗・皿類は城外の広い範囲で出土するのに対し、壺・水注は北 1 西 7 区のみであることから、黄釉と同様、格式の高い空間で用いられたと考えられる。

分類別では、城内では白磁Ⅺ類や越州窯系青磁Ⅲ類といった 10 世紀後半から 11 世紀中頃の新しい時期のものが少量出土しているが、城外で出土する白磁は全てⅠ類で、Ⅺ類は確認できず、越州窯系青磁Ⅲ類についてもみられない。緑釉・灰釉陶磁器が C・D 期に極めて少なくなることを踏まえれば、城外では 10 世紀以降の施釉陶磁器がほとんど出土しなくなるといえるだろう。



第 70 図 宮城県域出土の緑釉・灰釉陶器

3. 宮城県域出土例との比較

宮城県域で古代の施釉陶磁器の出土する遺跡を集成したところ、多賀城周辺を除き、52 遺跡を確認できた (第 69 図)。そのうち、灰釉陶器のみ出土するのは 32 遺跡、緑釉陶器のみが 8 遺跡、緑釉・灰釉陶器両方が 11 遺跡、白磁が出土するのは 1 遺跡のみである。なお、灰釉陶器として報告されたもののなかには大戸窯産須恵器や中世の瀬戸・美濃系陶器と認識されていた場合もあり、実見してそのように判断した場合や、器形などの特徴から明らかに灰釉陶器とは異なるものは除外した (註 16)。

遺跡の分布として、県北部の地域 (1～14)、多賀城跡から陸奥国分寺跡までの地域 (15～22)、名取川周辺の地域 (23～39)、県南部の内陸の地域 (40～49)、県南部の太平洋沿岸部や阿武隈川周辺 (50～52) に区分でき、内陸部や名取川周辺で多く出土する傾向が読み取れる。

全体の破片数の詳細は不明であるが、実測図や写真、または数量の表記があるものから把握できる点数は、緑釉陶器は 21 点、灰釉陶器 118 点、白磁 2 点の合計 141 点である。遺跡単位での出土量をみると、最も破片数が多く確認できるのは中田南遺跡 (37) の 22 点で、次いで今市遺跡 (17) の 11 点、安久東遺跡 (36)

と梅ヶ久保遺跡（41）の10点と続くが、それ以外は10点未満という状況であり、多賀城およびその周辺における施釉陶磁器の出土量の多さが突出していることが分かる。

このうち興味深いのは陸奥国分寺跡での出土状況で、金堂や講堂、僧坊周辺が調査されているものの緑釉・灰釉陶器は確認されておらず（陸奥国分寺跡調査委員会 1961）、その周辺に展開する竪穴建物から緑釉陶器1点と灰釉陶器2点が出土し、国分尼寺跡でも緑釉陶器1点のみと非常に少ない。多賀城廃寺跡からは緑釉陶器13点と灰釉陶器49点が出土しており、塔や金堂周辺からも出土がみられるなど、出土傾向に違いがみられる。

種類別にみていけば、緑釉陶器は碗（第70図1～5）・皿（6）・段皿（7）・稜皿（8）・碗または皿（9・10）・瓶（12）・蓋（11・13）が確認できるが、いずれも小破片である。

時期別では、色麻古墳群40号住居から洛北窯産の碗または皿の破片が出土しているものの、確実にA期と考えられるものはこれに限られる。そして元袋Ⅲ遺跡SI2（9）や三十三間堂官衙遺跡出土例（10）は高台がⅡC2aであることから尾野編年Ⅵ期中でB期と考えられ、陰刻花文の施される陸奥国分寺跡SI30出土碗（2）や郷楽遺跡包含層出土壺または瓶（12）も同時期とみられる。また観音崎遺跡では高台がⅠCの洛西窯産碗が出土しており、高橋編年Ⅱ期新～Ⅲ期とみられ、郷楽遺跡包含層（4）からも硬陶の山城産が確認できるが、客体的である。

このように、緑釉陶器はA期がわずかで多くはB期であるものの、出土例は限られる。これは貿易陶磁が1遺跡のみでしか確認できないことと合わせ、緑釉陶器が多賀城周辺で750点以上出土していることからすれば、そうした高級食器のほとんどが陸奥国府で消費されていたと推定できる。

灰釉陶器は碗（14～40）・皿（41～45・47～54）・段皿（46）・耳皿（55）・碗または皿（56～59）・長頸瓶（60・66～68）・広口瓶（62～65）・小瓶（70・71）・水注（69）が出土している。特に灰釉陶器の水注は多賀城周辺では確認できておらず、注目すべき資料であるが、段皿の出土が少なく、また平瓶や短頸壺といった器種もみられないなど、ヴァリエーションに乏しい。

時期別では、高台がⅡC1で尾野編年Ⅵ期古のA期に比定できるものが9点（14～18・41～43・55）、高台がⅡD1ab・ⅡD3・ⅡE1で尾野編年Ⅵ期中～新のB期に比定できるものが18点（19～24・47～54・56～59）、高台がⅡD4で口径の縮小化が顕著でない尾野編年Ⅶ期古～中のC期に比定できるものが2点（25・26）確認でき、A期から出土しはじめ、B期をピークにC期に急減する状況がうかがえる。また瓶類はⅥ期の長頸瓶が5点（60・61・66～68）、Ⅶ期の広口瓶が4点（62～65）出土している。全体の推移は多賀城と類似しているが、C期の出土がわずかであり、D期のものもみられない。こうした状況から、多賀城では多様な器種が出土していることや、C・D期の新しい時期まで一定量確認できることが特徴として把握できるだろう。

第Ⅳ章 まとめと今後の課題

第Ⅲ章での検討から、多賀城出土施釉陶磁器の特徴として次の7点を挙げることができる。

- (i) 施釉陶磁器に占める緑釉陶器の割合が約25%と高く、陸奥国府という性格を反映した結果であること。
- (ii) 地区によって緑釉陶器・灰釉陶器・貿易陶磁の割合や100㎡あたりの破片数が異なっており、それはそれぞれの地区の性格や使用形態の違いに起因していると考えられること。
- (iii) 施釉陶磁器は様々な器種が出土しており、特に緑釉陶器の20cmを超える大型の壺や香炉、四足短頸壺、水注は城外ではほとんど出土せず、城内で複数確認できること。
- (iv) 多賀城出土施釉陶磁器は大きくA～D期の4時期に分けることができ、A期の最も古い段階から出土し、B期に出土のピークを迎えたのち、C期は出土量が減るものの緑釉陶器を主体として一定量確認でき、D期までわずかながら出土すること。
- (v) 貿易陶磁が61点出土しており、東日本でも有数の貿易陶磁の消費地であったこと。
- (vi) 白磁・青磁ともに壺・水注が13%前後と一定量存在していること。
- (vii) 白磁Ⅺ類や越州窯系青磁Ⅲ類といった新しい時期のものが確認できること。

一方、今後の課題については次の4点が挙げられる。

- (a) 在地の土器との関係の検討。遺構から出土する施釉陶磁器は、在地の土器の年代観からみて古いものが含まれることがある。そうした製作年代と使用年代の差を理解しつつ、多賀城出土土器編年の再検討も含めた詳細な分析が今後必要である。
- (b) 城内と城外における出土様相の共通点と相違点の評価。これまで城内は城外に比べまとまって出土していないと評価されてきたが（尾野2002、高橋2001など）、今回資料を提示できたことにより、そうした見解には再検討が必要であることは示せたと思う。しかし、城内と城外における出土状況の違いをどのように評価すべきかについては十分に考察できておらず、施釉陶磁器の供給関係や使用のあり方も含め、今後更に分析を進めていくべきである。
- (c) その他の城柵官衙との比較。近年では村田淳（2016）や高橋照彦（2018）が検討しているが、なかでも胆沢城跡では第43次調査において施釉陶磁器が約350点出土し、そのなかで緑釉陶器が約65%を占めるとされる（水沢市教委1984）。第43次調査区を含む東方官衙地区では、政庁正殿よりも大きな規模の四面廂付建物が検出されており、『類聚三代格』太政官符貞観18（876）年6月19日条にみえる「俘饗」の饗宴施設との関連が指摘されている（八木2001）。これは遺構の状況が不明確ながら、緑釉陶器が卓越する西門・五万崎地区を考えるうえで参考になる事例であり、このような城柵間での比較・検討を積み重ねていくことが必要である。
- (d) 出土の背景に関する考察。今回は資料を提示することに重点を置いており、なぜ多賀城でこれだけの施釉陶磁器が出土するのか、あるいはC期に緑釉陶器の壺・皿類が灰釉陶器よりも多くなる要因は何かなど、解明すべき課題である。

課題は山積しているが、本書が多賀城の実態解明、更には施釉陶磁器研究の進展に寄与すれば幸いである。

註

註1) 灰釉陶器から須恵器と判断した資料として、福島県会津若松市大戸窯で生産された須恵器があり、具体的には『年報1993』第28図7、『年報1995』第54図44～46、第64図104、第67図146、第87図10が挙げられる。このほか『年報2009』図版27-15は在地産須恵器と判断したほか、政庁南面（城前官衙）地区については註7を参照。

註2) 除外した資料として、第14次SI350出土長頸瓶（『年報1971』第22図5）、第66次SI2300出土長頸瓶（『年報1995』第22図6）がある。

註3) ここで灰白色火山灰としている十和田a火山灰の降下年代については、『扶桑略記』にみられる降灰の記事と、秋田県北秋田市胡桃館遺跡においてそれを起源とする火山砕石物の堆積層から出土した建材の年輪年代（奈良国立文化財研究所1990）から、「915年」が有力視されている（小口2003など）。しかし、近年では炭素14スパイクマッチングと酸素同位体比年輪年代法によって白頭山の噴火を946年とする報告がなされ（奥野2018、木村ほか2017）、それに伴い十和田の噴火年代も最大で十数年新しく

なる可能性が指摘されている（箱崎ほか 2018）。考古学的な灰白色火山灰の年代は、陸奥国分寺の調査成果から貞観 11（869）年の地震以降で、『日本紀略』承平 4（934）年閏正月 15 日条にみえる塔焼失以前と考えられ（『本文編』：pp. 385-386）、現状では最近の研究成果を踏まえつつも、10 世紀前葉と捉えておきたい。

- 註 4） 灰釉陶器編年の大枠が示された尾野（2008）では、埴・皿類の高台形態に関して必ずしも詳細な記述がなされているわけではない。そのため、ここでは基準資料として挙げられている窯出土資料の高台の特徴を踏まえて記述している点は留意されたい。
- 註 5） 尾野編年では、Ⅵ期古は平安京出土土器編年（小森・上村 1996）のⅠ期古、Ⅶ期中がⅢ期古、Ⅶ期新がⅢ期新、Ⅷ期古がⅣ期古、Ⅷ期中がⅣ期中、Ⅷ期新がⅣ期新の土器群と共伴するとされる（尾野 2008・2014b）。高橋編年では、Ⅰ期がⅠ期新、Ⅱ期がⅡ期古、Ⅲ期がⅡ期中でも後半、Ⅳ期がⅡ期新～Ⅲ期古、Ⅴ期がⅢ期古～中の土器群と共伴するとされている（高橋 2003・2012）。鈴木編年と尾野編年については、尾野（2015）は埴の器形と法量の変化から、宮口Ⅰ期（9 世紀第 2 四半期）をⅥ期中（860～890 年頃）、清ヶ谷Ⅲ期（10 世紀前半）をⅦ期中（950～980 年頃）に比定し、鈴木が提示した併行関係よりも新しくなることを指摘しており、今後の検討課題である。
- 註 6） 『補遺編』では、施釉陶磁器を古代のものに限定した場合、緑釉陶器 7 点、灰釉陶器 21 点、白磁 3 点の合計 31 点であったが、新たに緑釉陶器 2 点、灰釉陶器 3 点を確認した。
- 註 7） 再検討により、『政庁南面Ⅰ』で緑釉陶器唾壺の可能性を指摘した図版 128-10 は、静岡県藤枝市助宗窯跡群産須恵器の可能性があることから除外した（尾野善裕氏・平尾政幸氏からのご教示）。また図版 128-19 は須恵器と判断し、そのほか須恵器長頸瓶と考えられる資料を除外した。
- 註 8） 陰刻花文の文様呼称については、三好町誌編集委員会（2013）に拠った。
- 註 9） 『年報 1973』では「高平遺跡」とされているが、現在この地点は「市川橋遺跡」として登録されているため、ここでは「市川橋遺跡高平地区」とした。
- 註 10） 具体的な各編年の点数は、緑釉陶器の場合、山城・篠窯産では高橋編年Ⅰ～Ⅱ期古 1 点、Ⅱ期新～Ⅲ期 1 点、猿投窯または東海西部産では尾野編年Ⅵ期古～中 4 点、Ⅵ期中 1 点、尾野Ⅶ期 2 点、東濃窯または近江産では高橋編年Ⅰ～Ⅲ期 1 点である。灰釉陶器では、尾野編年Ⅴ期新～Ⅵ期古 2 点、Ⅵ期 22 点、Ⅵ期中～新 4 点、Ⅶ期 15 点である。
- 註 11） 具体的に内容を示せば、SK090 は E 群の基準資料とされたが（『本文編』：p. 389）、その後の再調査によって口径の縮小化した須恵系土器坏が出土したことから（『補遺編』第 24 図 6）、E・F 群の混在した土器群と考えられる。SK078 は F 群でも新しい時期のもので、SK064・066・375 は須恵系土器が出土し、SK066・375 については 10 世紀後半とされる（『補遺編』：p. 109）。
- 註 12） 10 世紀に入ると、国司の政務や儀礼の場が「国庁」から「館」へ移ると考えるのが一般的であるが（佐藤 1997）、一方で 11 世紀頃の様相を示すとされる『朝野群載』巻 22 国務条々事や尾張国郡司百姓等解文から、国庁は政務の中心的な場ではないものの、儀礼の場として存続していたとの指摘もある（山口 1995、吉田 2014）。多賀城の政庁における 10～11 世紀の土器利用のあり方は後者の指摘との関連を示唆しており、改めて評価されるべきであろう。
- 註 13） 多賀城跡における厨について、大平聡（1999）は胆沢城跡のように厨院らしき遺構が確認できないことや城内各所で「厨」墨書土器が出土していることから、各部局に厨房が併設されていた可能性を指摘している。
- 註 14） 本書の産地推定基準から多賀前地区出土資料をみた場合、緑釉陶器では洛北窯産とされたなかに猿投窯産が存在していることや（第 66 図 19）、灰釉陶器では当時認識されていなかった東海東部産の可能性のあるものが存在し、今後再検討する必要がある。
- 註 15） 九州をみた場合、白磁 7 %（133/1, 1891 片）、越州窯系青磁 90 %（1, 702/1, 891 片）、長沙窯系 2 %（37/1, 891 片）、三彩その他 1 %（19/1, 1891 片）で越州窯系青磁が圧倒的に多い（土橋 1994）。
- 註 16） 例えば、観音崎遺跡の報告書第 9 図 4・5（白石市教委 1978）、六反田遺跡の報告書第 119 図 5（仙台市教委 2017a）は大戸窯産須恵器、家老内遺跡の報告書第 6 図 12（宮城県教委 1981a）や清水遺跡の報告書第 229 図 3 は中世陶器（宮城県教委 1981b）と判断した。

引用・参考文献（五十音順）

- 愛知県 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系
- 愛知県教育委員会 1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』
- 愛知県教育委員会 1983『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』
- 愛知県陶磁資料館 1998『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994『黒笹 40・89 号窯 黒笹 G2 号窯 立楠古窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 56 集
- 井上喜久男 2015「瓷器」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 pp. 707-715 愛知県
- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 pp. 215-232
- 大川勝宏 2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要』十九 pp. 8-26
- 大平聡 1999「『国府厨印』小考」『六軒丁中世史研究』第 6 号 pp. 1-21 東北学院大学中世史研究会
- 小口雅史 2003「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田 a と白頭山（長白山）を中心に—」『日本律令制の展開』pp. 421-456 吉川弘文館

- 奥野充 2018「白頭山古小牧 (B-Tm) テフラの精密年代決定の意義」『名古屋大学年代測定研究』2 pp. 30-34
- 尾野善裕 1999「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』第96号 pp. 163-176 岐阜史学会
- 尾野善裕 2000「猿投窯 (系) 須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 pp. 9-42 東海土器研究会
- 尾野善裕 2001「「戊申年木簡」・尾張国分寺と猿投窯—猿投窯系須恵器編年の再構築・補論—」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 pp. 133-140 東海土器研究会
- 尾野善裕 2002「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費—尾張産を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集 pp. 35-57
- 尾野善裕 2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム pp. 20-37
- 尾野善裕 2008「古代灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 pp. 77-92
- 尾野善裕 2014a「猿投窯の灰釉陶器編年をめぐる覚書」『灰釉陶器を考える—編年の現状と課題—』pp. 55-58 東海土器研究会
- 尾野善裕 2014b「古代土器の編年と暦年代観—10・11世紀を中心に—」『灰釉陶器を考える—編年の現状と課題—』pp. 59-76 東海土器研究会
- 尾野善裕 2015「灰釉陶器生産地域の拡大—猿投窯からみた駿遠地域の窯—」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』第3回東海土器研究会 pp. 27-40
- 角田市教育委員会 1999『角田郡山遺跡Ⅶ』角田市文化財調査報告書第27集
- 上村和直 1994「平安京周辺の施釉陶器生産」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp. 131-38
- 亀井明德 1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版
- 木村勝彦ほか 2017「酸素同位体比年輪年代法による白頭山10世紀噴火の年代測定」『日本第四紀学会講演要旨集』47 p. 30
- 九州歴史資料館 1982『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』
- 京都市文化市民局 2016『平成27年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』
- 京都市埋蔵文化財研究所 2013『平安京右京三条一坊六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-8
- 栗原市教育委員会 2010『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第11集
- 久留米市教育委員会 1985『筑後国府跡・国分寺跡』久留米市文化財調査報告書第44集
- 後藤秀一 1994「東北地方における初期貿易陶磁の出土状況」『貿易陶磁研究』No. 14 pp. 114-125 日本貿易陶磁研究会
- 小牧市教育委員会 1982『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ』
- 小牧市教育委員会 1987『桃花台沿線開発事業地内埋蔵文化財調査報告書』
- 小森俊寛 1994「平安京出土の灰釉陶器」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp. 163-172
- 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 pp. 187-271 京都市埋蔵文化財研究所
- 齋藤孝正 1981「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』Ⅲ pp. 19-25 小牧市教育委員会
- 齋藤孝正 1982「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル』No. 211 pp. 47-52 ニューサイエンス社
- 齋藤孝正 1989a「灰釉陶器の研究Ⅱ—猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年—」『名古屋大学文学部研究論集104』(史学35) pp. 1-34
- 齋藤孝正 1989b「灰釉陶器生産の—様相—」『美濃の古陶』美濃古窯研究会第3号 pp. 5-11
- 齋藤孝正 1994「東海地方における施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp. 109-120
- 齋藤孝正 1998「猿投窯黒笹地区における緑釉陶器生産の展開」『檜崎彰一先生古希記念論文集』pp. 145-160 真陽社
- 蔵王町教育委員会 2014『蔵王町内遺跡発掘調査報告書1』蔵王町文化財調査報告書第18集
- 酒井将史 2012「土器の計測法と定量化に関する基礎的検討」『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊 pp. 309-318
- 佐藤信 1997『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館
- 滋賀県教育委員会 2012『春日北遺跡』
- 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013『史跡出雲国府跡9 総括編』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22
- 白鳥良一 1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ pp. 1-38 宮城県多賀城跡調査研究所
- 白石市教育委員会 1978『観音崎遺跡発掘調査報告書』白石市文化財調査報告書第18集
- 白石市教育委員会 2018「本郷遺跡」『第44回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp. 167-174
- 鈴木敏則 2014「遠江における灰釉陶器編年の現状と課題」『灰釉陶器を考える—編年の現状と課題—』pp. 7-22 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2015「宮口・清ヶ谷窯の灰釉陶器編年と地域性」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』第3回東海土器研究会 pp. 9-26
- 瀬峰町教育委員会 2002『下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第20集
- 仙台市教育委員会 1980『栴江遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第18集
- 仙台市教育委員会 1981『山口遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集

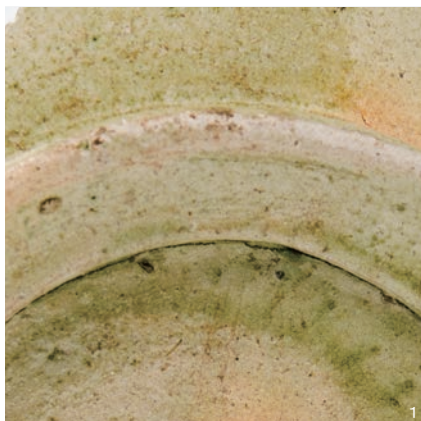
- 仙台市教育委員会 1982『岩切畑中遺跡』仙台市文化財調査報告書第50集
 仙台市教育委員会 1983a『中田畑中遺跡』仙台市文化財調査報告書第53集
 仙台市教育委員会 1983b『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第58集
 仙台市教育委員会 1986『宮城県仙台市安久東遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第2集
 仙台市教育委員会 1987『元袋Ⅲ遺跡』仙台市文化財調査報告書第103集
 仙台市教育委員会 1991a『富沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第150集
 仙台市教育委員会 1991b『山口遺跡第9次・10次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第151集
 仙台市教育委員会 1994a『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集
 仙台市教育委員会 1994b『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
 仙台市教育委員会 1995a『伊古田遺跡』仙台市文化財調査報告書第193集
 仙台市教育委員会 1995b『仙台平野の遺跡群XIV』仙台市文化財調査報告書第195集
 仙台市教育委員会 1995c『今泉遺跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第201集
 仙台市教育委員会 1995d『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第206集
 仙台市教育委員会 2001『今市遺跡』仙台市文化財調査報告書第260集
 仙台市教育委員会 2004a『元袋遺跡』仙台市文化財調査報告書第272集
 仙台市教育委員会 2004b『壇腰遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第277集
 仙台市教育委員会 2004c『鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第280集
 仙台市教育委員会 2005a『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第284集
 仙台市教育委員会 2005b『陸奥国分尼寺跡』仙台市文化財調査報告書第286集
 仙台市教育委員会 2007『郡山遺跡27』仙台市文化財調査報告書第307集
 仙台市教育委員会 2011『若林城跡』仙台市文化財調査報告書第383集
 仙台市教育委員会 2012『鴻ノ巣遺跡』仙台文化財調査報告書第400集
 仙台市教育委員会 2017a『元袋遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡ほか』仙台文化財調査報告書第455集
 仙台市教育委員会 2017b『元袋遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡ほか』仙台文化財調査報告書第456集
 仙台市教育委員会 2017c『下飯田東遺跡第1次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第457集
 仙台市教育委員会 2019『今市遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第476集
 多賀城市 1991『多賀城市史』第4巻（考古資料）
 多賀城市教育委員会 1983『市川橋遺跡発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第4集
 多賀城市教育委員会 1990『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第22集
 多賀城市教育委員会 1991a『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第26集
 多賀城市教育委員会 1991b『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第27集
 多賀城市教育委員会 1992『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第30集
 多賀城市教育委員会 1993『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第34集
 多賀城市教育委員会 1995『高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第37集
 多賀城市教育委員会 1997『山王遺跡Ⅰ』多賀城市文化財調査報告書第45集
 多賀城市教育委員会 2001『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第60集
 多賀城市教育委員会 2002『高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第65集
 多賀城市教育委員会 2003『高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第70集
 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第75集
 多賀城市教育委員会 2017『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第138集
 多賀城市教育委員会 2019『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第142集
 高清水町教育委員会 2000『経ヶ崎遺跡・観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第2集
 高橋照彦 1994a「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集
 高橋照彦 1994b「東国の施釉陶器」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp.19-26
 高橋照彦 1995「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 pp.133-170
 高橋照彦 2001「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No.475 pp.16-24 ニューサイエンス社
 高橋照彦 2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム pp.5-19
 高橋照彦 2012「操業の実年代」『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊 pp.224-229
 高橋照彦 2015「都と地方の土器」『官衙・集落と土器1』第18回古代官衙・集落研究会報告書 pp.11-26 奈良文化財研究所
 高橋照彦 2016「平安時代の須恵器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古

学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム pp. 75-100

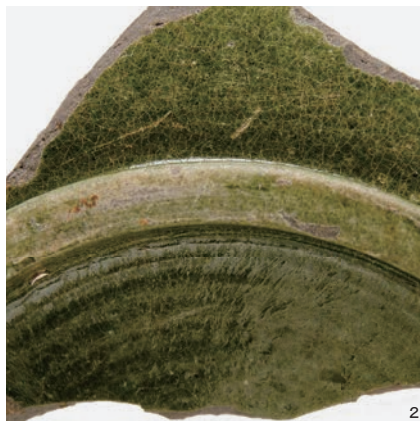
- 高橋照彦 2018「東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景」『尾駁の駒牧の背景を語る』pp. 63-84 六一書房
- 田口昭二 1982「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No. 211 pp. 60-64 ニューサイエンス社
- 田口昭二 1984『美濃焼』考古学ライブラリー 17 ニューサイエンス社
- 太宰府市教育委員会 1995『大宰府条坊跡Ⅶ』太宰府市の文化財第 28 集
- 太宰府市教育委員会 1998『大宰府条坊跡Ⅹ』太宰府市の文化財第 37 集
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ』太宰府市の文化財第 49 集
- 多治見市教育委員会 1981『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1984『北丘 25 号窯・26 号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1987『一般国道 248 号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 号
- 多治見市教育委員会 1990a『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第 25 号
- 多治見市教育委員会 1990b『虎溪山 4・5 号窯発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第 27 号
- 田中広明 2001『地方の豪族と古代官人—考古学が解く古代社会の権力構造—』KASHIWA 学術ライブラリー 01 柏書房
- 土橋理子 1994「日本出土の古代中国陶磁」『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁—』pp. 211-249 財団法人由良大和古文化研究協会
- 東海土器研究会 2009『灰釉陶器のブラインドテスト』
- 豊田市教育委員会 2005『良兼 1 号古窯跡・兼近 1 号古窯跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第 25 集
- 豊田市教育委員会 2007『明連 1～4 号窯跡・七曲 1 号窯跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第 29 集
- 豊橋市教育委員会 2000『二川古窯址群（Ⅰ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 52 集
- 名古屋考古学会 1984『熊ノ前窯址群』
- 名古屋市教育委員会 1976『徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財調査報告』名古屋市文化財調査報告Ⅵ
- 名古屋市教育委員会 1989『NN-259 号窯発掘調査報告書』
- 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室 2017『東山 72 号窯発掘調査報告書』
- 檜崎彰一 1961「土器の発達 須恵器と土師器」『世界考古学大系』第 4 巻 日本Ⅳ 歴史時代 pp. 128-137 平凡社
- 檜崎彰一 1976『日本陶磁全集』6（白瓷）中央公論社
- 檜崎彰一 1979「平安時代の施釉陶—青瓷と白瓷—」『世界陶磁全集』第 2 巻 pp. 265-289 小学館
- 檜崎彰一 1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』pp. 62-73 愛知県教育委員会
- 奈良文化財研究所（編）1990『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』同朋舎
- 奈良文化財研究所 2010『河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概報』奈良文化財研究所研究報告第 2 冊
- 奈良文化財研究所 2013『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』奈良文化財研究所研究報告第 11 冊
- 賛元洋 1996「二川窯における緑釉陶器生産の展開」『三河考古』第 9 号 pp. 38-58 三河考古刊行会
- 賛元洋 2002「二川窯出土遺物の分類と編年」『二川古窯址群（Ⅱ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 61 集 pp. 201-220
- 賛元洋 2003「二川窯における緑釉陶器生産の成立と展開」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第 7 回シンポジウム pp. 52-63
- 箱崎真隆ほか 2018「榛名山 5 世紀噴火（Hr-FA）と十和田カルデラ 10 世紀噴火（To-a）の年代学的再検討の必要性」『国際火山噴火史情報研究集会講演要旨集』2018-1 pp. 13-20
- 畑中英二 2003「近江における緑釉陶器生産の様相」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第 7 回シンポジウム pp. 64-72
- 八戸市教育委員会 2000『人首沢遺跡・毛合清水（3）遺跡・大仏遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 84 集
- 原明芳 1994「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第 3 回シンポジウム pp. 27-34
- 日永伊久男 1988「近江産緑釉陶器の生産体制について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』pp. 203-243 日本中世土器研究会
- 日永伊久男 1994「近江の緑釉陶器生産」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第 3 回シンポジウム pp. 121-130
- 平出遺跡調査会 1955『平出』文部科学研究費総合研究報告 朝日新聞社
- 平川南 1981「宮城・多賀城跡」『木簡研究』第 3 号 pp. 38-41 木簡学会
- 福岡市教育委員会 1991『鴻臚館跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 270 集
- 福岡市教育委員会 1992『鴻臚館跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 315 集
- 前川要 1989「平安時代における緑釉陶器の編年の研究」『古代文化』第 41 巻第 5 号 pp. 1-17 古代学協会
- 三重県教育委員会 1978『斎王宮跡資料』
- 水沢市教育委員会 1984『胆沢城跡』
- 宮城県教育委員会 1980a『東北自動車道遺跡発掘調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 63 集
- 宮城県教育委員会 1980b『東北自動車道遺跡発掘調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集

- 宮城県教育委員会 1980c『東北自動車道遺跡発掘調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集
- 宮城県教育委員会 1980d『東北新幹線関連遺跡調査報告書(4)』宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1981a『仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第79集
- 宮城県教育委員会 1981b『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 1982『松島有料道路関連調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第87集
- 宮城県教育委員会 1984『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第100集
- 宮城県教育委員会 1985a『香ノ木遺跡・色麻古墳群』宮城県文化財調査報告書第103集
- 宮城県教育委員会 1985b『中峯遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第108集
- 宮城県教育委員会 1985c『二本松遺跡・河原田遺跡』宮城県文化財調査報告書第112集
- 宮城県教育委員会 1986『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第120集
- 宮城県教育委員会 1987a『宮城町西館跡、利府町郷楽遺跡・天神台遺跡』宮城県文化財調査報告書第123集
- 宮城県教育委員会 1987b『三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第124集
- 宮城県教育委員会 1989『三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集
- 宮城県教育委員会 1996a『山王遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第170集
- 宮城県教育委員会 1996b『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 1997『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 2001『一本柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第185集
- 宮城県教育委員会 2003a『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2003b『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第195集
- 宮城県教育委員会 2008『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第216集
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第218集
- 宮城県教育委員会 2010『北小松遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第223集
- 宮城県教育委員会 2014『山王遺跡Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第235集
- 宮城県教育委員会 2016『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』
- 宮城県教育委員会 2018『山王遺跡Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮崎町教育委員会 2003『壇の越遺跡Ⅳ』宮崎町文化財調査報告書第13集
- 三好町教育委員会 1988『愛知大学用地内埋蔵文化財調査報告書』
- 三好町教育委員会 1996『県営北部畑地帯総合土地改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』
- 三好町誌編集委員会 2013『愛知県猿投山西南麓古窯跡黒笹90号窯跡』
- 陸奥国分寺跡発掘委員会 1961『陸奥国分寺跡』
- 村田淳 2016「東北地方北部の施釉陶磁器」『北東北9・10世紀社会の変動研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会第Ⅱ分科会 pp.293-308
- 百瀬正恒 1986「平安時代の緑釉陶器—平安京近郊の生産窯について—」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ pp.207-222 日本中世土器研究会
- 森隆 1991「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』第76巻第4号 pp.30-59
- 柳澤和明 1994「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp.7-18
- 山内伸浩 1994「結語」『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第42号 pp.27-35
- 山口英男 1995「平安時代の国衙と在地勢力—9・10世紀の国衙・国府—」『国史学』第156号 pp.91-102 国史学会
- 山里純一 2005「呪符の機能」『文字と古代日本』4(神仏と文字) pp.53-77 吉川弘文館
- 山中敏史 1994『古代地方官衙の研究』塙書房
- 八木光則 2001「城柵の再編」『日本考古学』第12号 pp.55-68 日本考古学会
- 吉田敏 2014『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院
- 若尾正成 1987「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報No.1 pp.5-12
- 若尾正成 1988「白瓷の光ヶ丘1号窯式と大原2号窯式について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報No.2 pp.16-18
- 若尾正成 1990「白瓷・白瓷系陶器編年における一考察」『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第25号 pp.180-186
- 涌谷町教育委員会 1996『黄金山産金遺跡・黄金山南遺跡』
- 亘理町教育委員会 1997『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第7集
- 亘理町教育委員会 2006『国史跡三十三間堂官衙遺跡』亘理町文化財調査報告書第11集
- 亘理町教育委員会 2007『国史跡三十三間堂官衙遺跡』亘理町文化財調査報告書第13集

<緑釉陶器>



猿投窯産



東海西部産



近江産



洛北窯産



洛西窯産



篠窯産

<灰釉陶器>



尾張産



東濃窯産



東海東部産

<白磁>



I 類

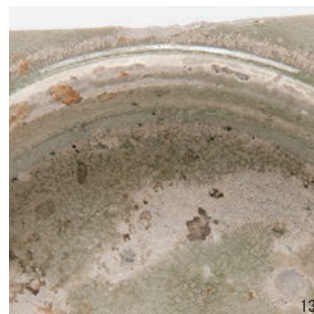


XI 類



I 類

<青磁>

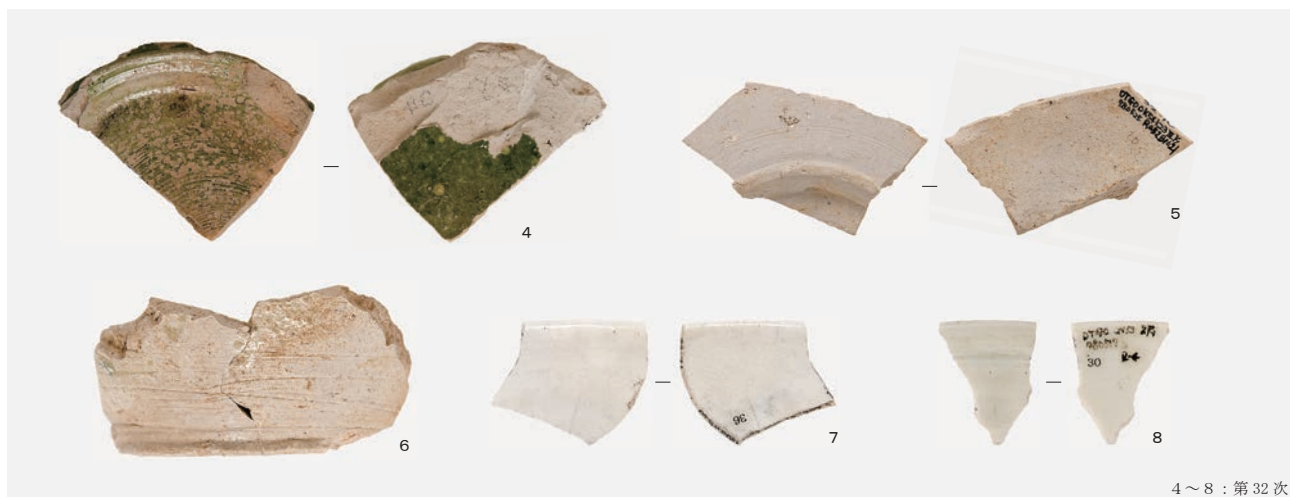


III 類

図版 1 施釉陶磁器の胎土・釉調



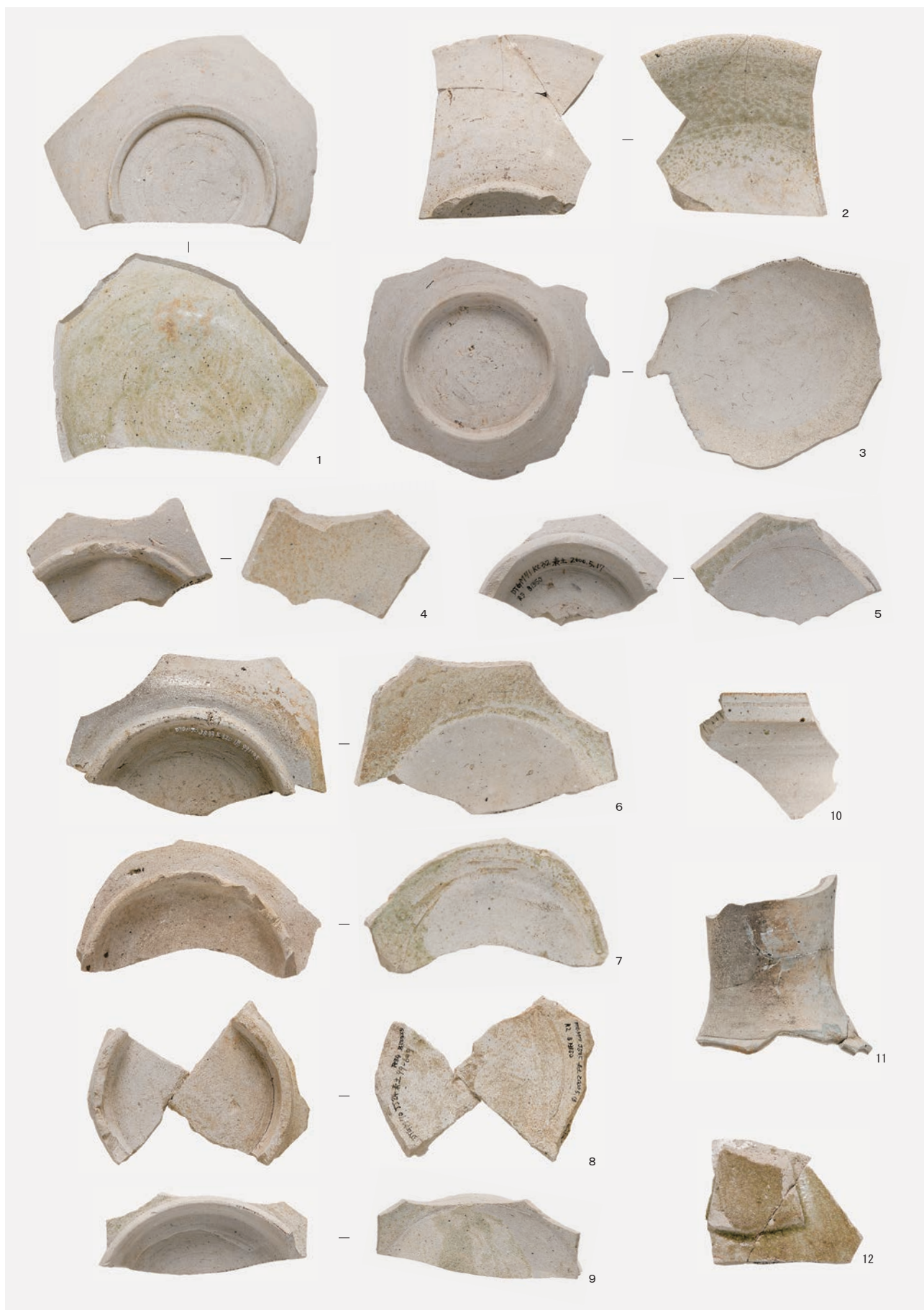
图版2 政厅地区出土施釉陶磁器写真



图版 3 政庁地区（北端）出土施釉陶磁器写真



图版 4 政庁南面（城前官街）地区出土施釉陶磁器写真（1）



图版 5 政厅南面（城前官衙）地区出土施釉陶磁器写真（2）



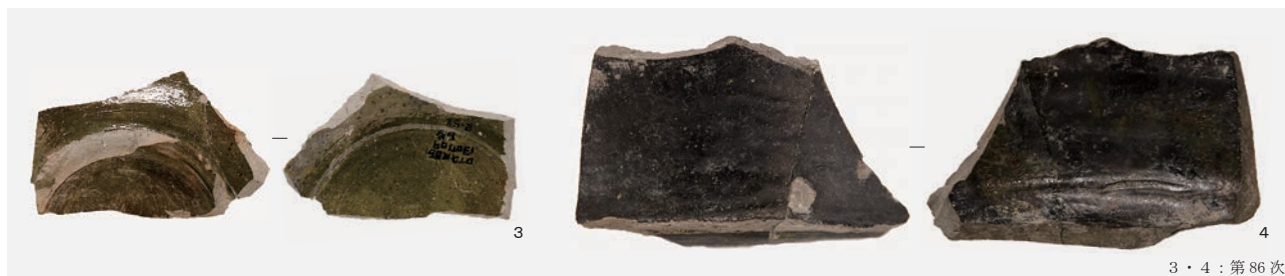
図版6 政庁南面（城前官街）地区出土施釉陶磁器写真（3）



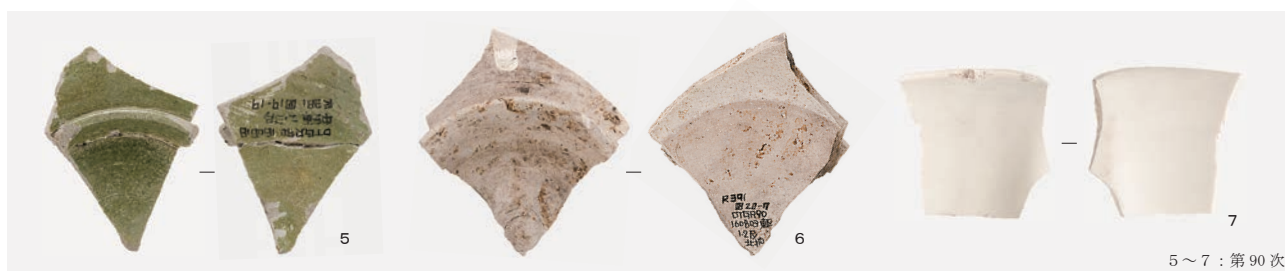
図版7 政庁南面（政庁南大路）地区出土施釉陶磁器写真



1・2：第61次

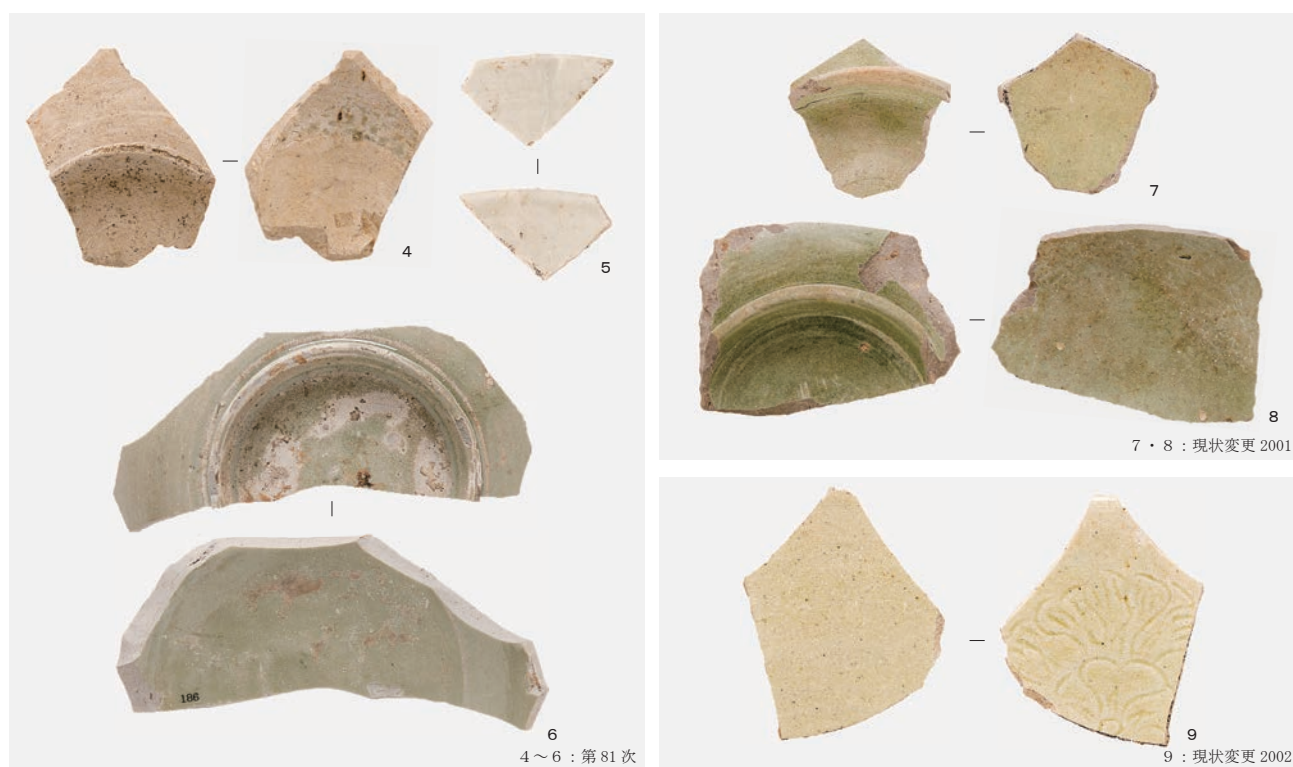
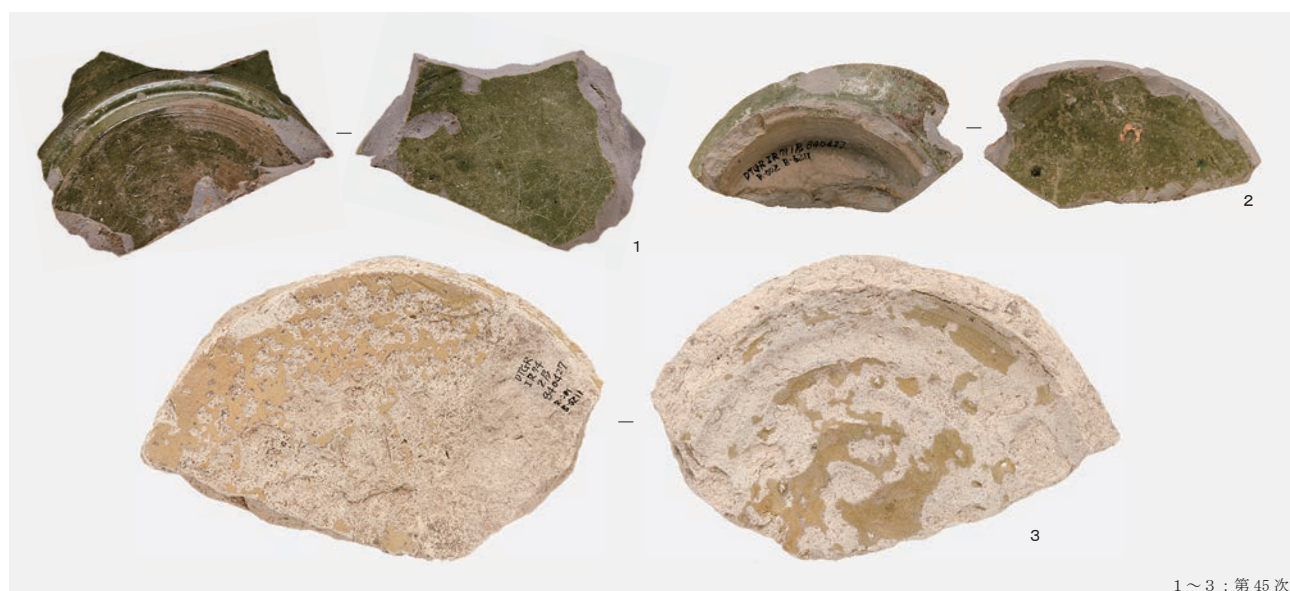


3・4：第86次



5～7：第90次

図版8 政庁南面（鴻の池）地区出土施釉陶磁器写真



図版 9 政庁西方地区出土施釉陶磁器写真



図版 10 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真 (1)

1 : 第 28 次



図版 11 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真（2）

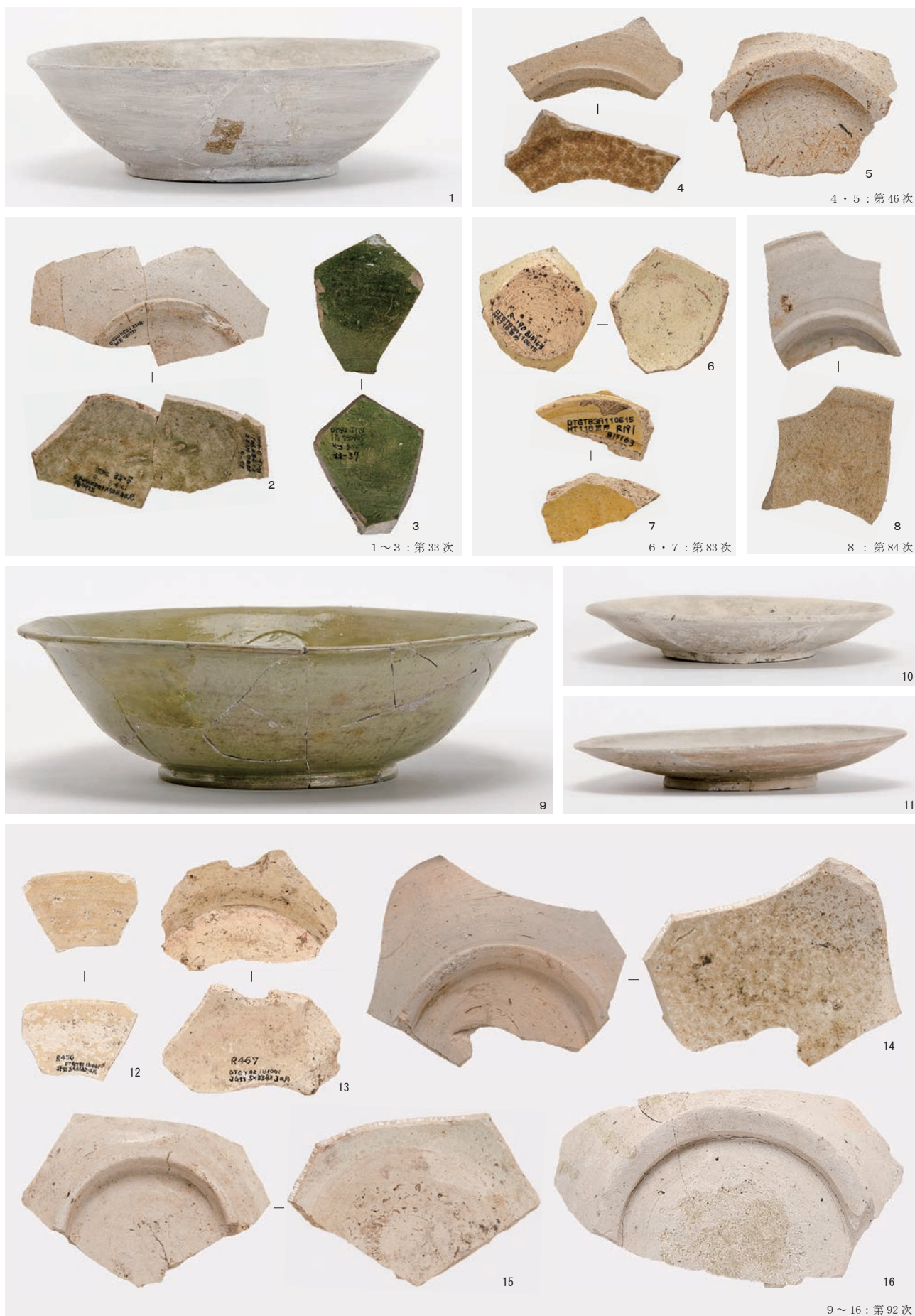


1 ~ 16 : 第 28 次

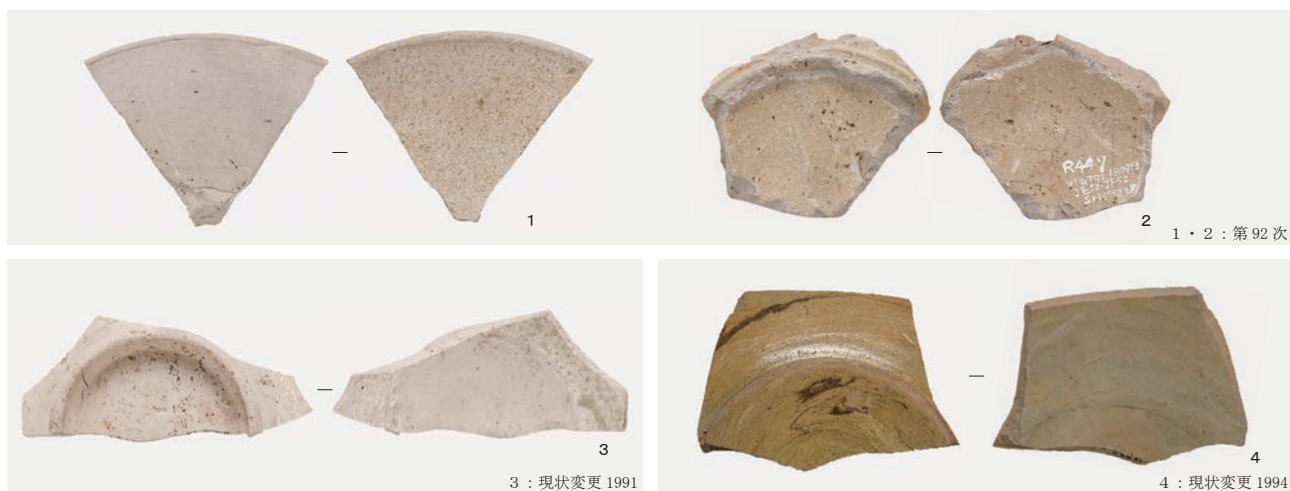
図版 12 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真 (3)



図版 13 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真（4）



図版 14 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真 (5)



図版15 西門・五万崎地区出土施釉陶磁器写真（6）



図版16 金堀地区出土施釉陶磁器写真



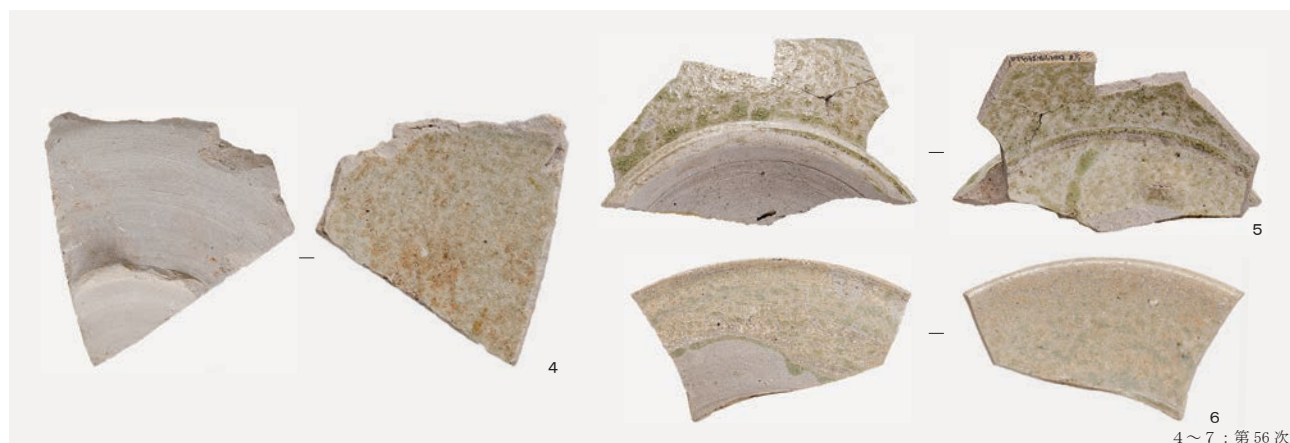
図版17 六月坂地区出土施釉陶磁器写真



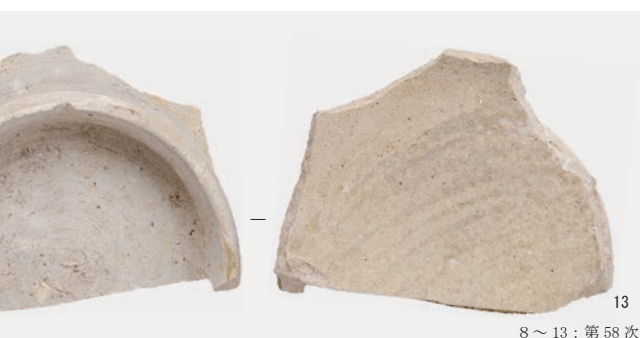
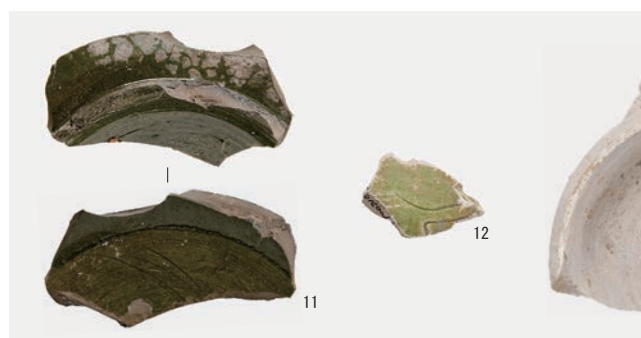
图版 18 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（1）



1～3：第23次

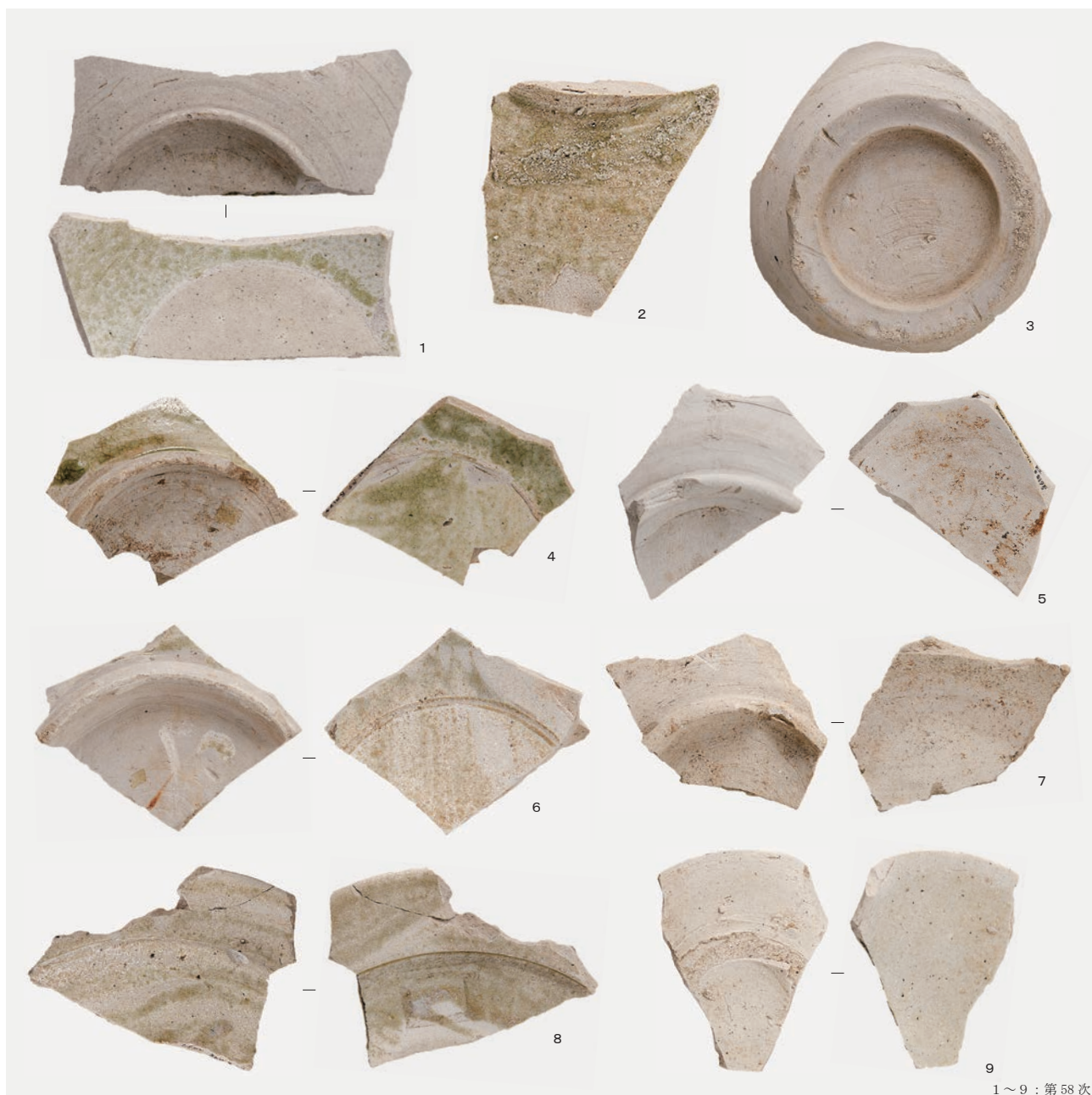


4～7：第56次



8～13：第58次

図版 19 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（2）



1～9：第58次

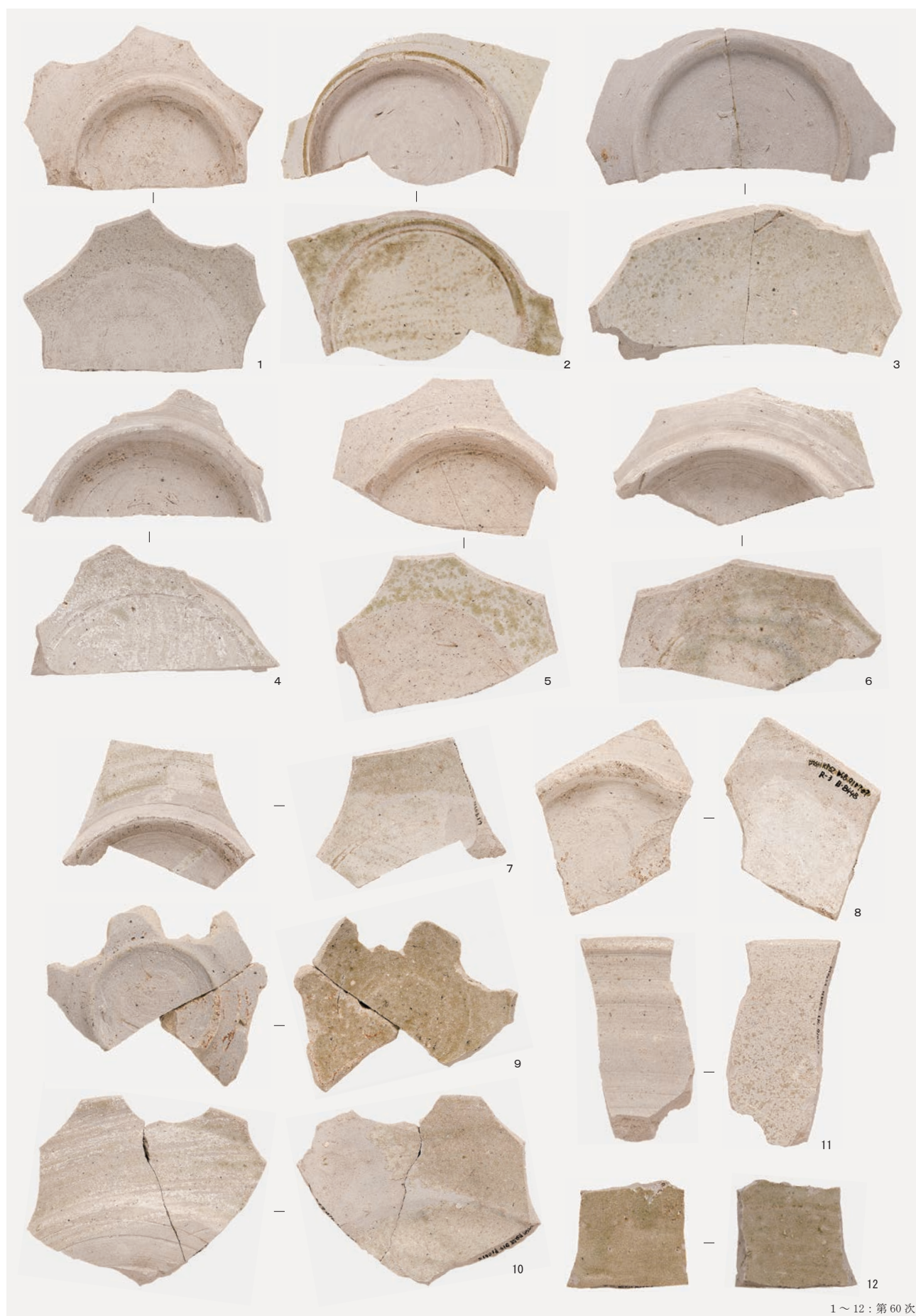
10～13：第60次

図版 20 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（3）



1 ~ 11 : 第 60 次

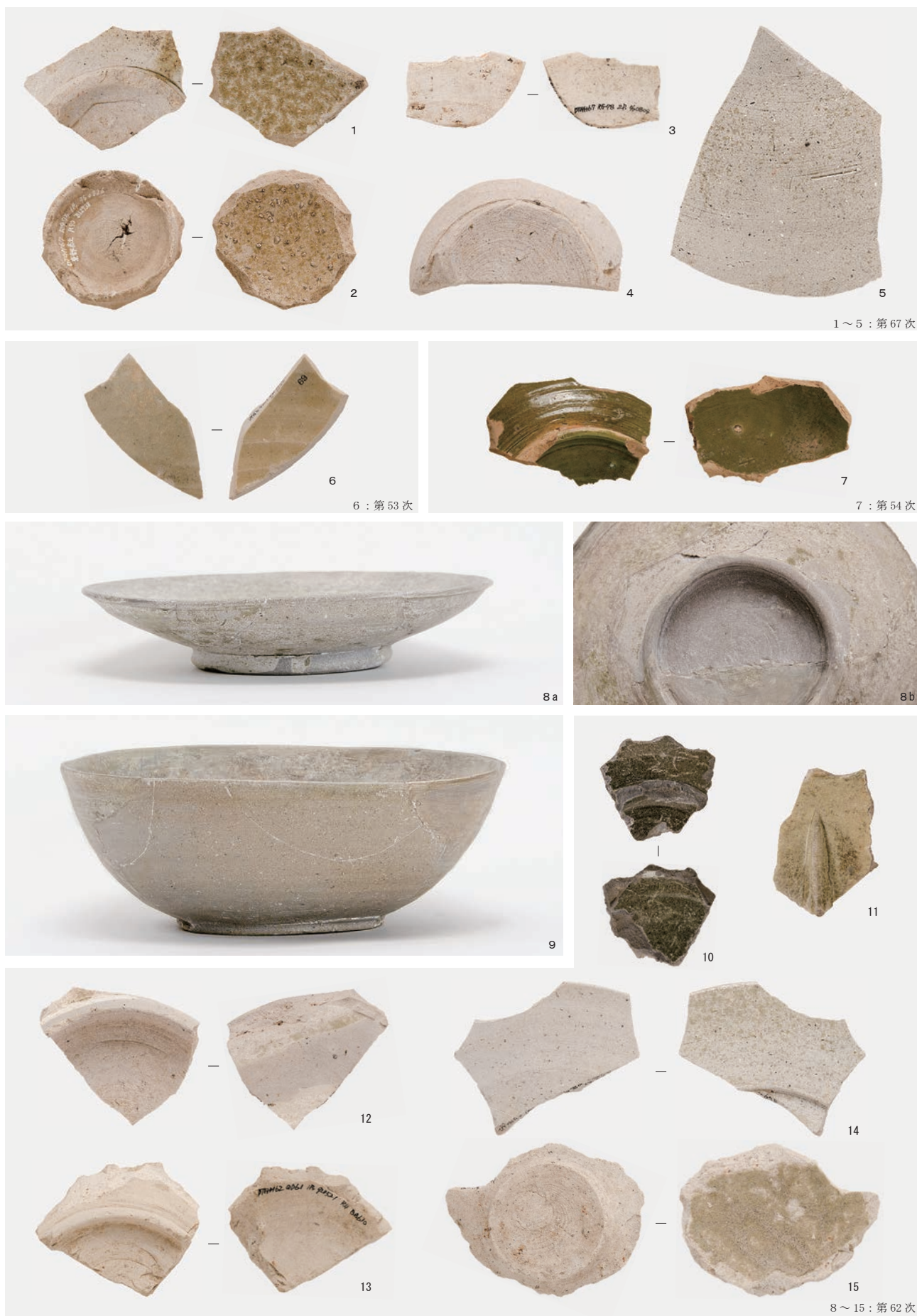
図版 21 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（4）



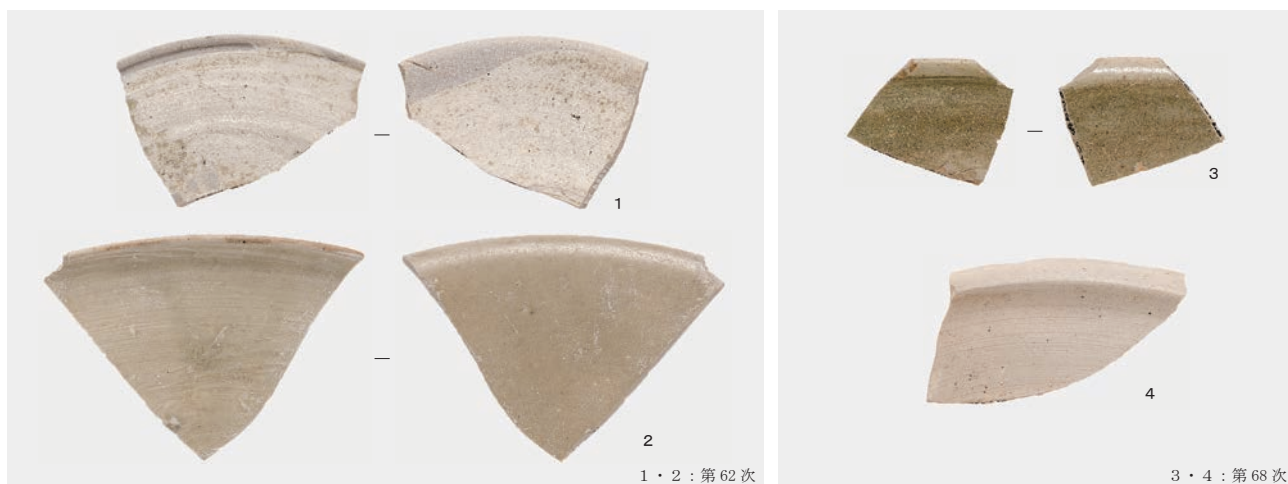
図版 22 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（5）



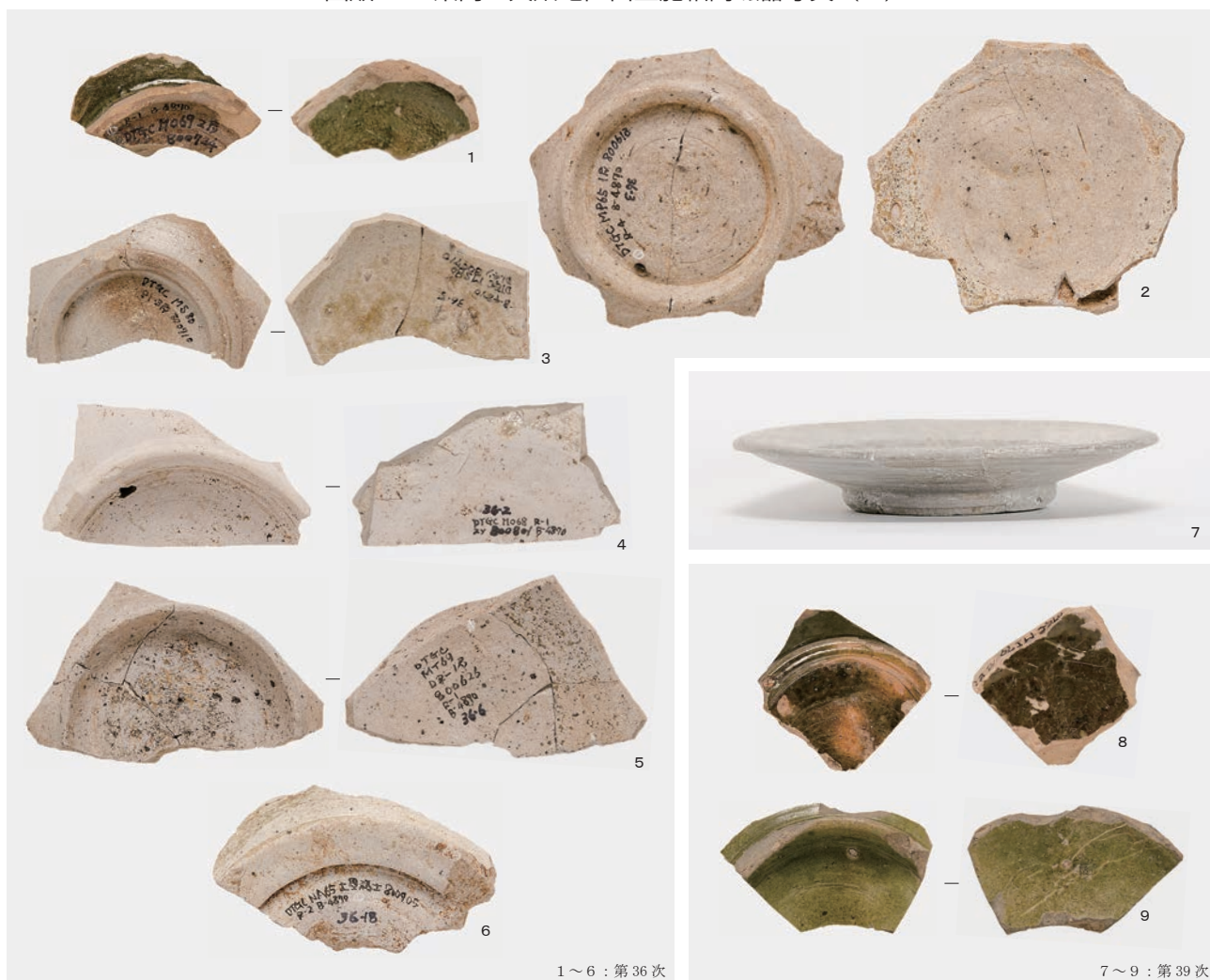
図版 23 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（6）



図版 24 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真（7）



図版 25 東門・大畑地区出土施釉陶磁器写真 (8)



図版 26 作貫地区出土施釉陶磁器写真

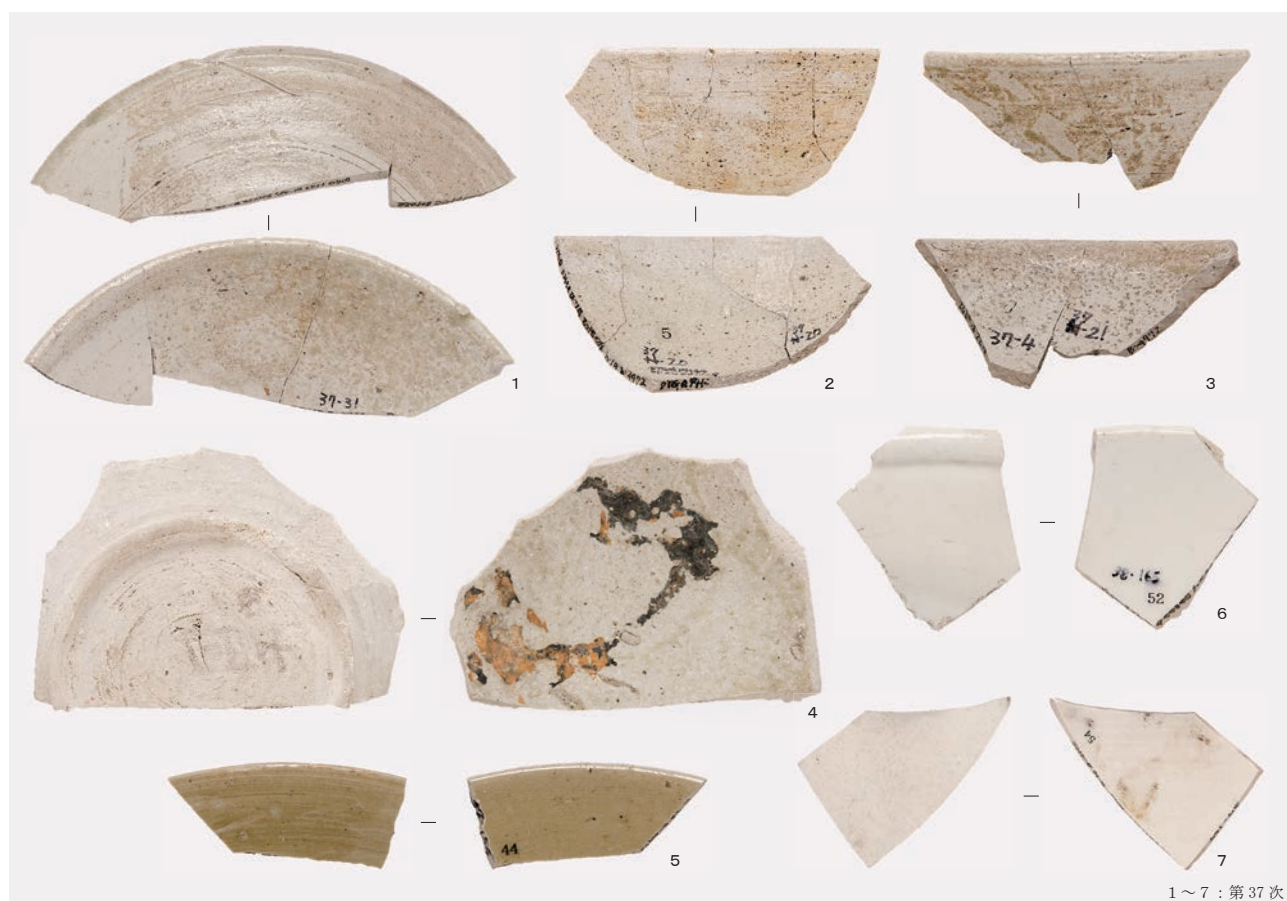


図版 27 北辺・南辺東地区出土施釉陶磁器写真



1 ~ 17 : 第 37 次

图版 28 南边西地区出土施釉陶磁器写真 (1)



图版 29 南边西地区出土施釉陶磁器写真（2）



图版 30 市川橋遺跡高平地区出土施釉陶磁器写真



図版 31 多賀城廃寺出土施釉陶磁器写真

報告書抄録

ふ り が な	たがじょうせゆうとうじき							
書 名	多賀城施釉陶磁器							
副 書 名								
巻 次	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所資料							
シリーズ番号	Ⅴ							
編 著 者 名	高橋 透							
編 集 機 関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所 在 地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1 丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発 行 年 月 日	20200325							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡 番号		北 緯 ° / "	東 経 ° / "	調査期間	調査面積	調査原因
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 つきたりてらあと 附 寺 跡	みやぎけん たがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ 市 川	04209	004	38 ° 18 / 24 "	140 ° 59 / 18 "	1961 年 8 月 1 日 } 2018 年 11 月 30 日 (多賀城廃寺跡第 1 次調査から多賀城 跡第 92 次調査)	118,773㎡	計 画 に 基 づ く 学 術 調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	・僧坊 ・塔 ・金堂 ・政庁南大路 ・築地堀 ・掘立柱建物 ・竪穴建物 ・井戸 ・溝 ・土壇 ・ピット ・遺物包含層		・緑釉陶器 ・灰釉陶器 ・貿易陶磁		・緑釉陶器 466 点、灰釉陶器 1,352 点、白磁 31 点、青磁 31 点が出土した。	
要約	多量の施釉陶磁器が出土しており、陸奥国府という性格を反映したものといえる。また 9 世紀前半から 11 世紀代まで連綿と出土しており、多賀城城外や宮城県域と比較してもこれだけ長期間出土しておらず、多賀城の特徴といえる。また多賀城内の地区によって施釉陶磁器の種類の割合や 100 ㎡あたりの破片数が異なり、これは各地区の性格や使用形態に起因するものとみられる。							